山元町文化財調査報告書第10集

中筋遺跡

－常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書Ⅴ－

中筋遺跡出土　弥生時代の石器

平成27年3月

宮城県山元町教育委員会

東日本高速道路株式会社 東北支社 仙台工事事務所

序　　文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の中筋遺跡の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成24年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、縄文時代、弥生時代、古墳時代の人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成２７年３月

山元町教育委員会
教育長　森　憲一

例　言

1．本書は、宮城県亘理郡山元町鷲足字中筋地内に所在する中筋遺跡（第１次調査）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成 23 ～ 26 年度に、調査原因となった事業主体者である東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所から業務委託を受けた山元町が実施した。

3．本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。中筋遺跡の現地発掘調査・報告書作成業務を行った平成 23 ～ 26 年度の職員の体制は下記のとおりである。

教育長　森　憲一
課　　長　渡邊 隆弘（H23）、齋藤 三郎（H24 ～）
班　　長　武田 賢一（H23 ～ 25）、阿部 正憲（H26）
主　　事　山田 隆博
主　　事　丹野 修太（任期付職員）
調査補助員　藤田 祐、渡邊 理伊知（H23・24）、佐伯 奈弓
発掘作業員　相原 一智、飯川 幸男、石井 進、伊藤 かず子、伊藤 清、伊藤 成夫、梅村 眞智子、及川 博子、太田 千佳子、小野 和喜子、後藤 征郎、斉藤 健二、佐藤 明、白鳥 浩二、鈴木 ひで子、関沼 邦彦、高橋 みゆき、立谷 重晴、南條 義博、西山 ゆり子、橋元 和子、深澤 久美、増川 悠記、三浦 長、森 忠男、矢吹 共子、遊佐 豊美、横山 真、渡部 修、渡邊 洋子
整理作業員　梅村 眞智子、及川 博子、斉藤 則彦、西山 ゆり子、永谷 佳歩美、高橋 みゆき、萩本 厚子、橋本 礼子、橋元 和子、深澤 久美、三浦 則子、水本 惠子、矢吹 共子、渡邊 洋子

4．発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
天野 順陽・高橋 栄一・千葉 直樹・初鹿野 博之・大坂　拓（宮城県教育庁文化財保護課）、及川 規（東北歴史博物館）、斎野 裕彦（仙台市教育委員会）、相沢 清利（多賀城市教育委員会）、日下 和寿（白石市教育委員会）、辻 秀人（東北学院大学）、藤沢 敦（東北大学理藏文化財調査室）、松本 秀明（東北学院大学）、高瀬 克範（北海道大学）、早瀬 亮介（㈱加速器分析研究所）、須田 富士子、宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所（敬称略）

5．本遺跡の平成 24 年度に実施した航空写真撮影は（株）日本特殊撮影、基準点設置は高野弘幸土地家屋調査士事務所に委託して行った。

6．石器の石材については、筆者が肉眼観察を行った。また、一部の石器の石材については、高瀬克範氏（北海道大学）に協力をいただいた。

7．現地発掘調査について、指揮・監督・測量を山田・丹野・藤田・渡邊が担当し、現地作業を発掘作業員、断面図の作成を及川・深澤・矢吹・渡邊が行った。

8．本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については、土器類は山田、土製品・石器は藤田が担当した。また、土器類の抽出に際しては、日下和寿氏（白石市教育委員会）に協力をいただいた。

遺物の実測図作成は、縄文・弥生土器を山田・佐伯、土師器を山田、土製品を山田・藤田、石器を藤田が担当した。また、実測図作成にあたり、縄文・弥生土器の一部については大坂拓氏（宮城県教育庁文化財保護課）、石器の一部については高瀬克範氏（北海道大学）の協力を得た。この他、縄文・弥生土器、土師器の一部の実測図作成は、㈱イビソク・国際文化財㈱・㈱シン技術コンサルに委託した。土器実測図のトレースは佐伯・渡邊（洋）、石器実測図のトレースは藤田・渡邊（洋）が行った。

遺物写真撮影・加工は（株）アートプロフィールに委託した。

遺構整理については、全般を山田・藤田・佐伯が担当し、断面図トレース、データ入力・校正、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊（洋）・及川が行った。

9．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、 今回使用した座標値は、東日本大震災前の値を基本としており、震災後のＸ・Ｙ座標の補正データは（ ） 内の数値のとおりである。

Ｒ794：X=－224658.534（－224659.217） Y=3357.005（3360.069） Z=9.724m（標高値）
Ｒ795：X=－224643.784（－224644.467） Y=3361.651（3364.715） Z=9.584m
Ｒ796：X=－224625.024（－224625.708） Y=3368.391（3371.455） Z=9.164m
Ｒ798：X=－224601.500（－224602.184） Y=3376.677（3379.742） Z=8.434m
Ｒ801：X=－224586.599（－224587.283） Y=3379.635（3382.700） Z=7.884m
Ｒ802：X=－224567.938（－224568.622） Y=3386.741（3389.806） Z=7.750m
Ｒ803：X=－224549.236（－224549.920） Y=3393.771（3396.836） Z=7.990m
Ｌ785：X=－224664.077（－224664.759） Y=3272.844（3275.906） Z=9.030m
Ｌ786：X=－224654.332（－224655.014） Y=3276.599（3279.661） Z=8.864m
Ｌ792：X=－224591.292（－224591.975） Y=3299.394（3302.457） Z=9.140m
Ｌ794：X=－224561.212（－224561.896） Y=3313.865（3316.928） Z=10.174m
Ｌ795：X=－224542.530（－224543.214） Y=3321.086（3324.150） Z=8.780m
Ｌ797：X=－224523.320（－224524.004） Y=3326.918（3329.982） Z=8.894m

※補正データの計算は、地殻変動に伴う座標値補正を行う座標補正ソフトウェア「PatchJGDtouhokutaiheiyouoki2011.par」による。

10．本書の第２図は、土地分類基本調査における1/50,000地形分類図「角田」をもとに作成したものである。

11．本書の第３図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000の地形図を複製して作成したものである。

12．本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帳2010年版」（小山・竹原1973）を参照した。

13．本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課2010）を参考にし、以下の通りとした。

ＳＤ：溝跡、ＳＫ：土坑、ＳＮ：水田跡、Ｐ：ピット・木杭跡、ＳＸ：性格不明遺構

14．出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。

Ａ：縄文土器、Ｂ：弥生土器、Ｃ：土師器、Ｅ：須恵器、Ｆ：土製品、Ｋ：石器、Ｌ：木製品

15．遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。

調査区全体図：1/500、調査区部分図：1/200・1/300、水田跡・溝跡・ピット・木杭跡：1/80、土坑：1/50、断面図：1/40・1/50・1/80・1/100、土器・土製品類等：1/3、石器類：1/2・1/3・1/4・2/3

16．標高は、水準点を基にした海抜高度で示した。

17．遺構内の傾斜の部分は「 ⊤⊤⊤ 」、後世の撹乱は「撹」と表記し、その傾斜部は「 ⊤⊤⊤ 」で示した。

18．その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章１にまとめた。

19．本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、第Ⅰ章～第Ⅲ章・第Ⅳ章第１節・第Ⅴ章１(1)・(2)・(5)、Ⅴ章２・３、第Ⅴ章１(3)は佐伯、第Ⅴ章１(4)は藤田が執筆した。また、第Ⅴ章(5)の石器の記載の一部については高瀬克範氏（北海道大学）に執筆していただいた。図版の版組みは山田、報告書編集は山田・佐伯が行った。

20．本書の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会・宮城県考古学会総会等でその内容の一部を報告しているが、それらと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

21．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺 跡 名：**中筋（なかすじ）遺跡**　（宮城県遺跡地名表登載番号 14080　遺跡記号 NS）
所 在 地：宮城県亘理郡山元町鷲足字中筋
調査原因：常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る事前調査
調査期間：確認調査　平成 23(2011)年 3 月 11 日、11 月 18 日～25 日
　　平成 24(2012)年 3 月 7 日～14 日、8 月 9 日～8 月 22 日
　　事前調査　平成 24(2012)年 8 月 23 日～ 12 月 19 日
調査面積：約 4,140 ㎡（対象面積約 9,300 ㎡）
　　【A 区：約 1,870 ㎡、B 区：約 490 ㎡、その他（A・B 区以外の確認調査トレンチ）：約 1,780 ㎡】
調査主体：山元町教育委員会
調査担当：山元町教育委員会生涯学習課
　　山田　隆博　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事】
　　丹野　修太　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事（任期付職員）】
　　藤田　祐　　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】
　　渡邊　理伊知【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】
調査協力：宮城県教育庁文化財保護課、東日本高速道路株式会社東北支社仙台工事事務所

中筋遺跡 A 区　調査風景（西から撮影）

目　次

序文
例言・調査要項・目次・挿図目次・表目次

第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1
1．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
2．周辺の遺跡 …… 1

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 …… 8
1．常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯 …… 8
（1）調査に至る経緯 …… 8
①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯　②文化財保護法に基づく手続き
（2）施工路線内の発掘調査の経過 …… 9
2．中筋遺跡発掘調査の経過 …… 9

第Ⅲ章　発掘調査 …… 12
1．発掘調査の方法 …… 12
2．基本層序 …… 15
3．発見された遺構と遺物 …… 29
（1）A区検出遺構 …… 34
①水田跡 …… 35
②性格不明遺構 …… 35
③溝跡 …… 38
④木杭跡・ピット …… 40
（2）B区検出遺構 …… 42
（3）基本層出土遺物 …… 82
①A区基本層出土遺物 …… 82
②B区基本層等出土遺物 …… 156
（4）その他の出土遺物 …… 156

第Ⅳ章　自然科学分析 …… 165
第1節　はじめに …… 165
第2節　山元町中筋遺跡の土層断面と大規模イベント堆積物　松本秀明・遠藤大希（東北学院大学地域構想学科） …… 167
第3節　中筋遺跡A区における自然科学分析報告　株式会社 古環境研究所 …… 181
第4節　中筋遺跡における火山灰分析　株式会社 古環境研究所 …… 193
第5節　中筋遺跡A区の花粉分析と大型植物化石分析　古代の森研究舎 …… 197
第6節　中筋遺跡から出土した加工材の樹種同定と放射性炭素年代測定　古代の森研究舎 …… 209
第7節　中筋遺跡における放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体分析　㈱加速器分析研究所 …… 215
第8節　中筋遺跡における放射性炭素年代測定　㈱加速器分析研究所 …… 221
第9節　宮城県山元町中筋遺跡出土土器の圧痕分析　高瀬克範（北海道大学大学院文学研究科） …… 227
第10節　宮城県山元町中筋遺跡出土石器の使用痕分析　高瀬克範（北海道大学大学院文学研究科） …… 235

第Ⅴ章　総括 …… 245
1．出土遺物の特徴と時期 …… 245
（1）縄文土器 …… 245
（2）弥生土器 …… 248
（3）土師器 …… 262
（4）石器 …… 270
（5）土製品 …… 274
2．検出した遺構の特徴と時期 …… 275
（1）検出遺構の所属時期 …… 275
（2）中筋遺跡で確認された自然災害痕跡 …… 276
（3）縄文時代の遺構 …… 279
（4）弥生時代の遺構 …… 280
（5）古墳時代の遺構 …… 281
3．まとめ …… 284

引用・参考文献
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　山元町と中筋遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　中筋遺跡及び山元町内の地形分類図 ・・・・・・・・・・・2
第３図　山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡・・・・・6
第４図　中筋遺跡調査区の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第５図　中筋遺跡基本層序模式図・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第６図　中筋遺跡Ａ区基本層序（１）・・・・・・・・・・・・・ 17・18
第７図　中筋遺跡Ａ区基本層 5A 層及び 5B・C 層確認範囲・・・19
第８図　中筋遺跡Ａ区基本層序（２）・・・・・・・・・・・・・・ 21
第９図　中筋遺跡Ａ区基本層序（３）・・・・・・・・・・・・・・ 22
第１０図　中筋遺跡Ｂ区基本層序（１）・・・・・・・・・・・・・25・26
第１１図　中筋遺跡Ｂ区基本層序（２）・・・・・・・・・・・・・・ 28
第１２図　中筋遺跡調査区全景（１）・・・・・・・・・・・・・・ 30
第１３図　中筋遺跡主要遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・ 31・32
第１４図　中筋遺跡調査区全景（２）・・・・・・・・・・・・・・ 33
第１５図　中筋遺跡Ａ区遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・ 34
第１６図　ＳＮ１～３水田跡・ＳＸ１性格不明遺構（１）・・・・・・ 36
第１７図　ＳＮ１～３水田跡・ＳＸ１性格不明遺構（２）・・・・・・ 37
第１８図　ＳＤ１溝跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
第１９図　ＳＤ２溝跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第２０図　Ａ区Ｐ１～３ピット・杭跡（１）・・・・・・・・・・・ 40
第２１図　Ａ区Ｐ１～３ピット・杭跡（２）・・・・・・・・・・・ 41
第２２図　中筋遺跡Ｂ区土坑群（１）-遺構配置図-・・・・・・・・ 42
第２３図　中筋遺跡Ｂ区土坑群（２）・・・・・・・・・・・・・・ 43
第２４図　ＳＫ１土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・・・・・ 44
第２５図　ＳＫ１土坑（２）-遺物出土状況①-・・・・・・・・・・ 45
第２６図　ＳＫ１土坑（３）-完掘・検出・断面・遺物出土状況②-・・ 46
第２７図　ＳＫ１土坑（４）-出土遺物①-・・・・・・・・・・・・ 47
第２８図　ＳＫ１土坑（５）-出土遺物②-・・・・・・・・・・・・ 48
第２９図　ＳＫ１土坑（６）-出土遺物③-・・・・・・・・・・・・ 49
第３０図　ＳＫ１土坑（７）-出土遺物④-・・・・・・・・・・・・ 50
第３１図　ＳＫ１土坑（８）-出土遺物写真図版①-・・・・・・・・ 51
第３２図　ＳＫ１土坑（９）-出土遺物写真図版②-・・・・・・・・ 52
第３３図　ＳＫ１土坑（１０）-出土遺物写真図版③-・・・・・・・ 53
第３４図　ＳＫ２土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・・・・・ 54
第３５図　ＳＫ２土坑（２）-出土遺物-・・・・・・・・・・・・・ 55
第３６図　ＳＫ３土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・・・・・ 56
第３７図　ＳＫ３土坑（２）-出土遺物-・・・・・・・・・・・・・ 57
第３８図　ＳＫ３土坑（３）-写真図版-・・・・・・・・・・・・・ 58
第３９図　ＳＫ４土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・・・・・ 59
第４０図　ＳＫ４土坑（２）-遺物出土状況・写真図版①-・・・・・ 60
第４１図　ＳＫ４土坑（３）-出土遺物-・・・・・・・・・・・・・ 61
第４２図　ＳＫ４土坑（４）-写真図版②出土遺物-・・・・・・・・ 62
第４３図　ＳＫ５土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第４４図　ＳＫ６土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第４５図　ＳＫ７土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・・・・・ 65
第４６図　ＳＫ７土坑（２）-遺物出土状況・写真図版-・・・・・・ 66
第４７図　ＳＫ７土坑（３）-出土遺物①-・・・・・・・・・・・・ 67
第４８図　ＳＫ７土坑（４）-出土遺物②-・・・・・・・・・・・・ 68
第４９図　ＳＫ７土坑（５）-出土遺物・写真図版①-・・・・・・・ 69
第５０図　ＳＫ７土坑（６）-出土遺物・写真図版②-・・・・・・・ 70
第５１図　ＳＫ８土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・・・・・ 71
第５２図　ＳＫ８土坑（２）-出土遺物-・・・・・・・・・・・・・ 72
第５３図　ＳＫ８土坑（３）-写真図版-・・・・・・・・・・・・・ 73
第５４図　ＳＫ９土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第５５図　ＳＫ１０土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第５６図　ＳＫ１１土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第５７図　ＳＫ１２土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第５８図　ＳＫ１３・１４土坑（１）-平面図・断面図-・・・・・・ 78
第５９図　ＳＫ１３・１４土坑（２）-写真図版１-・・・・・・・・ 79
第６０図　ＳＫ１３・１４土坑（３）-出土遺物①-・・・・・・・・ 80
第６１図　ＳＫ１３・１４土坑（４）-出土遺物②・写真図版２-・・ 81
第６２図　中筋遺跡Ａ区グリッド図・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第６３図　Ａ区基本層遺物出土遺物状況（１）・・・・・・・・・・ 87
第６４図　Ａ区基本層遺物出土遺物状況（２）・・・・・・・・・・ 88
第６５図　Ａ区基本層３・４層出土遺物 ・・・・・・・・・・・・ 89
第６６図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・ 89
第６７図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・ 90
第６８図　Ａ区基本層３層、4層、6B層出土遺物①-土器類(写真図版)- 91
第６９図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（３）・・・・・・・・・・・ 92
第７０図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（４）・・・・・・・・・・・ 93
第７１図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（５）・・・・・・・・・・・ 94
第７２図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（６）・・・・・・・・・・・ 95
第７３図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（７）・・・・・・・・・・・ 96
第７４図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（８）・・・・・・・・・・・ 97
第７５図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（９）・・・・・・・・・・・ 98
第７６図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１０）・・・・・・・・・・ 99
第７７図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１１）・・・・・・・・・・ 100
第７８図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１２）・・・・・・・・・・ 101
第７９図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１３）・・・・・・・・・・ 102
第８０図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１４）・・・・・・・・・・ 103
第８１図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１５）・・・・・・・・・・ 104
第８２図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物②-土器類（写真図版）- ・・・・ 105
第８３図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物③-土器類（写真図版）- ・・・・ 106
第８４図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物④-土器類（写真図版）- ・・・・ 107
第８５図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物⑤-土器類（写真図版）- ・・・・ 108
第８６図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物⑥-土器類（写真図版）- ・・・・ 109
第８７図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物⑦-土器類（写真図版）- ・・・・ 110
第８８図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１６）・・・・・・・・・・ 111
第８９図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１７）・・・・・・・・・・ 112
第９０図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１８）・・・・・・・・・・ 113
第９１図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（１９）・・・・・・・・・・ 114
第９２図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（２０）・・・・・・・・・・ 115
第９３図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（２１）・・・・・・・・・・ 116
第９４図　Ａ区基本層６Ｂ層出土遺物（２２）・・・・・・・・・・ 117
第９５図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・ 118
第９６図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・ 119
第９７図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（３）・・・・・・・・・・・ 120
第９８図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（４）・・・・・・・・・・・ 121

第９９図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・・ 122
第１００図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・・ 123
第１０１図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・・ 124
第１０２図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・・ 125
第１０３図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（９）・・・・・・・・・・・・・・ 126
第１０４図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１０）・・・・・・・・・・・・・ 127
第１０５図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１１）・・・・・・・・・・・・・ 128
第１０６図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物①-土器類（写真図版）－・・・・ 129
第１０７図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物②-土器類（写真図版）－・・・・ 130
第１０８図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物③-土器類（写真図版）－・・・・ 131
第１０９図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物④-土器類（写真図版）－・・・・ 132
第１１０図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物⑤-土器類（写真図版）－・・・・ 133
第１１１図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物⑥-土器類（写真図版）－・・・・ 134
第１１２図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１２）・・・・・・・・・・・・・ 135
第１１３図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１３）・・・・・・・・・・・・・ 136
第１１４図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１４）・・・・・・・・・・・・・ 137
第１１５図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１５）・・・・・・・・・・・・・ 138
第１１６図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１６）・・・・・・・・・・・・・ 139
第１１７図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１７）・・・・・・・・・・・・・ 140
第１１８図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１８）・・・・・・・・・・・・・ 141
第１１９図　Ａ区基本層６Ｄ層出土遺物（１９）・・・・・・・・・・・・・ 142
第１２０図　Ａ区基本層６Ｅ層出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・ 143
第１２１図　Ａ区基本層６Ｅ層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・ 144
第１２２図　Ａ区基本層６Ｅ層出土遺物-土器類（写真図版）－・・・・・ 145
第１２３図　Ａ区基本層６Ｅ層出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・ 146
第１２４図　Ａ区基本層６Ｅ層出土遺物（４）、基本層７層出土遺物（１）　147
第１２５図　Ａ区基本層７層出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・ 148
第１２６図　Ａ区基本層７層出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第１２７図　Ａ区基本層７層出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第１２８図　Ａ区基本層７層出土遺物（５）、８層出土遺物・・・・・・・ 151
第１２９図　Ａ区基本層９・１０層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第１３０図　Ａ区基本層７層出土遺物①-土器類（写真図版）－・・・・・ 153
第１３１図　Ａ区基本層７層出土遺物②-土器類・土製品（写真図版）－ 154
第１３２図　Ａ区基本層８～１０層出土遺物-土器類・土製品（写真図版）－ 155
第１３３図　Ｂ区トレンチ８、トレンチ１１出土遺物（１）・・・・・・ 157
第１３４図　Ｂ区トレンチ１１出土遺物（２）、トレンチ１５・３０出土遺物　158
第１３５図　Ｂ区トレンチ８・１１・１５・３０出土遺物-土器類(写真図版)－ 159
第１３６図　Ｂ区トレンチ１１出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・ 160
第１３７図　Ｂ区トレンチ１５・Ａ区表土出土遺物・・・・・・・・・・・ 161
第１３８図　中筋遺跡Ｂ区基本層・視点出土遺物（１）-土師器－・・・ 162
第１３９図　中筋遺跡Ｂ区基本層・視点出土遺物(2)-土師器・写真図版－ 163
第１４０図　中筋遺跡自然科学分析試料採取箇所（平面図）・・・・・・ 166
第１４１図　中筋遺跡縄文時代後期の土器・・・・・・・・・・・・・・・ 245
第１４２図　中筋遺跡縄文時代晩期前葉～中葉の土器・・・・・・・・・ 247
第１４３図　中筋遺跡縄文時代晩期後葉～末の土器・・・・・・・・・・ 247
第１４４図　中筋遺跡出土弥生土器の地文・調整技法・文様（１）・・・・ 249
第１４５図　中筋遺跡出土弥生土器の地文・調整技法・文様（２）・・・・ 250
第１４６図　中筋遺跡弥生土器・高坏集成図・・・・・・・・・・・・・・ 251
第１４７図　中筋遺跡弥生土器・鉢類集成図・・・・・・・・・・・・・・ 252
第１４８図　中筋遺跡弥生土器・蓋集成図・・・・・・・・・・・・・・・ 253
第１４９図　弥生土器・壺集成図（１）-Ａ区基本層４Ｂ層・６Ｂ層－・・・ 255
第１５０図　弥生土器・壺集成図（２）-Ａ区基本層６Ｄ・６Ｅ層－・・・ 256
第１５１図　中筋遺跡弥生土器・甕集成図（１）-Ａ区基本層６Ｂ層－・・ 257
第１５２図　中筋遺跡弥生土器・甕集成図（２）-Ａ区基本層６Ｄ・Ｅ層－　258
第１５３図　中筋遺跡弥生土器・深鉢集成図・・・・・・・・・・・・・・ 259
第１５４図　土師器・鉢集成図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 262
第１５５図　土師器・器台集成図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 263
第１５６図　土師器・高坏集成図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 264
第１５７図　土師器・壺集成図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 264
第１５８図　土師器・甕集成図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
第１５９図　土師器・ミニチュア土器・・・・・・・・・・・・・・・・・ 265
第１６０図　ＳＫ１土坑出土主要土器・・・・・・・・・・・・・・・・・ 268
第１６１図　ＳＫ７土坑出土主要土器・・・・・・・・・・・・・・・・・ 269
第１６２図　Ａ区基本層６Ｂ・６Ｄ層出土遺物石包丁・・・・・・・・・・ 271
第１６３図　Ａ区基本層６Ｂ・６Ｄ層出土遺物板状石器・・・・・・・・・ 272
第１６４図　中筋遺跡出土土製支脚とその類例・・・・・・・・・・・・・ 274
第１６５図　中筋遺跡Ａ区砂層（基本層５Ｂ・Ｃ層）確認範囲・・・・・ 277
第１６６図　中筋遺跡Ａ区地点２の砂層（5b 層）断面・・・・・・・・ 277
第１６７図　中筋遺跡Ａ区地点１の砂層（5b 層）断面・・・・・・・・ 277
第１６８図　中筋遺跡周辺の地形分類図と海岸線の位置・・・・・・・・ 278
第１６９図　中筋遺跡・香形遺跡の位置関係・・・・・・・・・・・・・・ 278
第１７０図　中筋遺跡Ｂ区ＳＫＩ～Ｉ４土坑の分布と方向・・・・・・・ 282

表目次

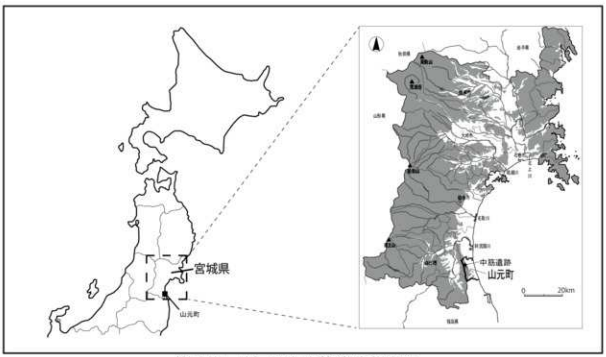
第１表　常磐自動車道建設計画に伴う関連遺跡・地点一覧・・・・・ 7
第２表　その他の山元町内の遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第３表　中筋遺跡Ａ区水田跡畦畔計測表・・・・・・・・・・・・・・ 35
第４表　中筋遺跡Ａ区水田区画計測表・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第５表　中筋遺跡Ｂ区土坑属性表・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第６表　中筋遺跡Ａ区土器類出土状況一覧・・・・・・・・・・・・・ 83
第７表　中筋遺跡Ａ区石器類出土状況一覧・・・・・・・・・・・・・ 83
第８表　塩釜式土器編年対照表・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
第９表　石器の出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 273
第１０表　石器・石材組成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 273
第１１表　中筋遺跡検出遺構の所属時期・・・・・・・・・・・・・・ 275
第１２表　中筋遺跡Ｂ区土坑出土土師器一覧・・・・・・・・・・・・ 282

第Ⅰ章　遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる（第 1 図）。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高 200～300m の山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した 4 列の浜堤（第Ⅱ浜堤列・第Ⅲa～c 浜堤列）が認められる（伊藤 2006、藤本・松本 2012）。

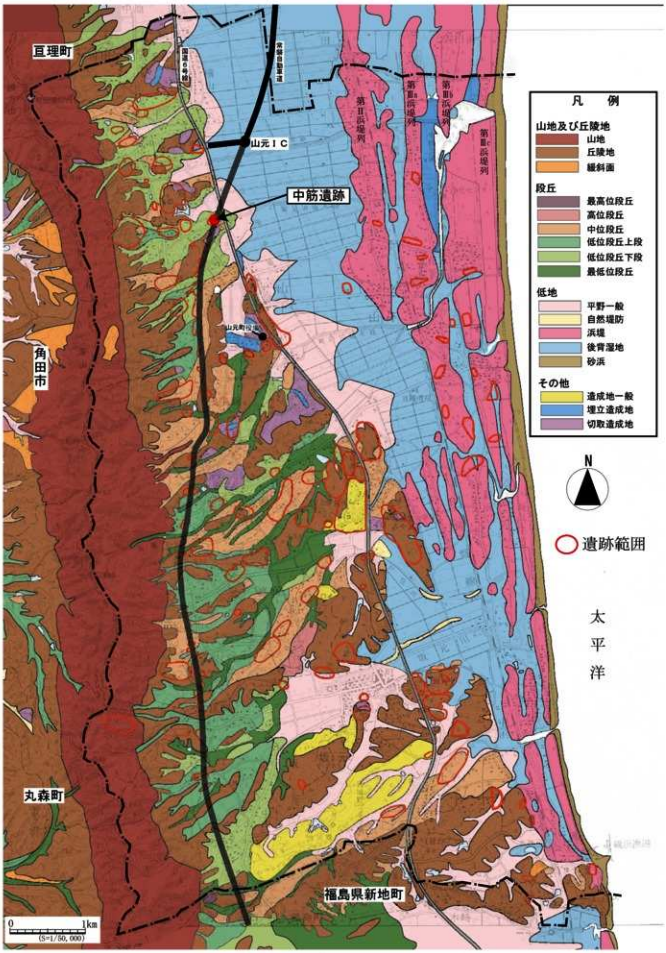
中筋遺跡は、平成 19・20 年度に実施された分布調査により発見された遺跡で、亘理郡山元町鷲足字中筋に所在し、山元町役場の北北西約 1.3km に位置する（第 2・3 図）。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵の鷲足沢川北側の標高 7～10m の低位段丘に立地する（第 2 図）。遺跡の範囲は、東西 250m、南北 100m ほどの広がりをもつ。現況は、水田、畑地、荒地、湿地、宅地である。



第 1 図　山元町と中筋遺跡の位置

2. 周辺の遺跡

山元町には、現在まで 100 余りの遺跡が登録されている（第 3 図、第 1・2 表）。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく 3 つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとん



第２図　中筋遺跡及び山元町内の地形分類図

どで、古代以降の遺跡が分布している。

これまで山元町内の遺跡のうち本格的な発掘調査が実施された遺跡は、中島貝塚や合戦原遺跡、狐塚遺跡などわずか数例で、町内の原始から中世の歴史は未解明な点が多い状況にあった。しかし、平成21年度以降、町内では常磐自動車道山元IC開通に伴う周辺地区の開発や常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う復興事業などに関連した発掘調査が継続的に行われ、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（42）、前期～中期の西石山原遺跡(16)、中期～晩期の中島貝塚(50)、後期の谷原遺跡(4)などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出された（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

西石山原遺跡では、平成22・23年に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出された（初鹿野ほか2012）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

谷原遺跡では、平成20・22・24年の調査で、後期の掘立柱建物跡で構成される環状集落が確認され、この他、土坑や遺物包含層などが検出された（宮城県考古学会2010・2012）。

【弥生時代の遺跡】

北経塚遺跡(42)、館の内遺跡(39)、狐塚遺跡(92)などがある。

北経塚遺跡では、平成21・23年に調査が行われ、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

館の内遺跡では、平成13年に調査が行われ、中期後半の十三塚式の土器が出土している（引地2002）。

狐塚遺跡では、平成5年の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している。（窪田1995）。

【古墳時代の遺跡】

石垣遺跡(6)・的場遺跡(7)、前期～中期の北経塚遺跡(42)、中期の合戦原遺跡(61)、後期～終末期の狐塚遺跡(92)・日向北遺跡(2)・谷原遺跡(4)・井戸沢横穴墓群(88) などがある。

石垣遺跡では、平成23年の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された（山田・藤田2014）。

的場遺跡では、平成23・25年の調査で、前期の竪穴住居跡・土坑・溝跡が検出された（山田・藤田・佐伯2014）。

北経塚遺跡では、平成21・23年の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

合戦原遺跡では、平成2年に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された（岩見ほか1991）。

日向北遺跡では、平成24年の調査で、終末期前後の竪穴住居跡が検出された（山田・丹野2014）。

日向・谷原遺跡では、平成22～24年の調査で、後期の竪穴住居跡が検出された（宮城県考古学会2010）。

狐塚遺跡では、平成4・5年に調査が行われ、後期の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出

された（千葉 1993、窪田 1995）。

井戸沢横穴墓群では、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。

【奈良・平安時代の遺跡】

館の内遺跡(39)、合戦原遺跡(61)、狐塚遺跡(92)、日向遺跡(3)、谷原遺跡(4)、涌沢遺跡(5)、石垣遺跡(6)、的場遺跡(7)、内手遺跡(10)、上宮前北遺跡(13)、向山遺跡(93)、熊の作遺跡（94）、北名生東窯跡（68）、犬塚遺跡（100）、新中永窪遺跡（102）、雷神遺跡（105）、内手 B 遺跡（126）などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している（引地 2002）。

合戦原遺跡では、平成 2 年の調査で、奈良時代～平安時代の須恵器窯跡が検出された（岩見ほか 1991）。

日向遺跡では、平成 23 年の調査で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑などが検出された。

谷原遺跡では、平成 20・22・24・25 年の調査で、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・大溝・土坑などが検出され、円面硯や風字硯が出土している（宮城県考古学会 2010・2012）。

涌沢遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の集落跡や土器廃棄土坑、製鉄関連遺構が検出され、墨書土器や八稜鏡などが出土した(宮城県考古学会 2012、初鹿野 2013a)。

石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構、土器廃棄土坑が検出され、土器廃棄土坑からは墨書土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

内手遺跡では、平成 23 年の調査で、平安時代の木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出されている(初鹿野 2013b)。

上宮前北遺跡では、平成 24 年の調査で、平安時代の製鉄炉が検出されている(初鹿野 2013b)。

向山遺跡では、平成 25 年の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている(宮城県考古学会 2013、初鹿野 2015)。

熊の作遺跡では、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、門跡が検出され、「坂本願」「大領」「子弟」などの墨書土器や風字硯、石帯、木簡、木製品などが出土している(宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015、吉野 2015)。

北名生東窯跡では、昭和 37・38・52 年に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した（鍛冶 1971）。

犬塚遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代の竪穴住居跡・木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された(初鹿野 2015)。

新中永窪遺跡では、平成 26 年の調査で、奈良～平安時代初期の竪穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された((宮城県考古学会 2014、初鹿野 2015)。

雷神遺跡では、平成 25・26 年の調査で、奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

内手 B 遺跡では、平成 26 年の試掘調査で、奈良時代の須恵器窯跡などが検出された。

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(42)、小平館跡(43)、日向遺跡(3)、谷原遺跡(4)、山下館跡（56）、鷲足館跡(49)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑

が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

日向・谷原遺跡では、平成 22・24 年の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された（宮城県考古学会 2010・2012）。

小平館跡は、室町時代の天文年間（1532～1555 年）に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で（柴桃 1974）、平成 24・25 年に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された。

山下館跡では、平成 26 年に調査が行われ、平場・土塁・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された（宮城県考古学会 2014）。

鷲足館跡では、平成 24～26 年に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

【近世の遺跡】

石垣遺跡(6)、的場遺跡(7)、山王 B 遺跡(9)、蓑首城跡(96)などがある。

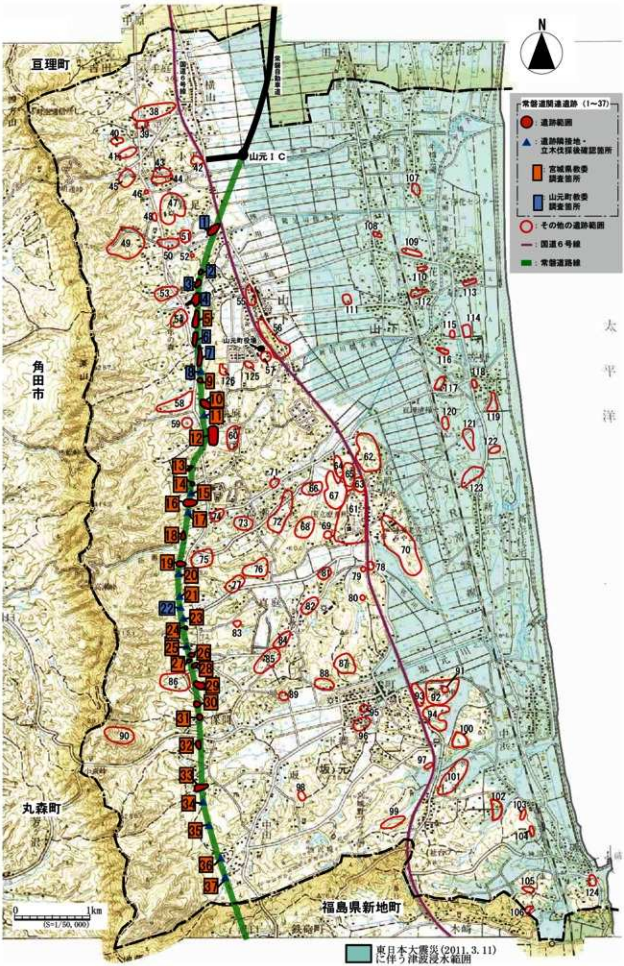
石垣遺跡では、平成 23 年の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年の調査で、17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

山王 B 遺跡では、平成 22 年の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和 2（1616）年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成 25・26 年に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡が検出された（宮城県考古学会 2013）。

中筋遺跡　調査風景



第３図　山元町内の遺跡分布と常磐自動車道建設関連遺跡

第1表　常磐自動車道建設計画に伴う関連遺跡・地点一覧

No.	遺跡名	種別	時代等
1	**中筋遺跡**	水田・包含層・墓域	縄文晩・弥生・古墳・中世 【平成23・24年度調査：町】
2	日向北遺跡	集落	江木田採取確認箇所→日向北遺跡として登録 古墳、中・近世、【平成23年度調査：町】 収蔵文献：山之町文化財調査報告書第6集
3	日向遺跡	集落	古代～中世【平成23年度調査：町】 収蔵文献：山之町文化財調査報告書第6集
4	谷原遺跡	集落	縄文～中世 【平成23・24年度調査：町】
5	清沢遺跡	集落・生産	江木田採取確認箇所→曲沢遺跡として登録 古代～近世、【平成24年度調査：町】
6	石垣遺跡	集落	縄文・古墳～近世　【平成23年度調査：町】 収蔵文献：山之町文化財調査報告書第6集
7	的場遺跡	集落	縄文・古墳～近世【平成23・24年度調査：町】 収蔵文献：山之町文化財調査報告書第6集
8	—	—	江木田採取確認箇所、【平成23年度調査：町】 現地確認の結果、調査不要と判断
9	山王B遺跡	集落	近世、【平成22・23年度調査：県】 収蔵文献：宮城県文化財調査報告書第230集
10	内手遺跡	製鉄・生産	平安 【平成23年度調査：県】
11	内手遺跡 南隣接地	生産	古代の本沢窯跡(墓域跡) 内手遺跡確認調査、【平成23年度調査：県】
12	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世、【平成22年度調査：県】 収蔵文献：宮城県文化財調査報告書第230集
13	上宮前北遺跡	製鉄	江木田採取確認箇所→上宮前北遺跡として登録 古代、【平成24年度調査：県】
14	上宮前遺跡	散布地	平安・中世、【平成22・23年度調査：県】 収蔵文献：宮城県文化財調査報告書第230集
15	西石山原遺跡 北隣接地	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成22年度調査：県】
16	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安、【平成22・23年度調査：県】 収蔵文献：宮城県文化財調査報告書第230集
17	西石山原遺跡 南隣接地	集落	時期不明の住居跡1基確認 西石山原遺跡確認調査、【平成22年度調査：県】
18	北山神遺跡	散布地	縄文、【平成22・23年度調査：県】 収蔵文献：宮城県文化財調査報告書第230集
19	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代、試掘の結果、用地内に遺構なし 【平成22年度調査：県】 収蔵文献：宮城県文化財調査報告書第230集
20	南山神B遺跡 隣接地	集落	試掘の結果、縄文時代の遺構確認、 南山神北遺跡範囲拡大、【平成24年度調査：県】
21	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県・町】
22	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】
23	新田B遺跡 隣接地	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】
24	新田B遺跡	散布地	古代、試掘の結果、用地内に遺構なし 【平成23年度調査：県】
25	影倉E遺跡 隣接地	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】
26	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代～中世、おとし穴 【平成23年度調査：県】
27	影倉B遺跡	散布地	縄文 【平成23年度調査：県】
28	影倉C遺跡	散布地	古代 【平成23年度調査：県】
29	影倉D遺跡	製鉄	古代、製鉄 【平成23年度調査：県】
30	荷駄場B遺跡	散布地	古代 【平成23年度調査：県】
31	荷駄場遺跡	散布地	縄文、試掘の結果、用地内に遺構なし 【平成23年度調査：県】
32	上小山遺跡	散布地	古代～中世 【平成23年度調査：県】
33	法輝遺跡	散布地	縄文、試掘の結果、用地内に遺構なし 【平成23年度調査：県】
34	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】
35	—	—	現地確認の結果、調査不要と判断 【平成23年度調査：県】
36	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】
37	—	—	試掘の結果、遺跡との関わりなし 【平成23年度調査：県】

※**太字ゴシック体**：本報告遺跡

第2表　その他の山元町内の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代
38	大平館跡	城館	中世
39	館の内遺跡	遺物包含地	古代
41	昧曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
41	昧曽野遺跡	散布地	古代
42	北経塚遺跡	集落・円墳・経塚	縄文前・弥生～平世
43	小平館跡	城館	中世
44	館横穴墓群	横穴墓	古墳後
45	清水遺跡	散布地	弥生
46	北ノ入遺跡	散布地	古代
47	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
48	北遺跡	散布地	古代
49	笠足館跡	城館	中世
50	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩
51	中遺跡	散布地	古墳後
52	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
53	石堂遺跡	散布地	古代
54	山寺館跡	城館	中世
55	作田山館跡	城館	中世
56	山下館跡	城館	中世
57	台向窯跡	窯跡	古代
58	入山遺跡	散布地	縄文後・古代
59	山王遺跡	製鉄	古代？
60	下大沢遺跡	散布地	縄文前
61	台戦原遺跡	集落・円墳・窯跡	古墳中・後・奈良・平安
62	台戦原B遺跡	製鉄	古代？
63	台戦原C遺跡	古墳群	古代
64	鎧下窯跡	窯跡	古代
65	中島館跡	城館	中世
66	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
67	大久保B遺跡	散布地	古代
68	北名生東窯跡	窯跡	古代
69	北名生東B窯跡	窯跡	古代
70	声花山遺跡	窯跡	縄文～古代
71	笠徒遺跡	散布地	古代
72	宮原遺跡	散布地	古代
73	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
74	石山原遺跡	散布地	縄文
75	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
76	真原館跡	城館	中世
77	北鹿野遺跡	散布地	古墳
78	貝吹城跡	城館	中世
79	切貝神塚	塚	中・近世
80	北越塚	塚	近世？
81	上台遺跡	散布地	弥生・平安
82	原遺跡	散布地	古墳

No.	遺跡名	種別	時代
83	北種現遺跡	製鉄	平安
84	浅生遺跡	散布地	古代
85	南種現遺跡	散布地	縄文早・前・古墳
86	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
87	愛宕山館跡	城館	室町
88	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
89	日向遺跡	散布地	古墳中・後
90	新城山古館跡	城館	中世
91	狐塚古墳群	円墳	古墳後
92	狐塚遺跡	集落・生産	弥生・古墳・平安
93	向山遺跡	集落・生産	古墳～平安
94	熊の作遺跡	集落	古代
95	鎧下遺跡	散布地	弥生
96	蛍雪城跡	城館	近世
97	作田種穴古墳群	横穴墓	古墳後
98	川内遺跡	製鉄	平安？
99	一の沢遺跡	散布地	弥生
100	大塚遺跡	集落・生産	古代
101	駒場原遺跡	散布地	古代
102	新中条遺跡	集落・生産	古代
103	東作経塚	経塚	平安～室町
104	大塚小塚十三塚	塚	中世？
105	雷神遺跡	集落・生産	古代
106	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
107	北泥沼遺跡	散布地	古代
108	泥沼遺跡	散布地	古代
109	烽合遺跡	散布地	古代
110	北鎌倉遺跡	散布地	古代
111	新田遺跡	散布地	縄文前・古代
112	諸輪遺跡	散布地	古代
113	浜遺跡	散布地	古代
114	花笠遺跡	散布地	古代
115	西北谷地A遺跡	散布地	古代
116	西北谷地B遺跡	散布地	古代
117	西須賀遺跡	散布地	古代
118	笠野A遺跡	散布地	古代
119	笠野B遺跡	散布地	古代
120	北中須賀遺跡	散布地	古代
121	狐須賀遺跡	散布地	古代
122	笠浜遺跡	散布地	古代
123	新浜遺跡	散布地	古代
124	港船番所跡	番所	近世
125	作田山遺跡	製鉄	古代
126	内手B遺跡	生産・製鉄	古代

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

1. 常磐自動車道（県境～山元間）建設工事計画と発掘調査に至る経緯

（1）調査に至る経緯

①路線内の埋蔵文化財の取り扱い決定までの経緯

宮城県亘理郡山元町は、常磐自動車道の事業計画地の一つとなっており、平成 11 年度に山元 IC から福島県の新地 IC までのおおよそのルートが決定したことを受け、日本道路公団東北支社仙台工事事務所長から平成 12 年 2 月 5 日付で、道路工事と埋蔵文化財の関わりについての「協議書」が提出された。宮城県教育委員会（以下、県教委）、山元町教育委員会（以下、町教委）では、協議の結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 12 年 5 月 29 日付け宮城県教育庁文化財保護課長通知により、路線内に含まれる周知の遺跡 4 カ所については、遺構の分布状況を把握するために、「確認調査」を実施する対応に決定した。しかし、具体的な施工時期等が未決定だったため、その後の高速道路建設工事に関する埋蔵文化財の対応は、平成 19 年度までの一定期間、具体的な動きがない状態であった。

平成 19 年度になり、常磐自動車道の施工時期・具体的な路線が決定し、用地のセンター杭設置が完了したことを受け、東日本高速道路株式会社（以下、事業主）・県教委・町教委の三者で改めて協議を行った結果、山元 IC 以南から県境までの総長約 10km の路線について、本格的な分布調査を実施し、路線内の遺跡の分布状況について再度調査することとなった。

分布調査は、県教委・町教委のほか、事業主・町担当部局の担当職員が参加し、平成 20 年 2 月 26 日～28 日（県教委 7 名・町教委 2 名）、平成 21 年 3 月 23 日・24 日（県教委 10 名、町教委 1 名）の 5 日間にわたり実施された。その結果、路線内では、十数箇所で新たに遺跡が発見され、すでに確認されていた周知のものと合わせて 21 遺跡確認された。また、山林のため遺跡の有無が確認できなかった箇所のうち、地形的に遺跡が存在する可能性のある箇所や遺跡隣接地に該当する箇所も 16 箇所確認され、路線内の要確認箇所は、合計 37 地点となった。

これを受け、平成 21 年 5 月に県教委・町教委・事業主の三者で、遺跡の取り扱い・調査体制等について協議した結果、路線内に多数の遺跡・確認箇所があり、かつ遺跡保存のための工法変更が難しいと判断されたことから、路線内 37 箇所の全てについて発掘調査が必要であると判断された。しかしながら、平成 21 年時点での町の調査体制では、提示された調査期間内に発掘調査完了見込みが立たないことから、発掘調査は県教委の全面的な協力を得て、県教委と町教委で分担することとなった。また、用地買収の状況により、平成 21 年度中に路線内の発掘調査可能箇所について調査着手するものとした（しかしながら、平成 21 年 11 月の段階で、平成 21 年度中の発掘調査着手が困難な状況となったため、本格的な発掘調査は、平成 22 年度から開始することとなった）。

②文化財保護法に基づく手続き

上記の三者による協議終了後、新発見遺跡の遺跡登録手続きを実施し、平成 21 年 6 月 2 日には、事業主から路線内の 21 遺跡・その他 16 箇所についての「協議書」が提出され、平成 21 年 6 月 17 日付け「文第 519 号」宮城県教育委員会教育長通知により、周知の遺跡 21 遺跡、その他 16 箇所についての取り扱いが決定した（周知の 21 遺跡：確認調査実施後、遺構が存在する場合は本調査を実施、その他 16 箇所：立木伐採後、現地踏査・確認調査を実施し取り扱いを決定する）。その後、平成 21 年 9 月 1 日には事業主から文化財保護法第 94 条に基づく「発掘通知」が提出され、平成 22 年度から本格的な発掘調

査を実施した。発掘調査完了後には、完了した遺跡ごとにその都度、遺失物法・文化財認定に係る手続きを行った。

（2）施工路線内の発掘調査の経過

常磐自動車道施工路線内の現地発掘調査については、前述のとおり、県教委と町教委が分担し発掘調査を進めた。発掘調査に先立ち、平成 22 年 4 月 1 日に県教委・町教委・事業主の三者で埋蔵文化財発掘調査に係る協定を締結し、その後、町教委については各年度当初に、事業主と山元町で業務委託契約を締結し発掘調査業務にあたった。施工路線内の発掘調査は、原則として高速道路 4 車線分の用地幅に対し、今回の施工分（2 車線分）と側道等の付帯設備のみを対象として行われ、切土部分や工法の関係で 4 車線分の工事を要する範囲については、用地幅すべてを調査の対象とした。また、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴い、常磐自動車道が「復興道路」に位置づけられたため、平成 24 年度以降の発掘調査実施にあたっては、「復興事業に伴う埋蔵文化財」の適用を受けることとなり、「復興の基準」(平成 23 年 6 月 3 日付け文第 268 号宮城県教育委員会教育長通知、平成 23 年 4 月 28 日付け 23 庁財第 61 号文化庁次長通知)で調査を実施した。

施工路線内の 21 遺跡、その他 16 箇所の合計 37 箇所の現地発掘調査は、平成 22 年度から開始し、平成 25 年度までの 4 カ年にわたり実施した（第 3 図・第 1 表）。山林のため遺跡の有無を確認できなかった 16 箇所については、調査の結果、遺構が発見された日向北(2)・涌沢(5)・上宮前北(13)の 3 箇所は遺跡として新規登録、遺跡隣接地のうち遺構が発見された 3 箇所(11・17・20)は隣接する遺跡への範囲拡大措置がとられた。したがって、最終的な路線内の遺跡数は 24 遺跡という結果となった。

発掘調査は、用地買収等の進捗状況の影響もあり、平成 22 年以前に用地内の確認調査が実施できなかったため、それぞれ遺跡の状況が把握できない状態での開始となった。したがって、発掘調査に際しては、路線内の遺跡範囲について、まず確認調査を実施し、遺構が発見された場合は、事前調査に切り替えて調査を行う方法で行った。各年度の県教委と町教委の調査遺跡については、第 3 図・第 1 表のとおりである。

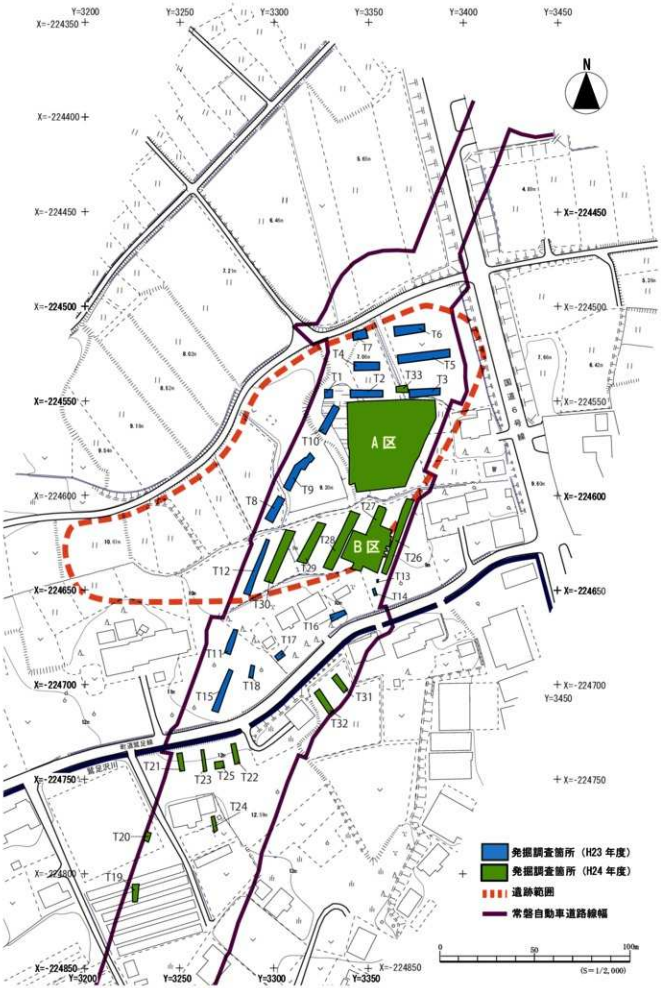
現地調査終了後、県教委・町教委により、それぞれが担当した遺跡について、整理作業・報告書作成業務が進められた。平成 23 年度末には、県教委により山王 B 遺跡（9）・浅生原遺跡(12)・上宮前遺跡(14)・西石山原遺跡(16)・北山神遺跡(18)・南山神 B 遺跡(19)の発掘調査報告書(初鹿野・山口・千葉・大坂 2012)、平成 25 年度末には、町教委により日向北遺跡(山田・丹野 2014)・石垣遺跡(山田・藤田 2014)・的場遺跡(山田・藤田・佐伯 2014)の発掘調査報告書が刊行された。

2. 中筋遺跡発掘調査の経過

中筋遺跡の確認調査・事前調査は、町教委が主体となり実施した。

（1）確認調査の経過

確認調査は平成 23 年 3 月 11 日・11 月 18～25 日、平成 24 年 3 月 7 日～14 日・8 月 9 日～22 日までの 11 日間実施し、中筋遺跡範囲内の路線計画部分の中央から南端にわたり遺構が残存していることが判明した。この結果を受け、事業主と協議した結果、4 車線分の路線とそれに付属する側道部分の範囲について、平成 24 年度に本格的な調査を行うこととなった。



第４図　中筋遺跡　調査区の位置

（２）事前調査の経過

事前調査は、平成 24 年 8 月 23 日～12 月 19 日の 69 日間実施した。調査面積は、調査対象となった事業計画面積約 9,300 ㎡のうち、遺構・遺物が確認された約 4,140 ㎡（A 区・B 区・確認調査トレンチ箇所）である（第 4 図）。

調査に先立ち、8 月 20 日に現場プレハブ・道具倉庫・仮設トイレを現場内に設置し、その後、機材一式の搬入等の作業を行い、8 月 23 日から本格的な調査を開始した。また、今回の調査区では、常時湧水があったことから、水中ポンプによる 24 時間排水を行うため、現場プレハブ付近に仮設電源を設置して調査にあたった。

調査区の表土除去は 8 月 23 日から開始し、10 月 8 日までに基本層序の確認作業・遺構検出作業を実施した。その後、10 月 9 日には調査区全面の空中写真撮影を業務委託により行った。空中写真撮影後は、A 区については 11 月 30 日まで水田跡・溝跡・遺物堆積層等の遺構の精査、B 区については 11 月 29 日まで土坑群の精査を行い、調査のすべてを完了した。調査完了後は、12 月 1 日に現場資材等の撤収を行い、12 月 3 日～19 日に調査区の埋め戻しを実施し、すべての現地作業を終了した。

なお、中筋遺跡の発掘調査体制は、調査員 2 名、調査補助員 2 名、作業員 30 名である。

（３）整理・報告書作成作業の経過

中筋遺跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。中筋遺跡の現地調査完了後も、その他の遺跡の現地調査を継続して進めたため、本格的な整理・報告書作成は、平成 24 年度末以降から開始し、平成 26 年度末に作業を完了した。

【平成 24 年度の作業内容】
- 出土遺物の整理作業（洗浄・保存処理）
- 記録写真のネーミング

【平成 25 年度の作業内容】
- 出土遺物の整理作業（接合・注記・復元）
- 出土遺物の一部実測図作成・写真撮影
- 平面図、断面図の修正・トレース

【平成 26 年度の作業内容】
- 出土遺物の整理作業（復元）
- 出土遺物の実測図・拓本の作成、実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
- 平面図・写真類の版組み
- 報告書執筆
- 出土遺物、記録類の収納

第Ⅲ章　発 掘 調 査

1．発掘調査の方法

今回の調査は、常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

（1）現地調査

【調査区の設定】

今回の調査範囲は、東西に流れる既存の水路により北と南に分断されている状況であった。このことから、水路を境として調査区を設定する方法をとった。調査区は、水路の北側をA区、南側をB区とした（第4図）。

【グリッドの設定】

グリッドは基本層に遺物が多く含まれるA区において設定することとした。グリッド設定の目的としては、A区の調査区内において出土する遺物の分布状況及びその総量を把握するためである。

グリッド設定には以下の2箇所の基準点を基準軸として用いた。座標値はいずれも世界測地系による数値である。基準点R801・R802を基準軸として、北東端を基点とした10m×10mのグリッドを設定した。名称は、北から南へ向かってA～Rのアルファベット大文字、東から西にむかって1～13のアラビア数字を付け、その組み合わせにより「A-1」「B-2」のように呼称した（第13図）。

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー（0.45 ㎥）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、A区は基本層6層上面、B区は基本層B5層上面で行った。

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション(SRX5X)及び電子平板システム（遺構くん cubic 2011 7.02)、遺構断面図は手実測により縮尺1／20で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、それぞれの調査区（A・B区）ごとに1から通し番号（A-001～、B-001～）を振り、各種記録類を作成した。その後、整理作業の段階で、遺構番号を各遺構の性格ごとに再度振り直した。なお、遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構は、原則としてすべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。また、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺物の記録については、遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物でかつ残存状況のよいもののみとした。

遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は基本層・検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。なお、基本層から出土遺物のうち、A区に

ついては、設定したグリット・層位ごとに遺物を取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ(NikonD90/レンズ AF-S　NIKKOR 18-200mm/画質モード RAW+FINE)、俯瞰撮影システム（CUBIC）を使用した。調査区の全景写真については、業務委託でラジコンヘリによる航空撮影（一眼レフデジタルカメラ、6×7フィルムカメラ）を行った。

【現地指導】

現地発掘調査を実施するにあたり、水田跡の調査方法については斎野裕彦氏（仙台市教育委員会）、地質・洪水堆積物については松本秀明氏（東北学院大学）・須田富士子氏、土層の剥ぎ取り方法については及川規氏（東北歴史博物館）に現地にてご指導・ご助言をいただいた。

（２）室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（縄文土器・弥生土器・土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。

遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。基本層出土の遺物については、グリット内→グリット間の手順で接合を行った。

遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・登録】

遺物の抽出・登録は調査員・調査補助員が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。出土遺物のうち、土器類・土製品については、抽出した遺物は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別１点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。石器については全点登録番号を付した。種別ごとの抽出基準は次のとおりである。

（土器類）

原則として口縁部資料・胴部資料については「土器の一辺が5cm以上」のもの、底部資料については「残存高が5cm以上のもの」を報告書掲載の対象とした。ただし、縄文・弥生土器の胴部資料のうち、地文のみのものや無文ものは上記基準を満たしている場合でも抽出の対象から除外した。また、これらの抽出基準を満たさない小破片のものであっても、器形や文様など特徴的なものについては抽出の対象とすることとした。なお、縄文・弥生土器の抽出作業に際しては、日下和寿氏（白石市教育委員会）からご助言・ご助力をいただいた。

（石　器）

石器は原則として全点を登録の対象としたが、このうち報告書掲載としたものは完形品を優先し掲載した。

（土製品）

遺物の大きさに関わらず、図化が可能なものは抽出の対象とした。

【遺物の実測図作成】

遺物の実測図作成は調査員・調査補助員が行った。実測図は原則として手実測により作成したが、一部の遺物は遺物くん cubic2012 4.00 を使用して作成した。また、石器の一部（石包丁・板状石器等）については高瀬克範氏（北海道大学）、縄文土器・弥生時土器の一部については大坂拓氏（宮城県教育委員会）の協力により実測図を作成していただいた。この他、縄文土器・弥生土器・土師器の一部は民間調査機関（株式会社シン技術コンサル東北支店、国際文化財株式会社東北支店、株式会社イビソク仙台支店）に委託して作成した。

【拓本図作成】

遺物の拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。

拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーで PC に画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC 上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

②出土遺物等の自然科学分析・保存処理等

今回の以下の自然科学分析・保存処理等は、次の機関に業務委託または協力により実施した。

◎出土土器圧痕分析、石器使用痕分析：北海道大学　高瀬　克範　氏
○木製品樹種同定・年代測定、花粉分析・大型植物化石分析：古代の森研究舎
○放射性炭素年代測定、炭素・窒素安定同位体分析：㈱加速器分析研究所
○火山灰分析、珪藻分析、プラント・オパール分析：株式会社　古環境研究所
◎砂層の粒度分析・放射性炭素年代測定：東北学院大学　松本　秀明　氏
◎土層の剥ぎ取り：東北歴史博物館　及川　規　氏
○剥ぎ取り土層の保存処理：(有)仙台写真工房

※○：業務委託、◎：協力

③図面の整理・報告書作成

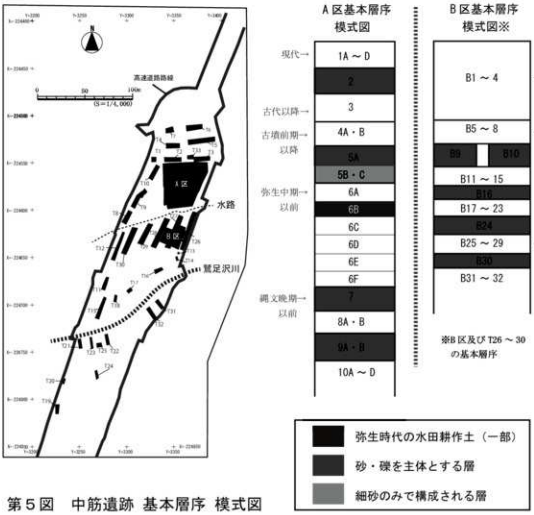
遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。報告書の執筆は、調査員・調査補助員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2012 8.03、Adobe Illustrator CS5・6、Adobe Photoshop CS5・6、Adobe InDesign CS5・6、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

2. 基本層序

今回の調査区（A・B 区）は標高 7～10m の平坦面に位置する。A 区の標高は 7～8m、B 区は 8.5～10m で、B 区南部の標高が最も高く、そこから北・東にかけて緩やかに傾斜し A 区に至る。B 区南側には鷲足沢川、A 区と B 区の境には農業用の水路が流れており、発掘調査実施前の土地利用状況は、A 区が原野・湿地で、その周辺が水田・畑地、B 区は果樹園（りんご畑）で、その周辺は宅地・畑地に利用されている。

調査区の基本層序の確認は、A 区と B 区が現代の水路に分断されていたため、それぞれの調査区ごとに基本層を確認した後、A 区と B 区の基本層がどのように対応しているか検討する方法をとった。その結果、A 区と B 区では土壌の堆積状況に相違がみられ、A 区と B 区の基本層序の一部で対応する可能性がある層を見出すことができたが、A 区と B 区の基本層序を完全に対応させることは難しいと判断された。このことから、今回の報告では、A 区と B 区の基本層序を別の層名として扱い（A 区：1～10 層、B 区：B1～32 層）、それぞれの特徴を記載することとした。なお、A 区・B 区の基本層序の概略については第 5 図のとおりである。



第５図　中筋遺跡 基本層序 模式図

（1）A区基本層序

A区では基本層大別10層、細別31層を確認した（第6～9図）。調査区の地形は南西から北東方向に傾斜しており、原則として基本層はこの傾斜に沿って堆積している。3・4・6・8・10層は砂質シルト・粘土質シルト土を主体とする自然堆積層で、2層・5A層・7層・9層は礫・細砂を主体とする河川起源の砂層、5B・C層は細砂のみを主体とする海浜起源と考えられる砂層である。出土遺物や土層の観察から、1層が現代、3層が古代以降、4層が古墳時代以降、6層が弥生時代以降、7層以下が縄文時代晩期以前に堆積した層であると考えられる。それぞれの層序の特徴は以下のとおりである。

1層：表土（現代）・盛土。層厚5～70cm。土色と混入物の違いにより1a～1d層に細別される。

1A層：灰黄褐色（10YR4/2）・黒褐色（10YR3/1）シルト土。現代の表土。

1B層：にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト土。現代の盛土。黄褐色砂質シルト土含む。

1C層：暗褐色（10YR3/3）シルト土。現代の盛土。

1D層：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質シルト土。旧表土。酸化鉄・砂質土含む。

2層：洪水砂層。標高7.0～7.2m付近に堆積し、A区南西部のみで確認した。にぶい黄褐色（10YR5/3）砂。直径1～5mmの角礫（花崗閃緑岩）を多く含む砂層。層厚5～20cm。

3層：自然堆積層。標高6.4～7.3m付近に堆積し、調査区のほぼ全面で部分的に確認した。にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト土。酸化鉄含む。古代の遺物・古墳時代の遺物含む。層厚5～45cm。

4層：自然堆積層。標高6.4～7.5m付近に堆積し、調査区の中央～北西部・北東部で確認した。土色と混入物の違いにより4A層と4B層に細別される。

4A層：黒褐色（10YR3/2・7.5YR3/2）シルト土。小礫微量・酸化鉄少量含む。層中位に火山灰層が部分的に堆積している。調査区北西側では植物遺体微量含む。古墳時代前期の遺物含む。層厚5～30cm。

4B層：黒褐色（10YR3/2）シルト土。小礫を多く含む。4a層の直下に堆積している層。層厚5～25cm。

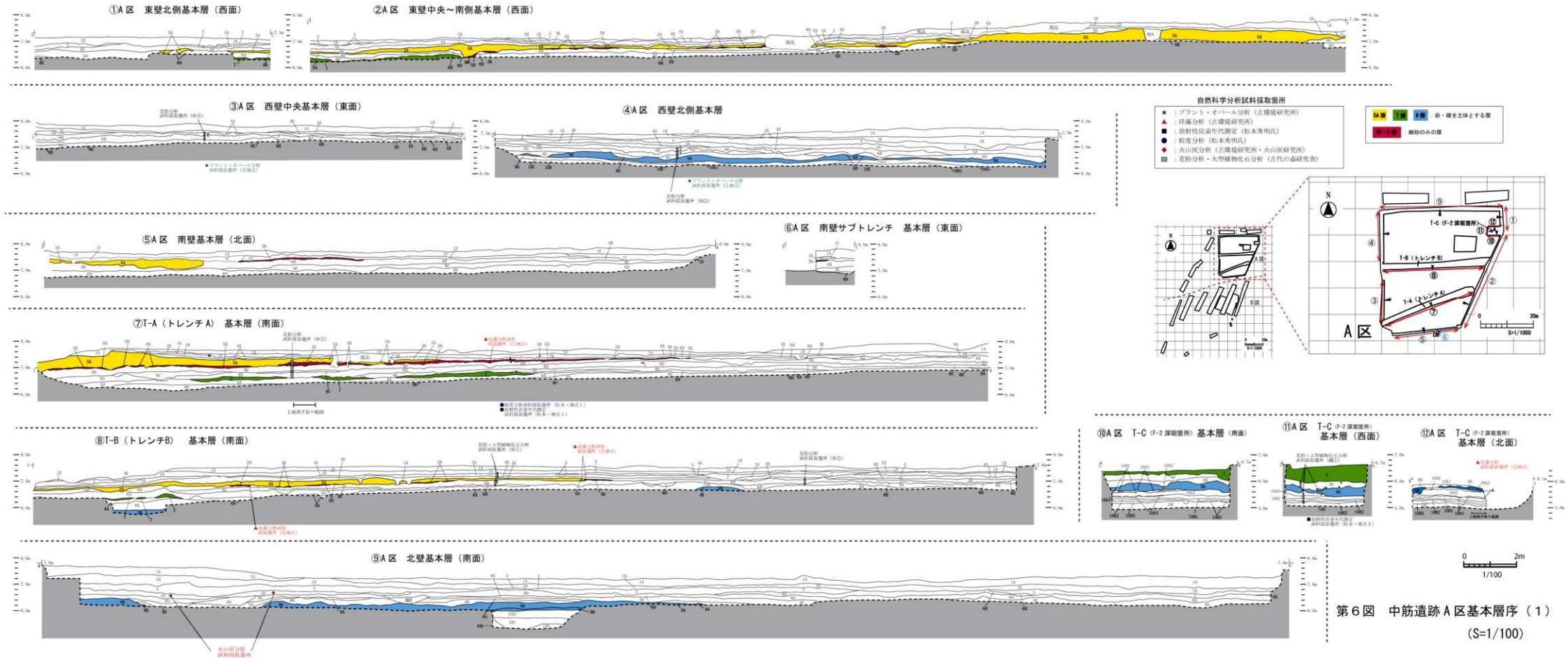
5層：洪水砂層。5A～C層に細別され、5C層→5B層→5A層の順に堆積している。5A層は河川起源、5B・C層は海浜起源と考えられる。調査区内でのそれぞれの分布範囲は第7図に示した。

5A層：にぶい黄褐色（10YR5/3）。小礫と直径1～5cmの角礫（花崗閃緑岩）を多く含む砂層。河川起源の土石流により形成された層と考えられ、5B層・6層直上に堆積している。標高6.4～7.6m付近に堆積し、調査区の東半で確認した。層厚10～30cm。調査区南部の標高が高い地点ほど厚く、標高が低くなるにつれ薄く堆積している。

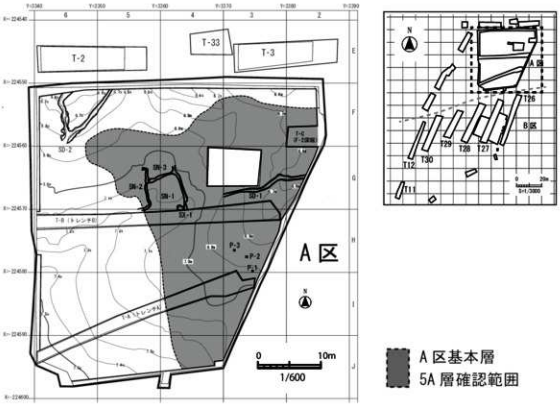
5B層：灰黄褐色（10YR6/2）。細砂で構成される砂層。標高6.4～7.4m付近に堆積し、調査区の東半で確認した。層厚1～8cm。確認範囲においては薄く面的に堆積しており、調査区南西の標高が高い地点ほどさらに薄くなり、途切れている。粒度分析の結果から海浜起源の砂層の可能性が高いと判断される。

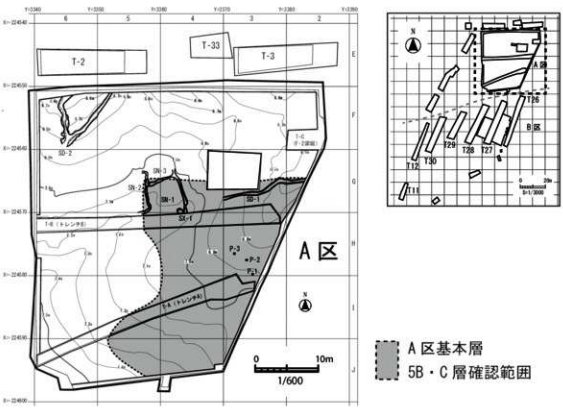
5C層：褐灰色（10YR4/1）。細砂・黒色土細粒子（6層起源）多く含む。5B層の分布域の5B層直下おいてのみ部分的に確認した。層厚1～3cm。5C層に含まれる細砂は5B層起源のものと思われ、海浜起源の細砂の可能性が高い。

6層：自然堆積層。標高6.1～7.4m付近に堆積し、土色と混入物の違いにより6A～F層に細別され、6F層→6E層→6D層→6C層→6B層→6A層の順に堆積している。このうち、6B・D・E層が調査区のほぼ全面で確認された。縄文土器・弥生土器・石器を含む層。



第６図　中筋遺跡 A 区基本層序（１）
（S=1/100）





第７図　中筋遺跡 A区 基本層5A層及び5B・C層確認範囲

6A 層：黒褐色（10YR3/1）シルト土。炭化物片・酸化鉄・小礫少量含む。砂質土含む。調査区中央西側・東端一部のみで部分的に確認した。層厚 5～10cm。

6B 層：褐灰色（10YR4/1）・黒褐色（10YR3/3）シルト土。炭化物片・酸化鉄・小礫少量含む。砂質土含む。調査区の北西部を除いてほぼ全面に分布している。グリット G-4・5 の範囲においては水田耕作土である。層厚 5～30cm。

6C 層：黒褐色（10YR2/2）シルト土。小礫（1～5mm 大）部分的に多く含む。調査区中央から南東にかけてのみ確認した。層厚 5～25cm。

6D 層：褐灰色（10YR4/1）・黒褐色（10YR3/1）シルト土。炭化物片微量、小礫（1～5mm 大）部分的に含む。植物遺体少量・酸化鉄少量含む。調査区のほぼ全面で確認した。層厚 5～30cm。

6E 層：暗褐色（10YR3/3）シルト土。酸化鉄含む。小礫（1～5mm 大）部分的に多く含む。調査区中央～北半で部分的に確認した。層厚 5～20cm。

6F 層：黒褐色（10YR3/2）シルト土。炭化物片・細砂微量含む。調査区中央部付近で確認した。層厚 5cm 前後。

7 層：洪水砂層。標高 6.0～6.7m 付近に堆積し、調査区の東半のみで確認した。にぶい黄褐色（10YR5/3）砂。小礫多く含む。層厚は 5～70cm である。縄文時代晩期以前の遺物を含む。

8 層：自然堆積層。標高 5.7～6.8m 付近に堆積している。土色と混入物の違いにより 8A・8B 層に細別され、8B 層→8A 層の順に堆積している。層厚は 5～50cm である。縄文時代晩期以前の遺物を含む。

8A 層：褐灰色（10YR5/1）砂質シルト土。細砂多く、小礫少量、炭化物片微量、植物遺体含む。

8B 層：黒褐色（10YR3/2）砂質シルト土。小礫（1～5mm）、細砂少量、植物遺体含む。

9 層：洪水砂層。標高 5.4～6.8m 付近に堆積している。土色と混入物の違いにより 9A～9B 層に細別され、9B 層→9A 層の順に堆積している。層厚は 5～40cm である。縄文時代晩期以前の遺物を含む。

9A 層：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂。小礫多量含む。

9B 層：灰褐色（10YR5/2）砂。細砂多量、黒色土粒子含む。

10 層：自然堆積層。標高 5.6～6.6m 以下に堆積している。土色と混入物の違いにより 10A～D 層に細別され、10D 層→10C 層→10B 層→10A 層の順に堆積している。縄文時代晩期以前の遺物を含む。

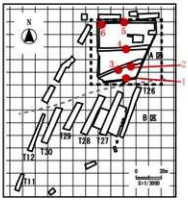
10A 層：砂質シルト土。土色・混入物の違いにより、さらに 4 層に細別される。10A1 層：褐灰色（10YR4/1）。炭化物片・細砂含む。部分的に小礫（1～5mm 大）多く含む。植物遺体含む。10A2 層：灰黄褐色（10YR6/2）。黒色土粒子少量、細砂多く含む。10A3 層：褐灰色（10YR4/1）。炭化物片・細砂含む。部分的に小礫（1～5mm 大）多く含む。植物遺体含む。10A4 層：灰黄褐色（10YR6/2）。黒色土粒子少量、細砂多く含む。

10B 層：砂質シルト土。土色・混入物の違いにより、さらに 3 層に細別される。10B1 層：灰黄褐色（10YR4/2）。炭化物片・細砂少量含む。植物遺体含む。10B2 層：暗褐色（10YR3/3）。炭化物片・細砂少量含む。植物遺体多く含む。10B3 層：灰黄褐色（10YR4/2）。炭化物片・細砂少量含む。植物遺体含む。

10C 層：黒褐色（10YR2/1）粘土質シルト土。植物遺体少量含む。炭化物片含む。

10D 層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト土。小礫（1～2mm 大）少量含む。

1. A区　南壁（北面）　基本層（北から）

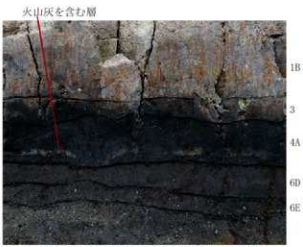


2. A区　トレンチA（北面）　基本層（北から）

3. A区　トレンチA（北面）　基本層（北西から）

4. A区　トレンチB（北面）　基本層（北から）

5. A区　北壁（南面）基本層（南から）

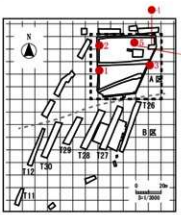


6. A区北壁（北西隅・南面）　基本層（南から）

第８図　中筋遺跡 A区 基本層序（２）

1.A区　西壁中央（東面）　基本層（東から）

2.A区　西壁北側（東面）　基本層（東から）



3.A区　東壁中央
～南側（西面）
基本層（西から）

4.A区　F2深掘箇所
（T-C）北面
基本層（南から）

5.A区　F2深掘箇所（T-C）西面　基本層（東から）

6.A区　F2深掘箇所（T-C）南面　基本層（北から）

第９図　中筋遺跡 A区 基本層序（３）

（2）B 区基本層序

B 区では基本層大別 32 層（B1～B32 層）、細別 56 層を確認した（第 10・11 図）。B 区の基本層序は、確認調査時に設定したトレンチ 26～30（T26～30）の土層断面で観察を行った。B9・10・16・24・30 層は細砂・砂・礫を主体とする砂礫層で、それ以外は砂質シルト土・粘土質シルト土を主体とする自然堆積層である。出土遺物・検出遺構・放射性炭素年代測定の結果等から、B1～4 層は近・現代以降、B5～8 層は古墳時代前期以前、B17～23 層・B25～29 層は弥生時代中期以降に堆積した層であると考えられる。各層の新旧関係は第 10 図に示した。B 区周辺の地形は、土層の堆積状況や遺構の分布から、古墳時代前期の遺構を確認した B5 層の段階には緩やかな平坦面となっていたと考えられる。それ以下の層については、数枚の砂礫層と砂質・粘土質シルト層が互層状に堆積しており、古墳時代前期以前の B 区は旧河道・低湿地であったと推定される。なお、B 区においては、古代以降の堆積層は確認されていないが、これは、近・現代の B 区周辺の土地利用に伴い削平を受けたためと推定される。B 区で確認したそれぞれの層序の特徴は以下のとおりである。

B1～4 層：近・現代以降の表土・盛土。B1 層→B2 層→B3 層→B4 層の順に堆積している。B1・4 層はすべてのトレンチ、B2 層はトレンチ 26・28・30 のみ、B3 層はトレンチ 26～28・30 のみで確認した。

【B1 層】にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト土。現代の表土。

【B2 層】暗褐色（10YR3/3）シルト土。小礫・砂粒含む。現代の表土。

【B3 層】暗褐色（10YR3/4）シルト土。酸化鉄・黄褐色ブロック含む。現代の表土

【B4 層】にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質シルト土。黒色土ブロック・砂質土多く含む。現代の盛土。
現在の果樹園造成時に盛土された層であると考えられる。

B5～8 層：自然堆積層。標高 7.8～9.0m 付近に堆積し、B5 層はすべてのトレンチ、B6 層はトレンチ 26～29 のみ、B7 層はトレンチ 26・27 のみ、B8 層はトレンチ 26～28 のみで確認した。B5 層→B6 層→B7 層→B8 層の順に堆積しており、土色と混入物の違いによりさらに細別される。B5 層は古墳時代前期の遺構確認面であることから、B6 層以下はそれ以前の堆積層と考えられる。

【B5 層】砂質シルト土。土色・混入物の違いにより B5a～d 層に細別される。

・B5a 層　黒褐色（10YR3/1）・暗褐色（10YR3/3）。砂質ブロック土含む。古墳時代前期の遺構確認面。古墳時代前期の遺物を含む。

・B5b 層　暗褐色（10YR3/3）・灰黄褐色（10YR4/2）。炭化物微量、酸化鉄を含み、部分的にグライ化している。古墳時代前期の遺構確認面。古墳時代前期の遺物を含む。

・B5c 層　黒褐色（10YR3/2）。酸化鉄含み、部分的にグライ化している。

・B5d 層　にぶい黄褐色（10YR5/3）。細砂多く含む。酸化鉄含む。

【B6 層】砂質シルト土。土色・混入物の違いにより B6a・B6b 層に細別される。

・B6a 層　灰黄褐色（10YR4/2）。細砂少量、酸化鉄含む。

・B6b 層　にぶい黄橙色（10YR6/4）。細砂多く含む。

【B7 層】砂質シルト土。土色・混入物の違いにより B7a・B7b 層に細別される。

・B7a 層　褐灰色（10YR4/1）。細砂少量、酸化鉄含む。

・B7b 層　にぶい黄橙色（10YR6/3）。細砂多く含む。

【B8 層】粘土質シルト土。土色・混入物の違いにより B8a・8b 層に細別される。

・B8a 層　黒色（10YR2/1）。薄い有機質層で粘性が強い。

・B8b 層　黒褐色（10YR2/2）。細砂・小礫少量含む。

B9 層：砂礫層。標高 8.5～8.8m 付近に堆積し、トレンチ 27～30 で確認した。土色と混入物の違いによりさらに細別（B9a～d 層）され、B9d→B9c→B9b→B9a 層の順に堆積している。各トレンチでの分布状況から、南西方向から北東方向へ流れる旧河道跡とみられる。

・B9a 層　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂。細砂・小礫(直径 1～10cm)を多く含む。

・B9b 層　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂。細砂を多く含む。小礫を含む。

・B9c 層　褐灰色（10YR5/1）砂質シルト土。細砂多く含む。小礫を少量含む。

・B9d 層　暗褐色（7.5YR3/3）砂質シルト土。小礫を部分的に多く含む。酸化鉄を含む。

B10 層：砂礫層。標高 8.2～9.0m 付近に堆積し、トレンチ 27・28・30 で確認した。土色と混入物の違いによりさらに細別（B10a～e 層）され、B10d→10d→B10c→B10b→B10a 層の順に堆積している。各トレンチでの分布状況から、西方向から東方向へ流れる旧河道跡とみられる。

・B10a 層　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂。小礫(直径 0.5～1.0cm）・酸化鉄を含む礫層。

・B10b 層　灰黄褐色（10YR6/2）砂。小礫・細砂・炭化物片・酸化鉄を含む細砂層。

・B10c 層　灰黄褐色（10YR5/2）砂。小礫(直径 0.5～1.0cm）を多く含む礫層。

・B10d 層　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂。細砂を多く含む。

・B10e 層　褐灰色（10YR5/1）砂質シルト土。細砂・黒色土粒子・炭化物片・植物遺体を含む。

B11～15 層：自然堆積層。標高 7.8～8.6m 付近に堆積し、すべての確認トレンチ（T26～30）で確認した。B15 層→B14 層→B13 層→B12 層→B11 層の順に堆積しており、土色と混入物の違いにより B12 層・B14 層はさらに細別される。

【B11 層】暗褐色（10YR3/4）砂質シルト土。細砂を多く含む。黒色土粒子・酸化鉄を含む。

【B12 層】砂質シルト土。土色・混入物の違いにより B12a と B12b 層に細別される。

・B12a 層　にぶい黄褐色（10YR5/3）。細砂・小礫を含む。

・B12b 層　灰黄褐色（10YR5/2）。細砂・小礫を含む。

【B13 層】褐灰色（10YR5/1）粘土質シルト土。細砂を多く含む。部分的にグライ化している。

【B14 層】粘土質シルト土。土色・混入物の違いにより B14a～d 層に細別される。

・B14a 層　灰黄褐色（10YR4/2）。細砂・酸化鉄を含む。弥生土器出土。

・B14b 層　灰黄褐色（10YR4/2）。細砂・シルト土を含む。

・B14c 層　褐灰色（10YR4/1）。細砂・シルト土を互層状に含む。

・B14d 層　灰黄褐色（10YR4/2）。小礫を多く含む。植物遺体を含む。

【B15 層】暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト土。小礫・炭化物片・酸化鉄・植物遺体を含む。

B16 層：砂礫層。標高 7.7～8.5m 付近に堆積し、トレンチ 27～30 で確認した。土色と混入物の違いによりさらに細別（B16a～c 層）され、B16c→B16b→B16a 層の順に堆積している。各トレンチでの分布状況から、南西方向から北東方向へ流れる旧河道跡とみられる。

・B16a 層　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂。小礫(直径 0.5～2.0cm）を多く含む。礫を主体とする層。

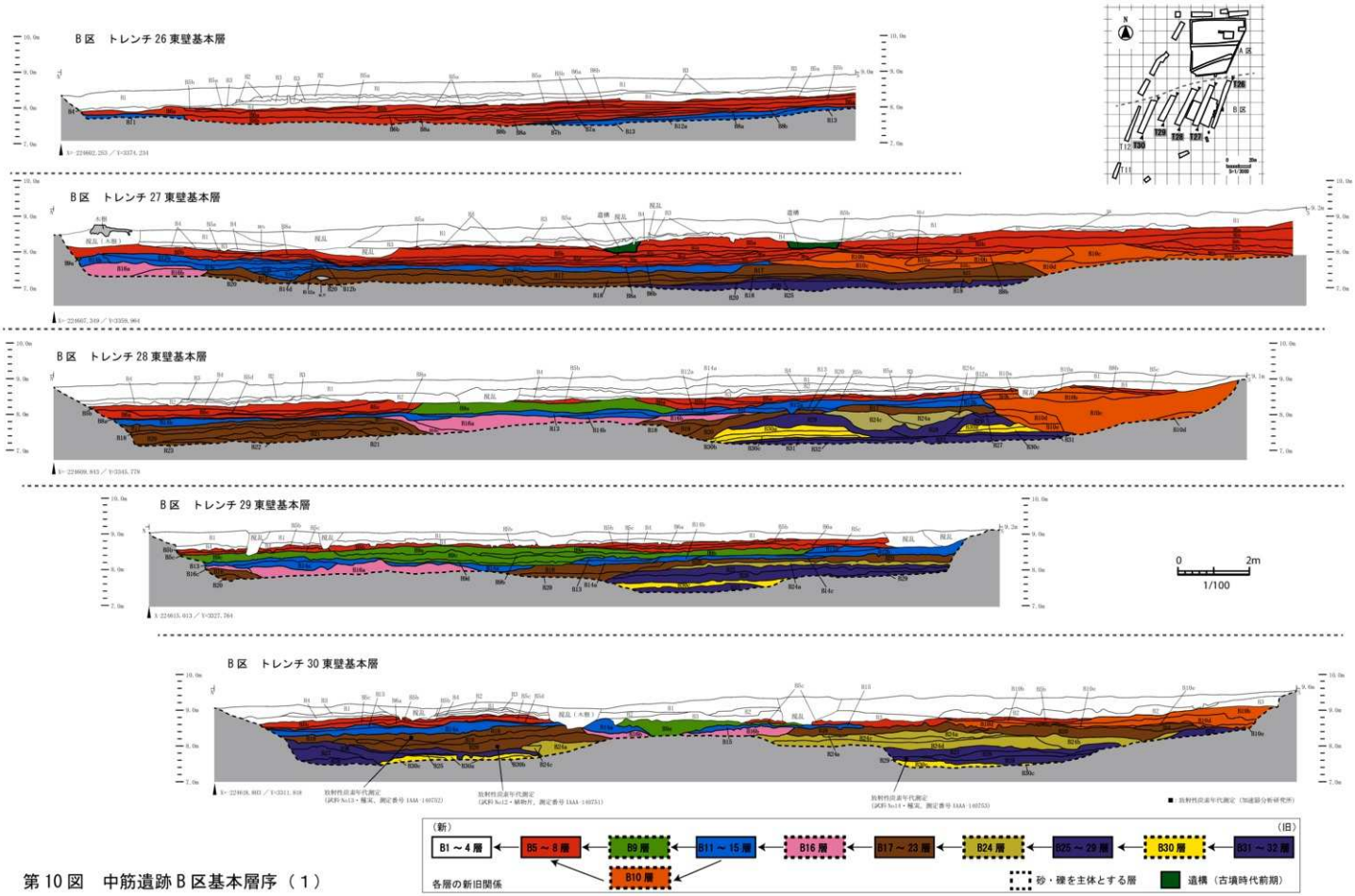
・B16b 層　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂。細砂を多く含む。細砂を主体とする層。

・B16c 層　にぶい黄橙色（10YR7/2）砂。小礫・黒色土粒子・酸化鉄を含む。

B17～23 層：自然堆積層。標高 7.5～8.4m 付近に堆積し、トレンチ 27～30（T26～30）で確認した。B23 層→B22 層→B21 層→B20 層→B19 層→B18 層→B17 層の順に堆積している。B18 層に含まれていた植物遺体の放射性炭素年代測定の結果から、弥生時代中期以降に堆積した層とみられる。

【B17 層】褐灰色（10YR4/1）粘土質シルト土。細砂を多く含む。酸化鉄を含む。

【B18 層】黒褐色（10YR3/2）黒褐色（7.5YR3/2）粘土質シルト土。細砂・酸化鉄植物遺体を含む。B18



第 10 図　中筋遺跡 B 区基本層序（1）

層に含まれていた種実の放射性炭素年代測定の結果では、^{14}C 年代は 2150±30yrBP（暦年較正年代 349～124calBC）で、弥生時代中期頃の年代を示している。

【B19 層】黒褐色（7.5YR3/2）砂質シルト土。細砂・小礫部分的に多く含む。

【B20 層】黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト土。小礫・炭化物片・植物遺体含む。B20 層に含まれていた植物片（葉）の放射性炭素年代測定の結果では、^{14}C 年代は 2050±20yrBP（暦年較正年代 102～2calBC）で、弥生時代中期頃の年代を示している。

【B21 層】にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質シルト土。小礫（直径 0.5～2.0cm）を部分的に多く含む。

【B22 層】灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルト土。細砂を多く含む。炭化物片を微量含む。

【B23 層】灰黄褐色（10YR6/2）砂質シルト土。小礫(直径 0.5～2.0cm）を含む。

B24 層：砂礫層。標高 8.0～8.4m 付近に堆積し、トレンチ 28～30 で確認した。土色と混入物の違いによりさらに細別（B24a～d 層）され、B24d→B24c→B24b→B24a 層の順に堆積している。各トレンチでの分布状況から、西方向から東方向へ流れる旧河道跡とみられる。

・B24a 層　明黄褐色（10YR6/6）砂。小礫を多く含む。

・B24b 層　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂。細砂・小礫を多く含む。

・B24c 層　灰黄褐色（10YR6/2）砂。細砂・黒色土粒子・炭化物片・植物遺体を含む。

・B24d 層　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂。細砂を多く含む。

B25～29 層：自然堆積層。標高 7.4～8.0m 付近に堆積し、トレンチ 27～30 で確認した。黒色・黒褐色・暗褐色の粘土質シルト土を主体とする層で、植物遺体を比較的多く含む。B29 層に含まれていた植物遺体の放射性炭素年代測定の結果から、弥生時代中期以降に堆積した層とみられる。

【B25 層】黒色（10YR2/1）粘土質シルト土。細砂を少量、植物遺体を含む。

【B26 層】黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト土。小礫・炭化物片・植物遺体を含む。

【B27 層】暗褐色（7.5YR3/3）粘土質シルト土。細砂少量、炭化物片・酸化鉄・植物遺体を含む。

【B28 層】黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト土。植物遺体を多く、炭化物片を含む。

【B29 層】黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト土。細砂・小礫を少量、植物遺体を含む。

B29 層に含まれる種実（クルミ）の ^{14}C 年代は 2130±30yrBP（暦年較正年代 199～112calBC）である。

B30 層：砂礫層。標高 7.5～7.6m 付近に堆積し、トレンチ 28～30 で確認した。土色と混入物の違いによりさらに細別（B30a～c 層）され、B30c→B30b→B30a 層の順に堆積している。各トレンチでの分布状況から、西方向から東方向へ流れる旧河道跡とみられる。

・B30a 層　灰褐色（7.5YR4/2）の砂。細砂を多く含む。

・B30b 層　灰黄褐色（10YR5/2）の砂。細砂・小礫・炭化物片を含む。

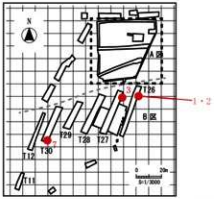
・B30c 層　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂。小礫を多く含む。

B31～32 層：自然堆積層。標高 7.4m 以下に堆積し、トレンチ 28・29 で確認した。

【B31 層】褐灰色（10YR4/1）粘土質シルト土。細砂・植物遺体を含む。

【B32 層】黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト土。小礫を少量含む。植物遺体を含む。

1.B区　T-26 東壁　基本層（北西から）



2.B区　T-26 東壁　基本層（西から）

4.B区　T-28 掘削状況（南東から）

3.B区　T-27 東壁　基本層（西から）

5.B区　T-29 掘削状況（南から）

6.B区　T-30 掘削状況（南西から）

7.B区　T-30 東壁　基本層（西から）

第11図　中筋遺跡 B区 基本層序（2）

3. 発見された遺構と遺物

今回の調査において、本調査を実施したA区・B区で検出した遺構は、水田跡3区画、溝跡2条、ピット1基・杭跡2箇所、土坑14基、性格不明遺構1基で、この他A区において遺物包含層、B区において旧河道跡が確認された（第12～14図）。

これらの遺構から出土した遺物は、発掘調査終了時の未整理の状態で、遺物収納箱（長59cm×幅38cm×深20cm）60箱出土しており、その内訳は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、土製品などである。このうち、縄文土器・弥生土器・石器の大半はA区の遺物包含層、土師器の大半はB区の土坑群から出土している。遺物の出土点数は、縄文土器・弥生土器が最も多く、次いで土師器、石器と続き、須恵器・土製品はわずかである。

以下、調査区ごとに発見された遺構・遺物について記述する。

A区　作業風景

B区　土坑群　調査風景

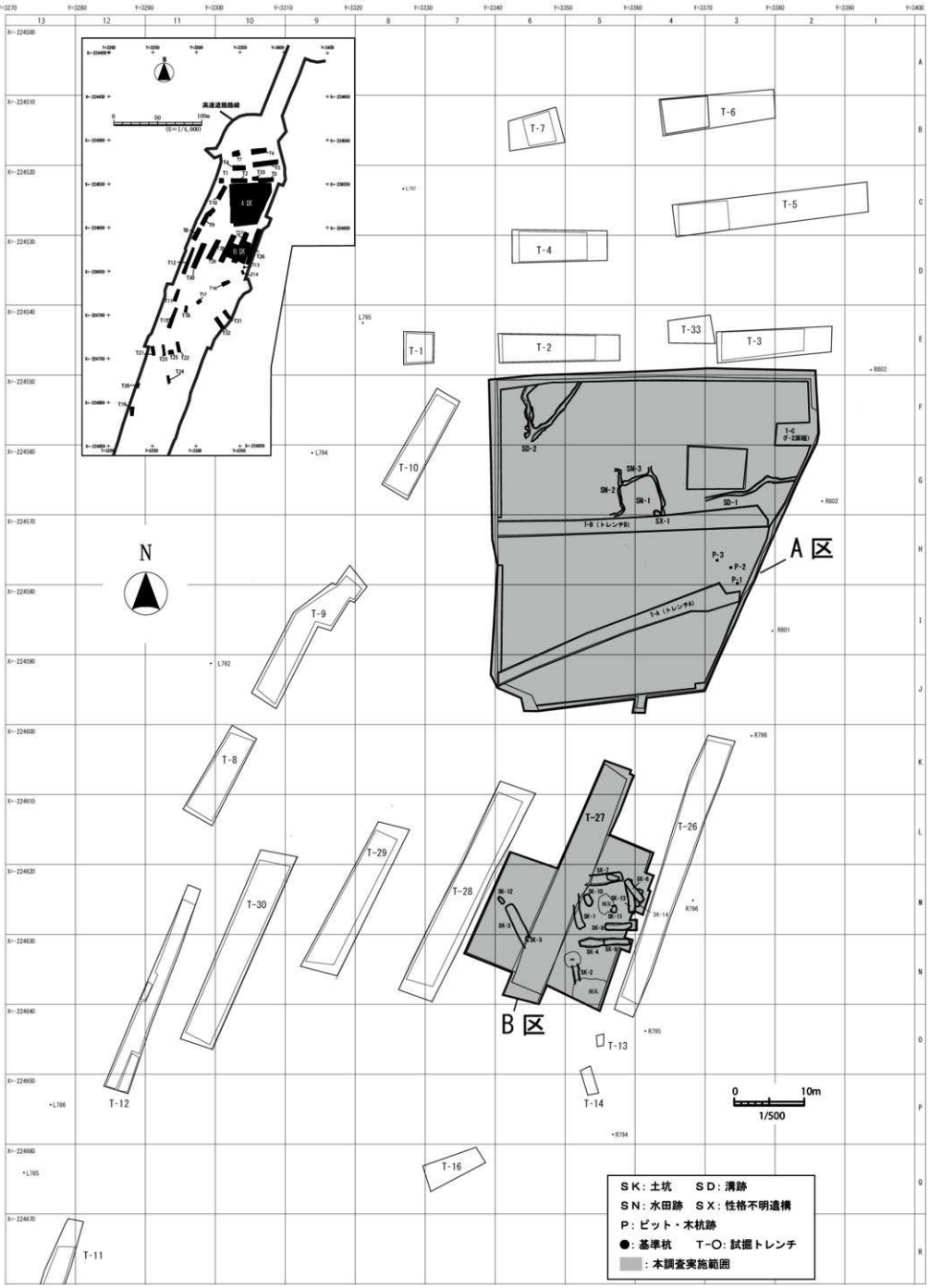
A区　水田跡　調査風景

B区　土坑群　調査風景

1. 中筋遺跡　調査区全景（北東から）

2. 中筋遺跡　調査区全景（西から）

第12図　中筋遺跡　調査区全景（1）



第13図　中筋遺跡　主要遺構配置図

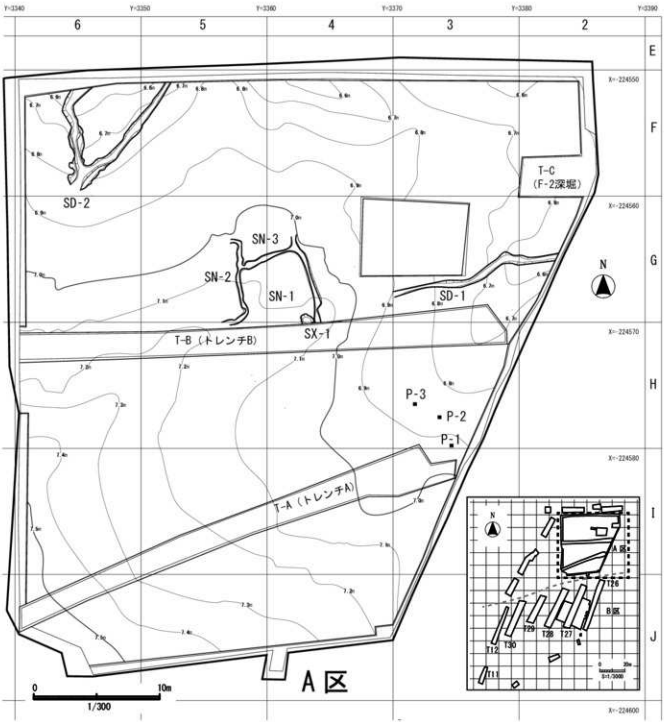
1. 中筋遺跡　調査区全景（上が東）

2. 中筋遺跡　A区全景（上が東）

第14図　中筋遺跡　調査区全景（２）

（1）A区検出遺構

約1,870㎡に及ぶ調査区で、A区基本層6層上面の標高6.6m～7.5mで水田跡3区画、溝跡2条、ピット1箇所・杭跡2箇所を検出した。水田跡はグリットG-4・5付近、溝跡はグリットF-6及びG-3付近、ピット・杭跡はH-3・4付近に分布している（第15図）。この他、A区調査区内の基本層6層以下では、縄文時代及び弥生時代の遺物が一定量出土しており、これらについては別項（第Ⅲ章（3））で報告することとする。



第15図　中筋遺跡　A区遺構配置図

①水田跡（第16・17図・第3・4表）

水田跡はA区中央やや北側のグリットG-4・5付近で畦畔（①～⑤）が検出され、畦畔により区画された水田を3区画（SN1～3）確認した。水田確認地点の標高は6.98～7.15mを測り、地形面の勾配は約2.0%～2.3%で、北西が高く南東が低く、標高差は17cmである。水田確認範囲は、洪水砂層（基本層5A層・5B層）に覆われており（第7図）、その後復旧した痕跡が確認されないことから、水田は洪水により廃絶したと考えられる。以下、水田跡の概要を示す。畦畔及び水田区画の計測値については第3・4表にまとめた。

【畦畔】

畦畔5条を検出した（①～⑤）。基本層6B層を掘り込んでつくられている。上端幅11～58cm、下端幅26～71cmを測り、水田面との比高差は1～8cmである。畦畔①は畦畔②・③と直交し、畦畔②は畦畔④・⑥と直交する。

【水田区画 SN-1～3】

水田区画は3区画確認した。区画の残存状況から、いずれも方形を基調とする平面形であったと推定される。**SN1**は畦畔①～③に区画される。区画南辺はトレンチBにより削平を受け残存していないため、区画南側の範囲は不明である。SN1は今回確認した水田の中で最も残りのよい区画で、面積は26.5㎡以上ある。**SN2**は畦畔②・④・⑤に区画される。畦畔西辺が残存していないため、西側の範囲は不明である。**SN3**は畦畔①～③に区画される。畦畔北辺が残存していないため、北側の範囲は不明である。

【水口】

明確に水口と判断される箇所は確認されなかったが、区画SN1の南西部分には畦畔がなく、区画が開口していることから、この付近が水口であった可能性が考えられる。

【耕作土】

基本層6B層を耕作土としている。褐灰色（10YR4/1）・黒褐色（10YR3/1）シルト土で、耕作土下面には凹凸がみられる。耕作土の数か所でプラント・オパール分析を実施しており、その結果、イネのプラント・オパールが1,800個/g検出されている（詳細については第Ⅳ章3を参照のこと）。

【出土遺物】

水田区画内の耕作土6B層から弥生土器片が17点（147g）出土しており、そのうち図示できたものは、弥生土器鉢（第16図1）である。水田域周辺の基本層出土遺物数と比較すると、水田区画内から出土数は非常に少ない。

第3表　中筋遺跡A区水田跡畦畔計測表

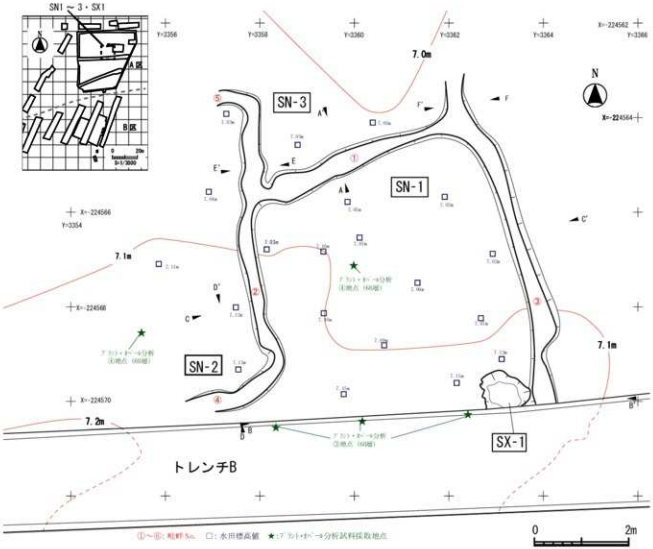
No.	方向	検出長（m）	上端幅（cm）	下端幅（cm）	水田面との比高差（cm）	備考
①	N-70°-E	4.37	11～58	26～71	1～6	畦畔②・③と接続
②	N-6°-W	5.72	16～40	33～58	2～8	畦畔①・④・⑤と接続
③	N-20°-W	7.21	15～47	33～62	1～5	畦畔①と接続
④	N-0°-W	1.82	30～39	41～47	1～4	畦畔②と接続
⑤	N-66°-E	0.68	21	36	1～2	畦畔②と接続

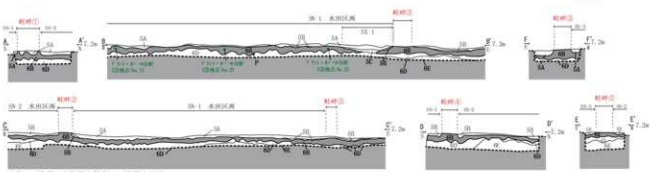
第4表　中筋遺跡A区水田区画計測表

区画名	最高標高（m）	最低標高（m）	平均標高（m）	区画内最大標高差（m）	東辺（cm）	西辺（cm）	南辺（cm）	北辺（cm）	面積（㎡）	備考
SN-1	7.15	7.03	7.08	0.12	584.2	391.9	—	474.9	26.5以上	畦畔①・②・③により区画 区画内にSX1有
SN-2	7.15	7.03	—	0.12	575.9	—	181.2	45.9	5.4以上	畦畔②・④・⑤により区画
SN-3	7.03	6.98	—	0.05	72.4	155.4	379.3	—	4.6以上	畦畔①・②・③により区画

②SX1 性格不明遺構（第16・17図）

SN1水田区画内の畦畔③南東隅で検出した。平面形は長軸92cm以上・短軸98cmの不整形を呈し、深さ10cmである。断面形は皿状で、底面は中央付近が窪み凹凸が多い。堆積土は基本層5A・B・C層を起源とする砂である。遺物は出土していない。





SN-1 水田区面出土遺物

No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-4 SN1・6E層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文LR・RR付加条・底部木葉痕？、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：底径5.8cm・残存高5.1cm・器厚0.4～0.7cm	B-162

第16図　ＳＮ１～３ 水田跡・ＳＸ１ 性格不明遺構（１）

1．SN1 ～ 3 水田跡 検出状況（南西から）

2．SN1 ～ 3 水田跡 畦畔①　断面（南から）

4．SX1 性格不明遺構　検出状況（南から）

5．SX1 性格不明遺構　断面（南から）

3．SN1 ～ 3 水田跡 畦畔③　断面（南から）

6．SX1 性格不明遺構　完掘状況（南から）

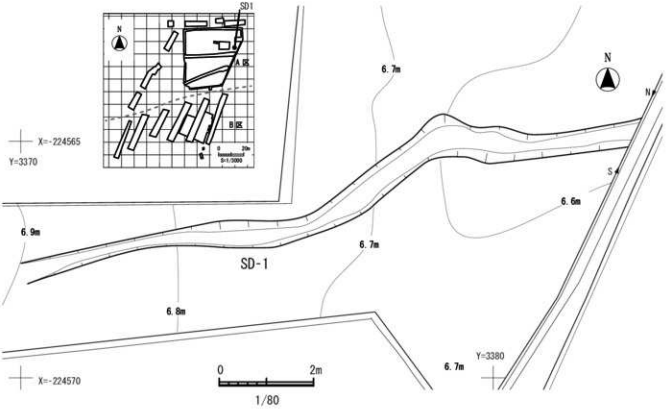
第17図　ＳＮ１～３ 水田跡・ＳＸ１ 性格不明遺構（２）

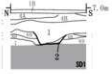
③溝跡

溝跡はＡ区中央東端のグリットG-2・3付近で１条（SD1）、Ａ区北西部のグリットF-5・6付近１条、合計２条確認した。

【ＳＤ１溝跡】（第18図）

標高6.6～6.9mの平坦面に立地し、基本層6B層上面で確認した。西―東方向に延びる溝で、溝の東側は調査区外に続いている。溝の西側は標高6.9m前後のグリットG-2付近で途切れる。検出長は13.5mで、上幅32～89cm、下幅19～49cm、深さ30cm前後である。底面の標高は、溝の西部が高く、東部が低い。溝の断面形はＵ字形で、底面は平坦である。堆積土は基本層5A・B層を起源とする砂で、自然堆積である。遺構の堆積状況から、SD1溝跡は構築後まもなく基本層5A・5B層を起源とする洪水により埋没したと考えられる。遺物は出土していない。



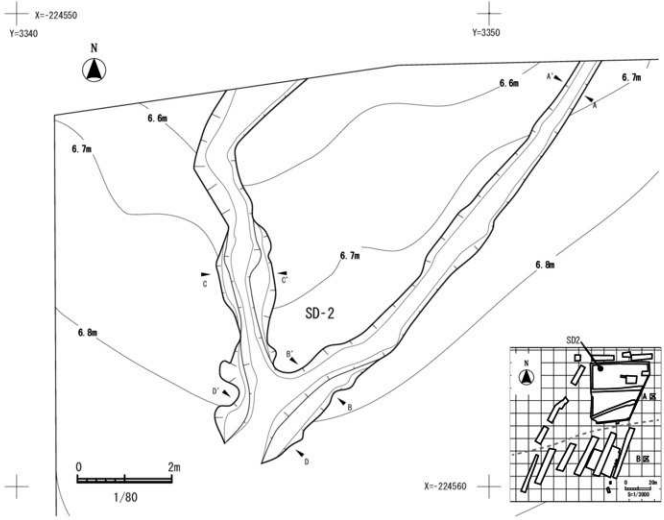


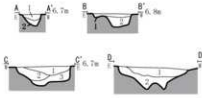
遺構	層	土色	土性	備考
SD1	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	砂	細砂・小礫・礫多く含む。（基本層5A層起源の堆積土）
	2	灰黄褐色（10YR6/2）	砂	細砂多く含む（基本層5B層起源の堆積土）。

第18図　ＳＤ１　溝跡

【ＳＤ２溝跡】（第19図）

標高6.6～6.8mの平坦面に立地し、基本層6B・6D層上面で確認した。南西―北東方向に延びる溝で、溝の北東側は調査区外に続いている。溝はグリットF-6中央南端付近で二股に分かれ、それぞれ北東側に延びる。溝の南西側は標高6.8m前後のグリットF-6中央南端付近で途切れる。検出長は二股に分かれた西側の溝が8.3m、東側の溝が11.3mで、上幅40～112cm、下幅21～41cm、深さ24～42cmである。底面の標高は、溝の南西部が高く、北東部が低い。溝の断面形はU字形で、底面は平坦であるが、部分的に凹凸がある。堆積土は3層に分かれ、褐灰色粘土質シルト土を主体し、自然堆積である。遺物は出土していない。





道構	層	土色	土性	備考
SD2	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	小礫微量、酸化鉄含む。
	2	褐灰色（10YR5/2）	粘土質シルト	細砂・小礫・黒色土粒子少量、酸化鉄含む。
	3	褐灰色（10YR5/2）	粘土質シルト	細砂・小礫微量含む。

第19図　ＳＤ２　溝跡

④木杭跡・ピット（第 20・21 図）

木杭跡（P-1・3）・ピット（P-2）は、A 区中央東側のグリット H-3・H-4 に位置する。標高 6.9m 前後の平坦面に立地し、基本層 6B 層上面で確認した。P-1～3 は、その位置関係から、杭列になる可能性がある。

【P-1 木杭跡】

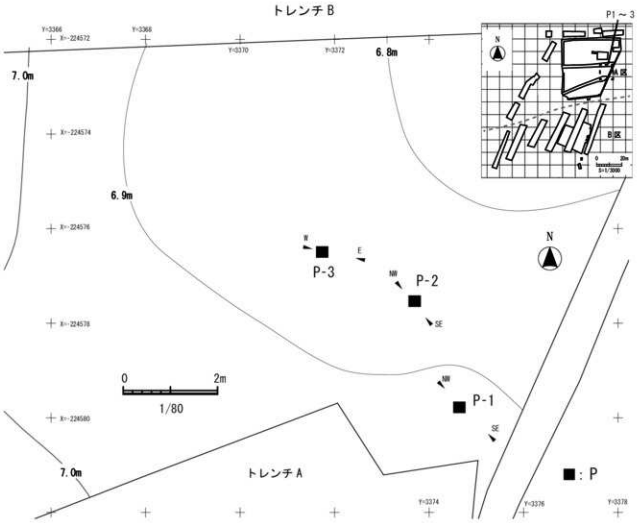
直径 15cm の掘方に木杭が打ち込まれた木杭跡である。木杭（第 21 図 1）は、芯持材で、全長 84cm、直径 11cm 前後の丸木を素材としている。樹皮が除去されており、上半が欠損し、下端に加工を施して尖端部を作り出している。木杭は基本層 9A 層まで打ち込まれている。

【P-2 ピット】

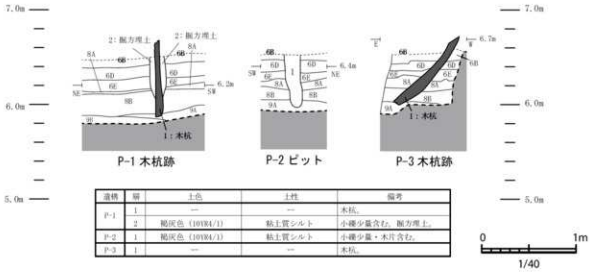
直径 17cm、深さ 56cm のピットで、堆積土は褐灰色粘土質シルト土で、小礫・木片を含む。ピットの掘方は、基本層 9A 層まで及んでいる。P-1 と同様の木杭跡であった可能性がある。

【P-3 木杭跡】

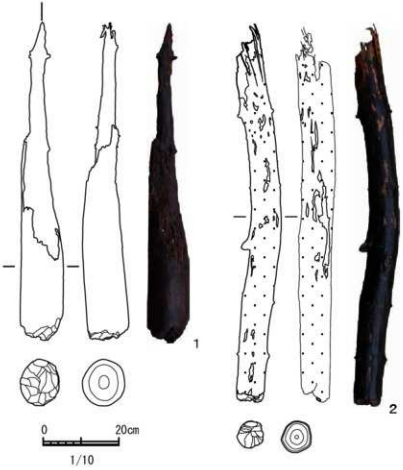
打ち込み杭である。木杭（第 21 図 2）は斜めに打ち込まれた芯持材で、全長 100 cm、直径 8cm 前後の丸木を素材としている。表面に樹皮が残り、上端に欠損している。木杭は基本層 9A 層まで打ち込まれている。



第20図　A区　P１～３　ピット・杭跡（１）



遺構	層	土色	土性	備考
P-1	1	―	―	木杭。
	2	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	小礫少量含む。版方埋土。
P-2	1	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	小礫少量・木片含む。
P-3	1	―	―	木杭。



P-1　木杭跡　断面（北から）

P-3　木杭跡　断面（北から）

P-2　ピット　断面（南から）

No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			樹種	備考	登録
				長さ	幅	厚さ			
1	P-1・木杭跡	木製品	木杭	84.0	11.0	10.0	カヤ	芯持材	L-1
2	P-3・木杭跡	木製品	木杭	100.0	7.4	8.5	イヌガヤ	芯持材	L-2

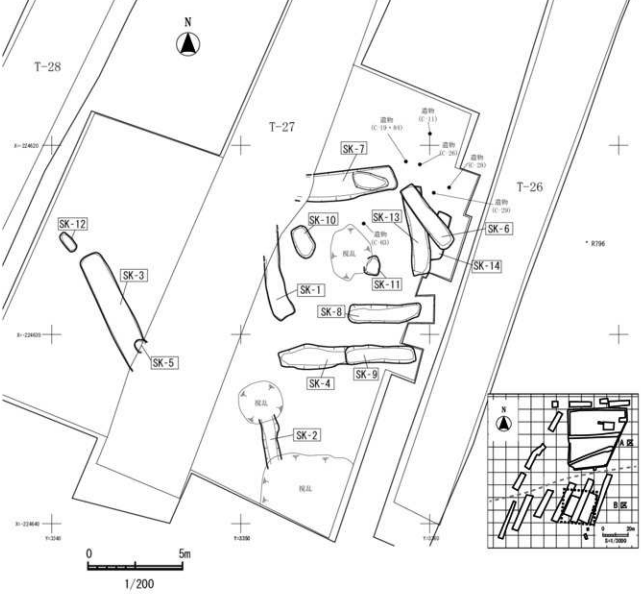
第21図　A区　Ｐ１～３　杭跡・ピット（２）

（2）B 区検出遺構

約 490 ㎡に及ぶ調査区で、調査区は T-26 から T-28 の間に位置する。遺構は、B 区基本層 B5 層上面で土坑を検出した。この他、B 区調査区内の基本層 5 層上面では古墳時代前期の遺物が出土しており、これらについては、別項（第 3 章（4））で報告することとする。

① 土坑　（第 22～61 図・第 5 表）

土坑は標高 8.2～9.0m の平坦面で 14 基確認した（第 22・23 図）。いずれも基本層 B5a・B5b 層上面で確認し、出土遺物の特徴から古墳時代前期の遺構であると考えられる。それぞれの特徴等については第 5 表にまとめた。



第22図　中筋遺跡　B区　土坑群（1）　ー遺構配置図ー

第５表　中筋遺跡B区　土坑　属性表

遺構No.	平面形	規模（m）長軸×短軸	深さ（cm）	断面形	堆積土	主軸方向（長軸を基準）	出土遺物	備考
SK1	隅丸長方形	(4.5) ×1.01	27	方形	人為	N-10°-W	土師器・土製支脚・石器	底面に板材残存。
SK2	隅丸長方形？	(1.94) ×0.93	10	逆台形	人為	N-10°-W	土師器・土製支脚	
SK3	隅丸長方形	(5.58) ×1.46	20	方形	人為	N-24°-W	弥生土器・土師器	SK5より古い。
SK4	隅丸長方形	(3.47) ×1.34	10	方形	人為	N-90°-E	土師器	SK9より古い。
SK5	楕円形	0.67× (0.37)	11	逆台形	人為	—	土師器	SK3より新しい。
SK6	隅丸長方形	3.87×0.88	30	方形	人為	N-15°-W	土師器	SK13・14より新しい。
SK7	隅丸長方形	(4.44) ×1.54	22	逆台形	人為	N-83°-E	土師器・土製支脚	
SK8	隅丸長方形	3.77×0.93	20	方形	人為	N-90°-E	土師器	
SK9	隅丸長方形	3.7×0.84	10	逆台形	人為	N-90°-E	縄文土器・土師器	SK4より新しい。
SK10	隅丸長方形	1.73×1.00	10	皿状	人為	N-20°-W	土師器・土製支脚	
SK11	楕円形	1.00× (0.69)	14	皿状	人為	N-7°-E	土師器	
SK12	隅丸長方形	1.23×0.51	5	皿状	人為	N-32°-W	土師器	
SK13	隅丸長方形	4.65×1.06	10	皿状	人為	N-8°-W	土師器・土製支脚	SK6より古く、SK14より新しい。
SK14	隅丸長方形	2.45× (0.74)	6	皿状	人為	N-17°-E	土師器・土製支脚	SK6・13より古い。

※規模の（）は推定値。

中筋遺跡Ｂ区　土坑群（SK1 ～ 14）完掘状況（南西から）

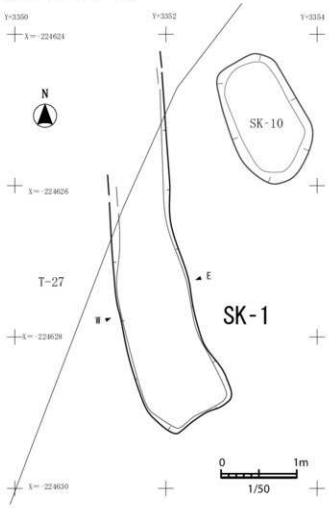
第23図　中筋遺跡　B区　土坑群（２）

【ＳＫ１土坑】（第 24～33 図・第 5 表）

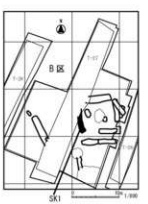
標高 8.5m の平坦面に立地する。土坑北端部分は確認調査で設定したトレンチ 27 により一部削平を受けている。平面形は、長軸 4.50m 以上、短軸 1.01m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 27cm である。短軸方向の断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 10° 傾く（N-10° -W）。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも人為堆積である。1 層・3 層には遺物が多量含まれ、底面には板材が数枚並べて据えられた状態で残存していた（第 25 図）。

遺物は堆積土・底面から土師器片 653 点（11,145g）、堆積土から石器剥片 1 点、底面から土製支脚片 24 点（3,170g）出土した。このうち、出土土師器の内訳は、鉢片 65 点（665g）、器台片 3 点（90g）、壺片 2 点（2,105g）、甕片 581 点（8,030g）、壺または甕片 2 点（255g）で、層位別にみると 1 層から 590 点（5,600g）、2 層から 10 点（45g）、3 層・底面から 53 点（5,500g）出土しており、2 層からの出土数が非常に少ない。また、3 層・底面出土遺物は遺物の残存率がよいものが多く、1 層はほとんどが破片資料である。これらの遺物出土状況から、SK1 は、まず底面に板材を配置し、その上部及び周辺に遺物を一定量据えた後、土坑を 2 層上面まで埋め戻し、その後、再度遺物を据え埋め戻したものとみられる。

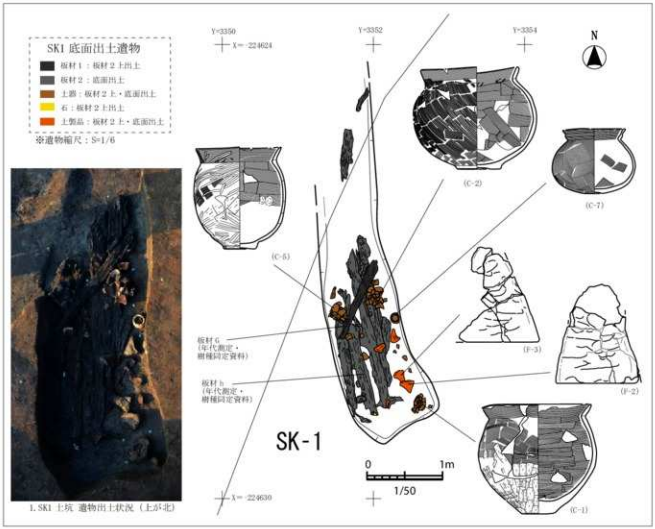
出土遺物のうち、図示できたのは、土師器 器台 2 点（第 27 図 1・2）・鉢 6 点（第 27 図 3～8）・壺 1 点（第 27 図 10）・甕 14 点（第 27 図 9・11・第 28 図 12～16・第 29 図 17～23）・壺または甕 2 点（第 29 図 24・25）、土製支脚 2 点（第 30 図 26・27）である。出土した板材の一部は樹種同定・年代測定を行っており、板材 G は樹種スギ・暦年代 20-130calAD、板材 h は樹種モミ属・暦年代 240-390calAD という分析結果が得られている。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/1）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・酸化鉄多く含む。小石・炭化物片含む。上部多く含む。人為堆積。
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	灰黄褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く含む。礫・砂・炭化物片含む。人為堆積。
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック少量含む。礫・炭化物片含む。上部多く含む。木片含む。人為堆積。



第24図　ＳＫ１　土坑（１）―平面図・断面図―



1. SK1 土坑 遺物出土状況（上が北）

2. SK1 土坑 板材出土状況（北から）

3. SK1 土坑 1 層遺物出状況①（東から）

4. SK1 土坑 1 層遺物出状況②（東から）

第25図　ＳＫ１　土坑（２）ー遺物出土状況①ー

1．SK1 土坑　完掘状況（北から）

2．SK1 土坑 検出状況（北から）

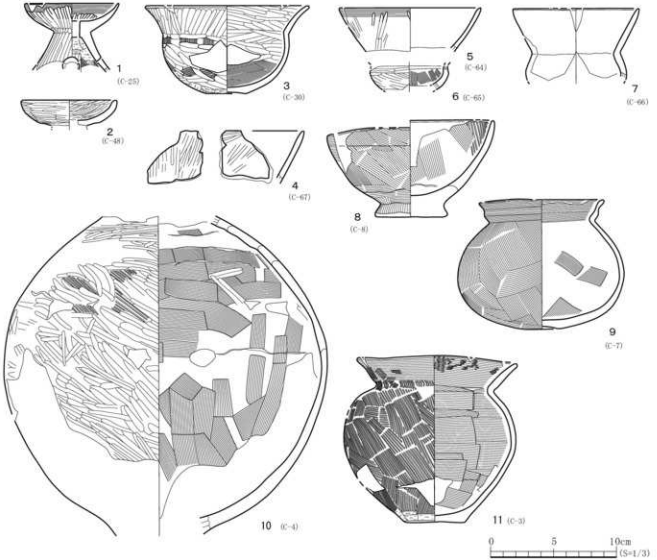
4．SK1 土坑 3 層・底面 遺物出土状況①（西から）

5．SK1 土坑 3 層・底面 遺物出土状況②（北から）

3．SK1 土坑 断面（北から）

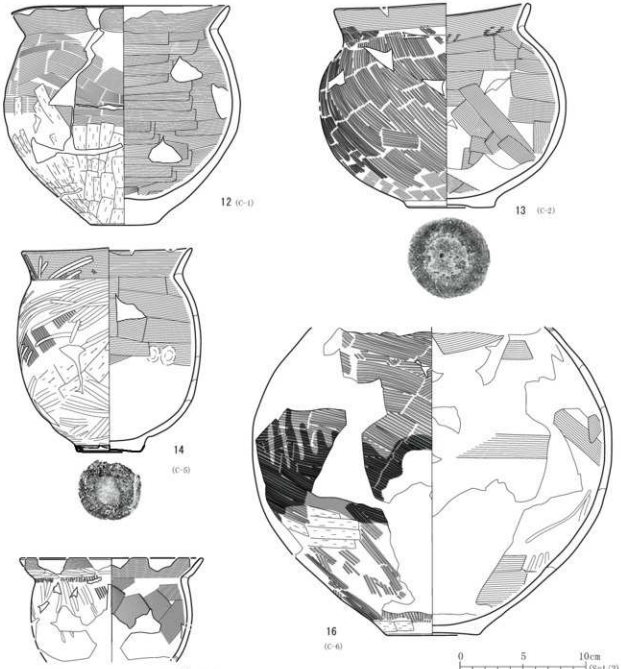
6．SK1 土坑 3 層・底面 遺物出土状況③（北から）

第26図　ＳＫ１　土坑（３）ー完掘・検出・断面・遺物出土状況②ー



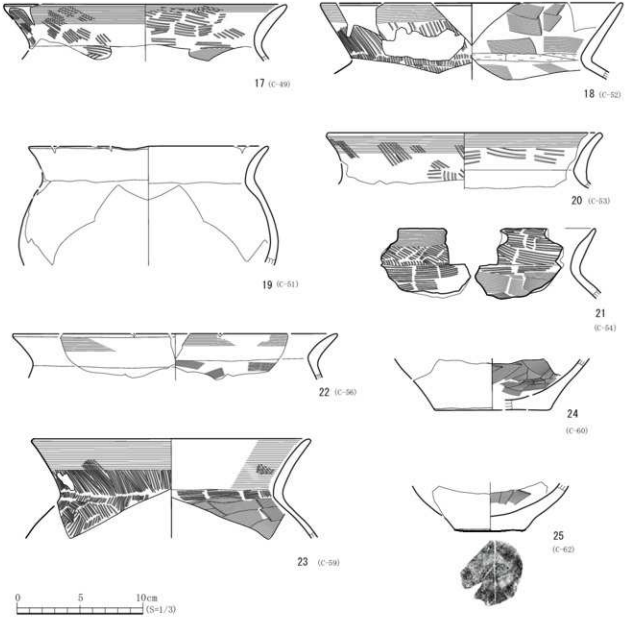
No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK1 3層	土師器	器台	受部 ～脚部	外面：受部ヨコナデ(口縁部)→ヘラミガキ・脚部ヘラミガキ、内面：受部ヨコナデ(口縁部)→ヘラミガキ・脚部ヘラ削り・ハケメ、色調：内外面：にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：受部径7.5cm・残存高4.7cm・器厚0.2～0.8cm、円窓一部残存、貫通孔あり	C-25
2	SK1 3層	土師器	器台	受部	内外面：ヘラミガキ・赤彩、色調：内外面：にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、法量：受部径(7.4)cm・残存高2.0cm・器厚0.4～0.5cm、脚部欠損、貫通孔有無不明	C-48
3	SK1 1層	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外面：口縁部～頸部ヘラミガキ・胴部ハケメ→ヘラミガキ・胴部下端ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・ナデ、色調：内外面：明黄褐色(10YR7/6)、法量：口径(13.0)cm・器高7.0cm・底径3.2cm・器厚0.3～0.6cm	C-30
4	SK1 1層	土師器	鉢	口縁部	内外面：ヘラミガキ・赤彩、色調：内外面：にぶい赤褐色(5YR5/3)、法量：器厚0.3～0.4cm	C-67
5	SK1 1層	土師器	鉢	口縁部	外面：口唇部ヨコナデ→口縁部ヘラミガキ・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：内外面：にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(11.2)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～0.4cm	C-64
6	SK1 2層	土師器	鉢	胴部	外面：ヘラミガキ、内面：ナデ、色調：内外面：にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：胴部径(6.2)cm・残存高1.9cm・器厚0.4～0.5cm	C-65
7	SK1 3層	土師器	鉢	口縁部 ～胴部	内外面：磨滅のため不明、色調：内外面：にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：口径(10.0)cm・残存高5.6cm・器厚0.3～0.5cm	C-66
8	SK1 1層	土師器	鉢	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ→ナデ・胴部～底部ナデ、内面：口縁部ヨコナデ→ナデ・胴部～底部ハケメ→ナデ、色調：外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面：にぶい黄橙色(10YR6/3)、法量：口径(13.3)cm・器高7.7cm・底径5.8cm・器厚0.3～0.6cm	C-8
9	SK1 底面	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・頸部～底部ヘラ削り→ナデ、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～底部ヘラナデ・磨滅、色調：外面：にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面：にぶい黄橙色(10YR5/3)、法量：口径(9.9)cm・胴部径13.2cm・器高10.3cm・底径2.5cm・器厚0.3～0.6cm、ほぼ完形	C-7
10	SK1 3層	土師器	壺	頸部 ～胴部	外面：ハケメ→ヘラミガキ、内面：ヘラナデ→ヘラミガキ、色調：外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面：にぶい黄橙色(10YR7/2)、法量：胴部径(25.7)cm・残存高25.5cm・器厚0.4～1.0cm	C-4
11	SK1 1層	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ハケメ・胴部下端ヘラ削り、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～底部ヘラナデ、色調：内外面：浅黄橙色(10YR8/3)、法量：口径(12.7)cm・胴部径13.65cm・器高13.3cm・底径4.7cm・器厚0.4～0.5cm、ほぼ完形	C-3

第27図　ＳＫ１　土坑（４）－出土遺物①－



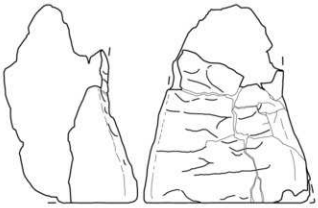
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【復元（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
12	SK1 底面	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部(上半)ハケメ→ナデ→ヘラ削り・胴部(下半)～胴部下端ヘラ削り・磨滅・剥離、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～底部ヘラナデ、色調：外面・明赤褐色(2.5YR5/6)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、法量：口径(17.3)cm・器高17.5cm・底径5.2cm・器厚0.4～0.7cm、ほぼ完形	C-1
13	SK1 底面	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ハケメ・胴部下端ナデ・底部輪台技法、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ、頸部～底部ヘラナデ、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、法量：口径(15.4)cm・器高16.3cm・底径6.5cm・器厚0.5～0.6cm、外面：煤付着、ほぼ完形	C-2
14	SK1 底面	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ・胴部ハケメ→ヘラ削り→ヘラミガキ・胴部下端ヘラミガキ・底部輪台技法、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ・指オサエ、色調：内外面・灰白色(10YR8/2)、法量：口径13.3cm・胴部径14.6cm・器高16.3cm・底径4.8cm・器厚0.4～0.5cm、外面：煤付着、ほぼ完形	C-5
15	SK1 1層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口管部ヨコナデ・頸部～胴部ハケメ→ヘラミガキ、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・灰色(N4/0)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(14.2)cm・残存高8.3cm・器厚0.4～0.6cm、外面：煤付着	C-50
16	SK1 1層	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：ハケメ→ヘラ削り、内面：ヘラナデ・ヘラミガキ、色調：外面・浅黄橙色(10YR8/3)、内面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：胴部径(28.5)cm・残存高24.6cm・底径7.2cm・器厚0.4～0.7cm、外面：煤付着	C-6

第28図　ＳＫ１　土坑（５）ー出土遺物②ー

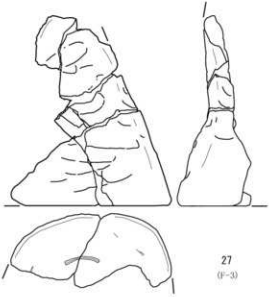


No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
17	SK1 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ハケメ，内面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ナデ，色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR7/2)，法量：口径(22.4)cm・残存高4.5cm・器厚0.3～0.8cm	C-49
18	SK1 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ・磨滅，内面：口縁部～頸部ヘラナデ・頸部ヘラ削り・胴部ナデ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：口径(24.0)cm・残存高6.0cm・器厚0.4～0.8cm	C-52
19	SK1 3層	土師器	甕	口縁部～胴部	内外面：磨滅のため不明，色調：内外面・褐灰色(10YR5/1)/にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：口径(19.0)cm・残存高9.5cm・器厚0.4～0.7cm	C-51
20	SK1 1層	土師器	甕	口縁部	内外面：ハケメ→ヨコナデ・磨滅，色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)，法量：口径(22.0)cm・残存高4.4cm・器厚0.5～1.0cm	C-53
21	SK1 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ，内面：口縁部～頸部ハケメ・胴部ナデ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)/暗灰色(N3/0)，法量：残存高5.8cm・器厚0.4～0.8cm	C-54
22	SK1 底面	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・磨滅，内面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ・磨滅，色調：外面・灰褐色(5YR5/2)/暗灰色(N3/0)，内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)，法量：口径(25.8)cm・残存高3.7cm・器厚0.4～0.7cm	C-56
23	SK1 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ，内面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ヘラナデ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：口径(22.2)cm・残存高7.9cm・器厚0.4～0.8cm，外面：煤付着	C-59
24	SK1 1層	土師器	壺or甕	底部	外面：磨滅のため不明，内面：ヘラナデ，色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR5/4)/にぶい褐色(7.5YR5/3)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：底径(9.0)cm・残存高4.1cm・器厚0.5～1.6cm，内面：煤付着	C-60
25	SK1 1層	土師器	壺or甕	底部	外面：ヘラ削り・底部木葉痕・磨滅，内面：ヘラナデ・磨滅，色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/3)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：底径(5.4)cm・残存高3.8cm・器厚0.7～1.6cm	C-62

第29図　ＳＫ１　土坑（６）ー出土遺物③ー



26 (F-2)



27
(F-3)

0　5　10cm
(S=1/3)

No.	層	種別	器種	残存	特徴	登録
26	SK1 底面	土製品	支脚	－	外面：ナデ・オサエ。色調：外面 明褐色（7.5YR5/6）・褐色（7.5YR4/6）。 法量：残存高15.7cm、残存幅13.2cm、残存厚10.6cm、一部欠損	F-2
27	SK1 底面	土製品	支脚	－	外面：ナデ・オサエ。色調：外面 明褐色（7.5YR5/6）・褐色（7.5YR4/6）。 法量：残存高15.1cm、残存幅12.7cm、残存厚5.9cm、一部欠損	F-3

第30図　ＳＫ１　土坑（７）ー出土遺物④ー

SK1 土坑　出土土師器

第31図　ＳＫ１　土坑（８）ー出土遺物写真図版①ー

C-8

C-8 底面

C-7

C-51

C-52

C-49

C-4

C-60

C-62

第32図　ＳＫ１　土坑（９）ー出土遺物写真図版②ー

C-1

C-2

C-5

C-3

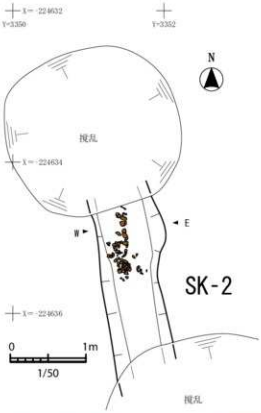
C-6

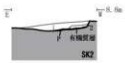
第33図　ＳＫ１　土坑（10）一出土遺物写真図版③一

【ＳＫ２土坑】（第 34・35 図・第 5 表）

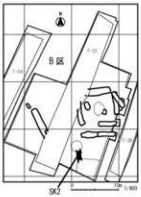
標高 8.6m 前後の平坦面に立地する。土坑北端・南端部分は後世の撹乱により削平を受けている。平面形は、長軸 1.94m 以上、短軸 0.93m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると思われ、残存深は 10cm である。短軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 10° 傾く（N-10° -W）。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為堆積で、底面付近の一部に薄い黒色の有機質層が確認された。

遺物は 1・2 層の底面付近から土師器甕片 101 点（1,410g）、2 層から土製支脚 1 点（137g）出土した。出土状況から、いずれも SK2 に伴うものと判断される。このうち、図示できたのは、土師器 甕 3 点（第 35 図 1～3）である。





層	土色	土性	備考
Ⅰ	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロック・小石・炭化物片含む。上層多く含む。
Ⅱ	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く、炭化物片・酸化鉄含む。下層に有機質層有。

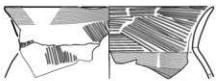


SK2 土坑 断面（北から）

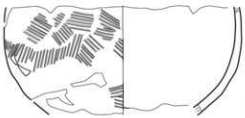
SK2 土坑 遺物出土状況（北から）

SK2 土坑 完掘状況（北から）

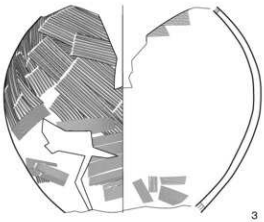
第34図　ＳＫ２　土坑（１）―平面図・断面図―



1
(C-55)



2
(C-75)



3
(C-40)

0　5　10cm
(S=1/3)

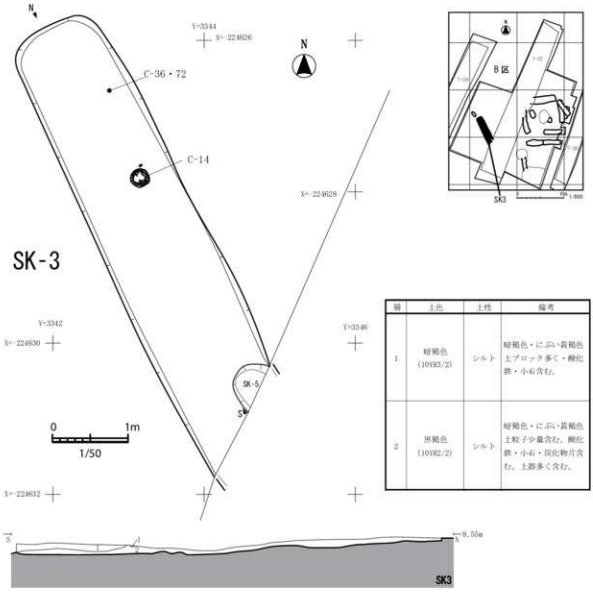
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK2 1・2層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ、内面：口縁部～頸部ハケメ・胴部ヘラナデ、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/2)/暗灰色(N3/0)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(16.6)cm・残存高5.7cm・器厚0.3～0.5cm	C-55
2	SK2 底面	土師器	甕	胴部	外面：ハケメ・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：胴部径(18.8)cm・残存高6.6cm・器厚0.4～0.7cm、外面：煤付着	C-75
3	SK2 底面	土師器	甕	胴部	外面：ハケメ→ナデ・磨滅、内面：ヘラナデ・ナデ・磨滅、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、法量：胴部径(20.4)cm・残存高16.5cm・器厚0.4～0.5cm	C-40

第35図　ＳＫ２　土坑（２）―出土遺物―

【ＳＫ３土坑】（第 36～38 図・第 5 表）

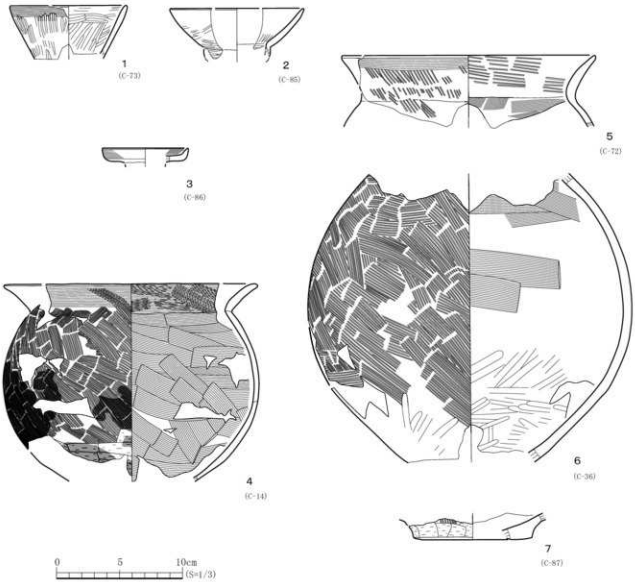
標高 8.5m 前後の平坦面に立地する。土坑東端部分は確認調査で設定したトレンチ 27 により一部削平を受けている。SK5 土坑と重複し、これより古い。平面形は、長軸 5.58m 以上、短軸 1.46m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 20cm である。長軸方向の断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 10°傾く（N-24°-W）。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

遺物は 1 層・2 層の底面付近及び底面から土師器片 50 点（1,615g）、2 層から弥生土器片 1 点（20g）出土した。このうち、出土土師器の内訳は、器台片 1 点（10g）、鉢片 3 点（40g）、甕片 45 点（1,540g）、壺または甕片 1 点（25g）で、層位別にみると 1 層から 15 点（690g）、2 層・底面から 35 点（925g）出土しており、2 層・底面出土遺物は SK3 構築時のものと思われる。このうち、図示できたのは、土師器 鉢 2 点（第 37 図 1・2）・器台 1 点（第 37 図 3）・甕 3 点（第 37 図 4～6）・壺または甕 1 点（第 37 図 7）である。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く・酸化鉄・小石含む。
2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子少量含む。酸化鉄・小石・炭化物片含む。土器多く含む。

第36図　ＳＫ３　土坑（１）ー平面図・断面図ー



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK3 2層	土師器	鉢	口縁部	外面：口唇部ヨコナデ→ヘラミガキ・赤彩，内面：ヘラミガキ・赤彩，色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR5/3)，法量：口径(9.2)cm・残存高4.3cm・器厚0.3～0.45cm	C-73
2	SK3 2層	土師器	鉢	口縁部 ～頸部	内外面：ヘラミガキ・赤彩・磨滅，色調：内外面・にぶい赤褐色(2.5YR5/4)，法量：口径(10.6)cm・残存高3.9cm・器厚0.4cm	C-85
3	SK3 2層	土師器	器台	受部	内外面：口縁部ヨコナデ・磨滅，色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)，法量：口径(6.8)cm・残存高1.9cm・器厚0.4～0.5cm，脚部欠損，貫通孔有無不明	C-86
4	SK3 底面	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ハケメ→ヘラ削り，内面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ヘラナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面：にぶい黄橙色(10YR6/4)，法量：口径(20.2)cm・胴部径(20.3)cm・残存高15.8cm・器厚0.3～0.5cm，外面：煤付着	C-14
5	SK3 2層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ・磨滅，内面：口縁部～頸部ハケメ・胴部ナデ・磨滅，色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：口径(20.6)cm・残存高5.7cm・器厚0.3～0.7cm	C-72
6	SK3 1層	土師器	甕	胴部	外面：ハケメ→ヘラミガキ，内面：ヘラナデ・ヘラミガキ，色調：外面・褐色(10YR4/6)/浅黄橙色(10YR8/3)，内面・明赤褐色(5YR5/8)/褐色(10YR4/4)，法量：胴部径25.6cm・残存高23.0cm・器厚0.6～0.9cm	C-36
7	SK3 2層	土師器	甕or鍋	底部	外面：ハケメ・ヘラ削り・底部編台技法，内面：煤付着のため不明，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：底径(9.4)cm・残存高2.1cm・器厚0.5～1.3cm，内面：煤付着	C-87

第37図　ＳＫ３　土坑（２）ー出土遺物ー

1. SK3 土坑　完掘状況（北から）

2. SK3 土坑　遺物（C-14）出土状況（東から）

3. SK3 土坑　遺物（C-36・72）出土状況（南西から）

SK3 出土遺物

C-73　C-85

C-86

C-72

C-87

C-14

0　5　10cm
(S=1/3)

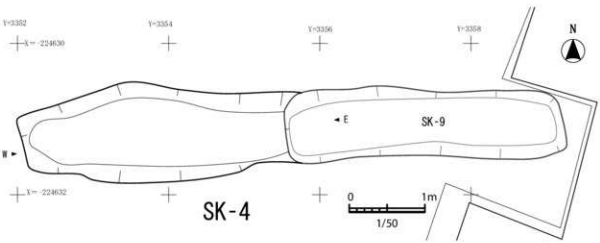
C-36

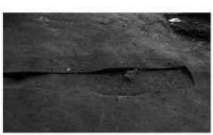
第38図　ＳＫ３　土坑（３）ー写真図版ー

【ＳＫ４土坑】（第 39～42 図・第 5 表）

標高 8.6m 前後の平坦面に立地する。SK9 土坑と重複し、これより古い。平面形は、長軸 3.47m 以上、短軸 1.34m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 10cm である。長軸方向の断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して東に 90° 傾く（N-90° -E）。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

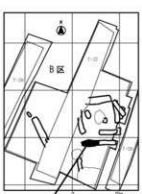
遺物は 1 層・底面から土師器片が 52 点（4,420g）出土した。出土土師器の内訳は、器台片 1 点（170g）、鉢片 2 点（335g）、壺 1 点（2,000g）、甕片 48 点（1,915g）で、層位別にみると 1 層から 10 点（75g）、底面から 42 点（4,345g）出土しており、遺物の大半は底面から出土している。このうち、図示できたのは、底面から出土した土師器 器台 1 点（第 41 図 1）・鉢 1 点（第 41 図 2）・壺 1 点（第 41 図 4）・甕 2 点（第 41 図 3・5）である。





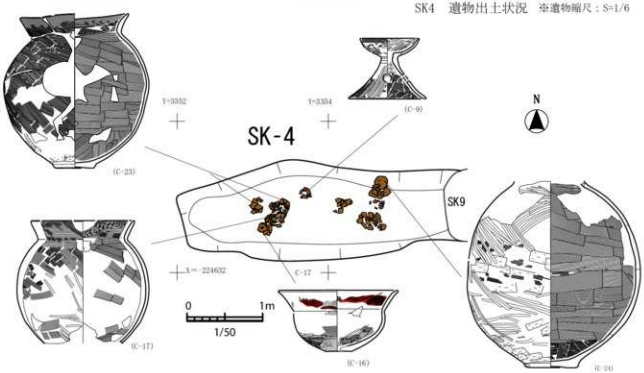
SK4 土坑 断面（北から）

層	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く、・炭化物片・酸化鉄含む。
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子・酸化鉄・小石・土器多く含む。
3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子・炭化物片・酸化鉄含む。土器多く含む。



第39図　ＳＫ４　土坑（１）―平面図・断面図―

SK4　遺物出土状況　※遺物縮尺：S=1/6

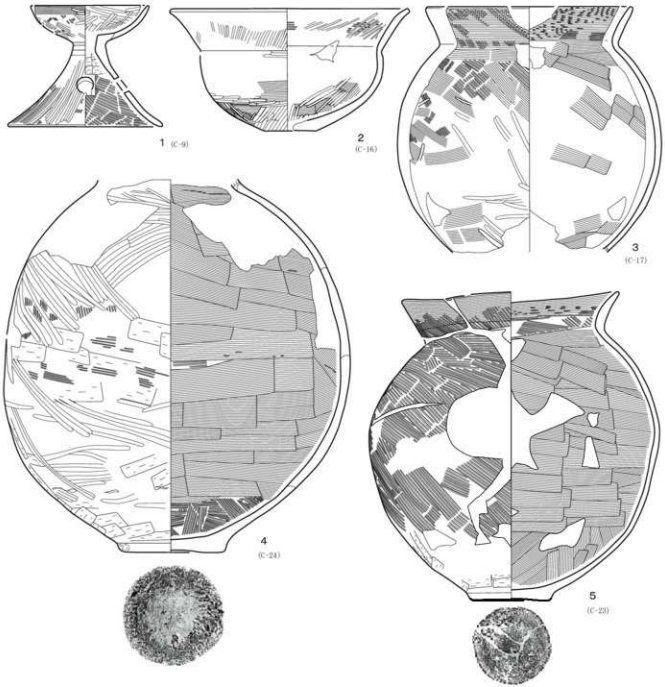


1. SK4 土坑　完掘状況（西から）

2. SK4 土坑　遺物（C-16・17）出土状況（西から）

3. SK4 土坑　遺物（C-9）出土状況（北西から）

第40図　ＳＫ４　土坑（２）ー遺物出土状況・写真図版①ー



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK4 底面	土師器	器台	受部～脚部	外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・受部～脚部ハケメ→ヘラミガキ・赤彩。内面：受部ヘラミガキ・赤彩・脚部ヘラ削り→ハケメ。色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR5/4)。内面・受部にぶい赤褐色(2.5YR5/4)/脚部にぶい褐色(7.5YR6/3)。法量：受部径(9.2)cm・器高9.7cm・脚部径12.0cm・器厚0.3～0.7cm。円形3穿。貫通孔あり。【ほぼ完形】	C-9
2	SK4 底面	土師器	鉢	口縁部～底部	外面：口縁部～頸部ヘラミガキ・胴部ヘラナデ→ヘラミガキ・底部穿孔・赤彩・磨滅・剥離。内面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ→ヘラミガキ・胴部ヘラナデ→ヘラミガキ・赤彩・磨滅・剥離。色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/3)。内面・にぶい黄橙色(10YR7/2)。法量：口径18.7cm・器高9.7cm・底径4.0cm・器厚0.5～0.7cm	C-16
3	SK4 底面	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ハケメ→ナデ→ヘラミガキ・磨滅。内面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ヘラナデ・磨滅。色調：外面・黄褐色(10YR5/6)。内面・にぶい黄褐色(10YR5/4)。法量：口径(16.2)cm・胴部径(21.0)cm・残存高19.6cm・器厚0.4～0.6cm。外面：煤付着	C-17
4	SK4 底面	土師器	壺	頸部～底部	外面：ヘラ削り→ハケメ→ヘラミガキ・胴部下端ヘラナデ・指オサエ・底部輪台技法。内面：ハケメ→ヘラナデ。色調：外面・黄褐色(10YR5/6)。内面・褐色(7.5YR4/6)。法量：底径7.5cm・残存高29.6cm・器厚0.5～0.7cm	C-24
5	SK4 底面	土師器	甕	口縁部～底部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ヘラ削り→ハケメ・胴部下端ヘラ削り・底部輪台技法？。内面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ヘラナデ。色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)。内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)。法量：口径(17.0)cm・胴部径23.0cm・器高24.7cm・底径5.7cm・器厚0.4～0.6cm。外面：煤付着	C-23

第41図　ＳＫ４　土坑（３）－出土遺物－

C-9

C-9 上から

0　5　10cm
(S=1/3)

C-16

C-16 底部

C-24

C-23

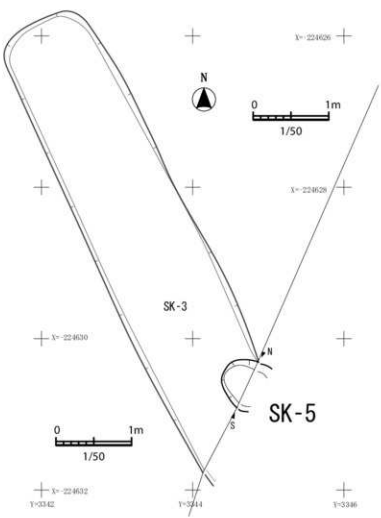
C-17

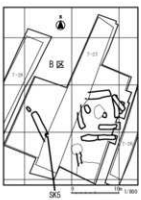
第42図　ＳＫ４　土坑（４）ー写真図版② 出土遺物ー

【ＳＫ５土坑】（第 43 図・第 5 表）

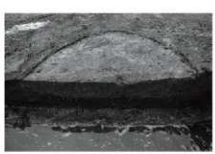
標高 8.5m 前後の平坦面に立地する。土坑東端部分は確認調査で設定したトレンチ 27 により一部削平を受けている。SK3 土坑と重複し、これより新しい。平面形は、長軸 0.67m、短軸 0.37m 以上の楕円形を呈し、残存深は 11cm である。短軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は 1 層で、人為堆積である。

遺物は 1 層から土師器甕片が 31 点（145g）出土した。いずれも小破片のため、図示できるものはないが、出土した甕片は非ロクロ成形の胴部資料で、外面に刷毛目を施すものである。





層	土色	土性	備考
1	褐灰色（10YR6/1）	シルト	灰黄褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く・小石・炭化物片含む。



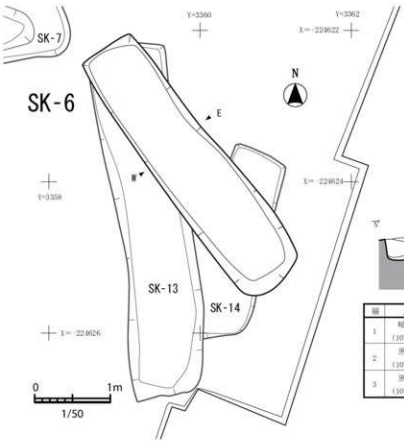
SK5 土坑 断面（東から）

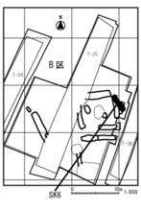
第43図　ＳＫ５　土坑

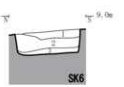
【ＳＫ６土坑】（第 44 図・第 5 表）

標高 8.8m 前後の平坦面に立地する。SK13･14 土坑と重複し、これらより新しい。平面形は、長軸 3.87m、短軸 0.88m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 30cm である。短軸方向の断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 15° 傾く（N-15° -W）。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

遺物は 1～3 層から土師器甕片が 12 点（60g）出土した。いずれも小破片のため、図示できるものはないが、出土した甕片は非ロクロ成形の胴部資料で、外面に刷毛目を施すものである。







層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	灰黄褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く含む。小石・炭化物・酸化鉄片含む。
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く、酸化鉄含む。
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く、炭化物片・酸化鉄少量含む。

SK6 土坑 断面（北西から）

SK6 土坑 遺物出土状況（北西から）

SK6 土坑 完掘状況（北西から）

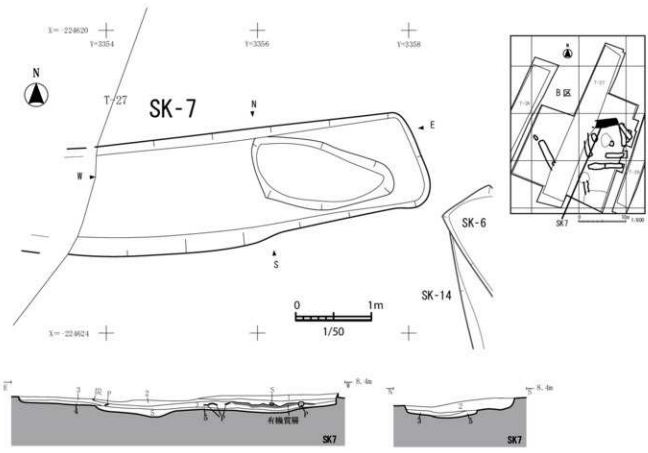
第44図　ＳＫ６　土坑

【ＳＫ７土坑】（第 45～50 図・第 5 表）

標高 8.2m 前後の平坦面に立地する。土坑西端部分は確認調査で設定したトレンチ 27 により一部削平を受けている。平面形は、長軸 4.44m 以上、短軸 1.54m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 22cm である。短軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦であるが、土坑東部に窪みがみられる。長軸方向の傾きは、真北に対して東に 83°傾く（N-83°-E）。堆積土は 5 層に分かれ、いずれも人為堆積で、3 層上層に薄い黒色の有機質層、5 層には木質繊維が多く含まれていた。

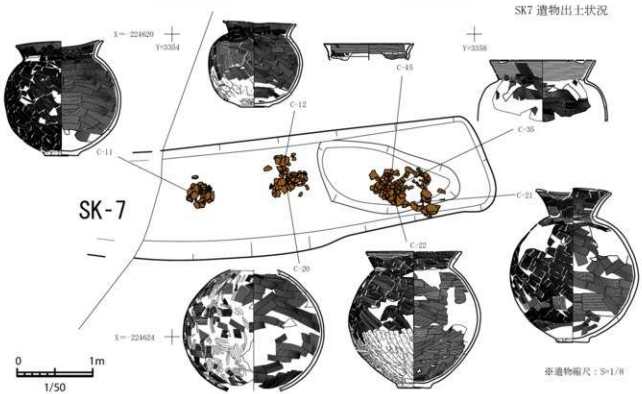
遺物は 1～4 層・底面から土師器片 213 点（9,830g）、土製支脚片 38 点（4,565g）出土した。このうち、出土土師器の内訳は、鉢片 11 点（100g）、壺 2 点（1,900g）、甕片 199 点（7,325g）、壺または甕片 2 点（505g）で、層位別にみると 1 層から 60 点（535g）、2 層から 68 点（650g）、3 層から 75 点（4,795g）、底面から 3 点（3,510g）出土しており、1～3 層からの出土数が多い。

出土遺物のうち、図示できたのは、土師器 鉢 2 点（第 47 図 1・2）・壺 2 点（第 47 図 3・4）・壺または甕 2 点（第 47 図 5・6）・甕 4 点（第 48 図 7～10）である。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く、・酸化鉄・小石・炭化物片少量含む。上部多く含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子・炭化物片含む。酸化鉄少量含む。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子・炭化物片少量含む。上部多く含む。上層に有機質層有。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子・炭化物片少量含む。
5	褐色(10YR4/4)	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子を含む。木質繊維多く含む。

第45図　ＳＫ７　土坑（１）ー平面図・断面図ー



1. SK7 土坑 完掘状況（北から）

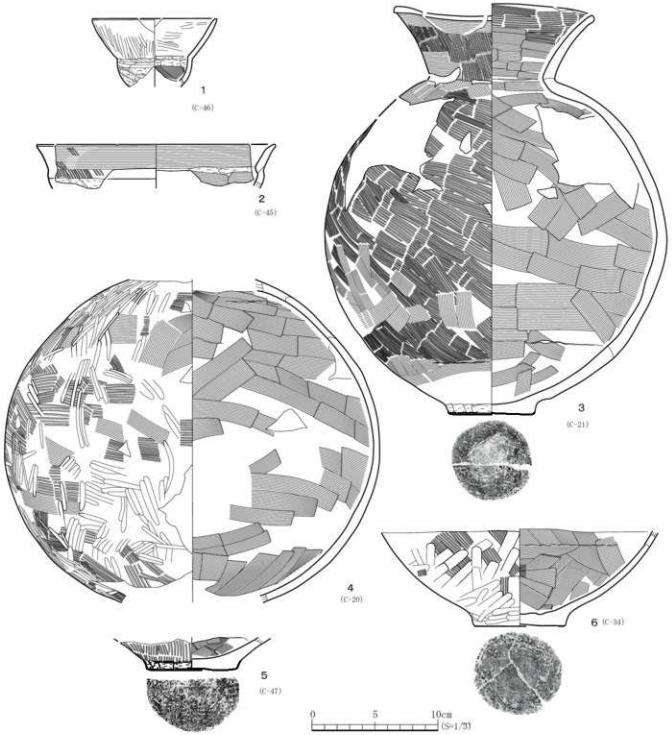
2. SK7 土坑 断面（北から）

3. SK7 土坑 遺物（C-12・20）出土状況（北から）

4. SK7 土坑 遺物（C-21・22・35・45）出土状況（北から）

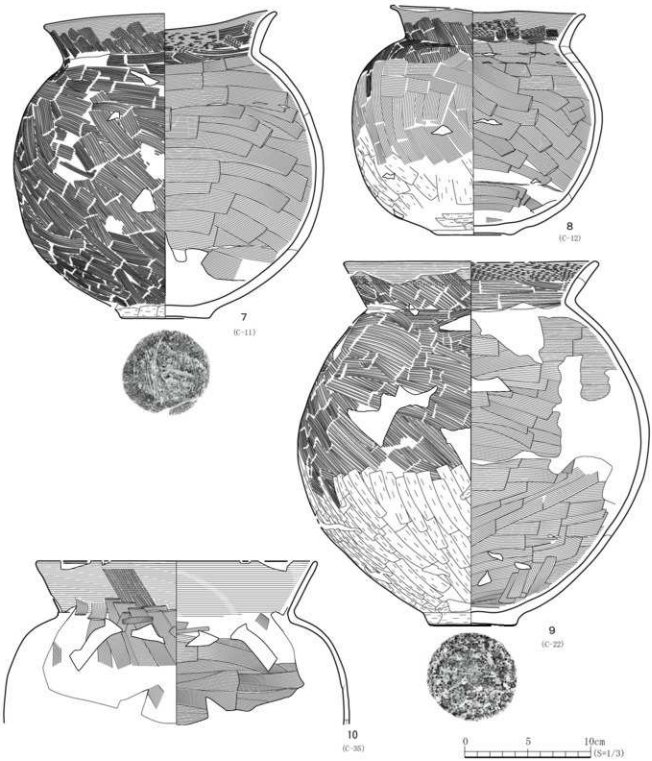
5. SK7 土坑 遺物（C-11）出土状況（北から）

第46図　ＳＫ７　土坑（２）ー遺物出土状況・写真図版ー



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK7 3層	土師器	鉢	口縁部 ～胴部	外面：口縁部～頸部ヘラミガキ・胴部ヘラ削り。内面：口縁部ヘラミガキ・頸部ヘラ削り・胴部ヘラナデ。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：口径(9.8)cm・残存高5.4cm・器厚0.3～0.4cm	C-46
2	SK7 2層	土師器	鉢	口縁部 ～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ヘラ削り。内面：口縁部ヨコナデ・頸部ヘラ削り・胴部ヘラナデ。色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)。法量：口径(18.8)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～0.7cm	C-45
3	SK7 3層	土師器	壺	口縁部 ～底部	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ハケメ→ナデ・胴部下端ヘラ削り・底部輪台技法。内面：口縁部ハケメ・頸部～胴部ヘラナデ。色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)。内面・にぶい黄橙色(10YR7/3)。法量：口径(16.0)cm・器高32.6cm・胴部径27.2cm・底径6.8cm・器厚0.8～1.0cm。外面：煤付着。注正完形	C-21
4	SK7 底面	土師器	壺	胴部	外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ。内面：ヘラナデ。色調：内外面・にぶい褐色(10YR7/4)。法量：胴部径(29.8)cm・残存高25.8cm・器厚0.5～0.8cm	C-20
5	SK7 2層	土師器	壺or甕	底部	外面：ハケメ・ヘラ削り・底部輪台技法。内面：ヘラナデ。色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)。 法量：底径7.2cm・残存高2.6cm・器厚0.6～1.4cm	C-47
6	SK7 3層	土師器	壺or甕	胴部 ～底部	外面：ハケメ→ヘラミガキ・底部輪台技法。内面：ヘラナデ。色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/4)。内面・浅黄橙色(10YR8/3)。法量：底径7.2cm・残存高7.6cm・器厚0.45～1.2cm。外面：煤付着	C-34

第47図　ＳＫ７　土坑（３）ー出土遺物①ー



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
7	SK7 底面	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ハケメ・胴部下端ヘラ削り・底部輪台技法・刺離、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ・刺離、色調：外面・褐色(7.5YR4/4)、内面：にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：口径18.6cm・器高22.9～24.2cm・底径7.0cm・器厚0.6～0.9cm、外面：煤付着	C-11
8	SK7 底面	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・胴部(上半)ハケメ→ナデ・胴部(下半)ヘラ削り→ナデ・磨滅、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、色調：外面：にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面：にぶい黄褐色(10YR5/4)、法量：口径(15.5)cm・器高17.6～18.3cm・底径5.5cm・器厚0.5～0.6cm、注ぎ完形	C-12
9	SK7 3層	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部(上半)ハケメ・胴部(下半)～胴部下端ヘラ削り、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・胴部～底部ヘラナデ、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面：にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：口径(20.4)cm・器高28.9cm・底径7.0cm・器厚0.4～0.7cm	C-22
10	SK7 3層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、法量：口径(22.4)cm・残存高12.0cm・器厚0.4～0.6cm	C-35

第48図　ＳＫ７　土坑（４）ー出土遺物②ー

C-11

C-12

C-34

C-47

C-22

第49図　ＳＫ７　土坑（５）ー出土遺物・写真図版①ー

C-21

0　5　10cm
(S=1/3)

C-20

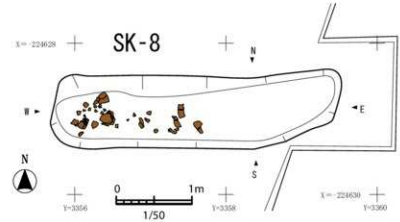
第50図　ＳＫ７　土坑（６）ー出土遺物・写真図版②ー

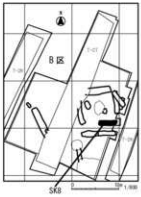
【ＳＫ８土坑】（第 51～53 図・第 5 表）

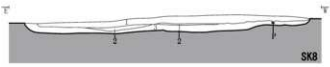
標高 8.5m 前後の平坦面に立地する。平面形は、長軸 3.77m、短軸 0.93m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 20cm である。短軸方向の断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して東に 90°傾く（N-90°-E）。堆積土は 3 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

遺物は 1～3 層・底面から土師器片 95 点（3,825g）、3 層から土製支脚片 5 点（685g）出土した。このうち、出土土師器の内訳は、鉢片 3 点（300g）、甕片 88 点（1,425g）、壺または甕片 3 点（2,015g）、ミニチュア土器 1 点（85g）で、層位別にみると 1 層から 40 点（295g）、2 層から 7 点（55g）、3 層から 42 点（1,245g）、底面から 6 点（2,230g）出土している。

出土遺物のうち、図示できたのは、土師器 鉢 3 点（第 52 図 1～3）・甕 2 点（第 52 図 5・6）・壺または甕 3 点（第 52 図 7～9）・ミニチュア土器 1 点（第 52 図 4）、土製支脚 1 点（第 52 図 10）である。





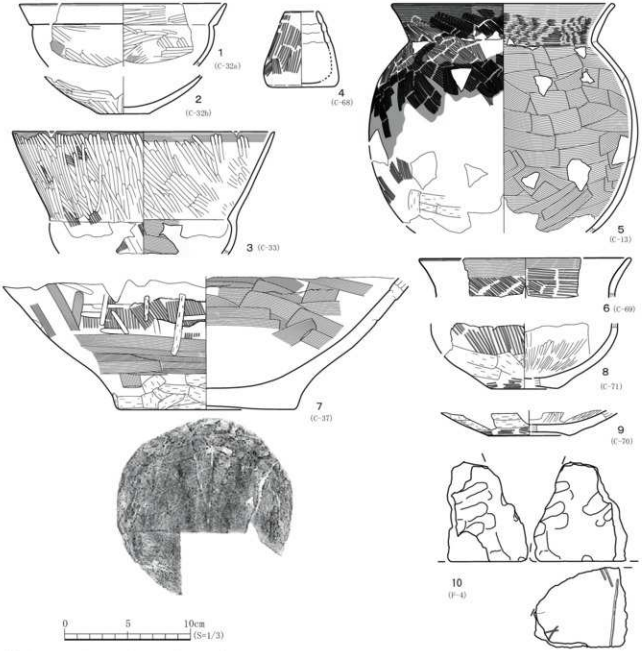


層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・酸化鉄多く、炭化物片含む。
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	灰黄褐色・にぶい黄褐色土粒子・砂多く、酸化鉄含む。
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・小石・炭化物片・酸化鉄含む、土器多く含む。

SK8 土坑 断面（北から）

SK8 土坑 完掘状況（西から）

第51図　ＳＫ８　土坑（１）ー平面図・断面図ー



No.	層	種別	器種	残存	特徴【出土（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK8 底面	土師器	鉢	口縁部 ～胴部	外面：口縁部磨滅のため不明・頸部～胴部ヘラミガキ・ナデ・赤彩・磨滅、内面：口縁部～頸部ヘラミガキ・胴部ヘラミガキ・ナデ・赤彩・磨滅、色調：内外面・橙色(2.5YR6/6)、法量：口径(16.4)cm・残存高8.0cm・器厚0.25～0.55cm、32bと同一個体	C-32a
2	SK8 底面	土師器	鉢	胴部 ～底部	外面：ヘラミガキ・赤彩、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・橙色(2.5YR6/6)、法量：底径4.0cm・残存高3.0cm・器厚0.25～0.7cm、32aと同一個体	C-32b
3	SK8 底面	土師器	鉢	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・頸部～胴部ハケメ→ヘラミガキ、内面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・頸部ヘラミガキ・胴部ヘラ削り→ヘラナデ、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR5/4)、内面・明黄褐色(10YR6/6)、法量：口径(20.6)cm・残存高9.7cm・器厚0.2～0.7cm	C-33
4	SK8 3層	土師器	ミニチュア 土器	口縁部 ～底部	外面：ハケメ、内面：不明、色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：口径(2.7)cm・器高8.0cm・底径5.2cm・器厚0.3～1.2cm、残存率90%、ほぼ完形	C-68
5	SK8 3層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ハケメ→ヘラ削り・磨滅、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面：にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：口径(17.8)cm・胴部径(21.3)cm・残存高18.3cm・器厚0.4～0.5cm、外面：煤付着	C-13
6	SK8 底面	土師器	甕	口縁部	内外面：ハケメ→口唇部ヨコナデ、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(16.8)cm・残存高3.1cm・器厚0.4cm	C-69
7	SK8 底面	土師器	壺or甕	胴部 ～底部	外面：胴部ハケメ→ヘラナデ/ミガキ・胴部下端ヘラ削り・底部木葉痕、内面：ハケメ→ヘラナデ、色調：内外面・褐色(10YR4/4)、法量：底径14.0cm・残存高18.4cm・器厚0.9～2.4cm	C-37
8	SK8 3層	土師器	壺or甕	底部	外面：ハケメ→ヘラ削り、内面：ヘラミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：底径(5.2)cm・残存高5.2cm・器厚0.4～1.1cm	C-71
9	SK8 底面	土師器	壺or甕	底部	外面：ハケメ→ヘラ削り、内面：ヘラミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/2)/赤灰色(2.5YR4/1)、法量：底径(6.3)cm・残存高2.0cm・器厚0.5～1.0cm	C-70
10	SK8 底面	土製品	支脚	－	外面：ナデ・オサエ、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)・明褐色(7.5YR5/6)、法量：残存高7.9cm、残存幅7.4cm、残存厚6.4cm、一部欠損	F-4

第52図　ＳＫ８　土坑（２）一出土遺物一

SK8 土坑　遺物出土状況（北から）

C-32a

C-32b

C-33

C-13

C-37

0　5　10cm

(S=1/3)

C-68

C-69

C-71

C-70

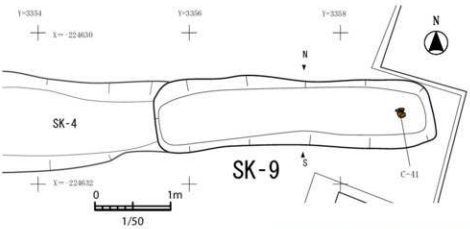
F-4

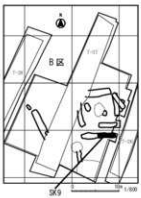
第53図　ＳＫ８　土坑（３）ー写真図版ー

【ＳＫ９土坑】（第 54 図・第 5 表）

標高 8.5m 前後の平坦面に立地する。平面形は、長軸 3.70m、短軸 0.84m の東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 10cm である。短軸方向の断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して東に 90°傾く（N-90°-E）。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

遺物は 1 層・底面から土師器甕片 19 点（225g）、1 層から縄文土器片 1 点（25g）出土した。このうち、土師器片の出土層位の内訳は、1 層が 18 点（105g）、底面が 1 点（120g）である。出土遺物のうち、図示できたのは、底面から出土した土師器 甕 1 点（第 54 図 1）のみである。

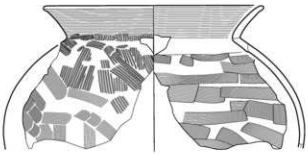


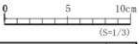


層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・小石・炭化物片・酸化鉄多く含む。
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・酸化鉄多く、炭化物片少量含む。

↑SK9 土坑　遺物（C-41）出土状況（西から）

SK9 土坑　完掘状況（西から）→





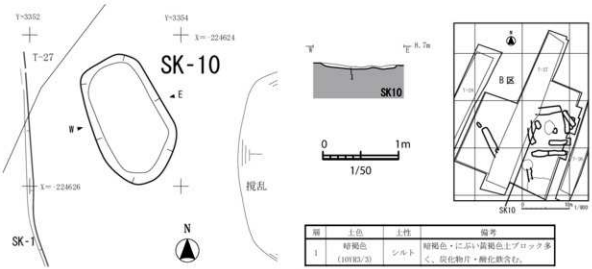
No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK9 底面	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ヨコナデ→ハケメ・胴部ハケメ→ナデ，内面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ，色調：外面・赤褐色（5YR4/6），内面・にぶい赤褐色（5YR4/4），法量：口径17.5cm・残存高11.4cm・器厚0.4～0.6cm	C-41

第54図　ＳＫ９　土坑

【ＳＫ10 土坑】（第 55 図・第 5 表）

標高 8.5m 前後の平坦面に立地する。平面形は、長軸 1.73m、短軸 1.00m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 10cm である。短軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 20°傾く（N-20°-W）。堆積土は 1 層で、人為堆積である。

遺物は 1 層から土師器壺片 1 点（150g）、土製支脚小破片 51 点（10.5g）出土した。このうち、図示できたのは、土師器 壺 1 点（第 55 図 1）である。

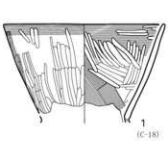


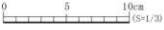
層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック多く、炭化物片・酸化鉄含む。

SK10 土坑 断面（南から）

SK10 土坑 完掘状況（南から）

SK10 土坑 遺物出土状況（南から）





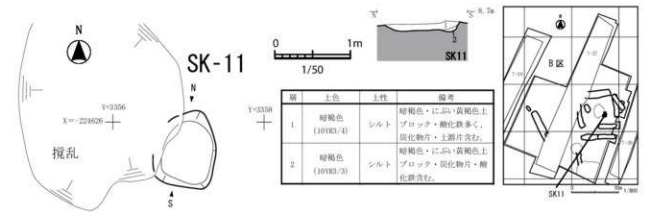
No.	層	種別	器種	残 存	特徴【法量（外面・内面）→色調（外面・内面）→胎土→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK10 1層	土師器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ・頸部ヘラミガキ、内面：ヘラナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、法量：口径辺 8cm・残存高7.9cm・器厚0.3～0.4cm	C-18

第55図　ＳＫ１０　土坑

【ＳＫ11 土坑】（第 56 図・第 5 表）

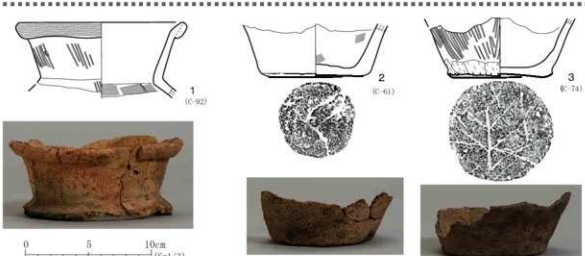
標高 8.5m 前後の平坦面に立地する。土坑西端部分は後世の撹乱により削平を受けている。平面形は、長軸 1.00m、短軸 0.69m 以上の南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、残存深は 14cm である。短軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して東に 7° 傾く（N-7° -E）。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

遺物は 1 層・底面から土師器片が 13 点（520g）出土した。出土土師器の内訳は、壺片 1 点（225g）・甕片 10 点（10g）・壺または甕片 2 点（285g）である。このうち、図示できたのは、土師器 壺 1 点（第 56 図 1）・壺または甕 2 点（第 56 図 2・3）である。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	暗褐色・に示い黄褐色土ブロック・酸化鉄多く、炭化物片・土器片含む。
2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・に示い黄褐色土ブロック・炭化物片・酸化鉄含む。

SK11 土坑　断面（西から）　　SK11 土坑　完掘状況（西から）　　SK11 土坑　遺物（C-92）出土状況（東から）



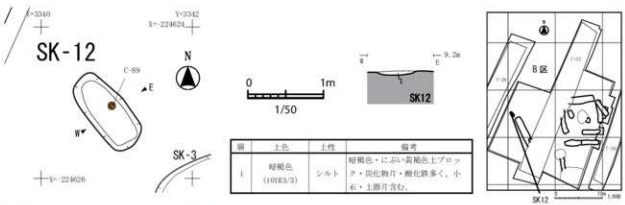
No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK11 底面	土師器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部ナデ・ハケメ（磨滅）・複合口縁、内面：胴部ヘラナデ・磨滅、色調：外面・に示い赤褐色（5YR5/4）、内面・灰褐色（7.5YR5/2）/暗灰色（N3/0）、法量：口径13.0cm・残存高7.0cm・器厚0.6～0.8cm、外面に朱痕	C-92
2	SK11 1層	土師器	甕or甕	底部	外面：磨滅のため不明・底部木葉痕、内面：ヘラナデ・磨滅、色調：外面・に示い褐色（7.5YR6/3）、内面・に示い褐色（7.5YR5/3）、法量：底径7.4cm・残存高4.2cm・器厚0.6～1.2cm、遺物No.8	C-61
3	SK11 1層	土師器	甕or甕	胴部～底部	外面：胴部ハケメ・胴部下端ヘラ削り・底部木葉痕、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・灰褐色（7.5YR5/2）、法量：底径8.4cm・残存高4.7cm・器厚0.5～1.2cm	C-74

第56図　ＳＫ１１　土坑

【ＳＫ12 土坑】（第 57 図・第 5 表）

標高 9.0m 前後の平坦面に立地する。平面形は、長軸 1.23m、短軸 0.51m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 5cm である。短軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 32°傾く（N-32°-W）。堆積土は 1 層で、人為堆積である。

遺物は 1 層・底面から土師器片が 19 点（465g）出土した。出土土師器の内訳は、甕片 17 点（170g）・壺または甕片 2 点（295g）である。このうち、図示できたのは、土師器 甕 1 点（第 57 図 1）・壺または甕 2 点（第 57 図 2・3）である。

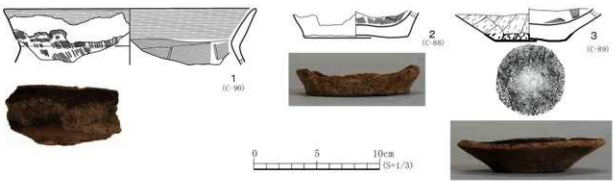


層	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・炭化物片・酸化鉄多く、小石・土器片含む。

SK12 土坑 断面（南東から）

SK12 土坑 完掘状況（南東から）

SK12 土坑 遺物（C-89）出土状況（南東から）



No.	層	種別	器種	残存	特徴【底法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK12 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ハケメ→口唇部ヨコナデ・胴部ハケメ・一部剥離、内面：口縁部～頸部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・褐灰色（7.5YR4/1）、内面・にぶい褐色（7.5YR5/3）、法量：口径(20.0)cm・残存高4.5cm・器厚0.3～0.7cm	C-90
2	SK12 1層	土師器	壺or甕	底部	外面：磨滅のため不明、内面：ヘラナデ、色調：外面・にぶい褐色（7.5YR5/3）、内面・にぶい黄褐色（10YR5/3）、法量：底径8.2cm・残存高2.1cm・器厚0.8～1.2cm	C-88
3	SK12 底面	土師器	壺or甕	底部	外面：ヘラ削り（磨滅）・底部輪台技法、内面：ヘラナデ、色調：外面・褐灰色（7.5YR4/1）、内面・暗灰色（N3/0）、法量：底径5.6cm・残存高2.6cm・器厚0.6～1.3cm、内面：煤付着、遺物No.1	C-89

第57図　ＳＫ１２　土坑

【ＳＫ13 土坑】（第 58～61 図・第 5 表）

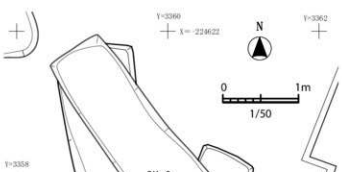
標高 8.8m 前後の平坦面に立地する。SK6・14 土坑と重複し、SK6 より古く、SK14 より新しい。平面形は、長軸 4.65m、短軸 1.06m の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 10cm である。短軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して西に 8°傾く（N-8°-W）。堆積土は 2 層に分かれ、いずれも人為堆積である。

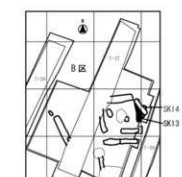
遺物は 1 層から土師器片 114 点（2,400g）、土製支脚 23 点（730g）出土した。出土土師器の内訳は、器台片 1 点（130g）・高坏片 1 点（200g）・鉢片 8 点（570g）・甕片 103 点（1,480g）・壺または甕片 1 点（20g）である。このうち、図示できたのは、土師器 器台 1 点（第 60 図 1）・鉢 4 点（第 60 図 2・3・5・6）・高坏 1 点（第 60 図 4）・甕 2 点（第 60 図 8・9）・壺または甕 1 点（第 60 図 7）、土製支脚 1 点（第 61 図 11）である。

【ＳＫ14 土坑】（第 58～61 図・第 5 表）

標高 8.8m 前後の平坦面に立地する。SK6・13 土坑と重複し、これらより古い。平面形は、長軸 2.45m、短軸 0.74m 以上の南北方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、残存深は 6cm である。短軸方向の断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。長軸方向の傾きは、真北に対して東に 17°傾く（N-17°-E）。堆積土は 1 層で、いずれも人為堆積である。

遺物は 1 層から土師器甕片 8 点（50g）、土製支脚 1 点（23.2g）出土した。このうち、図示できたのは、土師器 甕 1 点（第 60 図 10）である。





遺構	層	土色	土性	備考
SK13	1	黒褐色（10YR3/2）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土粒子・炭化物片・酸化鉄多く、小石・炭化物片含む。土器多く含む。
	2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・炭化物片・酸化鉄含む。
SK14	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	暗褐色・にぶい黄褐色土ブロック・酸化鉄多く、炭化物片含む。

第58図　ＳＫ１３・１４　土坑（１）―平面図・断面図―

1. SK13 土坑　完掘状況（北から）

3. SK13 土坑　遺物（C-10）出土状況（北から）

4. SK13 土坑　遺物（F-5）出土状況（北東から）

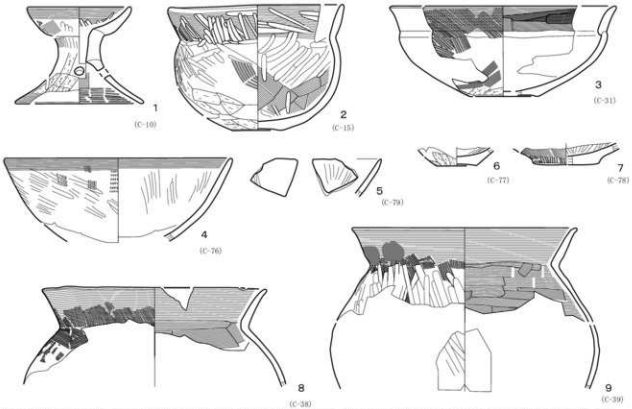
2. SK14 土坑　完掘状況（北から）

5. SK13 土坑　遺物（C-39）出土状況（北から）

6. SK13 土坑　遺物（C-15・31・38・76～79）出土状況（北東から）

第59図　ＳＫ１３・１４　土坑（２）－写真図版１－

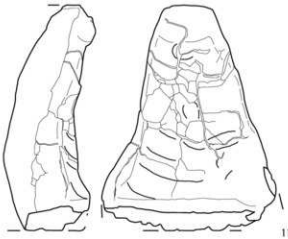
SK13 出土遺物①



SK14 出土遺物

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK13 1層	土師器	器台	受部～脚部	外面：口縁部ヨコナデ・受部ハケメ→ヘラミガキ・脚部ヘラ削り→ヘラミガキ・脚部面ヨコナデ・磨滅、内面：口縁部ヨコナデ・受け部ナデ→ヘラミガキ・脚部面ヘラナデ→ハケメ・磨滅、色調：内外面・にぶい橙色(10YR7/4)、法量：受部径(8.0)cm・器高7.7cm・脚部径(10.0)cm・器厚0.4～0.9cm、器部半分欠損、円窓3個、貫通孔あり	C-10
2	SK13 1層	土師器	鉢	口縁部～底部	外面：口縁部～頸部ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキ・胴部～底部ヘラナデ→ヘラミガキ・胴部(下半)ヘラ削り、内面：口縁部～頸部ヨコナデ→ヘラミガキ・胴部～底部ヘラナデ→ヘラミガキ、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：口径(13.8)cm・器高10.0cm・底径4.0cm・器厚0.5～0.7cm、外面：煤付着、ほぼ完形	C-15
3	SK13 1層	土師器	鉢	口縁部～底部	外面：口縁部～頸部ハケメ→ヨコナデ・胴部ハケメ/ナデ・胴部下端ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ→ヘラナデ・胴部磨滅のため不明、色調：外面・褐色(10YR4/4)、内面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：口径(17.6)cm・器高7.2cm・底径(5.4)cm・器厚0.3～0.6cm、遺物No.3	C-31
4	SK13 1層	土師器	高坏？	口縁部	外面：ハケメ→ヘラミガキ・口唇部ヨコナデ・磨滅、内面：ヘラミガキ→口唇部ヨコナデ・磨滅、色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)、法量：口径(18.0)cm・残存高6.6cm・器厚0.4～0.5cm、脚部欠損	C-76
5	SK13 1層	土師器	鉢	口縁部	内外面：ヘラミガキ・磨滅、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：器厚0.3～0.4cm	C-79
6	SK13 1層	土師器	鉢？	底部	外面：ヘラ削り、内面：ヘラミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：底径5.2cm・残存高1.4cm・器厚0.4～0.9cm	C-77
7	SK13 1層	土師器	甕or甕	底部	外面：ハケメ→ナデ、内面：ヘラミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：底径(5.2)cm・残存高1.7cm・器厚0.5～1.0cm	C-78
8	SK13 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ→ハケメ・頸部～胴部ハケメ、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、色調：外面・褐色(10YR4/4)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、法量：口径(17.6)cm・残存高7.9cm・器厚0.25～0.6cm	C-38
9	SK13 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ヨコナデ→ハケメ・胴部ハケメ→ヘラミガキ、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、色調：外面・褐色(10YR4/4)、内面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：口径17.9cm・残存高13.0cm・器厚0.3～0.7cm、外面：煤付着	C-39
10	SK14 1層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：ハケメ→口唇部ヨコナデ、内面：口唇部ヨコナデ・頸部ハケメ・胴部ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：残存高5.1cm・器厚0.4～0.6cm	C-58

第60図　ＳＫ１３・１４　土坑（３）ー出土遺物①ー



11
(F-5)

SK13 出土遺物②

0　5　10cm
(S=1/3)

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
11	SK13 1層	土製品	支脚	－	外面：ナデ・オサエ。色調：外面 橙色（7.5YR7/6）・橙色（7.5YR6/6）。法量：残存高17.9cm、残存幅13.8cm、残存厚7.4cm、一部欠損	F-5

C-10

C-10
(上から)

SK13 出土遺物

C-31

C-79

C-15

C-77

C-78

C-38

C-39

C-76

0　5　10cm
(S=1/3)

SK14 出土遺物

C-58

第61図　ＳＫ１３・１４　土坑（４）ー出土遺物②・写真図版２ー

(3)基本層出土遺物

① A区基本層出土遺物（第62〜132図）

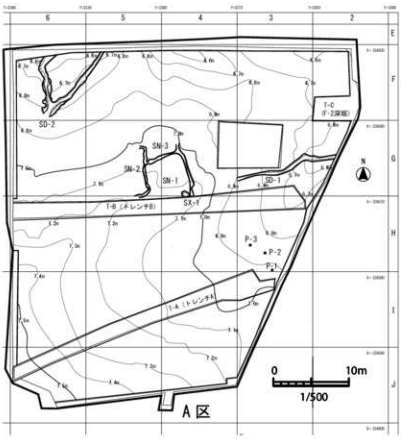
A区では、基本層6層以下に縄文土器・弥生土器、石器等が比較的多く含まれ、その範囲が調査区ほぼ全面に広がっている状況を確認した。このことから、6層以下を遺物包含層と認識し調査を行った。調査にあたっては、遺物の出土地点・層位を把握するため、世界測地系による基準点を用い、北東端を基点とした10m×10mのグリッドを設定し（第62図）、土層断面で基本層序を確認した後、各層位・グリッドごとに掘削を行い、遺物の取り上げを行った。基本層の精査については、原則として水田跡等が確認された基本層6層を対象とし、基本層6・7層は全面、基本層8層以下はグリッドF2〜6の範囲及びH-3・I-3の一部のみを精査の対象とした。

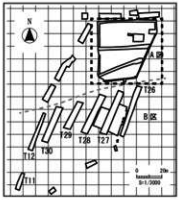
以下、遺物の出土状況・各層の出土遺物の概要について示す。なお、各層・グリッドごとの遺物出土点数は、第6・7表にまとめた。また、A区基本層各層の詳細については、第Ⅲ章2の記載及び第5〜9図を参照されたい。

【遺物の出土状況】（第62〜64図・第6・7表）

A区の基本層において、出土した遺物は総数16,156点（219,391g）で、その内訳は土器類15,733点（207,537g）点、石器類422点（11,804g）点、土製品1点（50g）である。

遺物の分布状況については、グリッドごとにみると、土器類はF-2〜4・G-2〜4の周辺、石器類はF-2〜4・G-3〜4・H-3〜4の周辺での出土点数が最も多く、調査区全体としてみると、遺物は調査区西半で少なく、東半で多く分布する傾向が認められた。





第62図　中筋遺跡 A区グリッド図

第６表　中筋遺跡A区土器類出土状況一覧

層位 / グリッド	グリッド合計	1層	2層	3層	4層	5A層	5B層	6A層	6B層	6C層	6D層	6E層	7層	8層	9層	10層
F-2	2,005 (31,100)			**3** **(235)**	6 (114)				199 (2,843)		885 (115,353)	162 (2,413)	479 (6,664)	167 (1,345)	164 (2,365)	38 (685)
F-3	2,972 (29,490)		2 (15)	3 (25)		11 (46)			3 (76)		667 (7,635)	236 (2,022)	1,434 (14,393)	117 (1,465)	515 (4,880)	4 (5)
F-4	1,367 (13,139)								2 (105)		307 (3,366)	152 (1,573)	19 (238)	138 (1,260)	724 (6,460)	13 (135)
F-5	86 (916)		2 (5)								16 (191)	3 (45)		6 (76)	65 (565)	
F-6	115 (1,625)	2 (16)	8 (35)								47 (473)				62 (565)	
G-2	1,293 (15,137)								230 (4,925)		466 (5,084)	5 (40)	340 (2,943)	148 (1,360)	104 (785)	
G-3	2,950 (37,679)				2 (55)	22 (125)		1 (5)	862 (12,707)		963 (11,696)	686 (6,059)	578 (6,062)			
G-4	1,329 (14,967)					17 (35)			1,004 (11,441)		168 (1,596)	97 (1,365)	23 (650)			
G-5	154 (1,552)		10 (15)		1 (42)				16 (35)		1 (10)	123 (1,410)			5 (40)	
G-6	104 (1,652)		14 (75)						2 (90)		40 (616)	38 (920)			10 (70)	
H-3	774 (14,752)					23 (145)	2 (20)	4 (30)	289 (5,412)		434 (8,812)	19 (220)	4 (113)			
H-4	1,283 (18,947)				**1** **(170)**	9 (135)	2 (16)		795 (13,635)		446 (14,849)	35 (723)	1 (25)			
H-5	138 (2,136)								15 (356)		121 (1,740)		2 (37)			
H-6	214 (2,170)								158 (1,435)		54 (365)	2 (170)				
I-3	63 (1,487)								1 (35)		61 (947)		1 (265)			
I-4	280 (4,868)			14 (35)		9 (76)			156 (2,583)		104 (1,811)			2 (276)		
I-5	9 (95)										3 (60)	6 (35)				
I-6	0 0															
J-4	339 (11,867)								238 (9,423)	14 (55)	77 (2,364)	1 (55)	13 (96)			
J-5	239 (4,560)								93 (1,634)	2 (95)	133 (2,831)					
J-6	41 (289)								7 (95)		34 (329)					
合計	15,734 (207,537)	2 (16)	32 (145)	20 (295)	10 (282)	91 (559)	4 (36)	5 (35)	3,904 (56,362)	16 (250)	4,844 (69,408)	1,553 (16,474)	2,904 (31,460)	578 (5,816)	1,656 (15,640)	56 (825)

※　数値が上段は土器数，下段は円は重量（g・乾燥重量）を示す。
※　同樹脂の数字は縄文土器・弥生土器の点数を示す。なお，鋼鏃・鏃片資料のため，縄文・弥生土器の判別ができない，ものも含む。
※　**コシック体**の数字は土師器・須恵器の点数【F-2・3層・赤ロクロ土師器1点（20g）・須恵器2点（3g），H-4・6層・赤ロクロ土師器1点（170g）】を示す。
※　G-2・7層の数値には土師品1点（30g）の数値を含む。

第７表　中筋遺跡A区石器類出土状況一覧

層位 / グリッド	グリッド合計	1層	2層	3層	4層	5A層	5B層	6A層	6B層	6C層	6D層	6E層	7層	8層	9層	10層
F-2	32 (573.9)								2 (11.4)		19 (392.0)	3 (16.4)	3 (100.5)	3 (53.6)		
F-3	26 (471.3)										5 (151.6)	9 (238.1)	10 (71.2)	1 (6.3)	1 (3.9)	
F-4	23 (746.9)			2 (8.4)							10 (692.2)	5 (24.7)		1 (3.6)	3 (4.6)	1 (7.4)
F-5	1 (4.6)										1 (4.6)					
F-6	0 0															
G-2	15 (1450.8)								4 (498.4)		2 (12.5)	1 (885.0)	9 (49.6)	1 (1.3)	1 (4.0)	
G-3	93 (2216.7)					1 (14.0)			38 (548.7)		40 (1235.4)	6 (43.2)	7 (377.7)			
G-4	79 (945.6)								74 (724.7)		4 (206.1)		1 (14.8)			
G-5	1 (2.6)										1 (2.6)					
G-6	2 (122.8)										1 (108.8)				1 (14.0)	
H-3	21 (901.6)					1 (4.5)			6 (30.1)		12 (852.0)	1 (8.6)	1 (6.4)			
H-4	71 (2314.4)								56 (1890.9)		15 (423.5)					
H-5	4 (210.2)										4 (210.2)					
H-6	5 (21.0)								1 (8.0)		2 (7.0)	2 (16.0)				
I-3	0 0															
I-4	9 (53.9)								5 (31.3)		3 (20.6)		1 (2.4)			
I-5	0 0															
I-6	0 0															
J-4	33 (1426.4)					1 (17.2)			23 (909.4)	1 (16.9)	8 (482.9)					
J-5	10 (325.5)										2 (211.1)	8 (114.4)				
J-6	0 0															
合計	432 (14904.6)			2 (19.2)		4 (35.7)			209 (4632.9)	1 (16.9)	130 (5611.4)	35 (1346.4)	30 (622.8)	1 (64.6)	6 (26.5)	1 (7.4)

出土層位別にみると、土器類は、1～5層から159点（1,312g）、6層から10,382点（152,490g）、7層から2,904点(31,460g)、8層から578点(5,810g)、9層から1,656点(15,640g)、10層から55点(825g)出土しており、6層からの出土量が最も多い（全体の約6割）。石器類は3層から2点(19.2g)、5層から4点(35.7g)、6層から375点(11,027.6g)、7層から30点(622.8g)、8層から4点(64.8g)、9層から6点(26.5g)、10層から1点(7.4g)出土しており、土器類と同様に6層からの出土量が多い（全体の約8割）。

土器類の種別でみると、基本層1～5層には縄文・弥生土器が少量含まれるが、基本層3層で古代の須恵器、基本層4層上層（4A層）で古墳時代前期の土師器が出土しており、3層は古代以降、4層上層は古墳時代前期以降の堆積層と考えられる。6層では縄文土器・弥生土器、7層以下では縄文土器のみが出土しており、6層は弥生時代、7層は縄文時代の堆積層と考えられる。

遺物の出土状況は、完形または器形全体を復元できる資料はわずかで、破片資料がほとんどである。基本層7層以下で出土した遺物の器面は磨滅しているものが多い。

以下、各層から出土した遺物の概要について示す。なお、それぞれの遺物の特徴、編年的位置づけについては、第Ⅴ章1を参照されたい。

［基本層1～5層出土遺物］　（第65・68図）

土器類は1層から2点（10g）、2層から32点(145g)、3層から20点（295g）、4層から10点（282g）、5層から95点（580g）出土し、その内訳は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器である。石器類は、3層から2点（19.2g）、5層から4点（35.7g）出土し、その内訳は石核・剥片である。

このうち図示できたものは、3層・4A層出土の非ロクロ成形の土師器高坏片2点（第65図1・2）、4B層出土の弥生土器壺片1点（第65図3）である。弥生土器（第65図3）は、頸部付近に連続押圧が施された壺の口縁部破片で、弥生時代後半の天王山式の特徴を有するものである。なお今回の調査で出土した弥生土器のうち、弥生時代後期の特徴を有する土器は本資料1点のみである。土師器高坏はいずれも脚部資料（第65図1・2）で、器形の特徴から古墳時代前期のものとみられる。

基本層3・4層出土遺物のうち、最も新しい遺物は、4B層は弥生時代後期、4A層は古墳時代前期、3層は古代の遺物であることから、4層は弥生時代後期～古墳時代前期以降、3層は古代に堆積した層であると考えられる。

［基本層6層出土遺物］　（第66～124図）

土器類10,382点（152,490g）、石器類375点(11,027.6g)出土した。6層は6A～F層に細別されるが、調査区のほぼ全面で確認されたのは6B・6D・6E層であり、遺物もこれらの層から多く出土している。A区においてその内訳は縄文土器・弥生土器・石器で、その主体は弥生土器である。基本層6層出土遺物のうち、最も新しい遺物は、弥生時代中期中葉頃の土器類であり、6層は弥生時代中期中葉以前に堆積した層であると考えられる。

縄文土器には深鉢・浅鉢・鉢・台付鉢・壺・注口土器があり、文様は雲形文・羊歯状文・平行沈線文・匹字文・変形工字文などが施されており、このうち匹字文・変形工字文を施したものが多い傾向にある。ほとんどが破片資料で、器面は磨滅しているものが多い。

弥生土器には高坏・壺・鉢・蓋・甕・深鉢などがある。器面の状態は比較的良好なものが多い。地文

は縄文が多く、この他、植物茎回転文や稀に網目状撚糸文などもみられる。器面調整はミガキ・ナデを施すものがほとんどである。高坏・壺・鉢・蓋などの文様には変形工字文、山形文・連弧文、方形・長方形の区画文、三角形の区画文、方形・三角形以外の区画による幾何学文、波状文、渦文、沈線文・平行沈線文などが施文される。甕には、頸部に列点文を施すもの・施さないものがある。出土した底部資料はすべて平底で、木葉痕・網代痕・織布痕が認められた。

石器には石包丁・板状石器・磨製石斧・扁平片刃石斧・石鏃・石錐・石篦・石錘・不定形石器・敲石・凹石・石核・剥片がある。

<6B 層出土遺物>　（第 66 図～94 図）

土器類 3,964 点（66,362g）、石器類 209 点（4,652.9g）出土した。出土地点でみると、遺物はグリッド G-2・G-3・G-4 東半、H-3・H-4、I-4、J-4 付近に多く分布しており、そのうち、グリット G-2～4・H3～4 周辺での出土量が多い。6B 層出土遺物のうち、弥生土器については、直上層の 4 層・5A～C 層との層理面や 6B 層上層から出土したものが多い。

6B 層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器 26 点、弥生土器 171 点、石器 26 点である。

縄文土器には鉢（第 66 図 1～5）・台付鉢？（第 66 図 6）・浅鉢（第 66 図 7～8）・深鉢（第 67 図 1～12）・壺（第 67 図 14～18）がある。

弥生土器には、高坏（第 69 図 1～3）・壺（第 69 図 4～14、第 70 図 1～17、第 71 図 1～11、第 72 図 1～3）・鉢（第 72 図 4～17、第 73 図 1～22、第 74 図 1～6）・蓋（第 74 図 7～16、第 75 図 1～14）・甕（第 76 図 1～15、第 77 図 1～12、第 78 図 1～3、第 79 図 1～11、第 80 図 1～6）・壺または甕（第 80 図 7）・深鉢（第 80 図 8～11、第 81 図 1～9）がある。なお、甕胴部資料（第 80 図 5）では、イネ由来の圧痕が確認されている。

石器には、石鏃（第 88 図 1）・石錐（第 88 図 2～5）・石篦（第 88 図 6）・石包丁（第 89 図 1～4）・板状石器（第 90 図 1、第 91 図 1・2、第 92 図 1～5）・不定形石器（第 93 図 1～4）・敲石（第 94 図 1・2）・石錘（第 94 図 3）・凹石（第 94 図 4）がある。

<6D 層出土遺物>　（第 95 図～119 図）

土器類 4,844 点（69,469g）、石器類 130 点（5011.4g）出土した。出土地点でみると、遺物はグリッド F-2～3、G-2・G-3、H-3～4 付近に多く分布し、G-4・I-4・J-5 付近でも一定量分布している。そのうち、グリッド G-3 東半の SD1 北側ではある程度まとまった状態で土器類が出土している（第 63 図）。なお、6D 層出土遺物のうち、弥生土器は、直上層の 6B 層との層理面から出土しているものが多い。

6D 層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器 16 点、弥生土器 119 点、石器 17 点である。

縄文土器には深鉢（第 95 図 1～7）・浅鉢（第 95 図 8・9）・注口土器（第 95 図 10）・鉢（第 95 図 11～15）・台付鉢？（第 95 図 16）がある。

弥生土器には、壺（第 96 図 1～11、第 97 図 1・2、第 98 図 1～4・6、第 99 図 1～3）・鉢（第 98 図 5、第 100 図 1～20、第 101 図 17・18）・蓋（第 101 図 1～13）・袖珍土器(第 101 図 14～16）・甕（第 102 図 1～12、第 103 図 1～17、第 104 図 1～8・10・13）・壺または甕（第 99 図 4～7、第 104 図 9・11～12）・深鉢（第 105 図 1～10・12・13）がある。なお、壺頸部資料（第 96 図 11）・甕底部資料（第 99 図 4）・甕底部資料（第 104 図 8）・深鉢と考えられる胴部資料（第 105 図 12）には、イネ由来の圧痕が確認されている。

石器には石包丁（第112図1～2）・板状石器（第113図1・2、第114図1・2、第115図1・2）・磨製石斧（第116図1・2）・扁平片刃石斧（第116図3）・不定形石器（第117図1～3）・石核（第117図4・5、第118図1・2）がある。

〈6E層出土遺物〉　（第120図～124図）

土器類1,553点（16,474g）、石器類35点（1346.6g）出土した。遺物は6B層・6D層とほぼ同様の範囲に分布しており、特にG-3周辺からの出土量が多い。6B層・6D層出土遺物と比較すると、弥生土器の出土数は少ない。

6E層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器16点、弥生土器15点、石器2点である。

縄文土器には深鉢（第120図1～10）・鉢（第120図11～15）・壺？（第120図16）がある。

弥生土器には、壺（第121図1～4）・鉢（第121図5～7）・蓋（第121図8）・甕（第121図9～14）・深鉢（第121図15）がある。

石器には凹石（第124図1）・石核（第123図1）がある。

［基本層7～10層出土遺物］　（第124～132図）

土器類5,193点（53,735g）、石器類41点(721.5g)・土製品1点出土した。このうち、遺物は7層・9層から出土したものが多く、土器類の器面が磨滅しているものがほとんどである。基本層7～10層で出土した土器類はすべて縄文土器であり、そのうち、最も新しい遺物は縄文時代晩期の土器類であり、7層以下は縄文時代晩期以前に堆積した層とみられる。

出土した縄文土器の器種には、深鉢・浅鉢・鉢・台付鉢・壺・注口土器があり、文様は入組文・羊歯状文・工字文・匹字文・変形工字文・平行沈線文などが施された土器が出土しており、その中で、匹字文・変形工字文・平行沈線文を施すものが多い。

石器には敲石・石核・不定形石器・剥片があり、7層から敲石・石核・不定形石器・剥片、8層から石核・剥片、9層から不定形石器・剥片、10層から剥片が出土している。土製品は7層から1点のみ出土しており、その形状から耳飾りとみられる。

このうち、図示できたものは、縄文土器85点、石器3点、土製品1点で、**基本層7層出土遺物**では、縄文土器深鉢（第125図1～19・第126図1・3～8）・浅鉢（第126図9～14）・鉢（第127図1～17・第128図5）・台付鉢（第127図18・19）・壺（第126図2、第128図1～3）・注口土器（第128図4）、耳飾り（第128図6）、不定形石器（第124図1～3）、**基本層8層出土遺物**では、縄文土器深鉢（第128図7・9）・鉢（第128図10～14）・壺（第128図8・15）・注口土器（第128図16）、**基本層9層出土遺物**では、縄文土器深鉢（第129図1～6）・鉢（第129図7～14）・壺（第129図15～16図）、**基本層10層出土遺物**では、縄文土器深鉢（第129図17）・浅鉢（第129図18）である。

1．中筋遺跡　A区　グリットG-3北東部分・基本層6D層　弥生土器　出土状況　遠景（東から）

2．中筋遺跡　A区　グリットG-3・基本層6D層
弥生土器（B-214）　出土状況①（東から）

3．中筋遺跡　A区　グリットG-3・基本層6D層
弥生土器（B-207）　出土状況②（南から）

4．中筋遺跡　A区　グリットG-3・基本層6D層
弥生土器　出土状況③（西から）

5．中筋遺跡　A区　グリットG-3・基本層6D層
弥生土器　出土状況④（東から）

第63図　A区基本層遺物出土遺物状況（1）

1. 中筋遺跡　A区　グリットG-3・基本層6B層
弥生土器　出土状況（東から）

2. 中筋遺跡　A区　グリットH-4・基本層6B層
石包丁　出土状況（東から）

3. 中筋遺跡　A区　グリットJ-4・基本層6B層
弥生土器　出土状況（北から）

4. 中筋遺跡　A区　グリットJ-5・基本層6D層
弥生土器（B-314）　出土状況（東から）

5. 中筋遺跡　A区　グリットF-2・基本層7層
縄文土器（A-129）　出土状況（西から）

6. 中筋遺跡　A区　グリットF-2・基本層7層
縄文土器（A-125）　出土状況（南から）

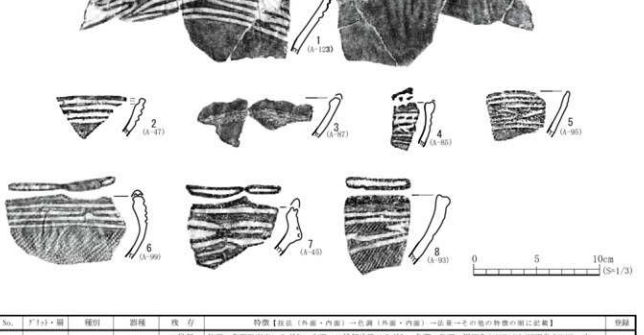
7. 中筋遺跡　A区　グリットG-3・基本層7層
縄文土器（A-83）　出土状況（南から）

8. 中筋遺跡　A区　グリットF-2・基本層10B層
縄文土器（A-149）　出土状況（南から）

第64図　A区基本層遺物出土遺物状況（２）

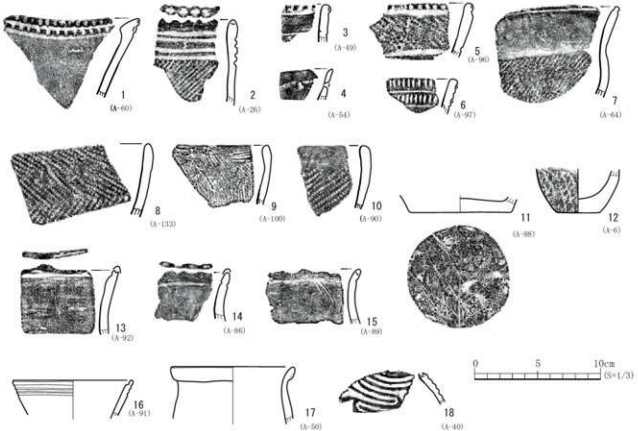
No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）－色調（外面・内面）－法量－その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-2・5層	土師器	高杯	脚部	内外面：磨滅のため不明。色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)。法量：残存高8.0cm・器厚0.6～4.4cm	C-91
2	I-4・4A層	土師器	高杯	脚部	外面：ヘラミガキ・磨滅。内面：ナデ。色調：外面・にぶい橙色(10YR7/4)。内面・浅黄橙色(10YR8/4)。法量：残存高9.1cm・器厚0.5～1.7cm。杯部欠損	C-43
3	G-5・4B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：ナデ・連続押圧・縄文LR。内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)。内面・黒褐色(5YR3/1)にぶい～褐色(7.5YR5/3)。法量：器厚0.3～0.9cm。外面：向仁勉付着	B-229

第65図　A区基本層3・4層出土遺物



No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）－色調（外面・内面）－法量－その他の特徴の順に記載】	登録
1	H-4・6B層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：変形工字文・ミガキ。内面：口縁部沈線・ミガキ。色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/暗灰色(N3/0)。内面・褐灰色(10YR4/1)。法量：残存高8.8cm・器厚0.35～0.7cm。内外面：赤彩	A-123
2	H-4・6B層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：平行沈線文。内面：沈線・ミガキ。色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)。内面・黒褐色(10YR3/1)。法量：器厚0.4～0.7cm	A-47
3	G-4・6B層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：小波状口縁・ミガキ。内面：ミガキ。色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)。内面・黒褐色(7.5YR3/1)。法量：器厚0.45～0.7cm。内外面：赤彩	A-87
4	G-3・6B層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部突起・半截状文。内面：ミガキ。色調：内外面・暗灰色(N3/0)。法量：器厚0.3～0.7cm	A-85
5	G-3・6B層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：変形工字文・磨滅。内面：口縁部沈線・ミガキ。色調：外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)/黒褐色(10YR3/1)。内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/暗灰色(N3/0)。法量：器厚0.2～0.6cm	A-95
6	G-4・6B層	縄文土器	台付鉢？	口縁部	外面：口唇部沈線・縄文LR・四字文。内面：口縁部沈線・ミガキ。色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.4～1.05cm	A-99
7	H-3・6B層	縄文土器	浅鉢	口縁部～頸部	外面：口唇部突起/沈線・口縁部突起/沈線文。内面：ミガキ。色調：外面・褐灰色(10YR4/1)。内面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)。法量：器厚0.3～1.2cm	A-45
8	G-4・6B層	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面：口唇部沈線・縄文LR・雲形文・磨滅。内面：磨滅。色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)。内面・灰黄褐色(10YR5/2)。法量：器厚0.6～1.1cm	A-93

第66図　A区基本層6B層出土遺物（１）



No.	ﾄﾚﾝﾁ・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	Ⅱ-4・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：頸Ⅱ・平行沈線文，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)/褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.2～1.1cm	A-60
2	F-2・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：小波状口縁・口唇部頸Ⅱ・縄文LR・平行沈線文，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.8～0.8cm	A-26
3	Ⅱ-4・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：頸Ⅱ・平行沈線文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.55～0.75cm	A-49
4	Ⅱ-4・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(7.5YR3/1)，法量：器厚0.2～0.5cm，穿孔有り，内外面：赤彩	A-54
5	G-3・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：頸Ⅱ・平行沈線文・縄文RL，内面：磨滅，色調：外面・灰褐色(5YR4/2)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.4～0.8cm	A-96
6	G-4・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：頸Ⅱ・平行沈線文・磨滅，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.55～0.7cm	A-97
7	Ⅱ-4・6層～胴部	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口縁部沈線・胴部ミガキ・縄文LR，内面：口縁部沈線・ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・褐灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.6cm	A-64
8	G-4・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文RL，内面：ナデ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.7cm	A-133
9	G-3・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：櫛歯状文，内面：ナデ・ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.7cm	A-100
10	G-3・6層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)/褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.5～0.85cm	A-90
11	G-3・6層	縄文土器	深鉢	底部	外面：底部木葉痕，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：底径8.1cm・残存高1.4cm・器厚0.7～1.1cm，内外面：炭化物付着	A-88
12	G-4・6層	縄文土器	深鉢	胴部～底部	外面：頸Ⅱ状燃糸文・底部ミガキ・磨滅，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)，内面・褐灰色(10YR5/1)，法量：底径3.4cm・残存高3.8cm・器厚0.8～1.4cm	A-6
13	G-3・6層	縄文土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部突起/沈線・口縁部沈線文・磨滅，内面：口縁部沈線・ミガキ，色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.3～0.8cm	A-92
14	G-3・6層	縄文土器	壺	口縁部～胴部	外面：小波状口縁・口唇部頸Ⅱ・口縁部縄文LR・沈線文，内面：口縁部縄文LR・沈線，色調：内外面・褐灰色(10YR5/1)，法量：器厚0.35～0.7cm	A-86
15	G-3・6層	縄文土器	壺	口縁部～胴部	外面：口縁部小突起/沈線・沈線文・胴部ミガキ・赤彩，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.65cm	A-89
16	G-4・6層	縄文土器	壺	口縁部	外面：平行沈線文・ミガキ，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.5cm	A-91
17	G-2・6層	縄文土器	壺	口縁部～胴部	内外面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：口径9.8cm・残存高4.5cm・器厚0.3～0.6cm	A-50
18	Ⅱ-4・6層	縄文土器	壺	胴部	外面：変形工字文・赤彩，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.6cm	A-40

第67図　A区基本層6B層出土遺物（２）

A区基本層3層・4層

C-91（第65図1）

C-43（第65図2）

B-229
（第65図3）

A区基本層6B層①

A-123
（第66図1）

A-47
（第66図2）

A-87（第66図3）

A-85
（第66図4）

A-95
（第66図5）

A-99（第66図6）

A-45（第66図7）

A-93（第66図8）

A-60
（第67図1）

A-26
（第67図2）

A-49（第67図3）

A-96（第67図5）

A-54（第67図4）

A-97（第67図6）

A-64
（第67図7）

A-133
（第67図8）

A-100
（第67図9）

A-90
（第67図10）

A-88（第67図11）

A-6（第67図12）

A-92（第67図13）

A-86
（第67図14）

A-89
（第67図15）

A-91
（第67図16）

A-50
（第67図17）

A-40
（第67図18）

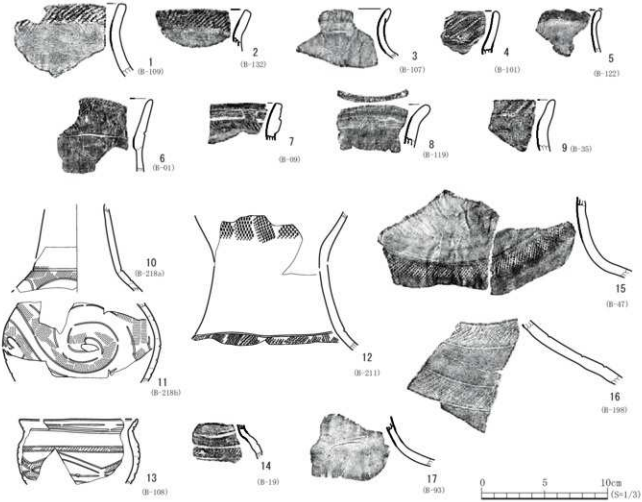
0　5　10cm
(S=1/3)

A：縄文土器
B：弥生土器
C：土師器

第68図　A区　基本層3層、4層、6B層出土遺物①－土器類（写真図版）－

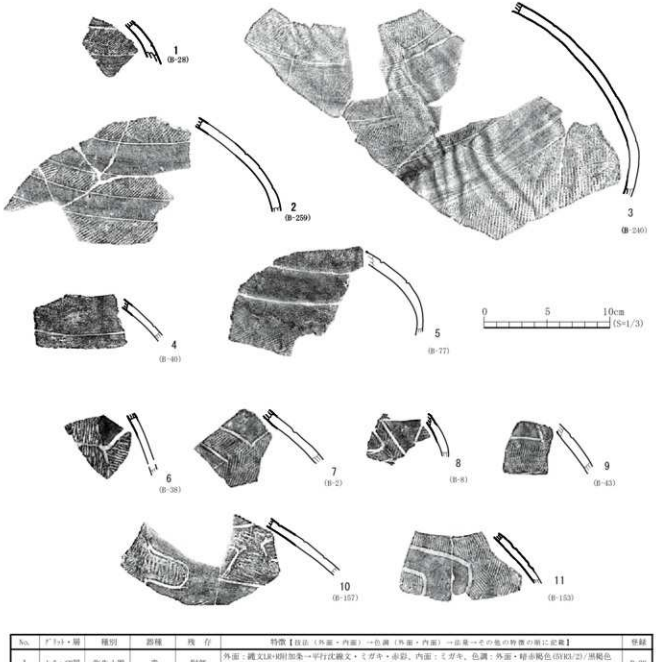
No.	ｸﾞﾘｯﾄ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-4・6層～側部	弥生土器	高坏	口縁部～側部	外面：波状口縁・口唇部刻目・変形工字文。内面：口縁部沈線・ミガキ。色調：内外面・暗灰色(N3/0)。法量：残存高5.5cm・器厚0.5～0.7cm。内外面：炭化物付着。帝年代測定（試料№8）	B-224
2	G-3・H-4 6層	弥生土器	高坏	口縁部	外面：口唇部刻目・縄文以→変形工字文。内面：ナデ。色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.45～0.6cm	B-68
3	J-4・6層～側部	弥生土器	高坏	口縁部～側部	外面：口唇部突起・縄文以→変形工字文・赤彩。内面：口唇部縄文以・口縁部上端沈線・ミガキ・赤彩、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)。内面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.3～1.0cm	B-185
4	G-2・6層～側部	弥生土器	壺	口縁部～側部	外面：口縁部～頸部ミガキ・植物葉圧痕。内面：ミガキ。色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)。法量：口径19.0cm・残存高12.4cm・器厚0.5～0.6cm	B-308
5	H-4・6層～側部	弥生土器	壺	口縁部～側部	外面：口縁部縄文以・頸部～胴部ミガキ。内面：ミガキ。色調：外面・黒褐色(5YR3/1)/褐灰色(N3/0)。内面・褐灰色(5YR4/1)/灰褐色(7.5YR4/2)。法量：口径11.2cm・残存高6.8cm・器厚0.5～0.8cm。外面：炭化物付着	B-285
6	G-3・6層～側部	弥生土器	壺	口縁部～側部	外面：平行沈線文・ミガキ。内面：ミガキ。色調：外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)。内面・褐灰色(7.5YR4/1)/にぶい黄褐色(10YR6/3)。法量：口径9.8cm・残存高4.8cm・器厚0.6～0.8cm	B-69
7	G-3・6層～側部	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：折り返し口縁・ミガキ。内面：ミガキ。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.25～0.5cm	B-149
8	G-4・6層～側部	弥生土器	壺	口縁部～頸部	内外面：ナデ。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：口径(4.0)cm・残存高5.0cm・器厚0.2～0.5cm	B-118
9	I-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部～頸部縄文以・頸部ヨコナデ。内面：ヨコナデ。色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR4/2)/灰黄褐色(10YR5/2)。法量：口径12.7cm・残存高6.2cm・器厚0.4～0.7cm	B-181
10	G-3・6層	弥生土器	甕	口縁部～側部	外面：口縁部縄文以・頸部ナデ・胴部綾絡文/縄文以。内面：ナデ・オサエ。色調：外面・灰黄褐色(7.5YR4/2)、内面・黄灰色(2.5Y4/1)。法量：器厚0.3～0.6cm	B-46
11	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：ミガキ。内面：口縁部縄文以・ミガキ。色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)。法量：器厚0.3～0.7cm	B-128
12	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：ミガキ。内面：口縁部縄文以・ミガキ。色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.2～0.7cm	B-105
13	H-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文以・磨滅。内面：磨滅。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：器厚0.2～0.7cm	B-164
14	H-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文以・RR1原条・ミガキ・赤彩。内面：ミガキ・磨滅。色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/褐灰色(10YR4/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)。法量：器厚0.4～0.85cm	B-44

第69図　A区基本層6B層出土遺物（3）



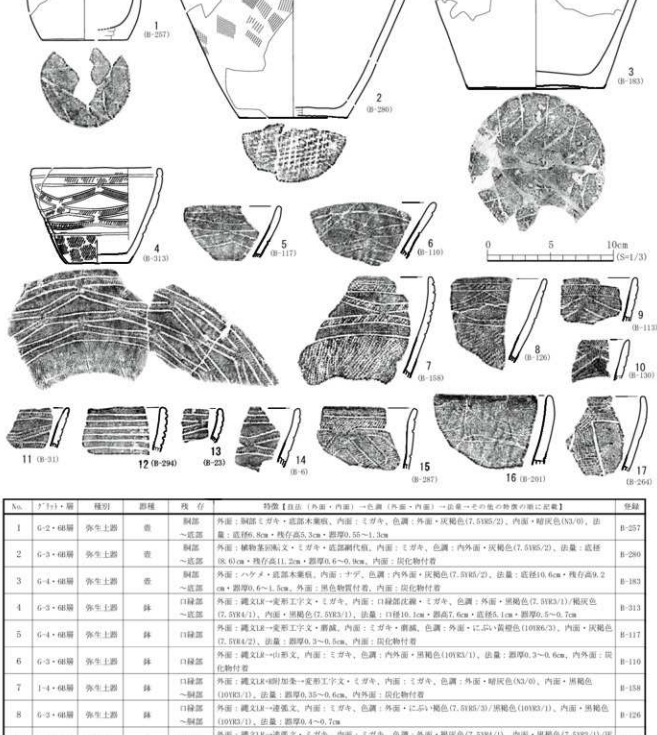
No.	ﾎﾟｲﾝﾄ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.55～0.8cm	B-109
2	G-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR・赤彩，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.5～0.7cm	B-132
3	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	内外面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(5YR3/1)，法量：器厚0.3～0.55cm	B-107
4	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：縄文LR→刻目加条，内面：ナデ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面：黒褐色(7.5YR3/1)，法量：器厚0.5～0.7cm，内外面：炭化物付着	B-101
5	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：小波状口縁・口縁部縄文LR・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.25～0.5cm	B-122
6	J-5・6層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR・頸部沈線文・ナデ，内面：ヨコナデ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)，内面：灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.3～0.8cm	B-1
7	J-5・6層	弥生土器	壺?	口縁部	外面：口縁部縄文RL→長方形区画文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.5～1.0cm	B-9
8	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：口唇部縄文LR・口縁部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.6～0.8cm	B-119
9	J-4・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：口縁部縄文LR（刻加条？）・赤彩・磨滅，内面：ミガキ・磨滅，色調：外面・黄灰色(2.5Y6/1)，内面・黄灰色(2.5Y4/1)，法量：器厚0.4～0.8cm	B-35
10 11	J-4・6層	弥生土器	壺	頸部～胴部	外面：頸部ミガキ/沈線文・対部/胴部植物茎回転文→渦文・磨滅，内面・ナデ，色調：外面・灰白色(2.5Y8/1)，内面・灰白色(2.5Y8/2)，法量：残存高7.0cm・器厚0.5～0.6cm	B-218a B-218b
12	H-3・6層	弥生土器	壺	頸部	外面：口縁部縄文LR・頸部ミガキ・対部縄文LR→沈線文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(10YR4/1)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：残存高11.0cm・器厚0.4～0.8cm	B-211
13	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口縁部平行沈線文・頸部ミガキ・胴部縄文LR→変形工字文，内面：口縁部沈線・ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：口径19.4cm・残存高5.2cm・器厚0.4～0.6cm	B-108
14	I-4・6層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→平行沈線文・ミガキ，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.6cm	B-19
15	G-3・6層	弥生土器	壺	頸部～胴部	外面：頸部ミガキ・胴部縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.65～0.8cm，内面：炭化物付着	B-47
16	H-4・6層	弥生土器	壺	頸部～胴部	外面：縄文LR→平行沈線文・ミガキ，内面：ミガキ・刺離，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.7～0.9cm，内面：炭化物付着	B-198
17	H-4・6層	弥生土器	壺	頸部	外面：ミガキ・植物茎回転文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.5～0.6cm	B-93

第70図　A区基本層6B層出土遺物（4）



No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	J-5・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR+RH加条→平行沈線文・ミガキ・赤彩、内面：ミガキ、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/2)/黒褐色(7.5YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.6～0.75cm	B-28
2	J-4・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→平行沈線文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.6～0.7cm、外面：炭化物付着	B-259
3	G-3・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→方形区画文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.6～0.8cm	B-240
4	J-5・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→平行沈線文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：器厚0.5～0.7cm	B-40
5	H-3・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→平行沈線文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.6～0.8cm、外面：炭化物付着	B-77
6	G-2・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文RL→幾何学文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.6～0.65cm	B-38
7	J-5・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.6～0.8cm	B-2
8	J-5・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文RL→幾何学文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.4～0.6cm	B-8
9	F-4・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、法量：器厚0.65～0.75cm	B-43
10	H-4・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR3/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.6cm	B-157
11	G-3・6B層	弥生土器	壺	胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.5～0.6cm	B-153

第71図　A区基本層6B層出土遺物（5）

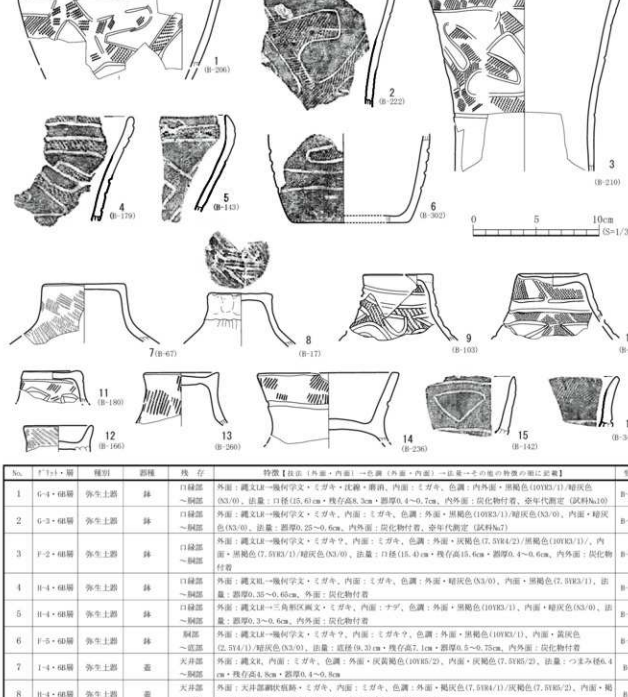


No.	グリット・層	種別	器種	残存	特徴【良点（外面・内面）→色調（外面・内面）→品質→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-2・6B層～底部	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：胴部ミガキ・底部本葉痕、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：底径6.8cm・残存高5.3cm・器厚0.55～1.3cm	B-257
2	G-3・6B層～底部	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：植物葉回転文・ミガキ・底部刺代痕、内面：ミガキ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：底径(8.6)cm・残存高11.2cm・器厚0.6～0.9cm、内面：炭化物付着	B-280
3	G-4・6B層～底部	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：ハケメ・底部本葉痕、内面：ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：底径10.6cm・残存高9.2cm・器厚0.6～1.5cm、外面：黒色物質付着、内面：炭化物付着	B-183
4	G-3・6B層～底部	弥生土器	鉢	口縁部～底部	外面：縄文LR→変形工字文・ミガキ、内面：口縁部沈線・ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/褐灰色(7.5YR4/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：口径10.1cm・器高7.6cm・底径5.1cm・器厚0.5～0.7cm	B-313
5	G-4・6B層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→変形工字文・磨滅、内面：ミガキ・磨滅、色調：外面：にぶい黄褐色(10YR6/3)、内面：灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.3～0.5cm、内面：炭化物付着	B-117
6	G-3・6B層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→山形文、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-110
7	I-4・6B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→胴加条→変形工字文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.35～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-158
8	G-3・6B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→連弧文、内面：ミガキ、色調：外面：にぶい褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR3/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.4～0.7cm	B-126
9	G-3・6B層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→連弧文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-113
10	G-3・6B層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→連弧文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面：にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.25～0.5cm	B-130
11	J-4・6B層～胴部	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→変形工字文・赤彩、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.3～0.5cm	B-31
12	J-4・6B層～胴部	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：平行沈線文、内面：ミガキ?、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.4～0.65cm、内面：炭化物付着	B-294
13	J-4・6B層～胴部	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→変形工字文・赤彩、内面：口縁部上端沈線・ナデ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.3～0.5cm	B-23
14	J-5・6B層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→変形工字文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.4～0.6cm	B-6
15	I-4・6B層～胴部	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.3～0.55cm	B-287
16	J-4・6B層～胴部	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→連弧文・磨滅、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.3～0.8cm、内外面：炭化物付着、赤外代測定（試料No.2）	B-201
17	J-5・6B層～胴部	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-264

第72図　A区基本層6B層出土遺物（6）

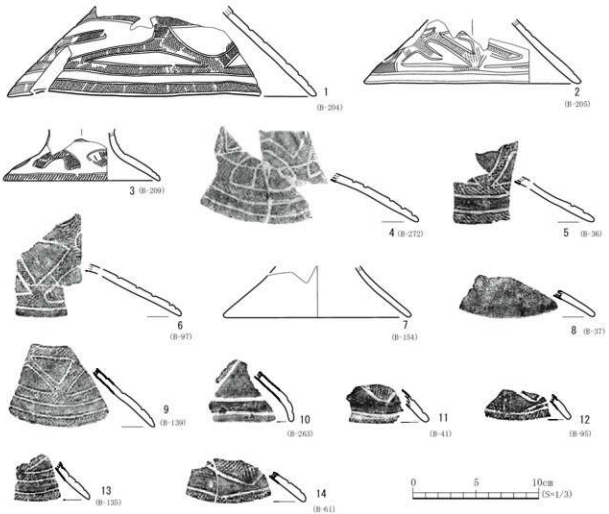
No.	グリット・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：平行沈線文・変形工字文，内面：口縁部沈線・ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.55cm	B-124
2	G-2・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：変形工字文，内面：口縁部沈線・ナデ，色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.3～0.5cm	B-65
3	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文(原体不明)→変形工字文，内面：ミガキ，色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.5～0.6cm，内面：炭化物付着	B-125
4	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：変形工字文・磨滅，内面：ナデ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.4～0.6cm	B-150
5	G-4・I-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：平行沈線文，内面：ケズリ→ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5～0.7cm	B-116
6	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：植物茎回転文→幾何学文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.2～0.6cm，内外面：炭化物付着	B-111
7	H-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→三角形区画文，内面：ミガキ，色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.25～0.45cm	B-171
8	G-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：波状口縁・縄文RL→三角形区画文？，内面：口縁部縄文RL→沈線文，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR5/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.5cm	B-134
9	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→幾何学文・赤彩，内面：口縁部縄文LR・ミガキ，色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.6cm	B-148
10	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：口唇部縄文LR・口縁部縄文LR→幾何学文，内面：縄文LR→沈線・ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.5cm	B-121
11	G-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→幾何学文，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.25～0.55cm	B-152
12	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：波状口縁・縄文LR→幾何学文？，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・黒褐色(7.5YR2/1)，法量：器厚0.2～0.6cm，外面：炭化物付着	B-133
13	G-3・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：小波状口縁・縄文RL→幾何学文・赤彩，内面：縄文RL・ミガキ・赤彩，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.2～0.5cm	B-112
14	H-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：植物茎回転文→三角形区画文？，内面：ナデ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)，内面・灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.3～0.5cm，外面：炭化物付着	B-39
15	H-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文L→三角形区画文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.6cm，外面：炭化物付着	B-177
16	H-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文(原体不明)附加条→三角形区画文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.55cm，内外面：炭化物付着	B-169
17	I-4・6層	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文R→幾何学文？，内面：ナデ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：0.4～0.5cm，内外面：炭化物付着	B-21
18	G-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.5～0.6cm，内外面：炭化物付着	B-284a
19	G-4・6層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.5～0.6cm，内外面：炭化物付着	B-284b
20	G-4・6層	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.5～0.6cm，内外面：炭化物付着	B-284c
21	J-5・6層	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文LR→変形工字文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.4～0.6cm	B-5
22	G-3・6層	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文LR→幾何学文，内面：磨滅，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.4～0.7cm	B-123

第73図　A区基本層6B層出土遺物（7）



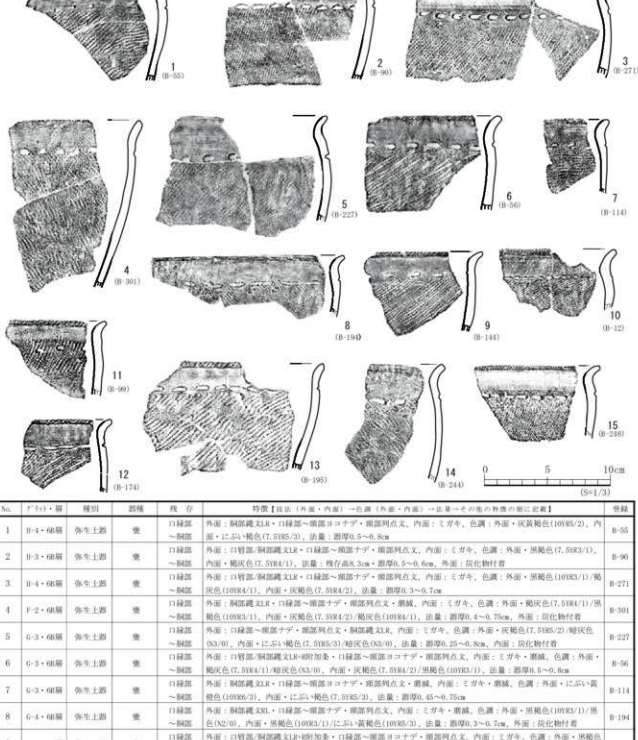
No.	ドット・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-4・6層～B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ・沈線・磨消、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、法量：口径(15.6)cm・残存高8.3cm・器厚0.4～0.7cm、内外面：炭化物付着、帝年代測定（試料№10）	B-206
2	G-3・6層～B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.25～0.6cm、内外面：炭化物付着、帝年代測定（試料№7）	B-222
3	F-2・4層～B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文RL→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)/、内面・黒褐色(7.5YR3/1)/暗灰色(N3/0)、法量：口径(15.4)cm・残存高15.6cm・器厚0.4～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-210
4	H-4・6層～B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文RL→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.35～0.65cm、外面：炭化物付着	B-179
5	H-4・6層～B層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→三角形区画文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-143
6	F-5・6層～B層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・黄灰色(2.5Y4/1)/暗灰色(N3/0)、法量：底径(9.3)cm・残存高7.1cm・器厚0.5～0.75cm、内外面：炭化物付着	B-302
7	I-4・6層～B層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：縄文R、内面：ミガキ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面：灰褐色(7.5YR5/2)、法量：つまみ径6.4cm・残存高4.8cm・器厚0.4～0.8cm	B-67
8	H-4・6層～B層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：天井部網状痕跡・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR5/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：天井径5.6cm・残存高4.3cm・器厚0.5cm	B-17
9	G-3・6層～B層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：天井部ミガキ・縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：天井径5.6cm・残存高5.3cm・器厚0.4～0.6cm	B-103
10	J-5・6層～B層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：天井部ナデ・縄文RL→LR縄文→三角形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：天井径5.4cm・残存高5.3cm・器厚0.4～0.6cm	B-217
11	H-4・6層～B層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：天井部ミガキ・縄文LR→幾何学文、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・褐灰色(10YR5/1)、法量：天井径4.6cm・残存高2.5cm・器厚0.4～0.8cm	B-180
12	H-3・6層～B層	弥生土器	壺	つまみ部	外面：縄文L、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(10YR5/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：つまみ径5.4cm・残存高3.1cm・器厚0.5～0.7cm	B-166
13	J-4・6層～B層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：天井部ミガキ・縄文LR、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR5/1)、法量：天井径5.7cm・残存高4.2cm・器厚0.4～0.7cm	B-260
14	G-2・6層～B層	弥生土器	壺	つまみ部	外面：縄文LR→沈線文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR6/2)/灰色(N4/0)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：つまみ径11.2cm・残存高6.0cm・器厚0.6～0.9cm	B-236
15	G-3・6層～B層	弥生土器	壺	つまみ部	外面：縄文L→三角形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.2～0.8cm	B-142
16	J-4・6層～B層	弥生土器	壺	つまみ部	外面：口縁部縄文LR・沈線文・磨滅、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)/灰黄褐色(10YR5/2)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.35～0.9cm	B-34

第74図　A区基本層6B層出土遺物（8）



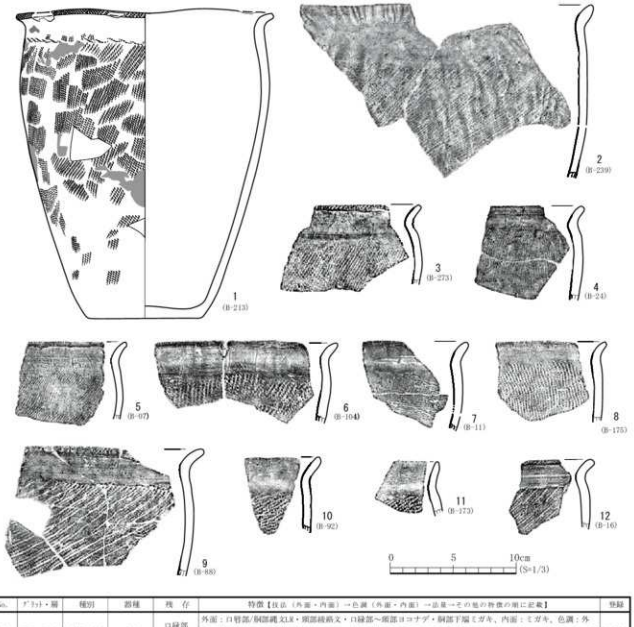
No.	グリッド・層	種別	器種	残　存	特徴【出土（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-4・6B層	弥生土器	壺	胴部～口縁部	外面：縄文底→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：口径(24.4)cm・残存高7.2cm・器厚0.5～0.7cm、内外面：炭化物付着、弥年代測定（試料No.4）	B-204
2	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：植物茎回転文→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：口径(17.2)cm・残存高5.1cm・器厚0.4～0.6cm、内面：炭化物付着	B-205
3	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→幾何学文、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)、法量：口径(12.4)cm・残存高4.1cm・器厚0.3～0.5cm、内面：炭化物付着	B-209
4	G-4・6B層	弥生土器	壺	胴部～口縁部	外面：縄文底→幾何学文・ミガキ・磨滅、内面：磨滅、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.3～0.65cm	B-272
5	J-4・6B層	弥生土器	壺	胴部～口縁部	外面：縄文底→三角形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.3～0.6cm	B-36
6	G-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文底→三角形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-97
7	G-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：ナデ・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/黄灰色(2.5Y5/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)、法量：口径(14.6)cm・残存高4.1cm・器厚0.3～0.5cm、内外面：炭化物付着	B-154
8	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文(原体不明)・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.4～0.55cm、内面：炭化物付着	B-37
9	F-2・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→三角形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.25～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-139
10	I-4・6B層	弥生土器	壺	胴部～口縁部	外面：縄文LR→三角形区画文・ミガキ、内面：炭化物付着のため不明、色調：内外面・暗灰色(N3/0)、法量：残存高4.3cm・器厚0.5cm、内外面：炭化物付着	B-263
11	J-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→山形文ヲ・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.45～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-41
12	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→山形文ヲ・ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.3～0.5cm、内外面：炭化物付着	B-95
13	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→三角形区画文ヲ・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.3～0.55cm、内外面：炭化物付着	B-135
14	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→山形文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/暗灰色(N3/0)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.4～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-61

第75図　A区基本層6B層出土遺物（９）



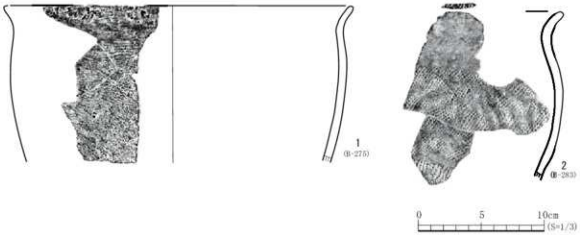
No.	ﾌﾟﾗﾝﾄ・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	Ⅱ-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.5～0.8cm	B-55
2	Ⅱ-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：残存高8.3cm・器厚0.5～0.6cm，外面：炭化物付着	B-90
3	Ⅱ-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/褐灰色(10YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.7cm	B-271
4	Ⅰ-2・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文・擦滅，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.4～0.75cm，外面：炭化物付着	B-301
5	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ナデ・頸部列点文・胴部縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/褐灰色(N3/0)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/褐灰色(N3/0)，法量：器厚0.25～0.8cm，内面：炭化物付着	B-227
6	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR+刷毛加条・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ・擦滅，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/褐灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.8cm	B-56
7	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR，口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文・擦滅，内面：ミガキ・擦滅，色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.45～0.75cm	B-114
8	G-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文RL，口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ミガキ・擦滅，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/黒色(N2/0)，内面・黒褐色(10YR3/1)/にぶい黄褐色(10YR5/3)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-194
9	G-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR+刷毛加条・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-144
10	H-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/頸部～胴部縄文L・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ナデ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.8cm，内外面：炭化物付着	B-12
11	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ヨコナデ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-99
12	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR+刷毛加条・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.3～0.65cm	B-174
13	J-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ/ミガキ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.75cm	B-195
14	J-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文RL・口縁部～頸部ヨコナデ?・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・黒褐色(5YR3/1)/暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.5～0.7cm，内外面：炭化物付着	B-244
15	J-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.75cm，外面：炭化物付着	B-248

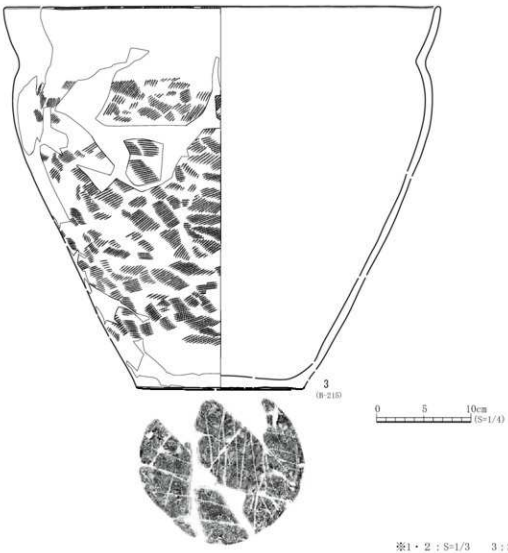
第76図　A区基本層6B層出土遺物（10）



No.	グリット・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～底部	外面：口唇部/胴部縄文LR・頸部線状文・口縁部～頸部ヨコナデ・胴部下端ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/褐灰色(10YR4/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、法量：口径(20.6)cm・器高24.5cm・底径(9.2)cm・器厚0.4～1.0cm、内外面：炭化物付着、帝年代測定（試料No.5）	B-213
2	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部櫛歯状文・口縁部ヨコナデ・頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.6～0.9cm、外面：炭化物付着	B-239
3	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面・にぶい黄褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR3/2)、法量：器厚0.3～0.65cm、外面：炭化物付着	B-273
4	J-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部植物繊維圧痕文・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ・磨滅、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.3～0.8cm、外面：炭化物付着	B-24
5	H-6・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.35～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-7
6	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.4～0.8cm、内外面：炭化物付着	B-104
7	I-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文附加条（原体不明）・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.4～0.8cm	B-11
8	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文RL・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.2～0.7cm	B-175
9	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部附加条LR・頸部ナデ、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.6～0.7cm	B-88
10	H-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：縄文LR・磨滅、内面：磨滅、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.3～0.6cm、外面：炭化物付着	B-92
11	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒色(N2/0)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.3～0.7cm、内外面：炭化物付着	B-173
12	G-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・刻目加条・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)、法量：0.5～0.7cm、内外面：炭化物付着	B-16

第77図　A区基本層6B層出土遺物（11）

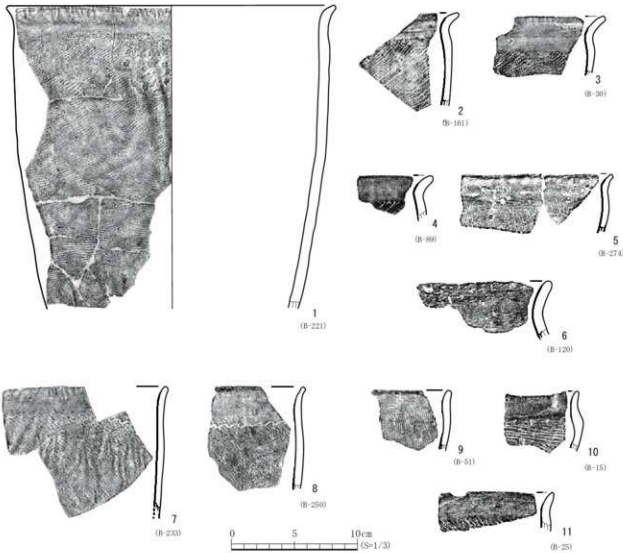




※1・2：S=1/3　3：S=1/4

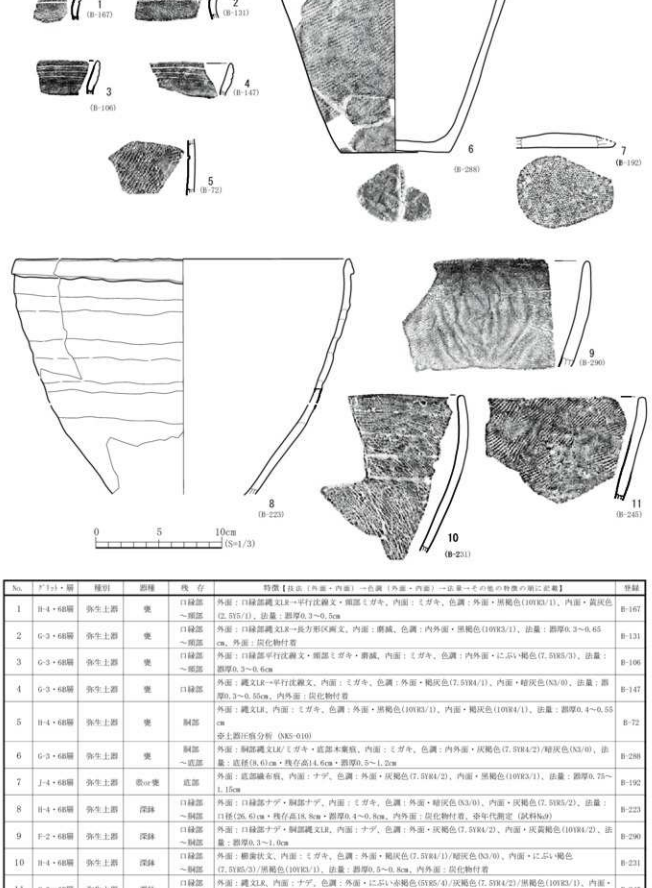
No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	H-5・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部櫛描状文・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(28.2)cm・現存高12.5cm・器厚0.4～0.6cm、外面：炭化物付着	B-275
2	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.4～0.8cm	B-283
3	J-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～底部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ・底部本葉痕、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/にぶい橙色(7.5YR6/4)/黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)、法量：口径(45.8)cm・器高40.7cm・底径17.5cm・器厚0.6～1.3cm	B-215

第78図　A区基本層6B層出土遺物（12）



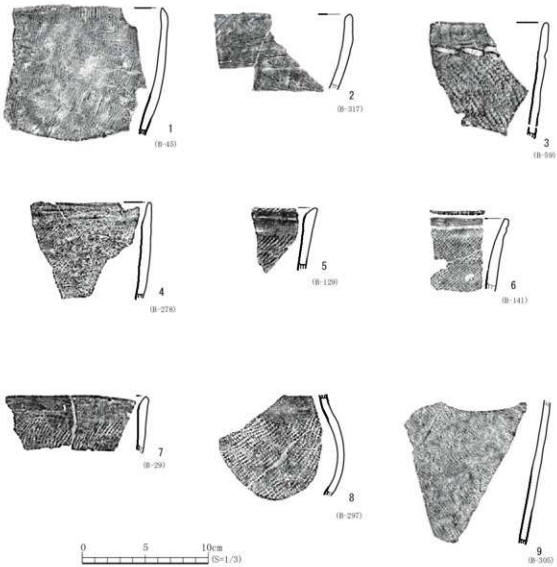
No.	グリッド・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面：灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：口径(26.0)cm・残存高24.2cm・器厚0.7～0.8cm，外面：炭化物付着，弥生代測定（試料No.6）	B-221
2	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部縄文LR・頸部ナデ・胴部縄文LR+櫛刺加条，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・褐～胴部灰色(5YR4/1)，法量：器厚0.4～0.7cm，内外面：炭化物付着	B-161
3	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.4～0.65cm，外面：炭化物付着	B-30
4	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・胴部縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5～0.75cm	B-89
5	G-2・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部櫛描状文・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/褐灰色(10YR4/1)，内面・灰褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.3～0.6cm	B-274
6	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.7～0.8cm	B-120
7	G-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄絡文/縄文R・口縁部ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.3～0.6cm，外面：炭化物付着	B-233
8	G-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文(胴体不明)附加条・胴部縄絡文・頸部ヨコナデ，内面：ミガキ，色調：外面・黒色(N2/0)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.35～0.6cm，外面：炭化物付着	B-250
9	F-2・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部植物茎回転文・口縁部～頸部ナデ，内面：ナデ，色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.4～0.6cm，外面：炭化物付着	B-51
10	G-3・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文R・口縁部～頸部ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・黒褐色(10YR3/2)/黒色(N2/0)，法量：器厚0.3～0.8cm，内外面：炭化物付着	B-15
11	H-4・6B層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文R・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.7cm	B-25

第79図　A区基本層6B層出土遺物（13）



No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	H-4・6B層	弥生土器	甕	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR→平行沈線文・頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・黄灰色(2.5Y5/1)，法量：器厚0.3～0.5cm	B-167
2	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR→長方形区画文，内面：磨滅，色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.65cm，外面：炭化物付着	B-131
3	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部～頸部	外面：口縁部平行沈線文・頸部ミガキ・磨滅，内面：ミガキ，色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.3～0.6cm	B-106
4	G-3・6B層	弥生土器	甕	口縁部	外面：縄文LR→平行沈線文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.55cm，内外面：炭化物付着	B-147
5	H-4・6B層	弥生土器	甕	胴部	外面：縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.4～0.55cm ※土器圧痕分析（NKS-010）	B-72
6	G-3・6B層	弥生土器	甕	胴部～底部	外面：胴部縄文LR/ミガキ・底部本葉痕，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)，法量：底径(9.6)cm・残存高(4.6)cm・器厚0.5～1.2cm	B-288
7	J-4・6B層	弥生土器	壺or甕	底部	外面：底部磨耗痕，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.75～1.15cm	B-192
8	H-4・6B層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部ナデ・胴部ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：(26.6)cm・残存高18.8cm・器厚0.4～0.8cm，内外面：炭化物付着，帝年代測定（試料No.0）	B-223
9	F-2・6B層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部ナデ・胴部縄文LR，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.3～1.0cm	B-290
10	H-4・6B層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：横位状文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.8cm，内外面：炭化物付着	B-231
11	G-3・6B層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR，内面：ナデ，色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)/灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，内面・灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.3～0.8cm，外面：炭化物付着	B-245

第80図　A区基本層6B層出土遺物（14）



No.	グリッド・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	H-4・6層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：植物茎回転文，内面：ミガキ・ナデ・潤滑，色調：外面・灰褐色(7.5YR3/2)，内面・黒褐色(7.5YR3/1)，法量：器厚0.25～0.7cm，内外面：炭化物付着	B-45
2	G-4・6層	弥生土器	深鉢	口縁部	外面：櫛描沈文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.45～0.75cm，外面：炭化物付着	B-317
3	F-2・6層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文RL・口縁部～頸部ミガキ・頸部列点文，内面：ナデ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.4～0.6cm	B-59
4	G-4・6層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部ナデ・胴部縄文LR，内面：炭化物付着のため不明，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/暗灰色(N3/0)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.8cm，内外面：炭化物付着	B-278
5	G-3・6層	弥生土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部縄文LR・口縁部縄文LR・口縁部～頸部ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.4～0.9cm	B-129
6	G-4・6層	弥生土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部縄文LR・口縁部～胴部縄文LR・口縁部沈線文・口縁部～頸部ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.75cm，外面：炭化物付着	B-141
7	G-3・6層	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ，内面：ヨコナデ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-29
8	G-4・6層	弥生土器	深鉢	頸部～胴部	外面：胴部縄文LR・頸部ミガキ，内面：ナデ，色調：外面・黒褐色(10YR3/2)/暗灰色(N3/0)，内面・黄灰色(2.5Y4/1)，法量：器厚0.45～0.55cm	B-297
9	G-4・6層	弥生土器	深鉢	胴部	外面：縄文R，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.6cm，内外面：炭化物付着	B-305

第81図　A区基本層6B層出土遺物（15）

A区基本層 6B 層②

B-224（第69図1）
B-68（第69図2）
B-185（第69図3）
B-308（第69図4）
B-285（第69図5）
B-69（第69図6）
B-149（第69図7）
B-118（第69図8）
B-181（第69図9）
B-46（第69図10）
B-128（第69図11）
B-105（第69図12）
B-164（第69図13）
B-44（第69図14）
B-109（第70図1）
B-132（第70図2）
B-107（第70図3）
B-101（第70図4）
B-122（第70図5）
B-1（第70図6）
B-9（第70図7）
B-119（第70図8）
B-218a（第70図10）
B-218b（第70図11）
B-211（第70図12）
B-35（第70図9）
B-108（第70図13）
B-19（第70図14）
B-47（第70図15）
B-198（第70図16）
B-93（第70図17）

0　5　10cm
（S=1/3）

第82図　A区　基本層6B層出土遺物②－土器類（写真図版）－

第83図　A区　基本層6B層出土遺物③－土器類（写真図版）－

A区基本層 6B 層④

第84図　A区　基本層6B層出土遺物④ ― 土器類（写真図版）―

A区基本層 6B 層⑤

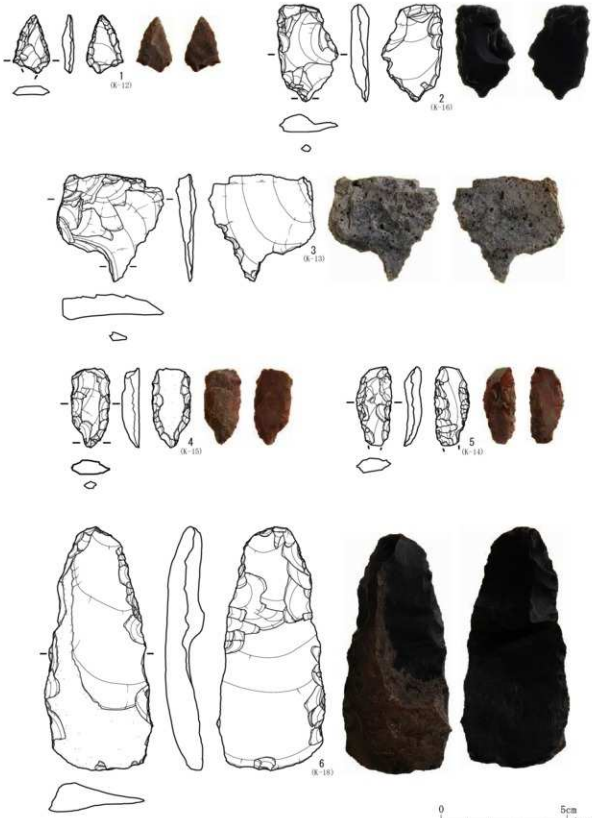
第85図　A区　基本層6B層出土遺物⑤ ― 土器類（写真図版）―

A区基本層6B層⑥

第86図　A区　基本層6B層出土遺物⑥ ― 土器類（写真図版）―

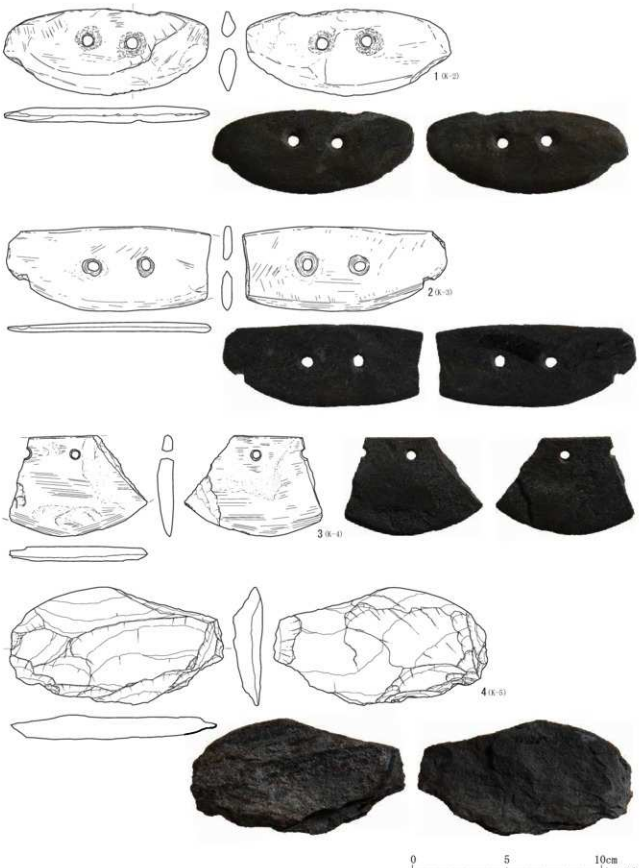
A区基本層6B層⑦

第87図　A区　基本層6B層出土遺物⑦ ― 土器類（写真図版）―



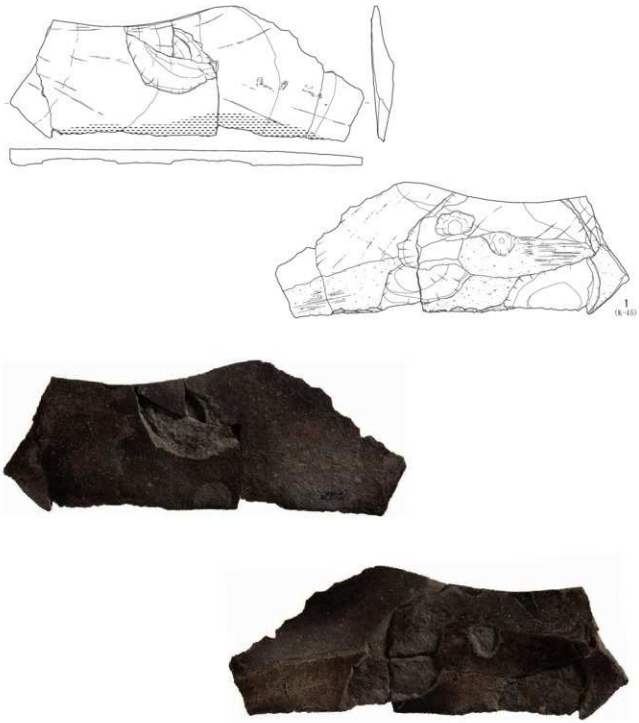
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	G-4	6B	石鏃	頁岩	2.3	1.46	0.46	1.3		K-12
2	G-3	6B	石錐	珪質頁岩	3.84	2.42	0.7	6.7		K-16
3	H-4	6B	石錐	花崗岩	4.25	4.23	0.79	13.7		K-13
4	G-3	6B	石錐	頁岩	3.15	1.54	0.68	4.0		K-15
5	H-4	6B	石錐	頁岩	3.12	1.38	0.7	2.9		K-14
6	H-4	6B	石錐	頁岩	9.66	4.3	1.53	66.0		K-18

第88図　A区基本層6B層出土遺物（16）



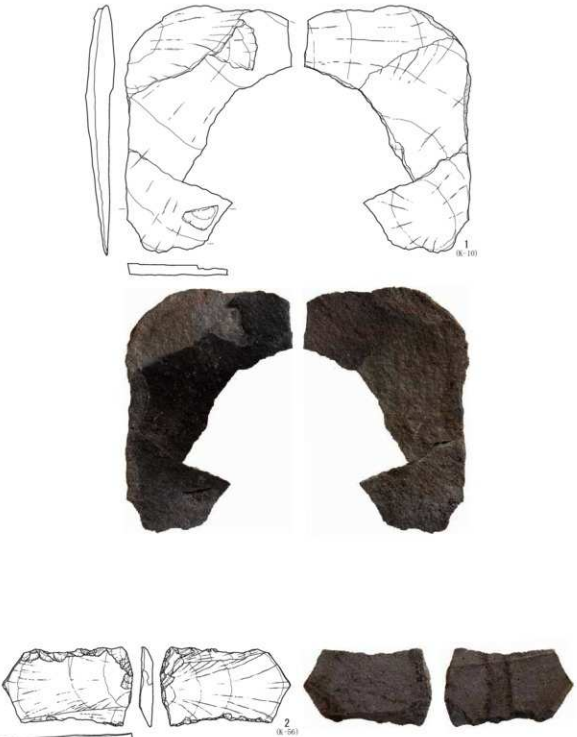
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-4	6B	石包丁	粘板岩	4.55	10.9	0.94	60.8		K-2
2	H-4	6B	石包丁	結晶片岩	4.55	10.9	0.52	39.7		K-3
3	H-4	6B	石包丁	結晶片岩	5.3	7.3	0.74	37.8		K-4
4	G-4	6B	石包丁	粘板岩	6.35	11.4	1.4	107.8	石包丁未成品	K-5

第89図　A区基本層6B層出土遺物（17）



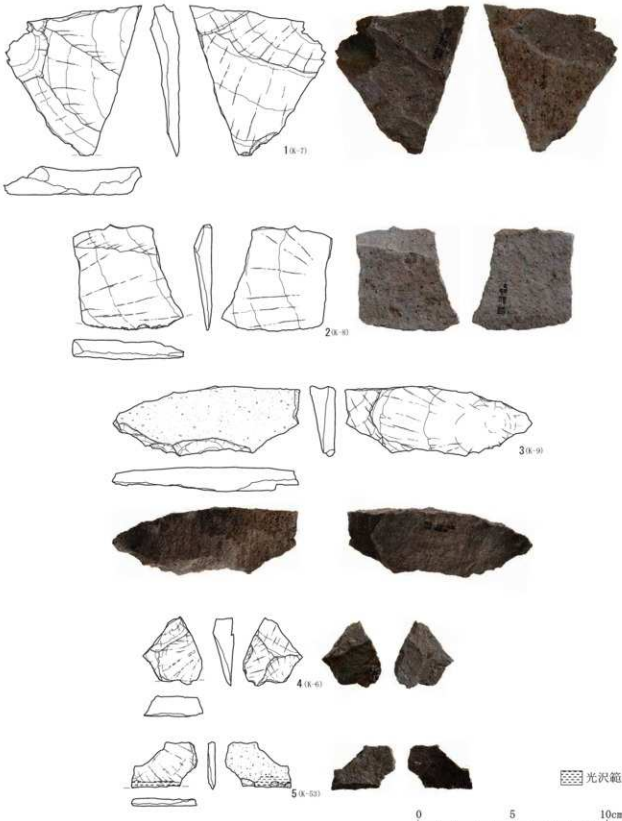
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	J-4	6B	板状石器	安山岩	11.0	28.5	1.7	450.0	刃部に光沢あり	K-45

第90図　A区基本層6B層出土遺物（18）



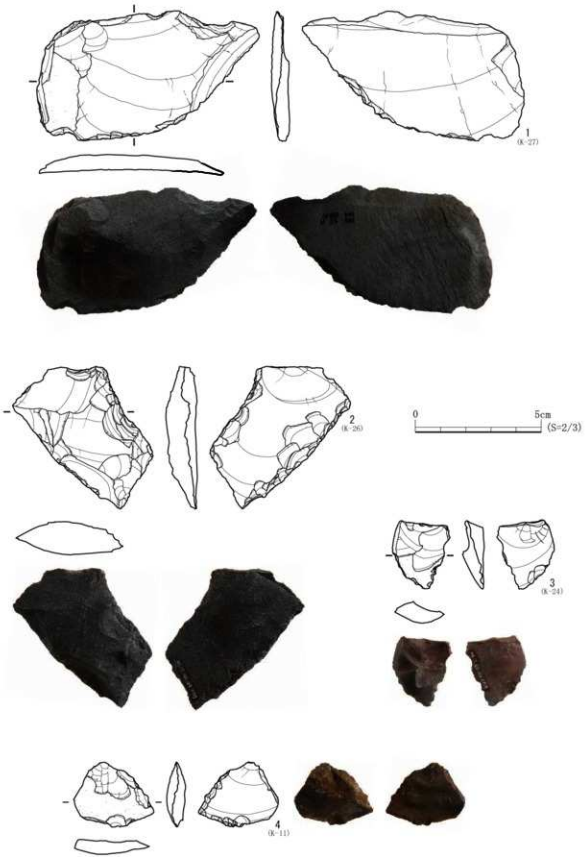
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-4	6B	板状石器	安山岩	13.0	8.8	1.18	99.1		K-10
2	H-4	6B	板状石器	安山岩	6.3	10.3	1.0	78.6		K-56

第91図　A区基本層6B層出土遺物（19）



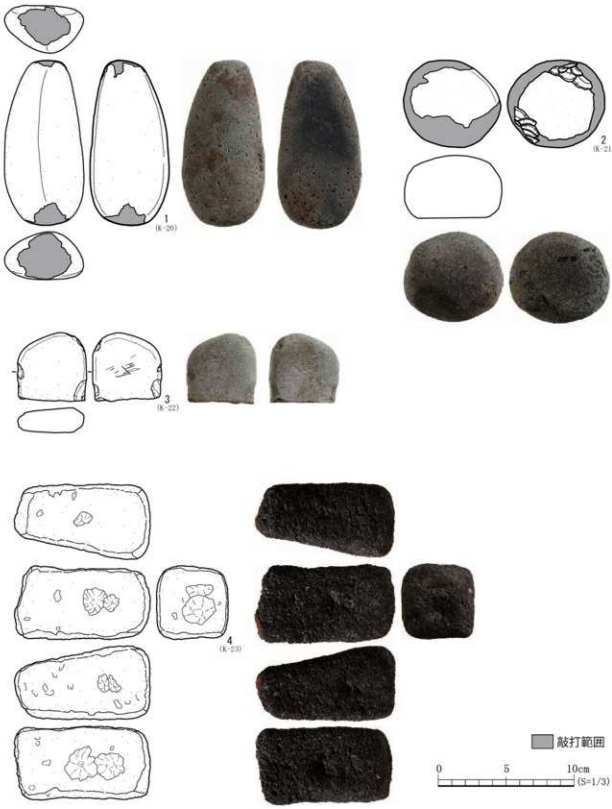
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-4	6B	板状石器	安山岩	8.4	7.2	1.0	60.3		K-7
2	G-3	6B	板状石器	安山岩	5.5	6.0	0.88	29.2		K-8
3	H-4	6B	板状石器	安山岩	3.7	10.0	1.15	46.3		K-9
4	H-4	6B	板状石器	安山岩	3.45	3.12	1.01	9.6		K-6
5	J-4	6B	板状石器	安山岩	2.4	3.6	0.4	3.8	刃部に光沢あり	K-53

第92図　A区基本層6B層出土遺物（20）



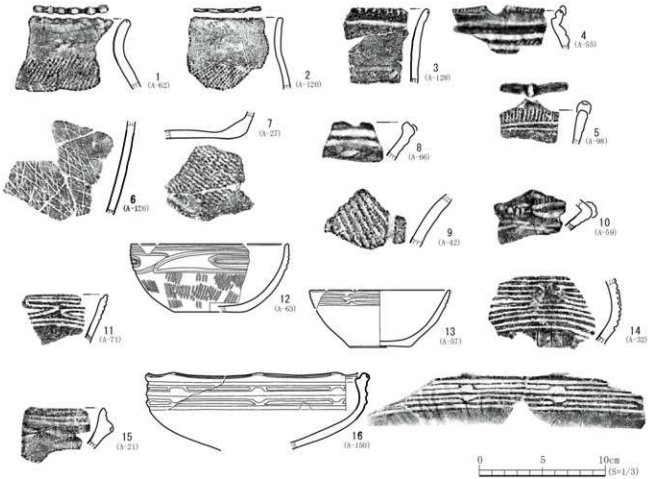
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-4	6B	不定形石器	粘板岩	5.15	8.82	0.78	37.7		K-27
2	G-4	6B	不定形石器	砂岩	5.65	5.58	1.25	32.2		K-26
3	H-4	6B	不定形石器	頁岩	2.77	2.29	0.85	4.4		K-24
4	G-3	6B	不定形石器	珪質凝灰岩	3.2	2.3	0.75	5.0		K-11

第93図　A区基本層6B層出土遺物（21）



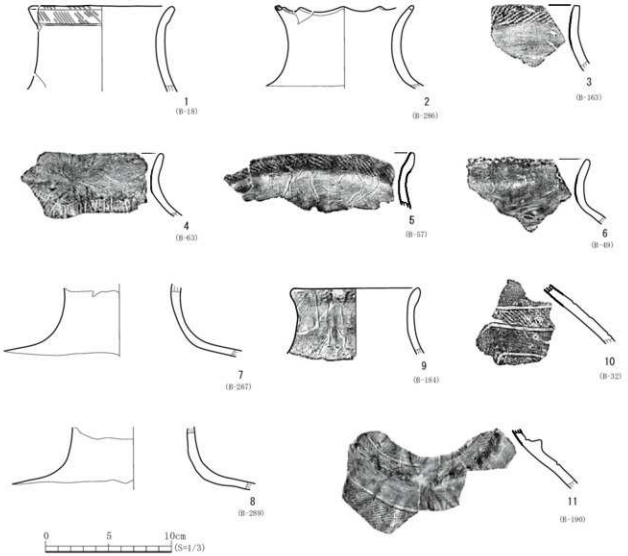
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	G-2	6B	敲石	安山岩	13.1	6.28	3.78	475.0		K-20
2	H-4	6B	敲石	安山岩	6.95	7.73	4.96	400.0		K-21
3	G-3	6B	石錘	花崗岩	5.45	5.48	2.17	108.1		K-22
4	H-4	6B	回石	軽石	10.8	5.86	5.68	365.0		K-23

第94図　A区基本層6B層出土遺物（22）



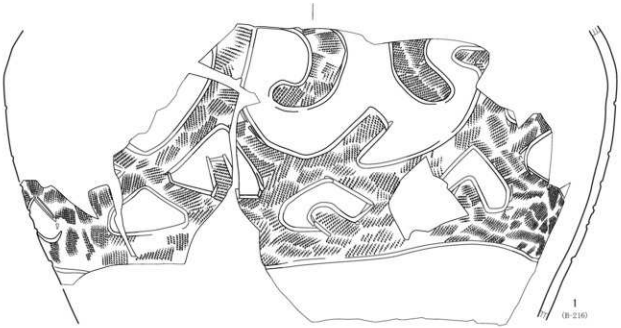
No.	ﾌﾞﾛｯｸ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	Ⅱ-3・6b層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：小波状口縁・口唇部刻目・口縁部～頸部ナデ・胴部縄文LR，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.75cm	A-62
2	G-2・6b層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部刻目・口縁部～頸部ミガキ・胴部縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.35～0.55cm，外面：炭化物付着	A-129
3	F-3・6b層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部刻目・口縁部沈線文・磨滅，内面：磨滅，色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.3～0.6cm	A-128
4	Ⅱ-4・6b層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部刻目/波状突起・口縁部縄文LR→平行沈線文，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(7.5YR3/1)，法量：器厚0.3～0.85cm	A-55
5	G-4・6b層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部刻目・口縁部突起/刻目/平行沈線，内面：磨滅のため不明，色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.45～1.1cm	A-98
6	Ⅱ-3・6b層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：網目状撚糸文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.6cm	A-126
7	F-2・6b層	縄文土器	深鉢	底部	外面：底部側代痕，内面：ナデ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)，法量：器厚0.45～1.1cm	A-27
8	G-4・6b層	縄文土器	浅鉢	口縁部～頸部	外面：小波状口縁・雲形文？・縄文RL・磨滅，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・黄灰色(2.5Y4/1)，法量：器厚0.55～1.05cm	A-66
9	G-4・6b層	縄文土器	浅鉢	胴部	外面：縄文LR→区画文・磨滅，内面：ミガキ・磨滅，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.55～0.8cm	A-42
10	Ⅱ-3・6b層	縄文土器	注口土器	胴部	外面：羊歯状文，内面：ナデ，色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.6～1.3cm	A-59
11	F-2・6b層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：変形工字文・赤彩・磨滅，内面：沈線・磨滅，色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.2～0.55cm	A-71
12	Ⅱ-5・6b層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：縄文LR・変形工字文・沈線文，内面：ナデ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)，法量：口径(12.4)cm・残存高5.4cm・底径(5.6)cm・器厚0.4～0.8cm	A-63
13	G-2・6b層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：区字文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：口径(11.0)cm・器高4.6cm・底径(5.0)cm・器厚0.3～0.5cm	A-57
14	Ⅱ-4・6b層	縄文土器	鉢	胴部	外面：変形工字文？・平行沈線文，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・灰黄褐色(10YR4/2)/暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.6～0.7cm	A-32
15	F-2・6b層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：平行沈線文・突起状隆帯，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)，法量：器厚0.2～1.3cm	A-21
16	G-3・6b層	縄文土器	台付鉢？	口縁部～胴部	外面：波状口縁・口唇部沈線・区字文，内面：口縁部沈線・ミガキ，色調：外面・褐灰色(5YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：口径17.0cm・残存高6.1cm・器厚0.5～0.9cm	A-150

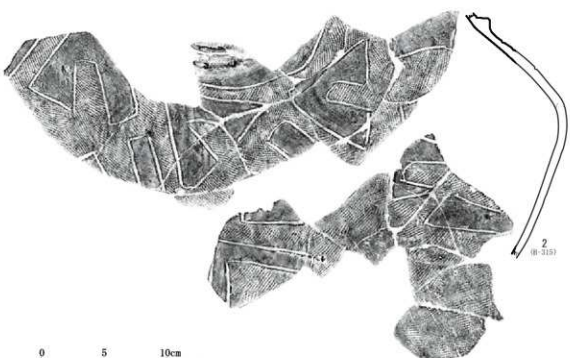
第95図　A区基本層6D層出土遺物（1）



No.	ｸﾞﾘｯﾄ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文RL・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR6/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR5/2)、法量：口径(11.0)cm・残存高6.8cm・器厚0.6～0.7cm	B-18
2	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：波状口縁・口唇部鋸歯状刻転文・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：口径(30.8)cm・残存高6.5cm・器厚0.4～0.7cm	B-286
3	F-5・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR・頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.5～0.75cm	B-163
4	F-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部ナデ・頸部櫛歯状文、内面：ナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/褐灰色(10YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.4～0.7cm	B-63
5	H-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文RL・頸部ミガキ・赤彩、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・黒褐色(10YR3/1)/灰褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.35～0.8cm	B-57
6	F-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口唇部縄文RL・口縁部～頸部ナデ、内面：ケズリ・ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.4～0.7cm	B-49
7	H-3・6D層	弥生土器	壺	頸部	内外面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：残存高5.8cm・器厚0.5～0.7cm	B-267
8	F-2・6D層	弥生土器	壺	頸部	外面：ミガキ、内面：磨滅、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：残存高5.0cm・器厚0.5～0.8cm	B-289
9	J-5・6D層	弥生土器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部縄文LR・頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：口径(9.8)cm・残存高5.3cm・器厚0.45～0.7cm	B-184
10	J-4・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文RL→施刑字文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.6～0.75cm、外面：炭化物付着	B-32
11	J-5・6D層	弥生土器	壺	頸部～胴部	外面：頸部陰帯→縄文LR→沈線文・胴部縄文LR→沈線文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.5～1.35cm、赤土器圧痕分析（MKS-008）	B-190

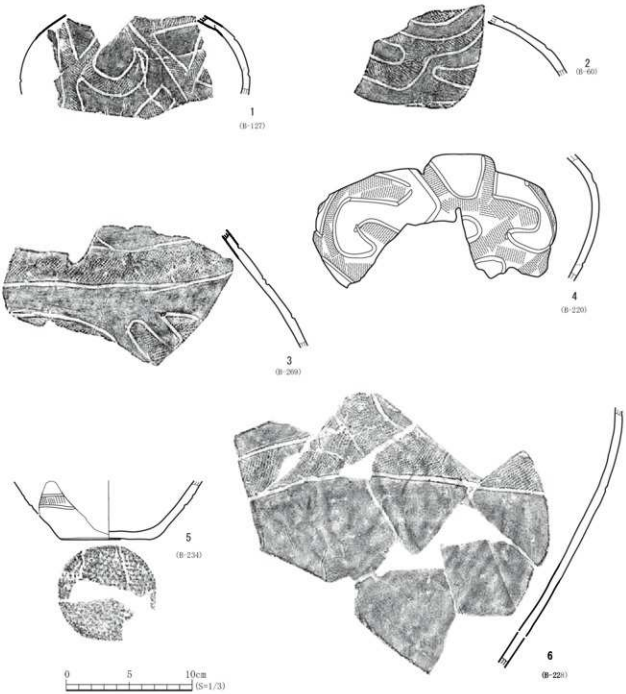
第96図　A区基本層6D層出土遺物（２）





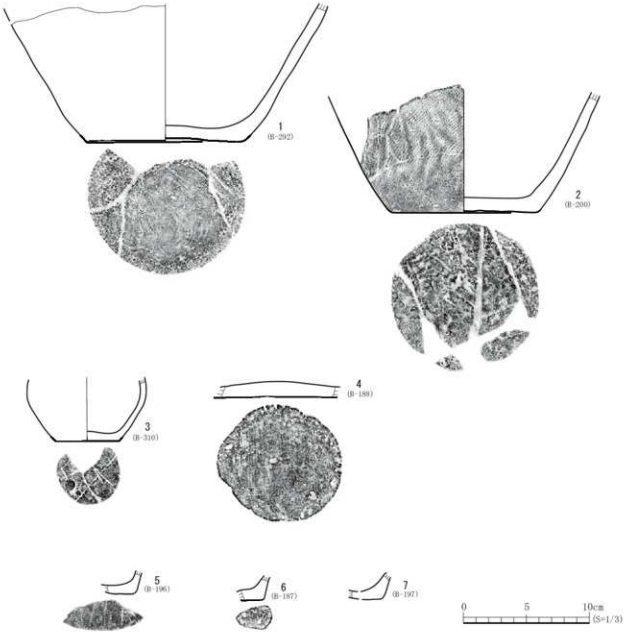
No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-2・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ・赤彩、内面：ナデ・磨滅、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/褐灰色(10YR4/1)/暗灰色(N3/0)、内面・灰褐色(7.5YR6/2)/黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.6～0.8cm	B-216
2	J-4・6D層	弥生土器	壺	頸部～胴部	外面：頸部降帯・突起/縄文LR・胴部縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.6～0.7cm	B-315

第97図　A区基本層6D層出土遺物（３）



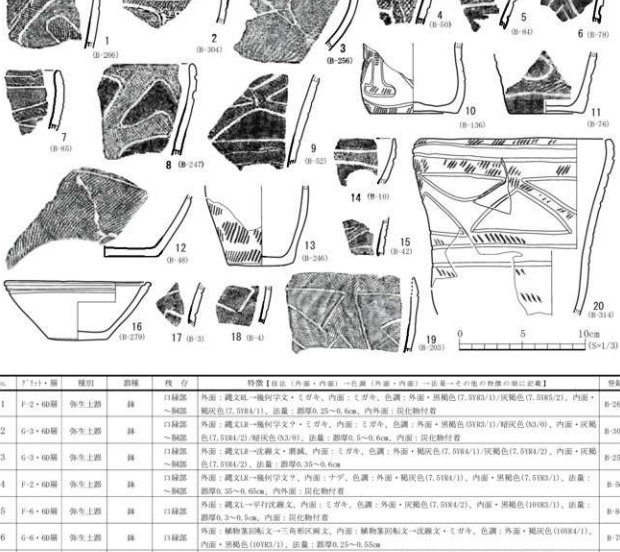
No.	ﾄﾞｯﾄ・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ・赤彩。内面：ナデ。色調：外面・褐灰色(5YR4/1)/暗灰色(N3/0)。内面・褐灰色(10YR4/1)。法量：器厚0.5～0.6cm	B-127
2	F-2・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文RL→幾何学文・ミガキ。内面：ミガキ。色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)/にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：器厚0.5～0.6cm。内外面：炭化物付着	B-60
3	I-4・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ。内面：ナデ・ミガキ。色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/にぶい黄橙色(10YR6/3)。内面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)。法量：器厚0.6～0.7cm	B-269
4	G-3・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文・ミガキ。内面：ヘラナデ。色調：外面・褐灰色(7.5YR5/1)。内面：灰黄褐色(10YR5/2)。法量：残存高9.9cm・器厚0.5～0.6cm。外面：炭化物付着	B-220
5	G-3・6D層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：植物茎回転文→平行沈線文・ミガキ・底部織布痕？。内面：ミガキ。色調：内外面・褐灰色(10YR5/1)。法量：底径7.2cm・残存高4.7cm・器厚0.5～0.9cm	B-234
6	G-3・6D層	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ。内面：ミガキ。色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)。法量：器厚0.5～0.7cm	B-228

第98図　A区基本層6D層出土遺物（４）



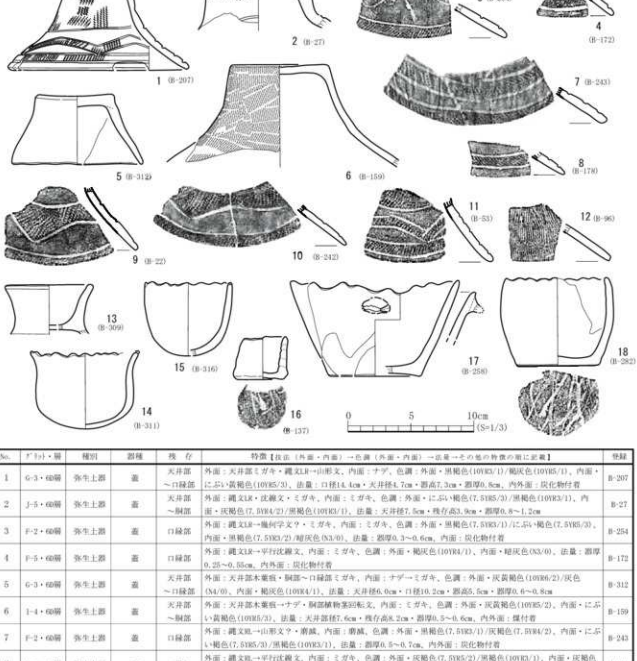
No.	ﾄﾞｯﾄ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	B-3・6層	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：胴部ミガキ・底部織布痕ヲ→ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：底径12.6cm・残存高11.0cm・器厚0.7～1.4cm	B-292
2	F-2・6層	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：胴部縄文LR・底部木葉痕，内面：ミガキ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)/暗灰色(N3/0)，法量：底径11.6cm・残存高9.6cm・器厚0.7～1.4cm，内外面：炭化物付着	B-200
3	F-2・6層	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：胴部ナデ→ミガキ・底部木葉痕，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：底径5.0cm・残存高5.1cm・器厚0.4～0.8cm	B-310
4	I-3・6層	弥生土器	壺or甕	底部	外面：底部布目痕，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.8～1.2cm，内外面：炭化物付着，赤上器圧痕分析（MKS-004）	B-188
5	F-2・6層	弥生土器	壺or甕	胴部～底部	外面：胴部ナデ・底部木葉痕，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：残存高1.9cm・器厚0.5～1.0cm，赤上器圧痕分析（MKS-003）	B-196
6	B-3・6層	弥生土器	壺or甕	胴部～底部	外面：胴部ナデ・底部木葉痕，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(7.5YR3/1)，法量：残存高1.8cm・器厚0.8～1.15cm，内面：炭化物付着，赤上器圧痕分析（MKS-005）	B-187
7	F-2・6層	弥生土器	壺or甕	胴部～底部	外面：胴部ナデ，内面：ナデ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：残存高2.1cm・器厚0.6～1.2cm，赤上器圧痕分析（MKS-002）	B-197

第99図　A区基本層6D層出土遺物（5）



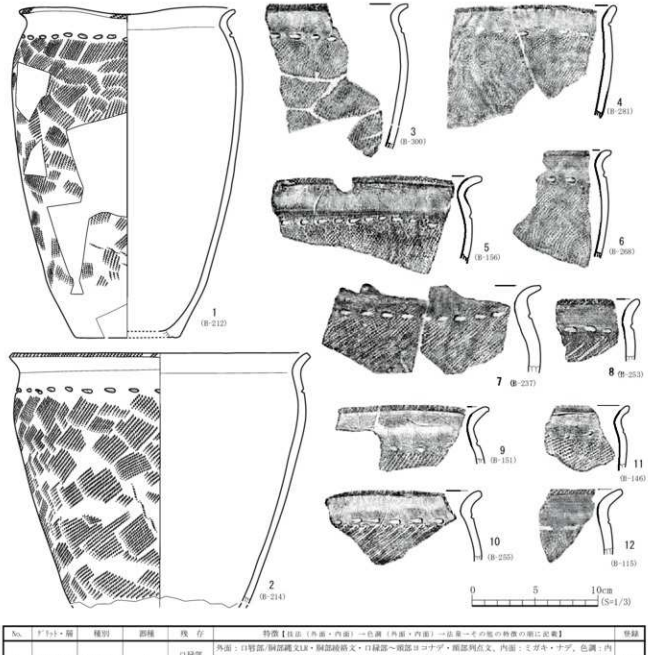
No.	ﾌﾟﾗｯﾄ・層	種別	器種	残 存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-2・6D層～M-2・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR5/2)、内面：褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.25～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-266
2	G-3・6D層～M-3・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文ヅ・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(5YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面：灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.5～0.6cm、内面：炭化物付着	B-304
3	G-3・6D層～M-3・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→沈線文・潰滅、内面：ミガキ、色調：外面：褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面：灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.35～0.6cm	B-256
4	F-2・6D層～M-2・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文ヅ、内面：ナデ、色調：外面：褐灰色(7.5YR4/1)、内面：黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.35～0.65cm、内外面：炭化物付着	B-50
5	F-6・6D層～M-6・6D層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：縄文L→平行沈線文、内面：ミガキ、色調：外面：灰褐色(7.5YR4/2)、内面：黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.3～0.5cm、内面：炭化物付着	B-84
6	G-6・6D層～M-6・6D層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：植物茎回転文→三角形区画文、内面：植物茎回転文→沈線文・ミガキ、色調：外面：褐灰色(10YR4/1)、内面：黒褐色(10YR3/2)、法量：器厚0.25～0.55cm	B-78
7	F-4・6D層～M-4・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→変形工字文、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(7.5YR3/1)、内面：黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.4～0.7cm、内外面：炭化物付着	B-85
8	F-2・6D層～M-2・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面：黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.4～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-247
9	F-2・6D層～M-2・6D層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文RL→三角形区画文・ミガキ、内面：ナデ、色調：外面：灰褐色(7.5YR4/2)、内面：黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.5～0.6cm、内面：炭化物付着	B-52
10	G-3・6D層～M-3・6D層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文LR→幾何学文・赤彩、内面：ミガキ、色調：外面：褐灰色(10YR4/1)/暗灰色(N3/0)、内面：暗灰色(N3/0)、法量：底径7.0cm・残存高5.6cm・器厚0.45～0.9cm	B-136
11	H-3・6D層～M-3・6D層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：ミガキ・縄文L→幾何学文・底部木葉痕、内面：ミガキ、色調：内外面：暗灰色(N3/0)、法量：底径5.8cm・残存高5.9cm・器厚0.4～1.0cm、内外面：炭化物付着	B-76
12	G-2・6D層～M-2・6D層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文RL→沈線文、内面：ミガキ、色調：外面：灰褐色(7.5YR4/2)、内面：灰褐色(5YR5/2)/褐灰色(7.5YR4/1)、法量：底径(8.2)cm・残存高5.0cm・器厚0.6～0.7cm	B-48
13	H-4・6D層～M-4・6D層	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面：赤灰色(2.5YR4/1)、内面：暗灰色(N3/0)、法量：底径5.2cm・残存高6.4cm・器厚0.4～0.8cm、内外面：炭化物付着	B-246
14	J-5・6D層～M-5・6D層	弥生土器	鉢	口縁部	外面：植物茎回転文→平行沈線文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(10YR2/1)、内面：褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.3～0.5cm、外面：炭化物付着	B-10
15	J-4・6D層～M-4・6D層	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文LR→三角形区画文ヅ、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(7.5YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面：灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.35～0.45cm	B-42
16	H-4・6D層～M-4・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～底部	外面：口縁部平行沈線文・胴部ナデ・底部木葉痕、内面：口縁部沈線・胴部ナデ、色調：内外面：灰黄褐色(10YR5/2)、法量：口径11.2cm・器高4.7cm・底径4.6cm・器厚0.4～0.7cm	B-279
17	J-5・6D層～M-5・6D層	弥生土器	鉢	胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文ヅ、内面：ナデ、色調：外面：暗灰色(N3/0)、内面：にぶい赤褐色(5YR5/3)、法量：器厚0.4～0.5cm、外面：炭化物付着	B-3
18	J-5・6D層～M-5・6D層	弥生土器	鉢	胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面：灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)、内面：にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.4～0.5cm、外面：炭化物付着	B-4
19	J-5・6D層～M-5・6D層	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR5/2)、内面：暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.45～0.6cm、内外面：炭化物付着、弥生代剥定（試料No.5）	B-203
20	J-5・6D層～M-5・6D層	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→三角形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面：黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面：灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)/、法量：口径15.0cm・残存高14.1cm・器厚0.5～0.6cm	B-314

第100図　A区基本層6D層出土遺物（6）



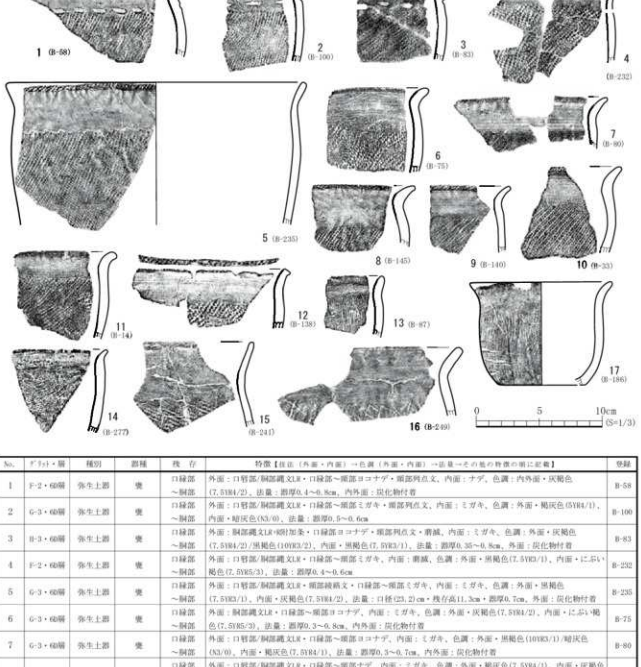
No.	グリッド・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6層	弥生土器	壺	天井部～口縁部	外面：天井部ミガキ・縄文LR→山形文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)・褐灰色(10YR5/1)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：口径14.4cm・天井径4.7cm・器高7.3cm・器厚0.8cm、内外面：炭化物付着	B-207
2	J-5・6層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：縄文LR・沈線文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)・黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)・黒褐色(10YR3/1)、法量：天井径7.5cm・残存高5.9cm・器厚0.8～1.2cm	B-27
3	F-2・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→鳥居状字文？・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・黒褐色(7.5YR3/2)・褐灰色(5Y3/1)、法量：器厚0.3～0.6cm、内面：炭化物付着	B-254
4	F-5・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→平行沈線文、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.25～0.55cm、内外面：炭化物付着	B-172
5	G-3・6層	弥生土器	壺	天井部～口縁部	外面：天井部木葉痕・胴部ヘラ→口縁部ミガキ、内面：ナデ→ミガキ、色調：外面・灰黄褐色(10YR6/2)・灰色(N4/0)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：天井径6.0cm・口径10.2cm・器高5.5cm・器厚0.6～0.8cm	B-312
6	I-4・6層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：天井部木葉痕・ナデ・胴部植物茎3D転文、内面：ミガキ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：天井部径7.6cm・残存高8.2cm・器厚0.5～0.6cm、内外面：煤付着	B-159
7	F-2・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文RL→山形文？・磨滅、内面：磨滅、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.5～0.7cm、内外面：炭化物付着	B-243
8	F-2・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文RL→平行沈線文、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)・黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.2～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-178
9	G-3・6層	弥生土器	壺	胴部～口縁部	外面：縄文LR→山形文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)・褐灰色(N3/0)、内面・褐灰色(N3/0)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-22
10	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→山形文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)・褐灰色(N3/0)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.3～0.5cm、内外面：炭化物付着	B-242
11	F-2・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→山形文、内面：ナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.35～0.65cm、内外面：炭化物付着	B-53
12	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部	外面：植物茎3D転文、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)・褐灰色(N3/0)、法量：器厚0.35～0.6cm、内外面：炭化物付着	B-96
13	G-3・6層	弥生土器	壺	つまみ部	外面：ミガキ、内面：磨滅、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)・褐灰色(10YR4/1)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：つまみ径6.6cm・残存高4.0cm・器厚0.5～1.3cm	B-309
14	H-5・6層	弥生土器	袖珍土器	口縁部～底部	外面：小波状口縁・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR4/1)・褐灰色(N3/0)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)・黒色(N2/0)、法量：口径6.6cm・器高6.0cm・器厚0.4～0.6cm	B-311
15	H-3・6層	弥生土器	袖珍土器	口縁部～底部	外面：小波状口縁・ミガキ、内面：ナデ、色調：内外面・褐灰色(N3/0)、法量：口径6.80cm・器高5.9cm・器厚0.3～0.5cm	B-316
16	F-2・6層	弥生土器	袖珍土器	口縁部～底部	外面：胴部ナデ/オサエ・底部木葉痕、内面：ナデ、色調：内外面・にぶい黄褐色(10YR6/3)、法量：口径3.3cm・器高3.4cm・底径3.6cm・器厚0.4～0.6cm	B-137
17	F-2・6層	弥生土器	鉢	口縁部～底部	外面：波状口縁・把手・ミガキ、内面：ミガキ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：口径(13.4)cm・器高7.6cm・底径(7.2)cm・器厚0.5～1.1cm	B-258
18	G-2・6層	弥生土器	鉢	口縁部～底部	外面：波状口縁・ナデ・底部網状痕跡、内面：ナデ、色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)・にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：口径(8.0)cm・器高7.0cm・底径(6.6)cm・器厚0.3～0.9cm	B-282

第101図　A区基本層6D層出土遺物（7）



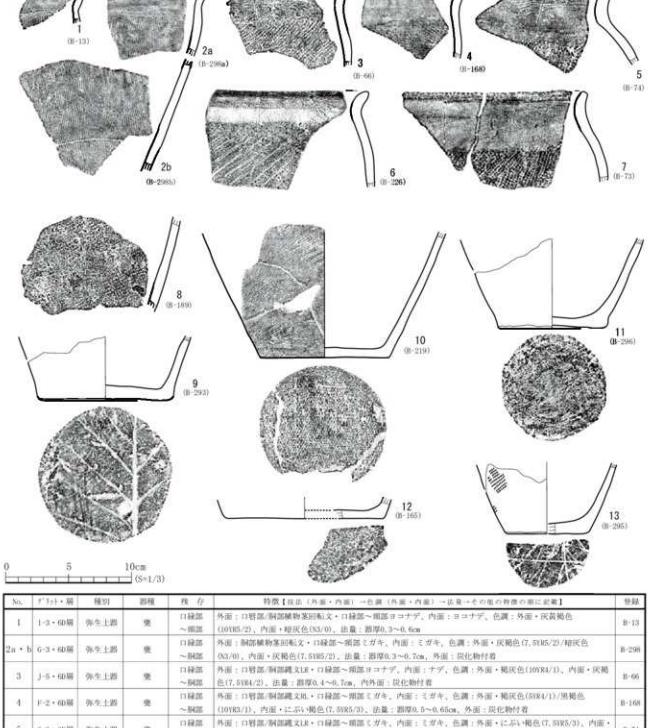
No.	グリット・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-2・6D層	弥生土器	壺	口縁部～底部	外面：口唇部/胴部縄文LR・胴部綾杉文・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ・ナデ，色調：内外面・褐灰色(5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，法量：口径(17.2)cm・器高36.3cm・底径(4.0)cm・器厚1.0cm，外面：炭化物付着	B-212
2	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・胴部下半綾杉文・口縁部～頸部ヨコナデ・ミガキ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：口径(24.0)cm・残存高20.2cm・器厚0.4～0.7cm	B-214
3	F-2・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/暗灰色(N3/0)，内面：にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.4～0.6cm	B-300
4	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ミガキナ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/褐灰色(7.5YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.7cm，外面：炭化物付着	B-281
5	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ナデ・ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-156
6	F-2・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ナデ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.35～0.6cm	B-268
7	F3・H4 6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR+刺加条・口縁部～頸部ミガキ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)/灰褐色(7.5YR4/2)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)/にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.35～1.1cm	B-237
8	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.85cm	B-253
9	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～0.8cm，外面：炭化物付着	B-151
10	F-2・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：内外面・黒褐色(7.5YR3/1)，法量：器厚0.4～0.85cm	B-255
11	G-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ，頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)～色(2.5Y4/1)，法量：器厚0.35～0.6cm	B-146
12	H-3・6D層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部縄文LR，頸部ミガキ/列点文・磨滅，内面：ミガキ，色調：内外面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.6～0.8cm	B-115

第102図　A区基本層6D層出土遺物（8）



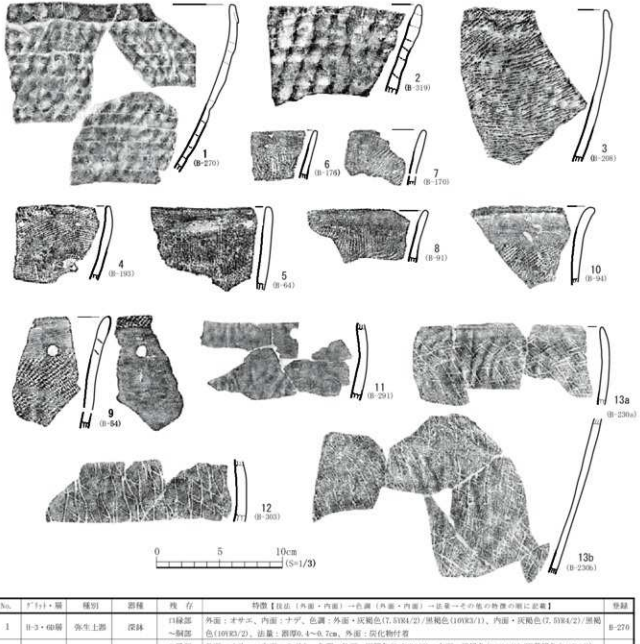
No.	ｸﾞﾘｯﾄﾞ・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	掲載
1	F-2・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文、内面：ナデ、色調：内外面・灰褐色（7.5YR4/2）、法量：器厚0.4～0.8cm、内外面：炭化物付着	B-58
2	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ・頸部列点文、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色（5YR4/1）、内面・暗灰色（N3/0）、法量：器厚0.5～0.6cm	B-100
3	H-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR→刻目加条・口縁部ヨコナデ・頸部列点文・櫛描、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色（7.5YR4/2）/黒褐色（10YR3/2）、内面：黒褐色（7.5YR3/1）、法量：器厚0.35～0.8cm、外面：炭化物付着	B-83
4	F-2・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ、内面：櫛描、色調：外面・黒褐色（7.5YR3/1）、内面・にぶい褐色（7.5YR5/3）、法量：器厚0.4～0.6cm	B-232
5	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・頸部綾杉文・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色（7.5YR3/1）、内面・灰褐色（7.5YR4/2）、法量：口径(23.2)cm・残存高11.3cm・器厚0.7cm、外面：炭化物付着	B-235
6	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色（7.5YR4/2）、内面・にぶい褐色（7.5YR5/3）、法量：器厚0.3～0.8cm、内外面：炭化物付着	B-75
7	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色（10YR3/1）/暗灰色（N3/0）、内面・褐灰色（7.5YR4/1）、法量：器厚0.3～0.7cm、内外面：炭化物付着	B-80
8	J-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色（7.5YR4/1）、内面・灰褐色（7.5YR4/2）、法量：器厚0.3～0.8cm	B-145
9	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR→刻目加条・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色（7.5YR3/1）、内面・灰褐色（7.5YR4/2）、法量：器厚0.3～0.6cm、外面：炭化物付着	B-140
10	J-5・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR→刻目加条・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色（10YR3/1）、法量：0.4～0.9cm、内外面：炭化物付着	B-33
11	J-6・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部ヨコナデ、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色（7.5YR4/1）/黒褐色（10YR3/1）、内面・黒褐色（7.5YR3/1）、法量：器厚0.55～0.8cm、内外面：炭化物付着	B-14
12	G-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・暗灰色（N3/0）、内面・灰黄褐色（10YR5/2）、法量：器厚0.7cm	B-138
13	G-3・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部単軸条回転文・口縁部～頸部ヨコナデ、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色（10YR3/1）、内面・灰褐色（7.5YR5/2）、法量：器厚0.4～0.65cm、外面：炭化物付着	B-87
14	F-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文RL ヲ・口縁部～頸部ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色（7.5YR4/1）/黒褐色（10YR3/1）、内面・黒褐色（10YR3/1）/暗灰色（N3/0）、法量：器厚0.25～0.8cm、内外面：炭化物付着	B-277
15	F-6・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ、内面：ミガキ・ナデ、色調：外面・灰褐色（7.5YR4/2）/黒褐色（10YR3/1）、内面・灰黄褐色（10YR4/2）、法量：器厚0.35～0.6cm	B-241
16	H-4・6層	弥生土器	壺	口縁部～胴部	外面：胴部撚糸文（網目状ヲ）・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい黄褐色（10YR5/3）、内面・にぶい黄褐色（10YR5/3）/黄灰色（2.5Y4/1）、法量：器厚0.45～0.75cm	B-249
17	J-5・6層	弥生土器	壺	口縁部～底部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色（10YR4/1）/暗灰色（N3/0）、内面・黒褐色（10YR3/1）/褐灰色（10YR4/1）、法量：口径11.2cm・器高8.2cm・底径7.0cm・器厚0.3～0.7cm	B-186

第103図　A区基本層6D層出土遺物（９）



No.	ﾌﾟﾗﾝﾄ・層	種別	器種	残存	特徴【法量（外面・内面）→色調（外面・内面）→出土場→その他の特徴の順に記載】	登録
1	I-3・6D層	弥生土器	甕	口縁部～頸部	外面：口唇部/胴部植物束状回転文・口縁部～頸部ヨコナデ，内面：ヨコナデ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)，内面・褐灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.6cm	B-13
2a・b	G-3・6D層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部植物束状回転文・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-298
3	J-5・6D層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.4～0.7cm，内外面：炭化物付着	B-66
4	F-2・6D層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文RL・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.5～0.65cm，外面：炭化物付着	B-168
5	G-3・6D層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.8～1.0cm，還元？	B-74
6	F-2・6D層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：縄文LR・刷毛加条・磨滅，内面：磨滅，色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)，内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/黄灰色(2.5Y4/1)，法量：器厚0.3～0.8cm	B-326
7	G-3・6D層	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR(磨滅)・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，法量：器厚0.5～0.9cm	B-73
8	J-4・6D層	弥生土器	甕	胴部	外面：縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.65～0.8cm，外面：炭化物付着，分析：DNA分析（DNA5-007）	B-189
9	H-3・6D層	弥生土器	甕or壺	胴部～底部	外面：胴部ナデ/ハケメ・底部木葉痕，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，法量：底径10.8cm・残存高5.2cm・器厚0.5～1.1cm，内面：炭化物付着	B-293
10	F-2・6D層	弥生土器	甕	胴部～底部	外面：胴部縄文LR・刷毛加条・底部編布痕，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：底径10.2cm・残存高10.0cm・器厚0.5～0.9cm，外面：炭化物付着	B-219
11	F-3・6D層	弥生土器	甕or壺	胴部～底部	外面：胴部ハケメ・底部木葉痕→ナデ，内面：ナデ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：底径8.8cm・残存高7.2cm・器厚0.5～1.3cm	B-296
12	G-3・6D層	弥生土器	甕or壺	底部	外面：底部編布痕，内面：ナデ，色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/3)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：底径(12.6)cm・残存高1.7cm・器厚0.6～1.1cm	B-165
13	G-2・6D層	弥生土器	甕	胴部～底部	外面：胴部縄文LR/ミガキ・底部木葉痕，内面：ミガキ，色調：褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)，法量：底径6.6cm・残存高5.6cm・器厚0.4～1.3cm，外面：炭化物付着	B-295

第104図　A区基本層6D層出土遺物（10）



No.	グリッド・層	種別	器種	残存	特徴【法量（外面・内面）→色調（外面・内面）→胎土→その他の特徴の順に記載】	登録
1	Ⅱ-3・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：オサエ、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/2)、法量：器厚0.4～0.7cm、外面：炭化物付着	B-270
2	G-3・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：オサエ、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.4～1.0cm	B-319
3	G-3・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：縄文L、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)/褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.3～0.65cm	B-208
4	F-2・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：縄文LR、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.3～0.7cm	B-193
5	F-3・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：側部櫛歯状文・口縁部ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.4～0.7cm、外面：炭化物付着	B-64
6	F-2・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：側部植物茎回転文・口縁部～頸部ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.3～0.55cm、外面：炭化物付着	B-176
7	F-2・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：頸部植物茎回転文・口縁部ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.3～0.6cm、外面：炭化物付着	B-170
8	F-2・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：櫛歯状文、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.3～0.6cm、外面：炭化物付着	B-91
9	Ⅱ-4・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：口唇部/側部縄文LR・口縁部ナデ、内面：口縁部縄文LR・ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.5～0.8cm、内外面：炭化物付着、穿孔有り	B-84
10	Ⅱ-4・6b層～側溝	弥生土器	深鉢	口縁部～側溝	外面：側部縄文LR・口縁部～頸部ミガキ潤滑、内面：ミガキヤ・潤滑、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.35～0.7cm、外面：炭化物付着	B-94
11	F-2・6b層	弥生土器	不明	側部	外面：ミガキ、内面：潤滑、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.6～0.8cm、外面：炭化物付着、赤土器圧痕分析（NKS-009）	B-291
12	J-5・6b層	弥生土器	深鉢？	側部	外面：側口状燃糸文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.65～0.8cm、外面：炭化物付着、赤土器圧痕分析（NKS-009）	B-303
13a 13b	J-5・6b層	弥生土器	深鉢	口縁部～側部	外面：口縁部ナデ・側口状燃糸文、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.3～0.65cm	B-230a・b

第105図　A区基本層6D層出土遺物（11）

A区基本層 6D 層①

第106図　A区　基本層6D層出土遺物①　－ 土器類（写真図版）－

A区基本層 6D 層②

第107図　A区　基本層6D層出土遺物② ― 土器類（写真図版）―

A区基本層6D層③

第108図　A区　基本層6D層出土遺物③ ― 土器類（写真図版）―

A 区基本層 6D 層④

B-254（第 101 図 3）

B-172
（第 101 図 4）

B-243（第 101 図 7）

B-207
（第 101 図 1）

B-27（第 101 図 2）

B-178
（第 101 図 8）

B-22（第 101 図 9）

B-242（第 101 図 10）

B-53（第 101 図 11）

B-159（第 101 図 6）

B-312
（第 101 図 5）

B-96
（第 101 図 12）

B-309（第 101 図 13）

0　5　10cm
（S=1/3）

B-212
（第 102 図 1）

B-214
（第 102 図 2）

B-300
（第 102 図 3）

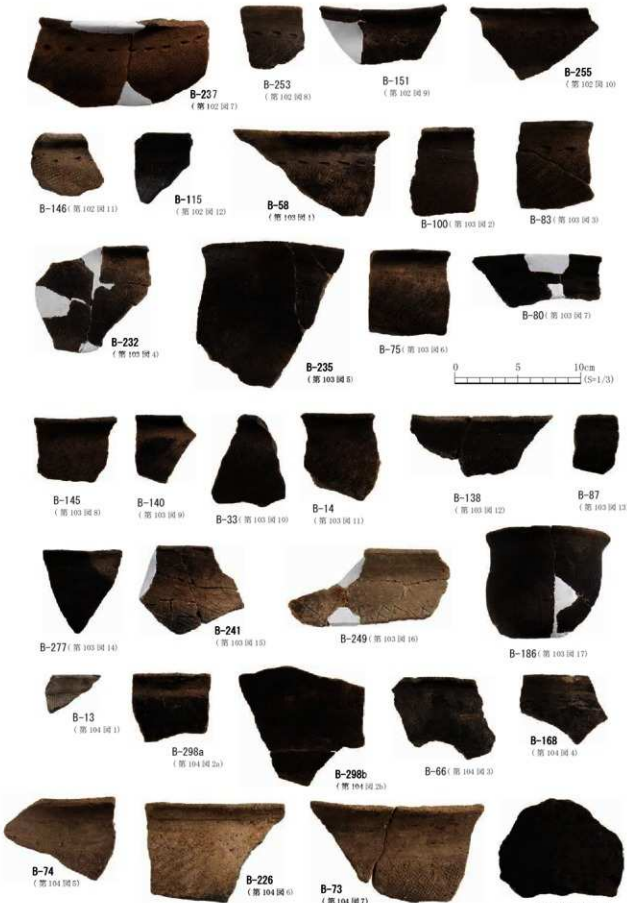
B-281
（第 102 図 4）

B-156
（第 102 図 5）

B-268
（第 102 図 6）

第109図　A区　基本層6D層出土遺物④ ― 土器類（写真図版）―

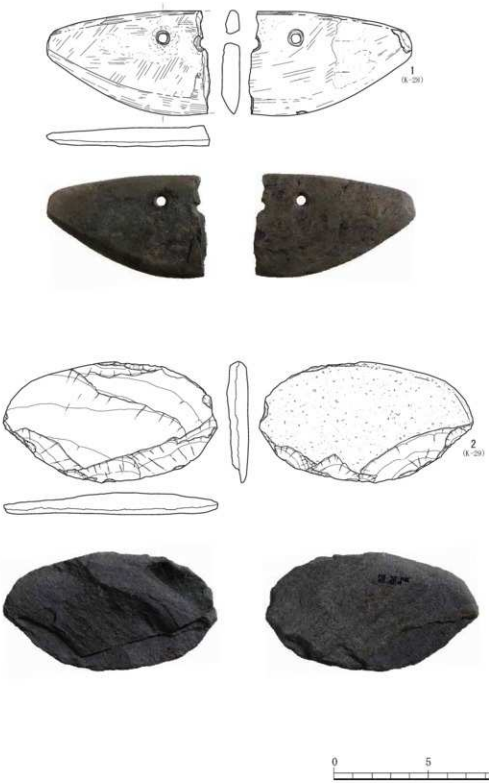
A区基本層6D層⑤



第110図　A区　基本層6D層出土遺物⑤ ― 土器類（写真図版）―

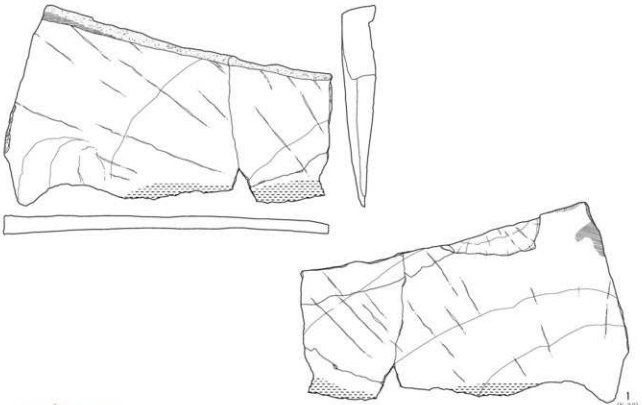
A 区基本層 6D 層⑥

第111図　A区　基本層6D層出土遺物⑥ － 土器類（写真図版）－



No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-4	6D	石包丁	珪質凝灰岩	5.55	8.55	1.0	58.1		K-28
2	G-3	6D	石包丁	結晶片岩	6.5	11.4	1.12	83.5	石包丁未成品	K-29

第112図　A区基本層6D層出土遺物（12）

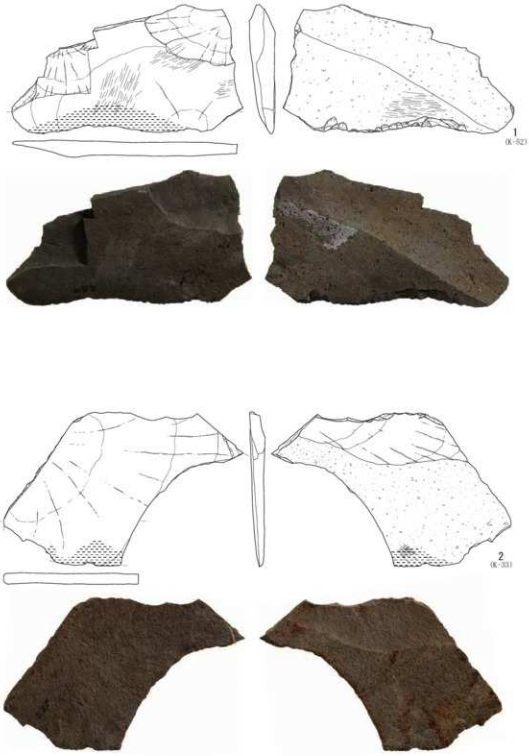


光沢範囲

0　5　10cm
(S=1/2)

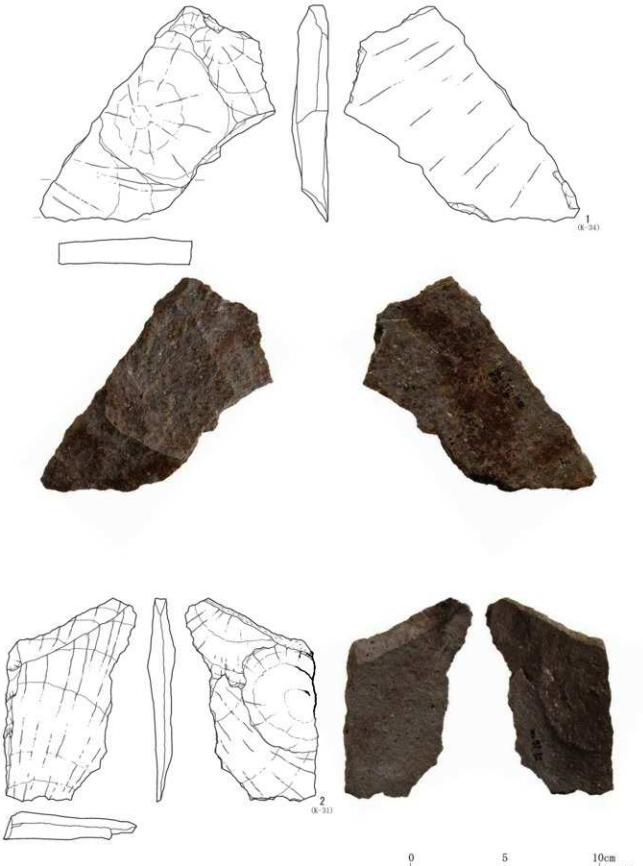
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-3	6D	板状石器	安山岩	10.6	17.8	1.54	285.0	刃部に光沢あり	K-32

第113図　A区基本層6D層出土遺物（13）



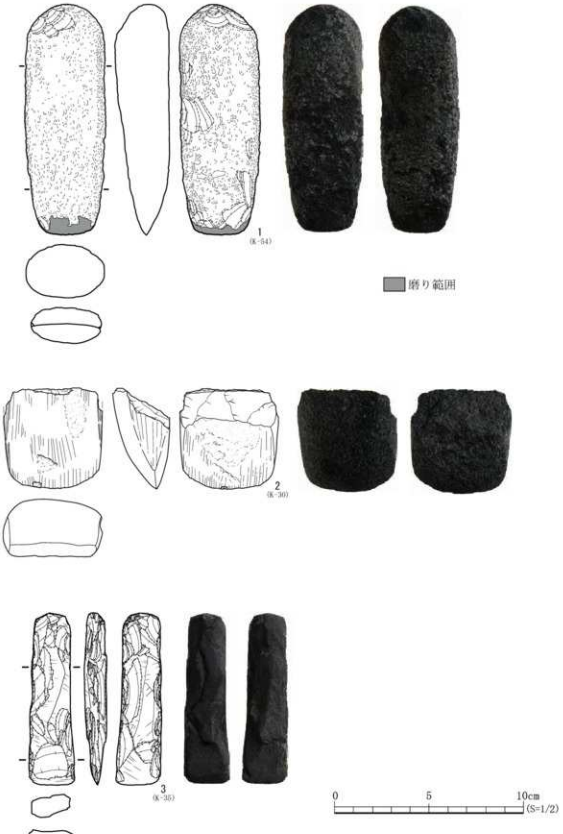
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	F-4	6D	板状石器	安山岩	10.8	18.6	1.82	355.0		K-52
2	G-3	6D	板状石器	安山岩	19.2	12.4	1.02	235.0		K-33

第114図　A区基本層6D層出土遺物（14）



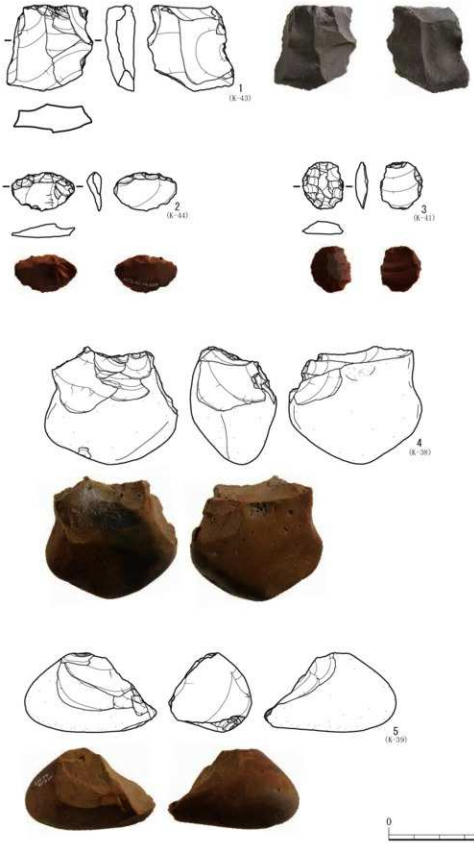
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	F-3	6D	板状石器	安山岩	9.6	4.95	1.08	59.5		K-34
2	F-3	6D	板状石器	安山岩	8.85	10.1	1.36	82.1		K-31

第115図　A区基本層6D層出土遺物（15）



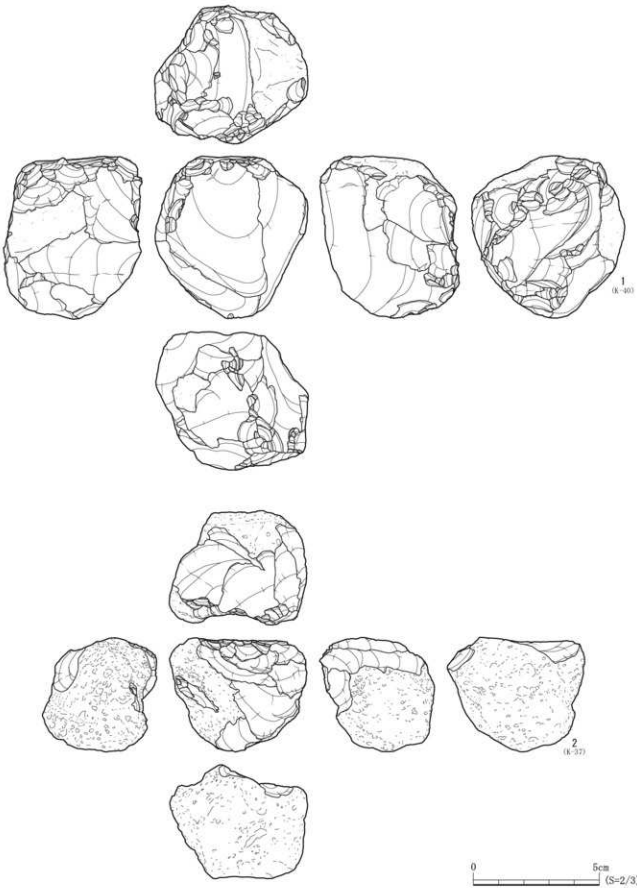
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	F-4	6D	磨製石斧	斑れい岩	12.1	4.15	2.92	225.0		K-54
2	G-6	6D	磨製石斧	斑れい岩	5.7	5.2	2.6	108.8		K-30
3	G-3	6D	扁平片刃石斧	凝灰岩	9.02	2.42	1.22	38.0		K-35

第116図　A区基本層6D層出土遺物（16）



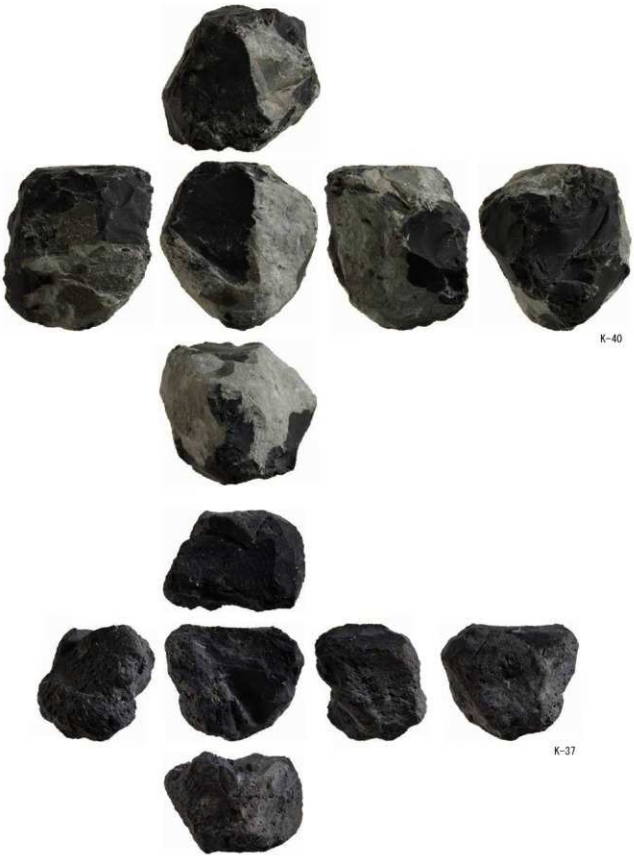
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	G-4	6D	不定形石器	頁岩	3.4	3.4	1.18	14.2		K-43
2	H-4	6D	不定形石器	頁岩	2.48	1.53	0.57	1.5		K-44
3	H-6	6D	不定形石器	頁岩	1.83	1.61	0.48	1.4		K-41
4	G-3	6D	石核	珪質凝灰岩	4.67	5.27	3.42	96.7		K-38
5	G-3	6D	石核	珪質凝灰岩	3.15	5.22	3.28	61.3		K-39

第117図　A区基本層6D層出土遺物（17）

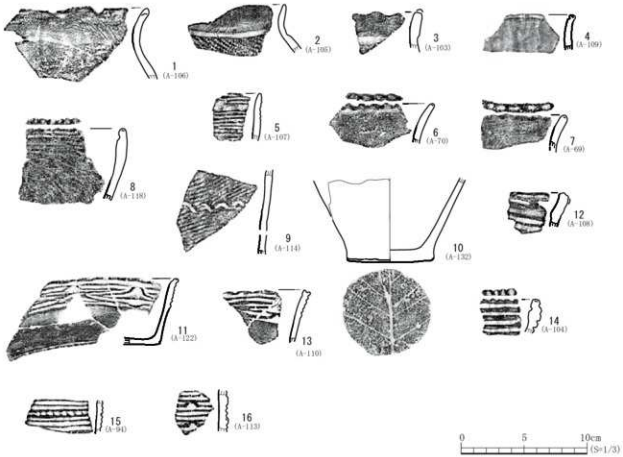


No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	H-3	6D	石核	砂岩	6.45	6.05	5.49	305.0		K-40
2	F-2	6D	石核	砂岩	4.54	5.54	4.49	135.8		K-37

第118図　A区基本層6D層出土遺物（18）

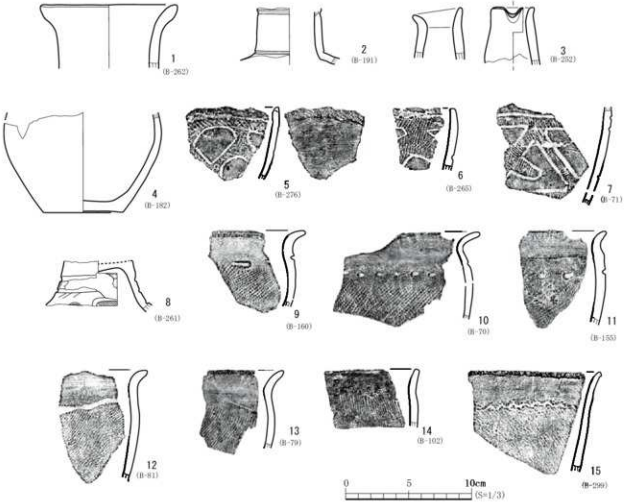


第119図　A区基本層6D層出土遺物（19）



No.	ﾌﾞﾛｯｸ・層	種別	遺構	残　存	特徴【器法（外面・内面）一色調（内面・内面）一出量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：波状口縁・ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、出量：器厚0.5～0.65cm、内面：炭化物微量付着	A-106
2	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：口縁部～頸部ヨコナデ・頸部縄文風→沈線文，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、出量：器厚0.2～0.6cm	A-105
3	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部突起・口縁部ミガキ・赤彩，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、出量：器厚0.5～0.8cm	A-103
4	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：口唇部沈線・口縁部沈線/ミガキ，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、出量：器厚0.4～0.55cm、外面：炭化物付着	A-109
5	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：撚糸文L，内面：ナデ，色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、出量：器厚0.2～0.6cm	A-107
6	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：小波状口縁・口唇部刻目・ナデ，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/にぶい黄褐色(10YR5/3)、出量：器厚0.4～0.55cm、外面：炭化物付着	A-70
7	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：小波状口縁・口唇部刻目・ナデ，内面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、出量：器厚0.5～0.6cm、外面：炭化物付着	A-69
8	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部刻目・口縁部櫛歯状文・磨滅，内面：口縁部沈線・ミガキ，色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、出量：器厚0.3～0.6cm	A-118
9	G-3・6E層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、出量：器厚0.5～0.55cm	A-114
10	F-4・6E層	縄文土器	深鉢	胴部～底部	外面：胴部櫛歯状文・底面木葉痕・磨滅，内面：磨滅，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、出量：底径7.9cm・残存高6.7cm・器厚0.4～1.3cm、内外面：炭化物付着	A-132
11	G-3・6E層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：沈字文・沈線文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)、出量：残存高5.3cm・器厚0.4～0.8cm	A-122
12	G-3・6E層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部突起・平行沈線文、内面：沈線・ミガキ・磨滅、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)、出量：器厚0.5～0.9cm	A-108
13	G-3・6E層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部沈線・沈字文・ミガキ，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、出量：器厚0.4～0.55cm	A-110
14	G-3・6E層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部刻目・平行沈線文・磨滅・赤彩，内面：沈線，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、出量：器厚0.4～1.0cm	A-104
15	G-3・6E層	縄文土器	鉢	胴部	外面：平行沈線文・刺突文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR4/2)、出量：器厚0.25～0.5cm	A-94
16	G-3・6E層	縄文土器	壺ヵ	胴部	外面：沈線文・沈字文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)、出量：器厚0.5～0.7cm	A-113

第120図　A区基本層6E層出土遺物（１）

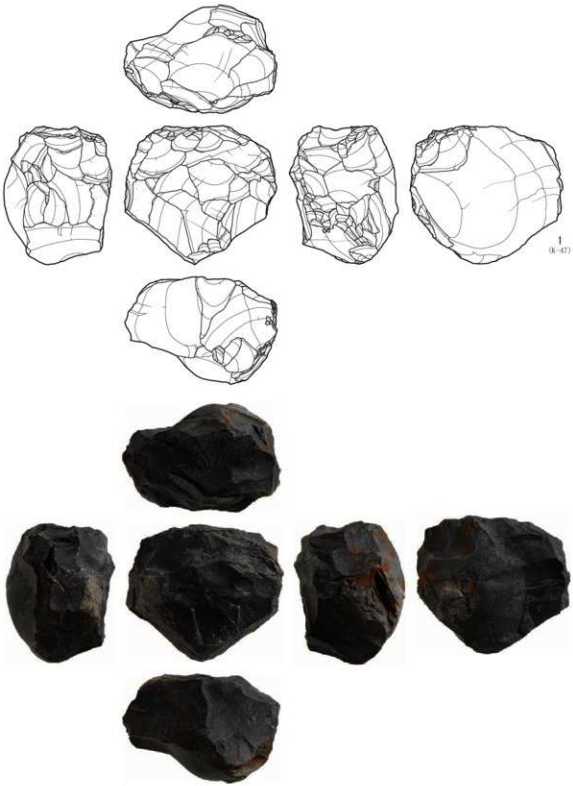


No.	ﾃﾞｰﾀ	層位	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→品質→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・6層	弥生上層	弥生上器	壺	口縁部～頸部	内外面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/褐灰色(10YR4/1)，内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：口径10.4cm・残存高5.2cm・器厚0.7～0.9cm	B-262
2	F-3・6層	弥生上層	弥生上器	壺	口縁部～頸部	外面：口縁部/頸部沈線文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：残存高4.5cm・器厚0.5～0.6cm，赤土顕圧痕分析（NKS-011）	B-191
3	J-4・6層	弥生上層	弥生上器	壺	口縁部	外面：ミガキ，内面：ナデ，色調：外面・灰黄褐色(10YR6/2)，内面・灰黄褐色(10YR6/2)/褐灰色(N3/0)，法量：口径3.3cm・残存高4.6cm・器厚0.6～0.8cm	B-252
4	F-2・6層	弥生上層	弥生上器	壺	胴部～底部	外面：胴部ナデ，内面：ハケメ，色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)/褐灰色(N3/0)，法量：底径6.4cm・残存高8.0cm・器厚0.4～1.2cm，外面：炭化物付着	B-182
5	G-4・6層	弥生上層	弥生上器	鉢	口縁部～胴部	外面：小波状口縁・縄文帯→幾何学文・ミガキ・潤滑，内面：口縁部縄文RL・胴部ミガキ，色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)，内面・褐灰色(N3/0)，法量：器厚0.2～0.5cm	B-276
6	F-3・6層	弥生上層	弥生上器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→幾何学文・ミガキ，内面：炭化物付着のため不明，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.4～0.65cm，内外面：炭化物付着	B-265
7	H-3・6層	弥生上層	弥生上器	鉢	胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰褐色(7.5YR5/2)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5～0.6cm	B-71
8	G-5・6層	弥生上層	弥生上器	蓋	天井部～胴部	外面：植物茎回転文→幾何学文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：残存高4.1cm・器厚0.4～0.9cm	B-261
9	F-2・6層	弥生上層	弥生上器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文RL・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：内外面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.4～0.8cm	B-160
10	G-3・6層	弥生上層	弥生上器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR6/2)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.3～0.7cm，外面：炭化物付着	B-70
11	G-4・6層	弥生上層	弥生上器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ・頸部列点文，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)，内面：にぶい黄褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR2/2)，法量：器厚0.3～0.8cm，内外面：炭化物付着	B-155
12	F-3・6層	弥生上層	弥生上器	甕	口縁部～胴部	外面：胴部縄文LR・口縁部～頸部ヨコナデ/ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：器厚0.5～0.7cm	B-81
13	H-4・6層	弥生上層	弥生上器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文LR・口縁部～頸部ナデ，内面：ミガキ，色調：外面・暗灰色(N3/0)，内面・黒褐色(10YR3/1)/暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.2～0.6cm，外面：炭化物付着	B-79
14	G-3・6層	弥生上層	弥生上器	甕	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部植物茎回転文・口縁部～頸部ヨコナデ，内面：ヨコナデ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.4～0.65cm，外面：炭化物付着	B-102
15	G-4・6層	弥生上層	弥生上器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部縄文RL・胴部綾絡文/縄文/縄文・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.4～0.6cm，外面：炭化物付着	B-299

第121図　A区基本層6E層出土遺物（２）

A区基本層6E層

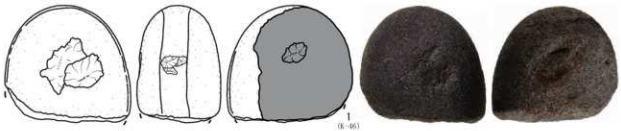
第122図　A区　基本層6E層出土遺物 ― 土器類（写真図版）―



No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	F-3	6E	石核	砂岩	5.34	6.11	4.3	173.1		K-47

第123図　A区基本層6E層出土遺物（３）

基本層 6E 層

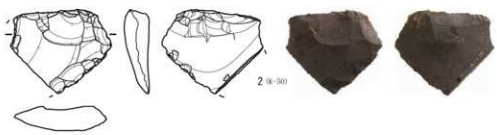


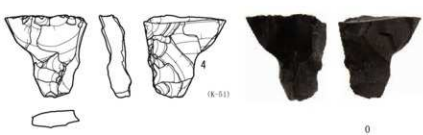
敲打範囲

0　5　10cm
(S=1/3)

No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	G-2	6E	回石	安山岩	9.11	9.59	6.64	855.0		K-46

基本層 7 層

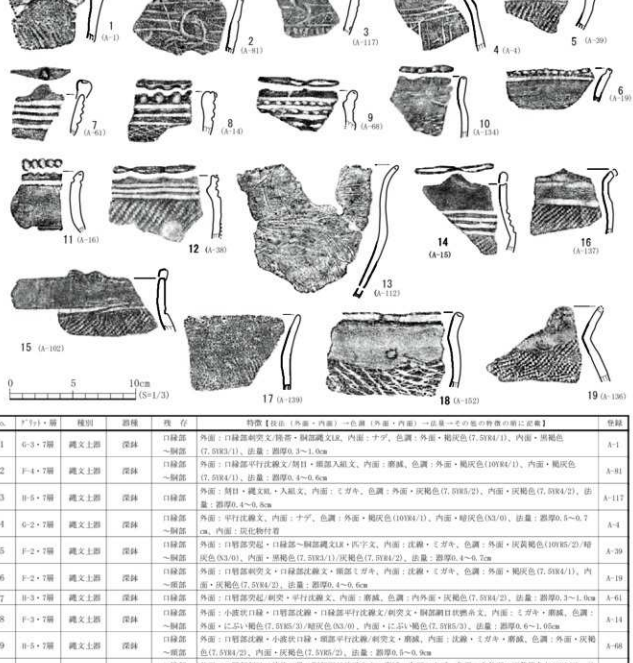




0　5cm
(S=2/3)

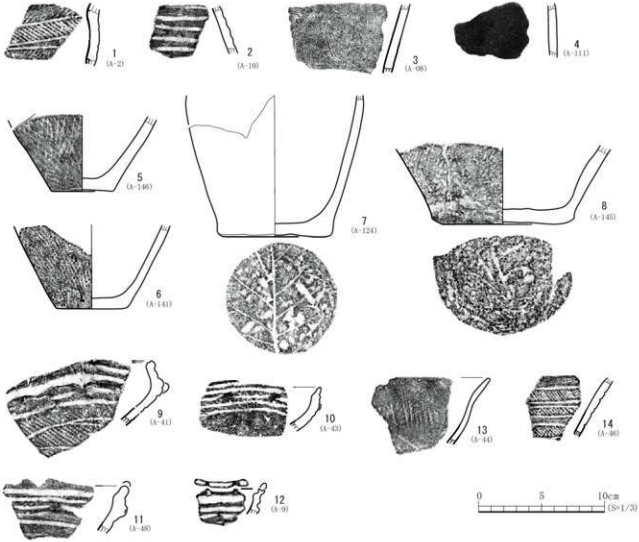
No.	グリッド	層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	F-2	7	不定形石器	頁岩	3.33	4.01	1.0	12.2		K-50
2	H-3	7	不定形石器	頁岩	3.33	2.65	0.6	6.4		K-49
3	F-3	7	不定形石器	頁岩	3.27	3.25	1.27	11.7		K-51

第124図　A区基本層6E層出土遺物（４）、基本層7層出土遺物（１）



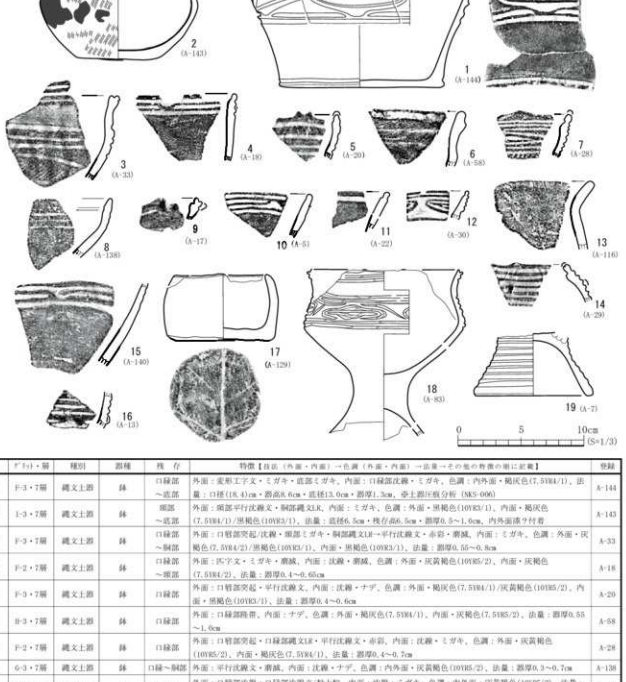
No.	ｸﾞﾘｯﾄ・層	種別	器種	産　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部刺突文/除草・胴部縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(7.5YR6/1)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.3～1.0cm	A-1
2	F-4・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部平行沈線文/刻目・胴部入組文、内面：擦滅、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.4～0.6cm	A-81
3	H-5・7層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：刻目・縄文帯・入組文、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.4～0.8cm	A-117
4	G-2・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：平行沈線文、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.5～0.7cm、内面：炭化物付着	A-4
5	F-2・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起・口縁部～胴部縄文LR・爪字文、内面：沈線・ミガキ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.4～0.7cm	A-39
6	F-2・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起・口縁部沈線文・胴部ミガキ、内面：沈線・ミガキ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.4～0.6cm	A-19
7	H-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部突起/刺突・平行沈線文、内面：擦滅、色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.3～1.0cm	A-61
8	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：小波状口縁・口唇部沈線・口縁部平行沈線文/刺突文・胴部刷目状撫糸文、内面：ミガキ・擦滅、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/暗灰色(N3/0)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.6～1.05cm	A-14
9	H-5・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部沈線・小波状口縁・胴部平行沈線/刺突文・擦滅、内面：沈線・ミガキ・擦滅、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.5～0.9cm	A-68
10	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部刻目・波状口縁・胴部刷目状撫糸文・擦滅、内面：ナデ、色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.4～0.5cm	A-134
11	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部刻目・沈線文・ナデ・赤彩、内面：沈線・ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：器厚0.35～0.75cm	A-16
12	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：小波状口縁・口唇部沈線・口縁部平行沈線文・胴部縄文LR、内面：沈線・ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.2～0.9cm、内外面：炭化物付着	A-38
13	G-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：波状口縁・櫛歯状文、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.3～0.6cm、内外面：炭化物付着	A-112
14	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起/沈線・縄文LR・平行沈線文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・褐灰色(5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.4～0.6cm、外面：炭化物付着	A-15
15	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起・縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.4～1.1cm、外面：炭化物付着	A-102
16	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：波状口縁・胴部縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・褐灰色(5YR4/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.4～0.6cm	A-137
17	G-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：縄文(胴体不明)・擦滅、内面：ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：器厚0.4～0.5cm	A-139
18	F-3・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部沈線・口縁部～胴部ミガキ・胴部刷目状撫糸文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.5～0.65cm、外面：炭化物付着	A-152
19	G-2・7層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR、内面：ミガキ、色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.5～0.6cm	A-136

第125図　A区基本層7層出土遺物（２）



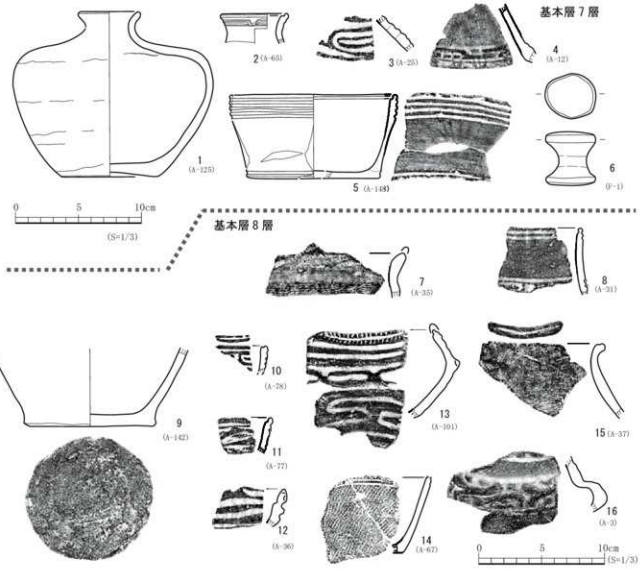
No.	ﾌﾟﾗﾝﾄ・層	種別	器種	残　存	特徴【位置・外面・内面：色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	G-3・7層	縄文上器	深鉢	頸部	外面：縄文RL・別目→沈線文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR4/2)，法量：器厚0.6～0.9cm	A-2
2	F-3・7層	縄文上器	浅ヲ	頸部	外面：平行沈線文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5～0.65cm	A-10
3	F-3・7層	縄文上器	深鉢	胴部	外面：櫛描文，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面：にぶい黄褐色(10YR5/3)，法量：器厚0.7cm	A-8
4	F-3・7層	縄文上器	深鉢？	胴部	内外面：磨滅，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面：灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.6～0.7cm，炭土器圧痕分析（NKS-012）	A-111
5	F-3・7層	縄文上器	深鉢	胴部～底部	外面：網目状撚糸文・縄文RL，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(5YR3/1)，法量：底径4.8cm・残存高6.9cm・器厚0.7～1.5cm，内外面：炭化物付着	A-146
6	F-3・7層	縄文上器	深鉢	胴部～底部	外面：縄文LR，内面：ナデ・ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)/暗灰色(N3/0)，法量：底径5.6cm・残存高6.8cm・器厚0.6～1.1cm，内外面：炭化物付着	A-141
7	F-2・7層	縄文上器	深鉢	胴部～底部	外面：ナデ・底部木葉痕，内面：ナデ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)，法量：底径9.0cm・残存高11.3cm・器厚0.5～1.8cm	A-124
8	F-3・7層	縄文上器	深鉢	胴部～底部	外面：胴部縄文LRヲ・磨滅・底部木葉痕，内面：磨滅，色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：底径(11.2)cm・残存高6.3cm・器厚0.7～1.2cm	A-145
9	F-3・7層	縄文上器	浅鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部沈線・口縁部沈線文・頸部突起状隆帯・胴部縄文LR→沈線文，内面：ミガキ・磨滅，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5～1.6cm	A-41
10	F-3・7層	縄文上器	浅鉢	口縁部～頸部	外面：平行沈線文・粘土粒，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・にぶい黄褐色(10YR6/3)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.2～0.7cm，内面：炭化物付着	A-43
11	F-3・7層	縄文上器	浅鉢	口縁部	外面：口唇部突起・口縁部平行沈線文/突起，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR4/2)，内面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5～1.2cm	A-48
12	F-3・7層	縄文上器	浅鉢	口縁部～頸部	外面：口唇部突起，変形工字文，内面：ミガキ・沈線，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.35～0.7cm	A-9
13	F-3・7層	縄文上器	浅鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ナデ・胴部櫛描沈文/沈線文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.25～0.5cm	A-44
14	F-3・7層	縄文上器	浅鉢	胴部	外面：別目→平行沈線文，内面：ミガキ・磨滅，色調：内外面・黒褐色(7.5YR3/1)，法量：器厚0.4～0.6cm	A-46

第126図　A区基本層7層出土遺物（3）



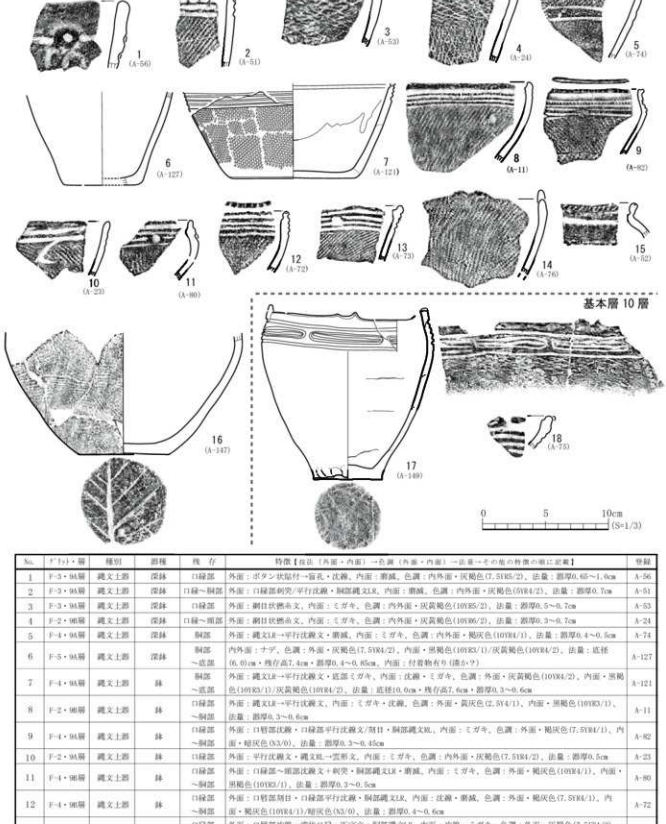
No.	ﾌﾞﾛｯｸ・層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：変形工字文・ミガキ・底部ミガキ。内面：口縁部沈線・ミガキ。色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)。法量：口径(18.4)cm・器高5.6cm・底径13.0cm・器厚1.3cm。帝土器圧痕分析（NKS-006）	A-144
2	I-3・7層	縄文土器	鉢	頸部～底部	外面：頸部平行沈線文・胴部縄文LR。内面：ミガキ。色調：外面・黒褐色(10YR3/1)。内面・褐灰色(7.5YR4/1)/黒褐色(10YR3/1)。法量：底径6.5cm・残存高6.5cm・器厚0.5～1.0cm。内外面漆ラ付着	A-143
3	F-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起/沈線・頸部ミガキ・胴部縄文LR→平行沈線文・赤彩・磨滅。内面：ミガキ。色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)。内面・黒褐色(10YR3/1)。法量：器厚0.55～0.8cm	A-33
4	F-2・7層	縄文土器	鉢	口縁部～頸部	外面：匹字文・ミガキ・磨滅。内面：沈線・磨滅。色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.4～0.65cm	A-18
5	F-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部突起・平行沈線文。内面：沈線・ナデ。色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)。内面・黒褐色(10YR3/1)。法量：器厚0.4～0.6cm	A-20
6	H-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口縁部隆帯。内面：ナデ。色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)。内面・灰褐色(7.5YR5/2)。法量：器厚0.55～1.0cm	A-58
7	F-2・7層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部突起・口縁部縄文LR・平行沈線文・赤彩。内面：沈線・ミガキ。色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)。内面・褐灰色(7.5YR4/1)。法量：器厚0.4～0.7cm	A-28
8	G-3・7層	縄文土器	鉢	口縁～胴部	外面：平行沈線文・磨滅。内面：沈線・ナデ。色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)。法量：器厚0.3～0.7cm	A-138
9	F-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部沈線・口縁部沈線文/粘土粒。内面：沈線・ミガキ。色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)。法量：器厚0.3～0.8cm	A-17
10	G-2・7層	縄文土器	鉢	口縁部～頸部	外面：匹字文・赤彩。内面：口縁部上端沈線・ミガキ・赤彩。色調：外面・黒褐色(10YR3/1)。内面・褐灰色(7.5YR4/1)。法量：器厚0.35～0.6cm	A-5
11	F-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部	内外面：沈線文・ナデ・赤彩。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：器厚0.3～0.6cm	A-22
12	F-2・7層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：変形工字文。内面：沈線・ミガキ。色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)。法量：器厚0.2～0.6cm	A-30
13	G-3・7層	縄文土器	鉢	口縁～胴部	内外面：ナデ。色調：外面：灰褐色(7.5YR5/2)。内面・褐灰色(7.5YR4/1)。法量：器厚0.5cm	A-116
14	F-2・7層	縄文土器	鉢	口縁部～頸部	外面：口唇部突起・平行沈線文・粘土粒。内面：ミガキ。色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)。法量：器厚0.4～0.8cm	A-29
15	F-2・7層	縄文土器	鉢	胴部	外面：匹字文ヤ・磨滅。内面：ミガキ。色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)。内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)/黄灰色(2.5Y4/1)。法量：器厚0.4～0.75cm	A-140
16	F-3・7層	縄文土器	鉢	胴部	外面：平行沈線文・粘土粒。内面：ナデ。色調：外面・黒褐色(10YR3/1)。内面・灰褐色(7.5YR4/2)。法量：器厚0.4～0.8cm	A-13
17	F-2・7層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：磨滅・底部木葉痕。内面：付着物（漆ヲ）多量。色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)。法量：口径7.3cm・器高5.3cm・底径7.5cm・器厚0.6～1.3cm。	A-129
18	G-3・7層	縄文土器	台付鉢	口縁部～脚部	外面：沈線文・変形工字文・ミガキ。内面：ナデ・口縁部ミガキ。色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/褐灰色(10YR4/1)。内面・灰黄褐色(10YR5/2)。法量：口径(12.4)cm・底径4.3cm・残存高13.6cm・器厚0.6cm	A-83
19	F-2・7層	縄文土器	台付鉢	台部	外面：平行沈線文。内面：ナデ。色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)。内面・暗灰色(N3/0)。法量：台部径9.2cm・残存高5.0cm・器厚0.5～0.8cm。円文	A-7

第127図　A区基本層7層出土遺物（4）



No.	ﾀﾞﾗｯﾄ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→胎土→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-2・7層	縄文土器	壺	口縁部～底部	外面：ミガキ，内面：ナデ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)，法量：口径(4.6)cm・胴部径15.9cm・底径7.6cm・器高13.2cm・器厚0.5～1.3cm	A-125
2	G-3・7層	縄文土器	壺	口縁部	外面：沈線文・ミガキ・赤彩，内面：沈線・ミガキ，色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)，法量：口径(5.1)cm・残存高2.4cm・器厚0.4～0.6cm	A-65
3	F-3・7層	縄文土器	壺	胴部	外面：変形工字文，内面：ナデ・軽上痕張，色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.5～0.8cm	A-25
4	F-3・7層	縄文土器	注口土器	胴部	外面：羊歯状文・磨滅，内面：ナデ・磨滅，色調：内外面・褐色(7.5YR4/3)，法量：器厚0.45～1.0cm	A-12
5	H-3・7層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：平行沈線文・沈線文・ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：口径(13.2)cm・器高6.7cm・底径(10.6)cm・器厚0.3～1.0cm	A-148
6	G-3・7層	土製品	耳飾り	－	外面：磨滅，法量：表面部直径3.6×4.0cm・くびれ部直径1.8×2.2cm・厚さ4.3cm	F-1
7	F-3・8A層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部突起・口縁部～頸部ミガキ・胴部磨滅，内面：ミガキ，色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.9cm	A-35
8	F-2・8A層	縄文土器	壺	口縁部	外面：平行沈線文・沈下文，内面：沈線・ミガキ，色調：外内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.2～0.6cm	A-31
9	I-4・8A層	縄文土器	深鉢	胴部～底部	内外面：磨滅，色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)・暗灰色(N3/0)，法量：底径10.0cm・残存高6.3cm・器厚0.6～1.5cm	A-142
10	F-4・8B層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部沈線・口縁部沈下文，内面：ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.4～0.5cm	A-78
11	F-4・8B層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：変形工字文ヲ・磨滅，内面：沈線・ミガキ・磨滅，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.8cm	A-77
12	F-3・8A層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：口唇部突起・平行沈線文，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・黄灰色(2.5Y4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～1.0cm	A-36
13	G-2・8B層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起・別口沈線・口縁部～胴部平行沈線文/工字文/隆帯・磨滅，内面：沈線・ミガキ・磨滅，色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)，内面・黄灰色(2.5Y5/1)/灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.3～1.0cm	A-101
14	F-3・8B層	縄文土器	鉢	口縁部～底部	外面：口縁部平行沈線文・胴部縄文LR，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)，法量：残存高6.1cm・器厚0.4～0.7cm	A-67
15	F-3・8B層	縄文土器	壺	口縁部～頸部	外面：口唇部沈線・口縁部～頸部ミガキ，内面：ミガキ，色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)，内面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.3～0.8cm	A-37
16	I-4・8A層	縄文土器	注口土器	胴部	外面：縄文LR・羊歯状文・磨滅，内面：ミガキ，色調：外面・黄灰色(2.5Y5/1)，法量：器厚0.5～1.0cm	A-3

第128図　A区基本層7層出土遺物（５）、8層出土遺物



No.	ﾄﾚﾝﾁ・層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→品質→その他の特徴の順に記載】	登録
1	F-3・9A層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：ボタン状貼付→指丸・沈線，内面：磨滅，色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)，法量：器厚0.65～1.6cm	A-56
2	F-3・9A層	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	外面：口縁部刺突/平行沈線・胴部縄文LR，内面：磨滅，色調：内外面・灰褐色(5YR4/2)，法量：器厚0.7cm	A-51
3	F-3・9A層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：網目状撚糸文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.5～0.7cm	A-53
4	F-2・9B層	縄文土器	深鉢	口縁～頸部	外面：網目状撚糸文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)，法量：器厚0.3～0.7cm	A-24
5	F-4・9A層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR→平行沈線文・磨滅，内面：ミガキ，色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.4～0.5cm	A-74
6	F-5・9A層	縄文土器	深鉢	胴部～底部	内外面：ナデ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR4/2)，法量：底径(6.0)cm・残存高7.4cm・器厚0.4～0.65cm，内面：付着物有り(漆か？)	A-127
7	F-4・9A層	縄文土器	鉢	胴部～底部	外面：縄文LR→平行沈線文・底部ミガキ，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)，内面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR4/2)，法量：底径10.0cm・残存高7.6cm・器厚0.3～0.6cm	A-121
8	F-2・9B層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR→平行沈線文，内面：ミガキ・沈線，色調：外面・黄灰色(2.5Y4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.6cm	A-11
9	F-4・9A層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部沈線・口縁部平行沈線文/刻目・胴部縄文LR，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.3～0.45cm	A-82
10	F-2・9A層	縄文土器	鉢	口縁部	外面：平行沈線文・縄文LR→雲形文，内面：ミガキ，色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)，法量：器厚0.5cm	A-23
11	F-4・9B層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部沈線文＋刺突・胴部縄文LR・磨滅，内面：ミガキ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.3～0.5cm	A-80
12	F-4・9B層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部刻目・口縁部平行沈線・胴部縄文LR，内面：沈線・磨滅，色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)，内面・褐灰色(10YR4/1)/暗灰色(N3/0)，法量：器厚0.4～0.6cm	A-72
13	F-4・9A層	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部沈線・波状口縁・JSS字文・胴部縄文LR，内面：沈線・ミガキ，色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)，内面・灰黄褐色(10YR5/2)，法量：器厚0.3～0.7cm	A-73
14	F-4・9A層	縄文土器	鉢	口縁～胴部	外面：口唇部突起・縄文LR，内面：ナデ，色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)，法量：器厚0.5～0.7cm	A-76
15	F-3・9A層	縄文土器	壺	口縁部～胴部	外面：口唇部刻目・口縁部沈線文，内面：沈線・磨滅，色調：外面・黒褐色(10YR3/1)，内面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.45～0.6cm	A-52
16	F-2・9A層	縄文土器	壺	胴部～底部	外面：縄文LR・底部木葉痕，内面：ミガキ，色調：内外面・暗灰色(N3/0)，法量：底径7.2cm・残存高9.7cm・器厚0.7～1.1cm	A-147
17	F-2・10B層	縄文土器	深鉢	口縁部～底部	外面：口唇部突起・変形工字文？・胴部刻目状撚糸文・底部木葉痕，内面：ナデ，色調：外面・褐灰色(10YR4/1)，内面・黒褐色(7.5YR3/1)/褐灰色(7.5YR4/1)，法量：口径12.4cm・器高13.6cm・底径5.5cm・器厚0.4～1.1cm，内面：炭化物付着	A-149
18	F-4・10A層	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面：口唇部突起・平行沈線文，内面：沈線・ミガキ，色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)，法量：器厚0.9cm	A-75

第129図　A区基本層9・10層出土遺物

A区基本層7層①

第130図　A区　基本層7層出土遺物①　－ 土器類（写真図版）－

第131図　A区　基本層7層出土遺物②　－ 土器類・土製品（写真図版）－

A区基本層8層

B-35（第128図7）

A-31（第128図8）

A-142（第128図9）

A-78（第128図10）　A-77（第128図11）

A-36（第128図12）

A-101（第128図13）

A-67（第128図14）

A-37（第128図15）

A-3（第128図16）

A区基本層9層

A-56（第129図1）

A-51（第129図2）

A-53（第129図3）

A-24（第129図4）

A-74（第129図5）

A-127（第129図6）

A-121（第129図7）

A-11（第129図8）

A-82（第129図9）

A-23（第129図10）

A-80（第129図11）

A-72（第129図12）

A-73（第129図13）

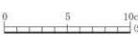
A-52（第129図15）

A-147（第129図16）

A-76（第129図14）

A区基本層10層

A-149（第129図17）



A-75（第129図18）

第132図　A区　基本層8～10層出土遺物 ― 土器類・土製品（写真図版）―

② B区基本層等出土遺物（第4図・22図・第133～139図）

B区では、基本層及び確認調査時に設定したトレンチ内の基本層から縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器が出土した。

以下、その概要について示す。なお、B区基本層各層の詳細については、第Ⅲ章2の記載及び第5・10・11図を参照されたい。

【縄文土器・弥生土器・石器】（第4図・第133～137図）

縄文土器・弥生土器・石器は、B区基本層B5a・b層以下の堆積層 及び B区周辺の確認調査時に設定したトレンチ8(T-8)・トレンチ11(T11)・トレンチ11(T-11)・トレンチ15(T-15)・トレンチ17(T-17)・トレンチ26（T26）～トレンチ30（T30）内の基本層から出土した。B区周辺は、基本層の観察から、古墳時代前期以前は旧河道跡であったと推定され、遺物は旧河道想定範囲内で出土しており、土器類の器面はいずれも磨滅している。遺物は、縄文・弥生土器が692点（8,620g）、石器類は石核1点・不定形石器1点・剥片8点の合計10点（371.2g）出土している。

このうち、図示できたものは、トレンチ8出土の縄文土器 台付鉢（第133図1）、トレンチ11出土の縄文土器 深鉢（第133図2～5）・鉢（第133図6～8）・壺（第138図9）、弥生土器 鉢（第133図10～13・15）・甕（第133図14、第134図3）・壺（第134図2）・深鉢（第134図1）、石核（第136図1）、トレンチ15出土の弥生土器 高坏（第134図4）・蓋（第134図5・6）・甕（第134図7）、石篦（第137図1）、トレンチ30出土の弥生土器 蓋（第134図8）である。

【土師器・須恵器】（第22図・第138・139図）

土師器は、トレンチ26（T-26）からトレンチ（T-28）の間に位置する土坑群（SK1～14）の周辺で出土し、基本層B1層で1点（45g）、基本層B3層で7点（90g）、基本層B4層で21点（1,020g）、土坑群の遺構確認面である基本層B5a・b層の上面で325点（4,075g）、合計354点（5,190g）出土した。出土した土師器はいずれも非ロクロ成形の土師器で、その内訳は、器台2点(130g)・高坏4点（530g）・鉢3点（25g）・壺1点（15g）・甕341点（4,120g）・壺または甕3点（370g）である。これらの土師器は、古墳時代前期の特徴を有するもので、SK1～14土坑の周辺（第22図）から出土していることから、これらの土坑群と関連のある遺物とみられる。

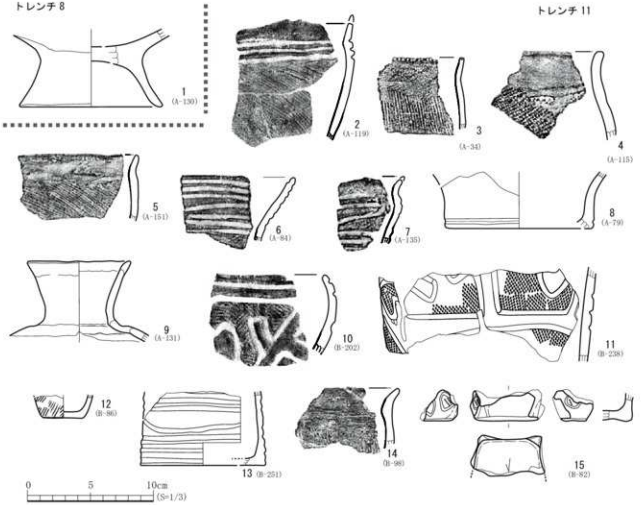
須恵器は、トレンチ27（T-27）壁面のB4層から1点（40g）出土した。破片のため器種・時期は不明である。

このうち、図示できたものは、土師器 器台（第138図1・2）・高坏（第138図3～6）・鉢（第138図7）・壺（第138図9）・甕（第138図8）・壺または甕（第138図12～14）である。

（4）その他の出土遺物（第137～139図）

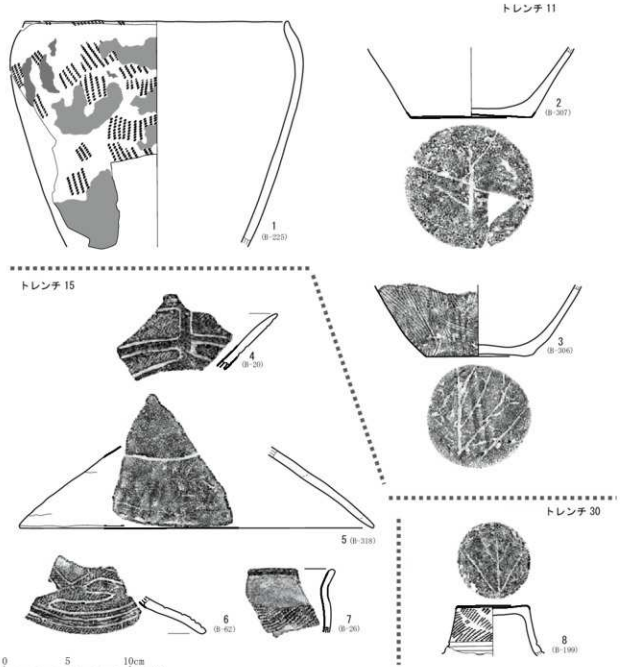
この他、A区の表土・排土から縄文・弥生土器片75点（690g）、石核1点（31.4g）・不定形石器2点（16.5g）・剥片8点(30.8g)、B区の排土・表土から縄文・弥生土器片19点（205g）、土師器甕片65点（505g）・石器剥片2点（95.8g）、SK2北側の攪乱から土師器甕片5点（140g）出土した。

このうち、図示できたものは、A区表土出土の不定形石器（第137図2）、B区SK2北側の撹乱出土の土師器甕（第138図14）である。



No.	層	種別	器種	残存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	T-8	縄文土器	台付鉢	胴部	内外面：ミガキ・ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、脚内面・暗灰色(N3/0)、法量：脚径11.4cm・残存高6.2cm・器厚0.6～1.5cm	A-130
2	T-11	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部突起・口縁部平行沈線文・胴部網撚状文、内面：ナデ、色調：外面・黄灰色(2.5Y5/1)/暗灰色(N3/0)、内面・黄灰色(2.5Y6/1)/褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.3～0.7cm、外面：炭化物付着	A-119
3	T-11	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部刻目・口縁部～頸部ナデ・胴部撚糸L、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.35～0.5cm、外面：炭化物付着	A-34
4	T-11	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ミガキ・胴部縄文LR、内面：ミガキ・磨滅、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.35～0.8cm	A-115
5	T-11	縄文土器	深鉢	口縁部～頸部	外面：口縁部～頸部ミガキ・胴部網撚状文、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(5YR4/1)、法量：器厚0.3～0.7cm、外面：炭化物付着	A-151
6	T-11	縄文土器	鉢	口縁部～頸部	外面：変形工字文ヲ・ミガキ・赤彩、内面：沈線・ミガキ・赤彩、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)/灰黄褐色(10YR5/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：器厚0.3～0.6cm	A-84
7	T-11	縄文土器	鉢	口縁部～胴部	外面：波状口縁・縄文LR～変形工字文、色調：内外面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.6cm、内外面：炭化物付着	A-135
8	T-11	縄文土器	鉢	胴部～底部	外面：ミガキ・沈線文、内面：ミガキ、色調：内外面・黒褐色(10YR3/1)、法量：底径(11.8)cm・残存高4.5cm・器厚0.5～1.1cm	A-79
9	T-11	縄文土器	壺	口縁部～胴部	内外面：ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：口径(8.1)cm・残存高6.4cm・器厚0.4～0.7cm	A-131
10	T-11	弥生土器	鉢	口縁部～胴部	外面：縄文RL・幾何学文、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.5～0.85cm、内外面：炭化物付着、帝年代測定（試料No.1）	B-202
11	T-11	弥生土器	鉢	胴部	外面：疵錯文～幾何学文、内面：ヘラミガキ、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・にぶい黄褐色(10YR4/3)、法量：残存高7.5cm・器厚0.7～0.8cm、内面：炭化物付着、間形状	B-238
12	T-11	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：胴部縄文LR、内面：ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR5/2)、法量：底径3.2cm・残存高1.8cm・器厚0.3～0.6cm	B-86
13	T-11	弥生土器	鉢	胴部～底部	外面：平行沈線文・波状文、内面：ナデ、色調：内外面・褐灰色(7.5YR5/1)、法量：底径(10.0)cm・残存高5.9cm・器厚0.4～1.1cm、間形状	B-251
14	T-11	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ミガキ・胴部網撚状文、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.25～0.8cm	B-98
15	T-11	弥生土器	鉢	底部	外面：縄文LR～幾何学文・ミガキ・磨滅・四隅に隆帯ヲ・赤彩、内面：ナデ、色調：内外面・褐灰色(7.5YR4/1)、法量：残存高2.5cm・器厚0.6～1.2cm、四角形	B-82

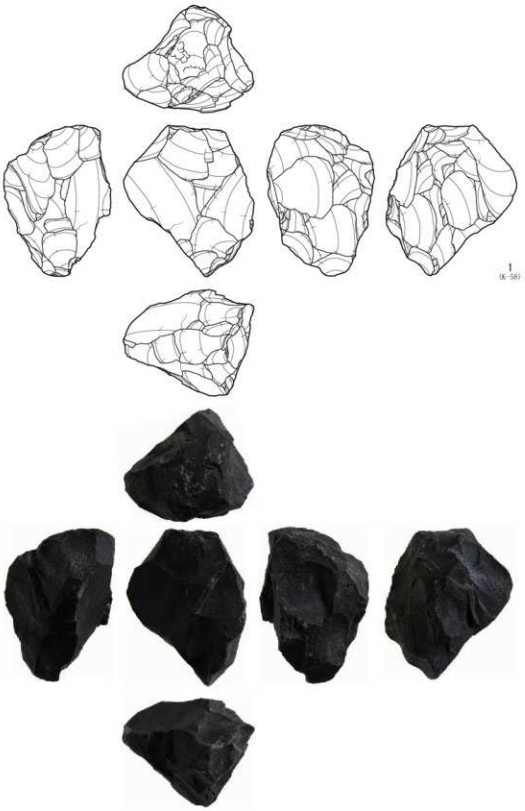
第133図　B区　トレンチ8、トレンチ11 出土遺物（1）



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法（外面・内面）→色調（外面・内面）→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	T-11	弥生土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：口唇部/胴部縄文RL・口縁部～頸部ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/暗灰色(N3/0)、法量：口径(21.0)cm・残存高18.0cm・器厚0.6～0.8cm、内外面：炭化物付着、赤年代測定（試料No.11）	B-225
2	T-11	弥生土器	壺	胴部～底部	外面：胴部ミガキ・底部本葉痕、内面：ミガキ、色調：内外面・褐灰色(10YR5/1)/暗灰色(N3/0)、法量：底径9.8cm・残存高5.6cm・器厚0.4～1.3cm	B-307
3	T-11	弥生土器	甕	胴部～底部	外面：胴部ハケメ/ケズリ・底部木葉痕、内面：ミガキ、色調：内外面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)、法量：底径8.3cm・残存高5.7cm・器厚0.5～1.0cm、内外面：炭化物付着	B-306
4	T-15	弥生土器	高坏	坏部	外面：縄文LR→方形区画文・ミガキ、内面：ミガキ、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(5YR4/1)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.5～0.6cm	B-20
5	T-15	弥生土器	壺	胴部～口縁部	外面：ナデ、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)/黒褐色(10YR3/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)/灰黄褐色(10YR6/2)、法量：口径(28.4)cm・残存高6.5cm・器厚0.4～0.7cm、内面：口縁部付近炭化物付着	B-318
6	T-15	弥生土器	壺	口縁部	外面：縄文LR→幾何字文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.4～0.7cm、内外面：炭化物付着	B-62
7	T-15	弥生土器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部～頸部ミガキ・胴部縄文LR、内面：ミガキ、色調：内外面・暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.4～0.5cm	B-26
8	T-30 826層	弥生土器	壺	天井部～胴部	外面：縄文RL→平行沈線文、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)/暗灰色(N3/0)、法量：天井径5.8cm・残存高4.0cm・器厚0.8～0.6cm	B-199

第134図　B区　トレンチ11 出土遺物（２）、トレンチ15・30出土遺物

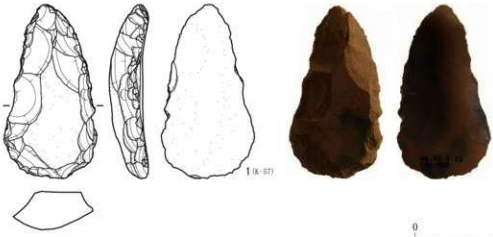
第135図　B区 トレンチ8・11・15・30 出土遺物 ― 土器類（写真図版）―



No.	出土	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	T-11	石核	砂岩	6.01	5.24	4.17	114.3		K-58

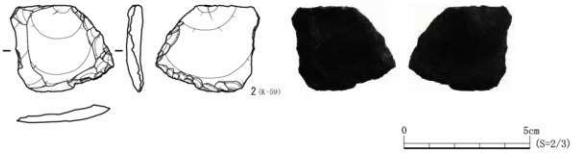
第136図　B区 トレンチ11 出土遺物（２）

T-15



No.	出土	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
1	T-15	石鏃	珪質凝灰岩	6.9	3.7	1.55	41.9		K-57

A区表土



No.	出土	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	登録No.
2	A区表土	不定形石器	砂岩	3.44	4.11	9.6	9.0		K-59

第137図　B区トレンチ15・A区表土出土遺物

No.	層	種別	器種	残存	特徴【法量（外面・内面）→色調（外面・内面）→胎土→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層64層 (T-27内)	土師器	器台	受部	外面：ハケメ→ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ・潰滅、内面：ナデ・潰滅、色調：外面：にぶい黄橙色(10YR7/2)、内面：にぶい黄橙色(10YR7/2)/にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(8.8)cm・残存高2.2cm・器厚0.4～1.1cm、脚部欠損、貫通孔有無不明	C-83
2	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	器台	脚部	外面：ヘラミガキ・赤彩、内面：ヘラ削り・ハケメ、色調：外面・明赤褐色(2.5YR5/6)、内面・浅黄橙色(7.5YR8/4)、法量：脚部径10.7cm・残存高4.9cm・器厚0.4～0.8cm、受部欠損、円窓3個、貫通孔有無不明	C-27
3	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	高坏	脚部	外面：ヘラミガキ、内面：ヘラナデ→ハケメ、色調：外面・浅黄橙色(7.5YR8/6)、内面・黄橙色(10YR8/6)、法量：脚部径(9.6)cm・残存高7.6cm・器厚0.3～1.8cm、坏部欠損、円窓3個	C-26
4	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	高坏	脚部	外面：ヘラミガキ、内面：ヘラナデ、色調：内外面・浅黄橙色(10YR8/4)、法量：残存高10.0cm・器厚0.9～1.7cm、坏部欠損、円窓一部残存	C-28
5	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	高坏	脚部	外面：ヘラミガキ、内面：ナデ・ヘラナデ、色調：外面・浅黄橙色(7.5YR8/6)、内面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：残存高9.5cm・器厚0.5～1.3cm、坏部欠損	C-29
6	基本層85a層 (T-28内)	土師器	高坏	脚部	外面：脚部ヘラミガキ、内面：坏部ヘラミガキ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・灰色(N4/0)、法量：残存高6.9cm・器厚0.5～3.4cm	C-44
7	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	鉢	口縁部	内外面：ヘラミガキ、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR7/3)、法量：器厚0.3～0.4cm、胎土：密	C-81
8a 8b	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	甕	口縁部～底部	外面：口縁部～頸部ヨコナデ→ヘラミガキ/ハケメ・胴部(上半)ナデ→ヘラミガキ・胴部(下半)～胴部下端ヘラ削り、内面：口縁部～頸部ヨコナデ→ハケメ→ナデ・胴部～底部ヘラナデ、色調：外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面：浅黄橙色(10YR8/3)、法量：口径(12.0)cm・残存高9.0cm(口縁部～胴部)/3.7cm(胴部～底部)・底径5.0cm・器厚0.3～0.6cm	C-19a C-19b
9	基本層85b層 (T-27東側)	土師器	壺	胴部上半	外面：ハケメ→ヘラミガキ・赤彩(一部残存)、内面：粗オサエ・ヘラナデ、色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、法量：残存高2.5cm・器厚0.3～0.4cm	C-82
10	基本層85b層 (T-27東側)	土師器	甕	口縁部	外面：ハケメ→ヨコナデ、内面：ハケメ、色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)/にぶい赤褐色(2.5YR5/4)、法量：口径(25.2)cm・残存高4.3cm・器厚0.5～0.8cm	C-57
11	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ハケメ、内面：口縁部ハケメ→ヨコナデ・胴部ナデ、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：残存高7.2cm・器厚0.4～0.8cm	C-80
12	基本層85a層 (T-27東側)	土師器	甕or壺	底部	外面：ヘラ削り、内面：ヘラナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR5/2)、内面：灰黄褐色(10YR6/2)、法量：底径5.2cm・残存高2.5cm・器厚0.4～1.3cm	C-84
13	基本層85b層 (T-27東側)	土師器	甕or壺	胴部～底部	外面：胴部ハケメ→ヘラ削り・胴部下端ヘラ削り、内面：胴部ヘラナデ・底部ナデ、色調：内外面・灰黄褐色(10YR6/2)、法量：底径(6.8)cm・残存高6.2cm・器厚0.4～1.2cm	C-63
14	撹乱 (SK2北側)	土師器	甕or壺	胴部～底部	外面：胴部ハケメ→ナデ・底部輪台技法ナ、内面：ヘラナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/4)、法量：底径6.0cm・残存高5.4cm・器厚0.4～0.6cm	C-42

第138図　中筋遺跡　B区　基本層・撹乱出土遺物（１）ー土師器ー

第139図　中筋遺跡　B区　基本層・撹乱出土遺物（２）ー土師器・写真図版ー

現在の中筋遺跡（2015. 3. 11・南東から撮影）

現在の中筋遺跡（2015. 3. 11・北東から撮影）

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　はじめに

１．自然科学分析の項目と分析目的

今回の調査では、次の 12 項目について自然科学分析を実施した。それぞれの分析項目、分析目的、分析機関については以下のとおりである。

No	分析項目	分析目的	分析機関	分析結果
1	**洪水砂層（A 区基本層 5B 層ほか）の粒度分析・放射性炭素年代測定**	・洪水砂層の起源及び年代の推定	松本秀明氏（東北学院大学）	第Ⅳ章第２節 P167～179
2	**砂層（A 区基本層 5B 層ほか）の建築分析**	・洪水砂層の成因及び堆積環境の推定	㈱古環境研究所	第Ⅳ章第３節 P181～192
3	**A 区基本層のプラント・オパール分析**	・水田土壌及び水田分布域の推定	㈱古環境研究所	
4	**A 区基本層及び水田土壌の花粉分析**	・水田土壌に含まれる花粉の分析 ・調査地点周辺の植生の推定	古代の森研究舎	第Ⅳ章第５節 P197～207
5	**A 区基本層の大型植物化石分析**	・調査地点周辺の植生の推定		
6	**A 区基本層 4A 層の火山灰分析**	・基本層中に混入したテフラの分析	㈱古環境研究所	第Ⅳ章第４節（P193～196）
7	**加工材（P1・3 木杭跡、SK1 板材）の樹種同定・放射性炭素年代測定**	・加工材の樹種推定 ・加工材の年代推定	古代の森研究舎	第Ⅳ章第６節 P209～213
8	**土器内面付着炭化物の放射性炭素年代測定、炭素・窒素安定同位体分析**	・土器使用時に付着した炭化物の年代推定 ・土器内面付着炭化物の由来推定	㈱加速器分析研究所	第Ⅳ章第７節 P215～220
9	**土器外面付着炭化物の放射性炭素年代測定**	・土器使用時に付着した炭化物の年代推定	㈱加速器分析研究所	第Ⅳ章第８節 P221～226
10	**B 区基本層（B18 層・B20 層・B29 層）出土植物遺体の放射性炭素年代測定**	・基本層堆積時に混入した植物遺体の年代及び土壌堆積年代の推定		
11	**出土土器（縄文土器・弥生土器・土師器）の圧痕分析**	・土器製作時に付着した種実圧痕の分析	高瀬克範氏（北海道大学）	第Ⅳ章第９節 P227～233
12	**出土石器（石包丁・板状石器）使用痕分析**	・石器の機能及び用途推定	高瀬克範氏（北海道大学）	第Ⅳ章第 10 節 P235～244

２．試料採取方法と採取地点

上記分析のうち、発掘調査現場で試料採取が必要なものについて、No.6・10 の分析試料は発掘担当者、その他の分析試料は分析機関が直接発掘調査現場で試料を採取した。それぞれの分析において発掘調査現場で試料を採取した地点は第 6・8・10・16・140 図のとおりである。

３．その他

この他、今回の調査では、洪水砂層を含む土層断面の剥ぎ取り（土層転写）を実施した。土層の剥ぎ取りにあたっては、及川規氏（東北歴史博物館）に現地指導・協力をいただいた。剥ぎ取った土層については、業務委託により展示加工を行い、現在は山元町教育委員会で保管している。

写真１

写真２

写真３

写真４

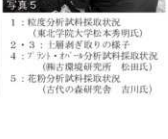
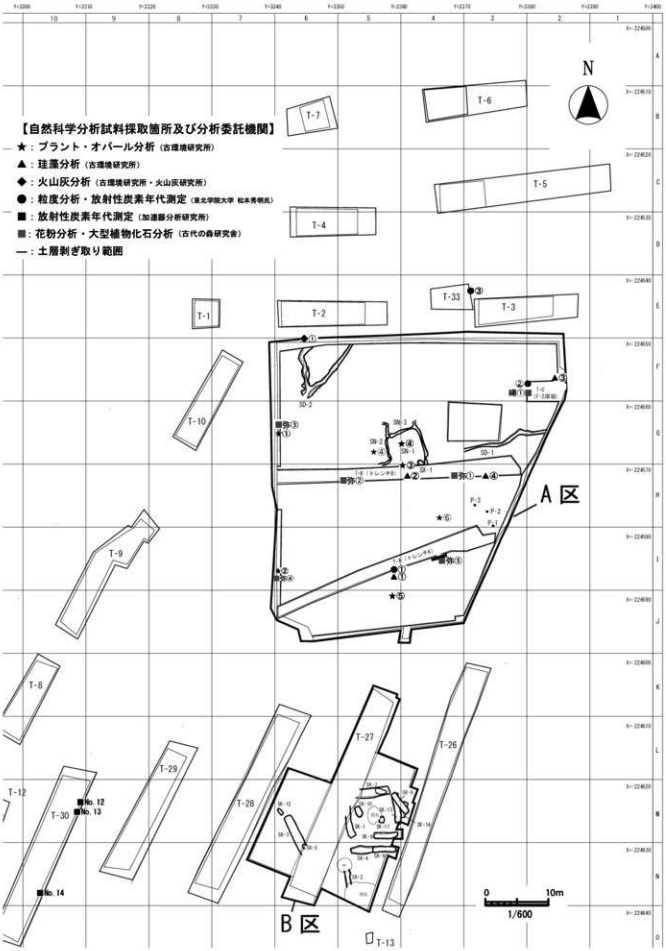


写真５

１：粒度分析試料採取状況
（東北学院大学松本秀明氏）
２・３：土層剥ぎ取りの様子
４：テラ１・ナパ→分析試料採取状況
（㈱古環境研究所　松田氏）
５：花粉分析試料採取状況
（古代の森研究舎　吉川氏）



第140図　中筋遺跡 自然科学分析　試料採取箇所（平面図）※断面図については第6・10・16図参照

第２節　山元町中筋遺跡の土層断面と大規模イベント堆積物

東北学院大学地域構想学科　松本秀明・遠藤大希

１．はじめに

本稿は 2013 年 10 月に山元町中筋遺跡において実施した土層断面調査と，その後に行った堆積物の粒度分析結果および放射性炭素年代測定結果をもとに，過去約 5 千年間の土石流，津波等のイベント堆積物について考察した結果を報告するものである。

山元町中筋遺跡は沖積低地としての仙台平野と亘理丘陵麓部とが接する部分に位置し（図１），海抜高度は 8～9m（国土地理院災害復興計画基図による）である。仙台平野は南北約 50km におよぶ沖積低地であり，東西幅は中央部で 10km，南部ではしだいに幅を減し，山元町磯浜付近まで連続する。地盤高は概ね 5m 未満で低平であり，海岸部には海岸線にほぼ並行に延びる浜堤列が明瞭に分布している。浜堤列は連続性や堤間湿地の深度をもとに 3～4 列に分類される。内陸側から第Ⅰ浜堤列，第Ⅰ’浜堤列，第Ⅱ浜堤列，第Ⅲ浜堤列群と称される。第Ⅰ浜堤列は 5000～4500 年前にかけて，第Ⅰ’浜堤列は 3100～3000 年前にかけて，第Ⅱ浜堤列は 2600～1700 年前にかけて，そして第Ⅲ浜堤列群は 800～700 年前から現在にかけて成長し形成されたと考えられてきた（松本，1984）。その後，藤本・松本（2012）は阿武隈川以南の浜堤列の分類を再検討し，松本（1984）の第Ⅱ浜堤列は阿武隈川以北の第Ⅰ’浜堤列に，第Ⅲ浜堤列群のうち最も内陸側のⅢａ列（伊藤，2006）を第Ⅱ浜堤列相当と修正した。また，形成年代をそれぞれ「3000 年前前後」，「2500 年前には既に形成されていた」ことを確認した。なお，図１に示した浜堤列の分類は藤本・松本（2012）に従ったものである。一方，南北に連なる亘理丘陵は頂部の高度が 200～300m であり，主尾根に沿って花崗岩類が分布する。花崗岩類は風化により真砂化し，水を含むと流動的になり土石流を発生させることがある。規模の大きな土石流痕跡としては亘理町中心街地部分において第Ⅰ浜堤列を山側から覆うように広がる複数の土石流性緩斜面が認められる。

２．中筋遺跡周辺の地形

中筋遺跡西方には亘理丘陵が位置し，主尾根部には白亜紀と考えられている花崗岩類が分布している。前述の通り，花崗岩類表層部は風化により真砂化し，豪雨等により水を含むことで斜面下方に流動する。流動した真砂は土石流となり花崗岩岩片を多く取りこみながら谷沿いに流れ下る。流下した土砂は谷を埋める緩やかな斜面としての土石流性緩斜面を形成する。中筋遺跡およびその周辺地域には丘陵地内で発生した土石流が流下し堆積した土石流性緩斜面が認められる（図２）。中筋遺跡付近の土石流性緩斜面は遺跡範囲を通過しさらに東方の仙台平野にも一部張り出していることから，遺跡は土石流性緩斜面上に位置していると考えられる。中筋遺跡を含み西方に広がる土石流性緩斜面の勾配は 20/1000 前後であり，中筋遺跡より東方の緩斜面の勾配は 2～3/1000 である。砂礫を主体とする土石流堆積物と沖積低地を構成する泥質堆積物とは地下で指交関係にあり，表層部の土石流堆積物は沖積低地を構成するで泥質な堆積物に覆われている部分も多いと考えられる。したがって，中筋遺跡付近は沖積低地を構成する泥質堆積物と土石流性堆積物が累重してい

ると考えられる。なお，土石流性緩斜面と沖積低地との境界部は協和的であり，両者の境界を明瞭に示すことは困難である。

3．遺跡内の土層断面観察および堆積物分析

発掘調査地内の３地点（図３）で土層断面観察と堆積物分析用の試料採取を行った。地点１については南壁で，地点２については西壁で土層断面観察と試料採取を行った。地点３では地表から5mおよぶ深掘り調査を行い東壁で断面観察と試料採取を行った。

（1）地点１（南壁）

図４-1 に地点１の土層断面写真を，図４-２に柱状図と粒度分析結果および放射性炭素年代測定結果を示した。地表から（以下同様）32 ㎝には黒色のシルト混じり有機質粘土層が，32～38 ㎝には細粒砂を混入する有機質の粘土混じりシルト層が堆積している。38～46 ㎝には淘汰良好な細粒砂層が認められる。その層厚は８㎝前後であり，直上の粘土混じりシルト層中に混じり込んでいる細粒砂は同層由来の可能性がある。46～63 ㎝には粘土混じりシルト層が堆積しているが，下半部には直径１～２㎝の角礫を含む砂礫が挟在する。同砂礫は下位層上面の凹部に厚く堆積する特徴をもち，明瞭な層構造は認められない。63～71 ㎝には腐植混じり粘土層が認められ，71～80 ㎝には細礫を含む粗粒砂層が堆積している。その下位には 80～83 ㎝に有機質粘土層が一部に認められ，83～94 ㎝に直径１～２㎝の花崗岩片を含む粗粒砂層が堆積している。94 ㎝から下位は角礫を主体とする砂礫層となる。

地表から 46～63 ㎝の下部に認められる砂礫堆積層や 71～80 ㎝，83～94 ㎝に堆積する粗粒砂や砂礫は流水ラミナが確認できない乱堆積の状況を呈していることから，土石流性堆積物と判断される。一方，38～46 ㎝に堆積する細粒砂層は淘汰良好であり，薄層であるにもかかわらず水平方向に連続している状況から，土石流等により上流域から供給された堆積物とは考えにくい。同層の堆積時の地形環境を考察するため，堆積物の粒度分析と放射性炭素年代測定を行った。その詳細は以下の通りである。

１）砂層の粒度分析結果

粒度分析は 1/4φ間隔にそろえた篩セットを用い，風乾させた約 50g の試料を電磁式篩振盪機にて 30 分振盪させることで篩い分けを行った。各篩にトラップされた砂粒の重量を 1/1000 g まで計測し，Friedman（1961）の示した積率法により平均粒径，淘汰度を算出した。粒径は粒度分析で通常用いられるφスケールを用いて示した。φスケールは 粒径 =1/(2^φ）で示され，1φは直径 0.5mm，2φは 0.25mm，3φは 0.125mm，4φは 0.063mm となる。したがって，φスケールで示された平均粒径が小さい値をとる場合には粒径は大きく，大きな値をとる場合には粒径が小さいことを示している。淘汰度は粒径の標準偏差であり，粒径が全く均一である場合には０であり，0.5 前後の場合には淘汰良好，0.7 以上の値をとる場合には一般に淘汰不良と判定される。

地表から 38～46 ㎝に堆積する砂層の粒度分析結果は，平均粒径が 2.62φ，淘汰度は 0.60 であった（図４-２）。一方，図５は南北 50km におよぶ仙台平野の海浜において採取された海浜堆積物を汀線堆積物と風成堆積物（砂丘堆積物）とに分けて粒度分析を行い，その結果を平均粒径と淘汰度との相関図で示したものである（Matsumoto, 1985）。さらに，図５には松本（1977）に示された河床や洪水堆積物（自然堤防堆積物）の分析結果を加えて表示した。図５によると，海浜の風成堆積物の平均粒径は 2.5～1.0φ，淘汰度は 0.4～0.7

の値をとる特徴があるのに対し，汀線の堆積物は平均粒径 2.5～-0.5 φの値，淘汰度は 0.4～1.5 付近までの値を示し，極めてばらつきが大きいことが分かる。一方，河床や洪水堆積物は様々な平均粒径を示すものの，淘汰度は 0.7 を大きく越えるものが多いことが示される。

仙台平野の海浜に堆積する砂の粒度組成と当該砂層の粒度組成を比較すると，平均粒径は仙台平野の海浜堆積物より細粒であるものの，淘汰度が 0.60 の値を示すことから，海浜の砂丘堆積物の特徴に類似している。中筋遺跡周辺に砂層を供給する地形現象として考えられるのは，①土石流，②土石流堆積物からの洗い出し，③河川洪水，④風による砂丘の形成，そして⑤津波である。このうち土石流堆積物は母岩の岩片を含むことが多く，後に示すように淘汰が悪いのが特徴であることから除外される。河川洪水による堆積物は淘汰が悪く，地表を彫り込んでレンズ状に堆積することも多く，当該砂層の分布のような薄層として面的に堆積することはないため除外される。海岸背後の砂丘を形成する堆積物は層厚が厚く，地表に大きな起伏を残すのが一般的であることから，これも除外される。したがって，当地点に淘汰良好な細粒堆積物を供給する現象として考え得るのは津波である。同層が津波堆積物であるか否かを判定するためには，さらに広範囲での調査や放射性炭素年代測定を実施することが必要である。

2）放射性炭素年代測定結果

当該砂層の直上および直下に堆積する粘土層中の腐植物について放射性炭素年代測定を行った（図 4 - 2）。その結果，砂層直上（地表から 38 ㎝）の試料については 2020±30yrBP（IAAA-121488），直下の試料については 2070±30yrBP（IAAA-121489）の測定結果が得られた。これらのことから，当該砂層は約 2000 年前に堆積した砂層であると考えられ，仙台市若林区の沓形遺跡およびその周辺で確認されている弥生時代の津波堆積物(松本ほか，2013）に対比される可能性が高い。

そのほか，71～80 ㎝，83 ㎝以深にみられる土石流堆積物中には部分的に有機質粘土層が挟在（80～83 ㎝）しているが，同層の放射性炭素年代測定を行った結果，2480±30yrBP（IAAA-121490）の測定結果が得られた。このことから，71～80 ㎝および 83 ㎝以深に堆積する土石流堆積物は約 2500 年前に複数回発生した土石流による堆積物と考えられる。

（2）地点 2（西壁）

図 6 - 1 に地点 2 の土層断面写真を，図 6 - 2 に柱状図と放射性炭素年代測定結果を示した。西壁断面の上端から 55 ㎝までは花崗岩岩片を多量に含む砂礫層，その下位 55～60 ㎝には花崗岩岩片入り中粒砂層が堆積している。60～95 ㎝前後には腐植物の薄層を多く含む淘汰良好な細粒砂層が厚く堆積している。同層下面は下位層上面の起伏を埋めるように堆積している。95～103 ㎝には花崗岩岩片を多量に含む砂礫層が，103～150 ㎝には腐植物を混入した有機質粘土層が堆積している。同層中 124～126 ㎝には細粒砂の薄層が挟在する。さらに 150 ㎝以深は花崗岩類岩片からなる砂礫層である。

1）堆積時の地形環境の判断

0～60 ㎝，95～103 ㎝，150 ㎝以深の堆積物は花崗岩類の角礫岩片が多く含まれる粗粒砂～砂礫層であることから土石流堆積物と判断される。また，103～150 ㎝に堆積する腐植質粘土層は後背湿地堆積物と判断される。また，60～95 ㎝に堆積する淘汰良好細粒砂層は腐植物薄層を複数枚挟むことから，ある程度の水流のある水底での堆積物と判断されるが，

堆積時の地形環境は現段階では解釈できない。

2）放射性炭素年代測定結果

地点2の土層断面において3点の放射性炭素年代測定を行った。表層から60 cm，95 cmの深度にみられる腐植物薄層，そして95～103 cmに堆積する土石流堆積物直下の腐植物を試料とした。それらの年代値は上位から 2490±30yrBP（IAAA-121492），2610±30yrBP（IAAA-121493），2590±30yrBP（IAAA-121491）である。これらの試料採取位置と堆積物との関係から，0～60 cm，95～103 cmに堆積する2枚の土石流堆積物は2600～2500年前の短い期間に堆積したものと判断される。

（3）地点3（東壁）

地点3の土層断面写真，柱状図と年代測定結果，堆積物の粒度分析結果をそれぞれ図7-1，2，3に示した。地表から144 cmまでは土層断面が乱され堆積物の状態は確認できないが，地表から144～214 cmには角礫を主体とする砂礫層が認められる。礫の大部分が花崗岩岩片で構成されていることから，土石流性堆積物と判断される。その下位の 214～347 cmまでは腐植物を多量に混入する粘性の大きな腐植混じり粘土層である。同層中には 248～252 cm，266～267 cmにそれぞれ細礫混じりの粗粒砂の薄層が認められる。これらの粗粒砂層は淘汰が悪いことから，土石流堆積物末端部の堆積層である可能性が高い。その下位には347～370 cmと386～400 cm，そして413～443 cmにそれぞれ層厚23 cm，14 cm，30 cmの細粒砂層が堆積している。これら3枚の砂層について堆積時の地形環境を推定するために粒度分析を行った。詳細は以下の通りである。

1）粒度分析

347～370 cmの砂層（砂層A）は平均粒径が2.54 φ，淘汰度は1.05であり（図7-3），386～400 cmの細粒砂層（砂層B）は平均粒径が2.77 φ，淘汰度は0.60である。さらに413～443 cmに堆積する細粒砂層（砂層C）は平均粒径が2.99 φ，淘汰度は0.57を示す（図7-3）。これらの指標値およびヒストグラムが示すように，砂層Aは粗粒なものから細粒なものまでを含み淘汰が悪いこと，そして土層断面観察では粘土分を多く含んでいることから土石流堆積物の洗い出し堆積物の可能性が高い。これに対し，砂層Bと砂層Cは平均粒径が細かく，淘汰も良好であることから海浜起源の堆積物である可能性が高い。また，453～460 cmに堆積する細礫混じりの粗粒砂の平均粒径は0.60 φ，淘汰度は1.10の値を示す。粒径が粗く淘汰不良な堆積物であることから，土石流による堆積物であると判断される。

2）放射性炭素年代測定結果

地点3では地表から214 cm，347 cm，386 cm，447 cm，そして460 cmから採取した試料について放射性炭素年代測定を行った（図7-2）。地表から144 cmの粘土層中の腐植物から2550±30yrBP（IAAA-121497）の年代値が得られた。この年代値は地点1の地表から 71 cm以深にみられる土石流性堆積物や地点2の0～60 cm，95～103 cmに確認された土石流堆積物と同年代であり，同時代の土石流堆積物が遺跡範囲一帯に堆積したと考えられる。

また，地表から347～370 cmに堆積する淘汰不良な土石流堆積物（砂層A）の年代を推定するために347 cmの腐植物の年代測定を行った。測定値は3820±30yrBP（IAAA-130826）であり，約3800年前に小規模な土石流が地点3付近に達した可能性がある。

さらに，砂層B，砂層Cの堆積年代を推定するためにそれぞれ地表から386 cm，447 cmから腐植物を採取し，放射性炭素年代測定を行った。年代値はそれぞれ 4360±30yrBP

（IAAA-130826），4690±30yrBP（IAAA-130827）である。砂層 B，砂層 C は粒度の特徴は海浜起源と判断されることから津波により堆積した堆積物である可能性もあるが，約 4500～4300 年前の海岸は中筋遺跡から 200～数百メートルの位置にあったと考えられることから，これらの淘汰良好な細粒砂は高潮による堆積物，あるいは海浜背後の砂丘を構成する砂層に関連する堆積物である可能性がある。

地表から 453～460 cmに堆積する土石流堆積物については，その直下の 460 cm付近の腐植物から 4890±30yrBP（IAAA-121496）の年代値が得られていることから，約 5000 年前にも土石流の発生があった可能性が考えられる。

4．堆積層中に見いだされるイベント堆積物。

以上に示された地点 1，2，3 における堆積物の層相観察と堆積物の分析結果から，中筋遺跡におけるイベントの発生は以下の様に整理される。

約 4800 年前：土石流発生（地点 3 より）の可能性がある。

約 4700 年前：津波あるいは高潮等による風成堆積物の侵入（地点 3 より）。ただし，約 4700 年前の海岸線は，中筋遺跡に隣接した位置にあ（東方 200～数百メートル）ることから，津波と判断するのは極めて困難である。

約 4300 年前：津波あるいは高潮等による風成堆積物の侵入（地点 3 より）。ただし，約 4300 年前の海岸線は，中筋遺跡に隣接した位置にあ（東方 200～数百メートル）ることから，津波と判断するのは極めて困難である。

約 3800 年前：土石流発生（地点 3 より）の可能性がある。

約 2500 年前：大規模土石流が複数回発生した可能性が大きい（地点 1，2，3 より）。

約 2000 年前：年代値から，仙台市若林区の沓形遺跡で見いだされた津波堆積物に対比される可能性が高い（地点 1 より）。したがって，中筋遺跡においても約 2000 年前に大津波が来襲した可能性が指摘される。
一方，堆積物の淘汰は良好であるが，粒径が現在の海浜のそれと比較すると細かい，という点についてさらに吟味が必要と考えられる。

謝辞：本調査・研究を実施するにあたり，山元町生涯学習課の山田隆博氏には多くのご指導と便宜を図って頂いたことに深く感謝申し上げます。また，堆積物の年代測定にあたり，科学研究費補助金（基盤研究（C），研究代表者　松本秀明）の一部を使用した。

文　献

伊藤晶文（2006）：仙台平野における歴史時代の海岸線変化．鹿児島大学教育学部研究紀要（自然科学編），57，1-8

藤本展子・松本秀明（2012）：阿武隈川河口付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討．人間情報学研究，17，29-40

松本秀明（1977）：仙台付近の海岸平野における微地形分類と地形発達　－粒度分析法を用いて－．

東北地理，29，229-237
松本秀明・熊谷真樹・吉田真幸（2013）：仙台平野中部にみられる弥生時代の津波堆積物．
人間情報学研究，18，79-94
松本秀明（1984）：海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動．地理学評論，57，720-738
Matsumoto（1985）：Beach ridge ranges and the Holocen sea-level fluctuations on Alluvial coastal plains,
North-east Japan. Science reports of Tohoku Univ., 7th series（Geography）,35, 15-46
Friedman, G. M.（1961）：Distinction between dune, beach and river sands from their textural characteristics.
Journal of Sedimentary Petrology, 31, 514-529

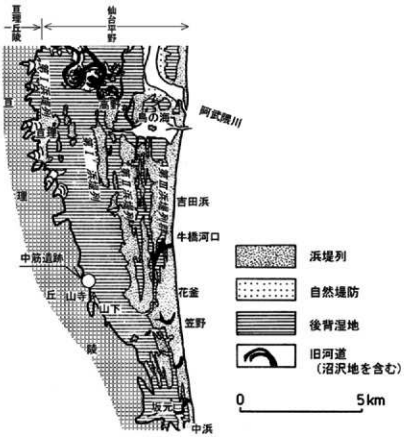


図１　仙台平野南部の地形

地形分類は松本（1984），
浜堤列分類は藤本・松本（2012）による

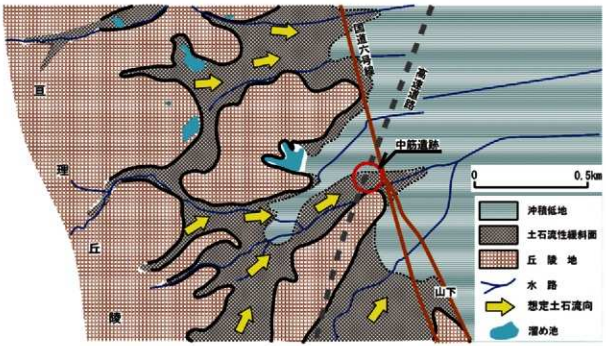


図２　中筋遺跡周辺の地形

図３　中筋遺跡　堆積物調査地点

図４－１　中筋遺跡　調査地点１の土層断面（北壁）

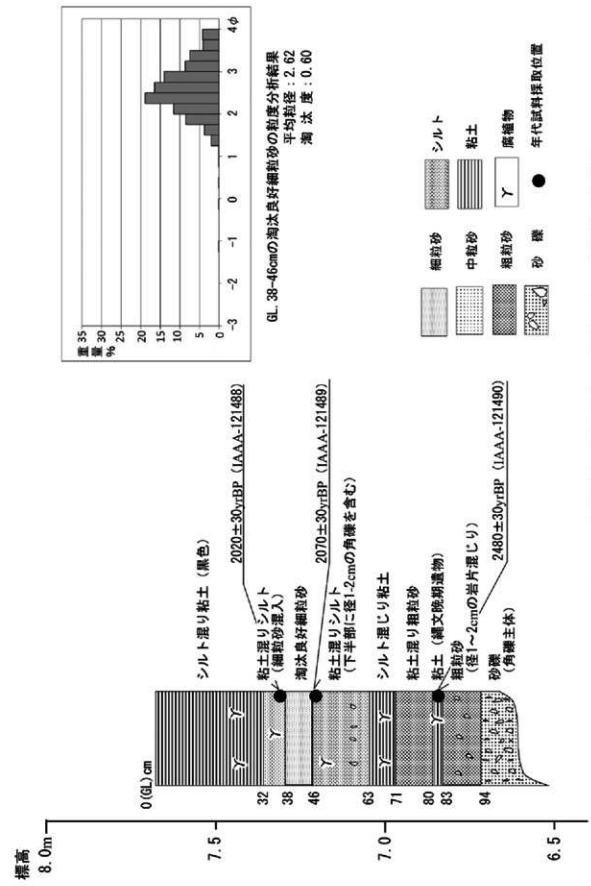


図４－２　中筋遺跡　調査地点１の柱状図および堆積物分析結果

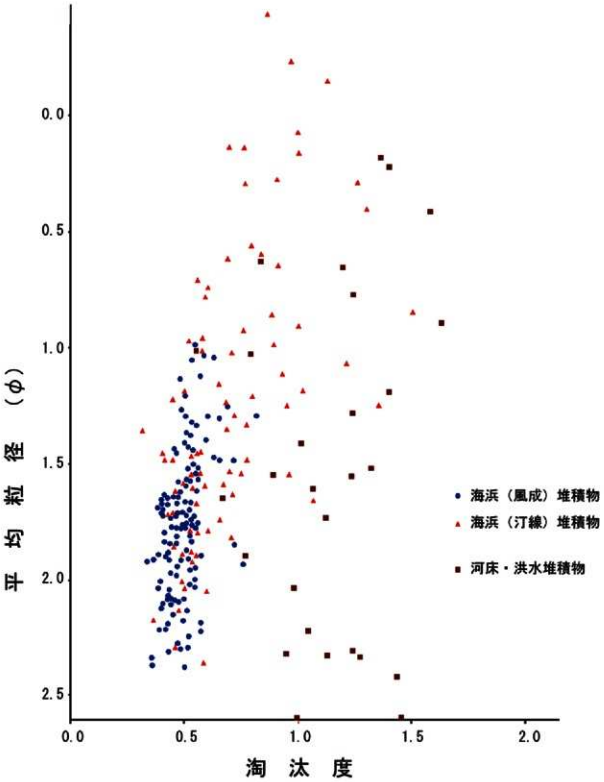


図５　仙台平野の海浜堆積物および河床・洪水堆積物の粒度組成

Matumoto(1985)による

図６－１　中筋遺跡　調査地点２（西壁）の土層断面

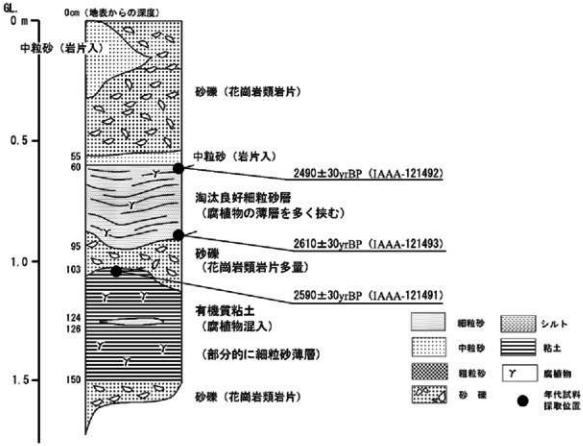


図６－２　中筋遺跡　調査地点２（西壁）柱状図および年代測定結果

砂礫（花崗岩角礫主体）

粘土（水平筋状腐植物混

細粒砂

粘土（腐植物混り）

細粒砂

粘土（腐植物多量，粘性

細粒砂（粘土分含む）

粘土（腐植物混り）

淘汰良好細粒砂

粘土（腐植混り）

淘汰良好細粒砂

粘土（腐植物混り）

粗粒砂（礫混り）

粘土（腐植混り）

図７－１　中筋遺跡　調査地点３の土層断面（東壁）

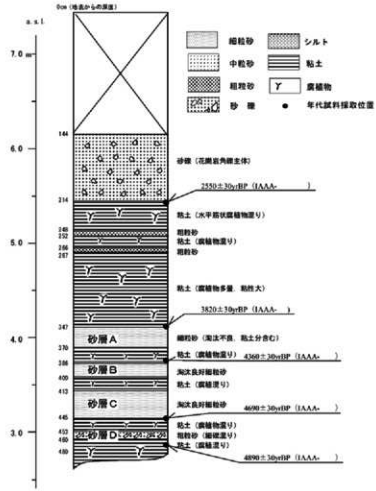
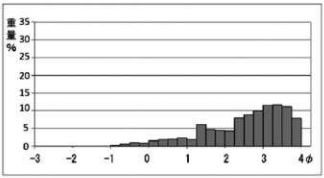


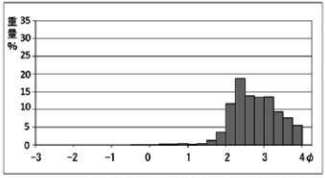
図７－２　中筋遺跡　調査地点３の柱状図および年代測定結果



平均粒径：　2.549　淘汰度：　1.053　歪　度：　-0.917

砂層A

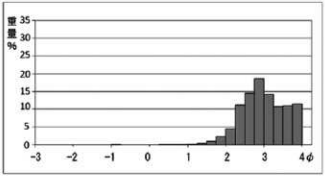
地表から347～370cmに堆積する細粒砂層の粒度分析結果
平均粒径　2.55φ，淘汰度　1.05



平均粒径：　2.769　淘汰度：　0.899　歪　度：　-0.283

砂層B

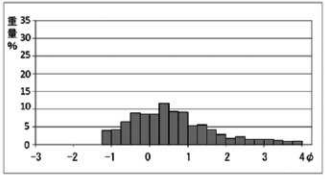
地表から386～400cmに堆積する細粒砂層の粒度分析結果
平均粒径　2.77φ，淘汰度　0.60



平均粒径：　2.988　淘汰度：　0.67　歪　度：　-0.368

砂層C

地表から413～445cmに堆積する細粒砂層の粒度分析結果
平均粒径　2.99φ，淘汰度　0.57



平均粒径：　0.604　淘汰度：　1.1　歪　度：　0.796

砂層D

地表から453～460cmに堆積する砂礫層の粒度分析結果
平均粒径　0.60φ，淘汰度　1.10

図７－３　中筋遺跡　調査地点３の粒度分析結果

第３節　中筋遺跡Ａ区における自然科学分析報告

株式会社古環境研究所

１．はじめに

中筋遺跡は、宮城県亘理郡山元町鷲足字中筋に所在し、仙台平野南部の鷲足川北岸の沖積平野上に立地する。発掘調査において、縄文時代晩期の遺物包含層、弥生時代中期中葉の水田跡・遺物包含層、古墳時代前期の土坑などが検出された。また、これら以外にも縄文時代晩期の洪水跡とみられる砂層、弥生時代中期の洪水堆積層（上部は河川起源の洪水層、下部は洪水砂層？）が確認された。

ここでは、弥生時代中期中葉の水田跡における稲作の検証とその広がりを確認することを目的にプラント・オパール分析を行う。また、縄文時代晩期の洪水砂層、弥生時代中期の洪水砂層の成因を検討するために珪藻分析を行う。

２．プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

（１）試料

調査地点は、調査区西壁北側（①地点）、同南側（②地点）、調査区中央（③地点、④地点）、南側検出面（⑤地点）、中央部南検出面（⑥地点）の６地点である。

分析対象は、№１地点では4B層、6B層、6D層の３層準、№２地点～№６地点では6B層である。

（２）方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに直径約40μｍのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おも

な分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山，2000）。

（3）結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 、図 1 に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

イネは①地点の 4B 層と 6B 層、②～④地点の 6B 層で検出されている。プラント・オパール密度はいずれもやや低い値である。ヨシ属はすべての試料で検出されている。②地点の 6B 層で高い密度である以外はやや低い密度である。ススキ属型もすべての試料で検出されている。①地点の 4B 層、②地点、③地点、④地点の 6B 層では高い密度である。タケ亜科では、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型の各類群がすべての試料で検出されているが、いずれも低い密度である。

（4）中筋遺跡Ａ区における稲作と周辺植生

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料 1 g あたり 5,000 個以上の密度で検出されれば、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし仙台平野では、これまでの調査で密度が 3,000 個/g 程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは 3,000 個/g を目安として検討する。

6B 層では、イネは①～④地点で検出されている。プラント・オパール密度は 600～1,800 個/g といずれもやや低い値か低い値である。ただし、③地点と④地点では発掘調査において畦畔が確認されており、③地点では密度が 1,800 個/g と他所よりも高い値である。このことから、③地点および④地点では 6B 層において稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、プラント・オパール密度がやや低いことから、耕作期間は短かったと推定される。①地点と②地点ではプラント・オパール密度が低いことから、これらの地点で稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。ここで検出されたプラント・オパールは他所から混入したものと思われる。以上、6B 層の時期の当該調査区では③地点と④地点一帯で水田稲作が営まれていたとみられる。ただし、水田の分布域はあまり広くなかったようである。

4B 層では、イネは①地点で 1,200 個/g の密度で検出されている。密度がやや低いことから、本地点で稲作が行われていた可能性はあるものの、他所からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

イネ以外の分類群では、②地点の 6B 層でヨシ属が高い密度であり、優勢となっている。このことから、6B 層堆積時の②地点近辺は湿った環境であったと推定される。なお、①地点の 4B 層、②地点、③地点、④地点の 6B 層ではススキ属が比較的高い密度で検出されており、これらの地点周辺にはススキ属が生育していたと考えられる。

表1　山元町中筋遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼層位		①地点			②地点	③地点			④地点		⑤地点	⑥地点
		4B	6B	6D	6B	6B	6B	6B	6B	6B	6B	6B
イネ科	Gramineae (Grasses)											
イネ	*Oryza sativa*	12	6		6	18	18	12	6	6		
ヨシ属	*Phragmites*	6	6	18	30	6	6	6	6	18	12	6
ススキ属型	*Miscanthus* type	42	12	6	42	24	36	18	12	36	12	18
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)											
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	18	12	12	6	18	18	18	6	6	6	6
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	30	24	12	24	24	36	24	24	24	24	12
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	12	6	6	6	6	6	6	6	18	12	12
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	12	6	12	6	12	6	6	6	6	6	
未分類等	Unknown	90	60	72	96	168	114	97	96	91	102	72
プラント・オパール総数	Total	222	132	138	216	276	240	187	162	205	174	126

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa*	0.35	0.18		0.18	0.53	0.53	0.35	0.18	0.18		
ヨシ属	*Phragmites*	0.38	0.38	1.13	1.90	0.38	0.38	0.38	0.38	1.14	0.76	0.38
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.52	0.15	0.07	0.52	0.30	0.45	0.22	0.15	0.45	0.15	0.22
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	0.21	0.14	0.14	0.07	0.21	0.21	0.21	0.07	0.07	0.07	0.07
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.14	0.12	0.06	0.12	0.12	0.17	0.12	0.12	0.12	0.12	0.06
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.09	0.05	0.04	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.14	0.09	0.09
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.04	0.02	0.04	0.02	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	

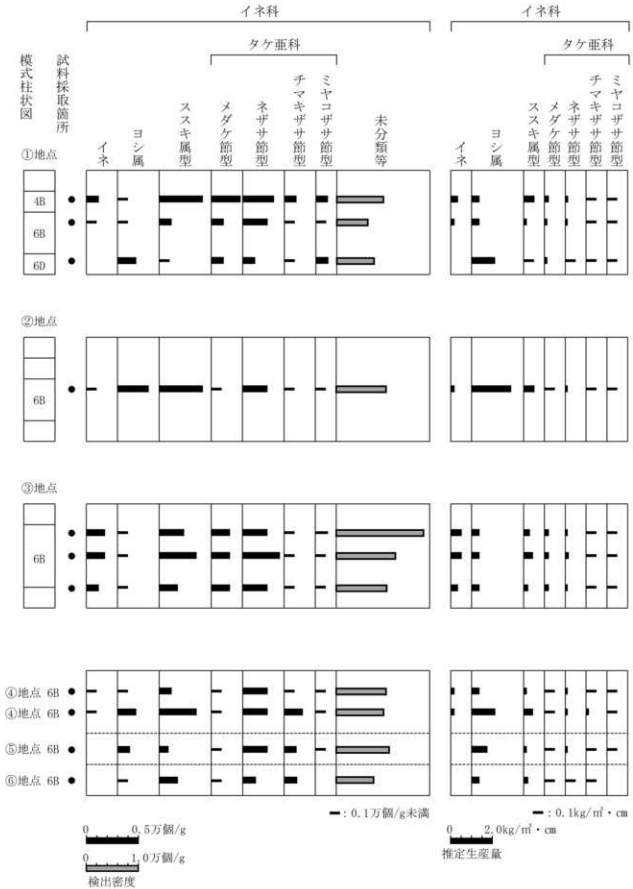


図１　中筋遺跡のプラント・オパール分析結果

（5）まとめ

中筋遺跡A区においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、畦畔が検出されていた調査区中央（③地点、④地点）において稲作が行われていた可能性が認められた。ただし、プラント・オパール密度が低いことから、耕作期間（年数）は短期間であったと判断された。また、水田の分布域は限られた範囲であったと推定された。

なお、6B層の堆積時の調査区西壁南側（②地点）周辺は湿った環境であり、調査区西壁北側（①地点）の4B層、調査区西壁南側（②地点）、調査区中央（③地点）、水田遺構検出面（④地点）の6B層ではススキ属が生育していたと推定された。

3．珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

（1）試料

分析試料は、トレンチA（①地点）の5B層（灰褐色シルト）、トレンチB（②地点）の5A層（灰褐色砂質）と5B層（黒（黄）褐色微砂混シルト）、北東部深堀（F2グリッド）（③地点）の10A-2層（暗灰黄色微砂質シルト）、10A-4層（暗灰黄色微砂質シルト）、トレンチB東側（④地点）の5B層（灰（黄）褐色シルト）の計6点である。

（2）方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

1）試料から1 cm^3を採量

2）10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置

3）上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

5）マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

6）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査した。

（3）結果

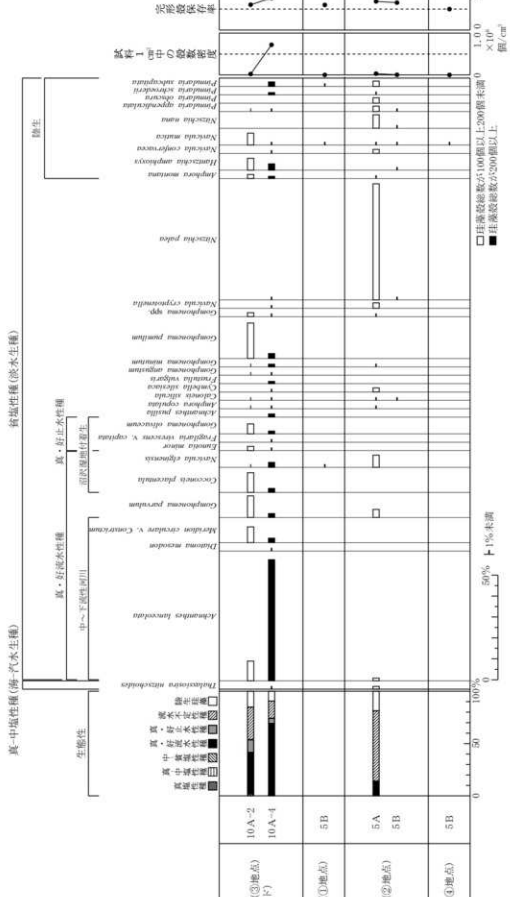
1）分類群

試料から出現した珪藻は、真－中塩性種（海－汽水生種）6分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）74分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。表2に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図2に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974)の記載に、陸生珪藻は小杉（1986）に従った。また、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生

表２　中筋遺跡における珪藻分析結果

分類群	③地点（F2）		①地点	②地点		④地点
	10A－2	10A－4	5B	5A	5B	5B
貧塩性種（淡水生種）						
Achnanthes hungarica		1				
Achnanthes lanceolata	10	268		2		
Achnanthes montana		2				
Achnanthes pusilla		7				
Achnanthes spp.		2				
Amphora copulata	1	2		1		
Amphora montana	2	5		1		
Amphora pediculus		1				
Aulacoseira ambigua	1					
Caloneis silicula	1	1		1		1
Caloneis spp.		1				
Cocconeis placentula	10	9				
Cymbella silesiaca		4		3		
Cymbella sinuata	2					
Diatoma mesodon		4				
Diploneis elliptica		2				
Diploneis pseudovalis		3				
Diploneis spp.		1				
Eunotia minor	2	4				
Eunotia paludosa-rhomboidea	2					
Eunotia pectinalis	1	1				
Eunotia tridentula		1				
Fragilaria capucina		1				
Fragilaria exigua		2				
Fragilaria virescens	2					
Fragilaria virescens v. *capitata*		4				
Frustulia vulgaris		5				
Gomphonema angustatum		1				
Gomphonema angustum	1	4				
Gomphonema gracile	1					
Gomphonema minutum	1	6		1		
Gomphonema olivaceum	5	6				
Gomphonema parvulum	11	9		6		
Gomphonema pumilum	18	11				
Gomphonema spp.	2	2		1		
Hantzschia amphioxys	6	14				2
Melosira varians		1				
Meridion circulare v. *Constrictum*	8	10				
Navicula confervacea		1		3		
Navicula contenta	1					
Navicula cryptotenella		1		4		
Navicula elginensis	1	11	1	9		
Navicula gallica		3				
Navicula kotschyi		3				
Navicula laevissima				3		
Navicula mutica	6	4	1	1	1	1
Navicula pupula				2		
Navicula radiosa	1					
Navicula spp.						2
Neidium affine				1		
Neidium alpinum				1		
Neidium ampliatum		1				

Nitzschia amphibia		1				
Nitzschia debilis		1				
Nitzschia dissipata		1				
Nitzschia nana				10		3
Nitzschia palea		2		86		5
Pinnularia acidophila				1		
Pinnularia acrosphaeria				1		
Pinnularia aestuarii	1	1				
Pinnularia appendiculata	1	2		4		2
Pinnularia hemiptera		1				
Pinnularia interrupta				1		
Pinnularia microstauron		3				
Pinnularia nodosa		1				
Pinnularia obscura				4		
Pinnularia schroederii		5		1		
Pinnularia subcapitata		10	1	4		
Pinnularia viridis		3				
Pinnularia sp.1	3					
Pinnularia spp.		3				
Stauroneis anceps	1	2				
Surirella angusta		1				1
Synedra ulna	2	1				
中−貧塩性種（汽−淡水生種）						
Rhopalodia gibberula		1		1		
真−中塩性種（海−汽水生種）						
Achnanthes delicatula		1				
Coscinodiscus lineatus	1					
Coscinodiscus marginatus	1					
Coscinodiscus radiatus		1				
Diploneis interrupta		1				
Thalassiosira nitzschoides		2		2		
合　計	106	463	3	155	1	17
未同定	6	10		6	1	2
破片	73	146	2	74	2	10
試料 1 cm^3 中の殻数密度	2.2×10^4	7.2×10^5	6.0×10^2	3.1×10^4	4.0×10^2	3.8×10^3
完形殻保存率（%）	60.5	76.4	60.0	68.5	50.0	65.5


北東部深掘(③地点)
(F2グリッド)
トレンチA(①地点)
トレンチB(②地点)
トレンチB(③地点)
10A-2
10A-4
5B
5A
5B
5B
生態性
真・中塩性種
真・好塩水性種
真・好汽水性種
真・中・汽水性種
真・好淡水性種
真・中・淡水性種
真・好止水性種
陸生種
Halamphora hirsutoides
Achnanthes lanceolata
Halamphora coffeaformis
Cocconeis pediculus
Gomphonema parvulum
Navicula salinicola
Navicula cryptocephala
Gomphonema parvum
Navicula pupula
Navicula salinarum
Navicula cryptotenella
Navicula minima
Navicula erifuga
Navicula rhynchocephala
Navicula tripunctata
Navicula cincta
Navicula decussis
Navicula ambigua
Navicula cincta var. rostrata
Navicula cincta var. minor
Navicula cincta var. capitata
Navicula cincta var. ventricosa
Navicula cincta var. elongata
Navicula cincta var. linearis
Navicula cincta var. lanceolata
Navicula cincta var. minuta
Navicula cincta var. pumila
Navicula cincta var. rostrata
Navicula cincta var. vulgaris
Navicula cincta var. ventricosa
Navicula cincta var. capitata

種は安藤（1990）による。主要な分類群については顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔真－中塩性種〕

Thalassiosira nitzschoides

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Achnanthes pusilla*、*Amphora copulata*、*Amphora montana*、*Caloneis silicula*、*Cocconeis placentula*、*Cymbella silesiaca*、*Diatoma mesodon*、*Eunotia minor*、*Fragilaria virescens* v. *capitata*、*Frustulia vulgaris*、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema olivaceum*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema pumilum*、*Gomphonema* spp.、*Hantzschia amphioxys*、*Meridion circulare* v. *Constrictum*、*Navicula confervacea*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula elginensis*、*Navicula mutica*、*Nitzschia nana*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia obscura*、*Pinnularia schroederii*、*Pinnularia subcapitata*

2）珪藻群集の特徴

それぞれの地点について、珪藻群集の組成構成の特徴を記載する。（図２）

・北東部深堀（F2 グリッド）（③地点）

10A-4 層では真・好流水性種が 68.0%を占める。珪藻密度は高く、中～下流性河川指標種の *Achnanthes lanceolata* が卓越し優占する。

10A-2 層では珪藻密度は低くくなり、真・好流水性種が 39.5%、流水不定性種が 31.0%、陸生珪藻が 15.0%、真・好止水性種が 12.0%を占める。真・好流水性種では *Gomphonema parvulum*、中～下流性河川指標種の *Achnanthes lanceolata*、*Meridion circulare* v. *Constrictum*、沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula* が比較的多い。流水不定性種では、*Gomphonema pumilum* が多く、陸生珪藻では *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が出現する。

・トレンチＡ（①地点）

珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

・トレンチＢ（②地点）

5A 層は珪藻密度が低く、流水不定性種が 67.0%、陸生珪藻が 18.5%、真・好流水性種が 11.0%を占め、流水不定性種では *Nitzschia palea* が優占する。真・好流水性種の *Gomphonema parvulum*、沼沢湿地付着生種の *Navicula elginensis*、陸生珪藻の *Nitzschia nana* が出現する。

5B 層は珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

・トレンチＢ（④地点）

珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

（4）珪藻分析から推定される堆積環境

各地点について、珪藻群集の特徴から環境の復元を行う。

1）北東部深堀（F2 グリッド）（③地点）

10A-4 層は、真・好流水性種で中～下流性河川指標種の *Achnanthes lanceolata* が優占することから、中～下流域の水流のある河川性堆積物と考えられ、流水の影響を受ける環境が示唆される。10A-2 層は、真・好流水性種の中～下流性河川指標種、沼沢湿地付着生種がやや多く、10A-4 層と同様の環境が示唆されるが、

水流が低下し、不安定な縁辺の水生植物が生育する沼沢地の環境が推定される。

2）トレンチA（①地点）

珪藻密度が極めて低く、淘汰を受けたか珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境が示唆される。

3）トレンチB（②地点）

5A 層は、流水不定性種 *Nitzschia palea* が優占し、陸生珪藻、真・好流水性種も多少出現する。不安定な水域が示唆され、水田の環境の可能性も考えられる。

5B 層は、珪藻密度が極めて低く、淘汰を受けたか比較的乾燥した堆積環境が示唆される。

4）トレンチB（④地点）

珪藻密度が極めて低く、淘汰を受けたか珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境が示唆される。

（5）まとめ

中筋遺跡A区において珪藻分析を行った結果、北東部深堀（F2 グリッド）（③地点）の 10A-2 層、10A-4 層とトレンチB（②地点）の 5A 層で珪藻が比較的高い密度で検出された。それぞれ 10A-2 層は不安定な水域、10A-4 層は水流のある河川、5A 層からは不安定な水域の堆積環境が示唆された。トレンチA（①地点）の 5B 層、トレンチA（①地点）の 5B 層、トレンチB（④地点）の 5B 層は珪藻がほとんど検出されず、淘汰を受けたか珪藻の生育しにくい比較的乾燥した生成環境が示唆された。

参考文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料としてー．考古学と自然科学，20，p.81-92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1998）稲作の起源を探る．岩波新書．Hustedt,F.(1937- 1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131- 506.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh- water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・１－４.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(２) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

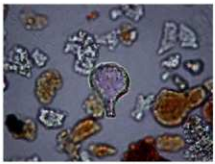
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

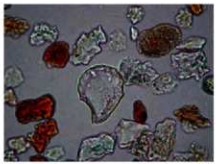
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

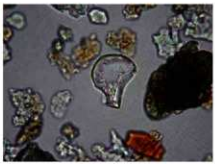
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.１-20.

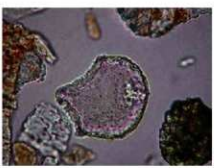
渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo，pH 耐性能．内田老鶴圃，666p.

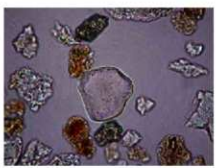
中筋遺跡のプラント・オパール

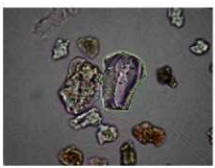

イネ（①地点 4B層）

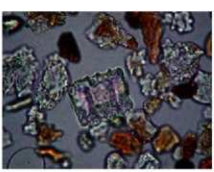

イネ（③地点 6B層）

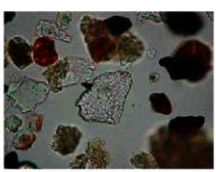

イネ（③地点 6B層）

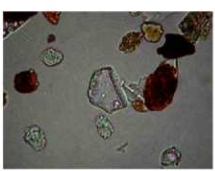

ヨシ属（②地点 6B層）


ススキ属型（①地点 4B層）


メダケ節型（③地点 6B層）

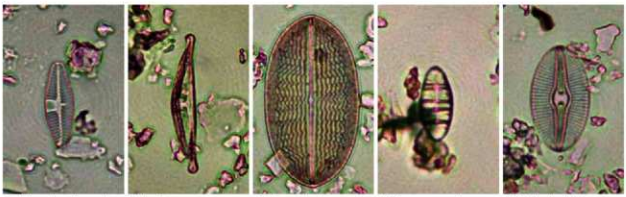

ネザササ節型（③地点 6B層）


チマキザサ節型（④地点 6B層）


ミヤコザサ節型（③地点 6B層）

50μm

中筋遺跡の珪藻



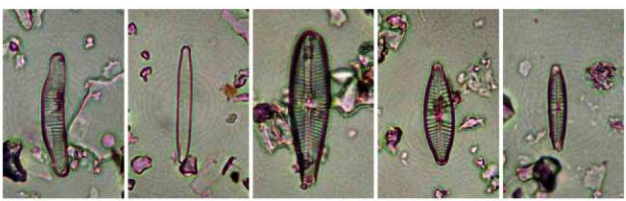
1 *Achnanthes lanceolata*
(③地点 10A-4)

2 *Amphora montana*
(③地点 10A-2)

3 *Cocconeis placentula*
(③地点 10A-2)

4 *Diatoma mesodon*
(③地点 10A-4)

5 *Diploneis elliptica*
(③地点 10A-4)



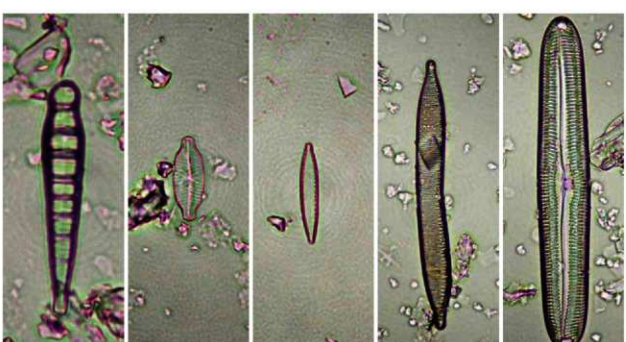
6 *Eunotia minor*
(③地点 10A-4)

7 *Fragilaria virescens*
(③地点 10A-4)

8 *Gomphonema olivaceum*
(③地点 10A-4)

9 *Gomphonema parvulum*
(③地点 10A-4)

10 *Gomphonema pumilum*
(③地点 10A-4)



11 *Meridion circulare v. constrictum*
(③地点 10A-4)

12 *Navicula elginensis*
(②地点 5A)

13 *Nitzschia palea*
(②地点 5A)

14 *Hantzschia amphioxys*
(③地点 10A-4)

15 *Pinnularia viridis*
(③地点 10A-4)

1-13 ―― 10μm, 14, 15 ―― 10μm

第４節　　中筋遺跡における火山灰分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

東北地方仙台平野とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、蔵王、栗駒、鳴子、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、浅間、御岳、三瓶、阿蘇、姶良、鬼界など遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が数多く認められる（町田・新井，1992，2003 など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

山元町内の中筋遺跡の発掘調査の際にも、テフラの可能性のある堆積物が検出されたことから、発掘担当者により採取された試料を対象に、火山ガラス比分析と火山ガラスの屈折率測定さらに主成分化学組成分析（EPMA 分析）を実施して、その起源を明らかにすることになった。分析の対象となった試料は、発掘調査担当者により採取・送付された中筋遺跡４Ａ層の２点である。

２．火山ガラス比分析

（１）分析試料と分析方法

４Ａ層試料について、火山ガラスの色調形態別含有率を求める火山ガラス比分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

１）12g を秤量。

２）超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）分析篩を用いて 1/4～1/8mm（火山ガラス比分析用と 1/8～1/16mm（屈折率測定用）の粒子を篩別。

５）偏光顕微鏡下で 1/4～1/8mm 粒径の 250 粒子を観察し、火山ガラスの形態別含有率、軽鉱物および重鉱物の含有率を求める。

（２）分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図３に、その内訳を表１に示す。４Ａ層には、火山ガラスが比較的多く含まれている（27.2%）。それらは、含有率が高い順に、無色透明のバブル型（14.0%）、繊維束状軽石型（7.6%）、分厚い中間型（4.4%）、スポンジ状軽石型（0..8%）である。なお、重鉱物としては、角閃石や単斜輝石がごくわずかに認められる。

表１　火山ガラス比分析結果

地点・試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
中筋遺跡・4A 層	35	1	0	11	2	19	47	16	119	250

bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：無色透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．
数字は粒子数．

３．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

４Ａ層に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製 MAIOT）により屈折

率（n）の測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。屈折率測定の対象は、篩別により得られた 1/8-1/16mm 粒径の火山ガラスである。

表2　屈折率測定結果

試料（地点・層位）	火山ガラスの屈折率（n）	測定粒子数	文献
中筋遺跡・4A 層	1.502-1.505	30	本報告
宮城県域の後期旧石器時代以降の代表的指標テフラ			
白頭山苫小牧（B-Tm，10世紀）	1.511-1.522（1.515-1.520）		町田・新井（2003）
十和田a（To-a，915AD）	1.503-1.507*1		町田・新井（2003）
榛名二ツ岳伊香保（Hr-FP，6世紀中葉）	1.501-1.504		町田・新井（2003）
沼沢湖（Nm-N，5ka*2）	1.500-1.505		町田・新井（2003）
十和田中掫（To-Cu，6ka）	1.508-1.512		町田・新井（2003）
（安家火山灰，岩手県岩泉町）	1.507-1.513		早田ほか（1988）
（吾妻火山灰，福島県東吾妻）	1.507-1.512		早田ほか（1988）
鬼界アカホヤ（K-Ah，7.3ka）	1.508-1.516		町田・新井（2003）
肘折尾花沢（Hj-O，11-12ka*2）	1.499-1.504		町田・新井（2003）
十和田八戸（To-H，15ka）	1.505-1.509		町田・新井（2003）
浅間草津（As-K，15-16.5ka）	1.501-1.503		町田・新井（2003）
浅間板鼻黄色（As-YP，15-16.5ka）	1.501-1.505		町田・新井（2003）
鳴子潟沼上原（Nr-KU）	1.492-1.500		町田・新井（2003）
姶良Tn（AT，28-30 ka）	1.499-1.501		町田・新井（2003）
十和田大不動（To-Of，≧32ka）	1.505-1.511		町田・新井（2003）

*1：仙台周辺での屈折率．（）：中央値およびmodal range．ka：1,000年前．*2：放射性炭素（^{14}C）年代．

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（n）は、1..502-1.505 である。

4．火山ガラスの主成分化学組成分析（EPMA 分析）

（1）分析試料と分析方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるため、4A層に含まれる火山ガラスを対象に、電子プローブマイクロアナライザ（EPMA）により、1/4-1/8mm 粒径の火山ガラスの主成分化学組成を明らかにした。分析に使用した分析機器は、山形大学理学部の日本電子 JXA8600MWDS 型 EPMA である。加速電圧 15kV、照射電流 0.01μA、ビーム径 10μm の条件で行った。また、補正には Oxide ZAF 法を用いた。

（2）分析結果

分析結果を表3に、また指標テフラとの比較のために表4を作成した。なお、分析結果は無水に換算して表示している。本試料に含まれる火山ガラスには、多様な主成分化学組成が認められる

表3　中筋遺跡テフラ試料に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

地点・試料		SiO2	TiO	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O5	SUM
中筋遺跡・4A 層	1	78.47	0.25	11.97	1.24	0.00	0.20	1.17	3.82	2.88	0.00	100.00
	2	77.88	0.32	11.99	1.25	0.12	0.20	1.20	3.87	3.18	0.00	100.00
	3	77.94	0.31	12.25	1.35	0.05	0.28	1.08	4.01	2.66	0.07	100.00
	4	78.45	0.04	12.05	0.90	0.05	0.03	0.43	4.46	3.59	0.00	100.00
	5	78.07	0.29	11.84	1.16	0.13	0.22	1.16	3.97	3.11	0.05	100.00
	6	78.37	0.28	11.83	1.26	0.02	0.22	1.08	3.87	3.07	0.00	100.00
	7	78.38	0.09	12.10	0.99	0.06	0.03	0.40	4.39	3.45	0.08	100.00
	8	78.37	0.05	12.06	0.99	0.10	0.04	0.52	4.31	3.54	0.02	100.00
	9	77.98	0.12	12.03	1.13	0.03	0.01	0.49	4.56	3.65	0.00	100.00
	10	78.50	0.23	11.71	1.03	0.03	0.16	1.06	4.03	3.23	0.03	100.00
	11	78.14	0.02	12.01	1.15	0.10	0.01	0.49	4.60	3.47	0.01	100.00
	12	78.67	0.05	12.08	1.03	0.08	0.05	0.48	3.99	3.56	0.01	100.00
平均		78.27	0.17	11.99	1.12	0.06	0.12	0.80	4.16	3.28	0.02	100.00

無水に換算.

表4　中筋遺跡テフラ試料に含まれる火山ガラスの主成分化学組成

地点・試料	SiO2	TiO	Al2O3	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O5	文献
中筋遺跡・4A 層	78.27	0.17	11.99	1.12	0.06	0.12	0.80	4.16	3.28	0.02	本報告
指標テフラ											
B-Tm	76.12	0.23	10.30	4.14	0.01	0.07	0.25	4.93	3.93		1)
To-a	77.87	0.37	12.81	1.75	0.10	0.42	2.00	3.29	1.34		2)
Nm-N	78.10	0.24	12.10	1.14	0.09	0.19	1.34	3.35	3.45		3)
To-Cu	75.08	0.44	13.28	2.46	0.08	0.63	2.63	4.04	1.29		2)
K-Ah	75.24	0.53	12.85	2.42	0.08	0.47	2.02	3.32	3.00		2)
Hj-O	77.79	0.16	12.76	1.05	記載なし	0.44	1.09	3.61	3.10		3)
To-H (pfl)上部	78.30	0.29	12.67	1.52	0.06	0.29	1.73	3.84	1.30		3)
To-H (pfl)下部	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24		3)
As-YP	78.15	0.27	11.99	1.33	0.04	0.26	1.30	3.72	2.89		2)
Nr-KU	77.98	0.22	12.28	1.22	記載なし	1.01	1.59	4.23	1.47		3)
AT	78.25	0.13	12.14	1.26	0.04	0.11	1.09	3.41	3.56	0.02	2)
To-Of (pfl)	77.82	0.36	12.45	1.88	0.08	0.33	1.87	3.97	1.25		3)

無水に換算. 1)奥村(1988)を再計算. 2)澤井(2010). 八木(未公表). 3)青木・新井(2000).

5．考察

4Ａ層に含まれる火山ガラスは、主成分化学組成に多様性があり、その平均値でみても、従来仙台平野周辺で検出されているテフラと同様なものは知られていない。これらのテフラ粒子が後期更新世以降のテフラに由来するものとすれば、起源を異にするテフラが混在して堆積しているものと推定される。

なお、本遺跡周辺に、弥生時代以降降灰したテフラとしては、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，６世紀初頭，新井，1979，坂口，1986，早田，1989）、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，６世紀中葉、新井，1962，町田ほか，1984，坂口，1986，早田，1989）、十和田ａテフラ（To-a，915 年，大池ほか，1966，町田ほか，1981，町田・新井，1992，2003）浅間粕川テフラ（As-Kk，1128 年，早田，2004 ほか）などがある。

6．まとめ

山元町中筋遺跡において４Ａ層から採取された試料を対象に、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定、さらに火山ガラスの EPMA による主成分化学組成分析を実施した。その結果、多様な主成分組成をもつ火山ガラスを検出することができた。

文献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p. 1-79.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀研究，5，p.29-35.

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p. 103-119.

早田　勉（1989）6 世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p. 297-312.

早田　勉（2004）火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史－とくに平安時代の噴火について－．かみつけの里博物館編「1108－浅間火山－中世への胎動」，p.45-56.

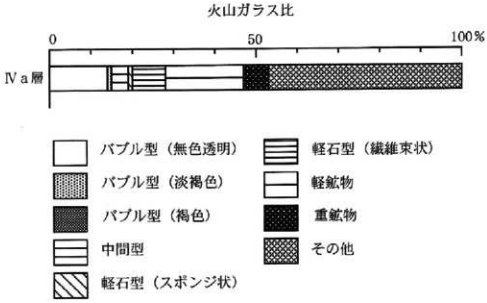


図１　中筋遺跡火山灰試料の火山ガラス比ダイヤグラム

第５節　中筋遺跡Ａ区の花粉分析と大型植物化石分析

吉川昌伸・吉川純子（古代の森研究舎）

１．はじめに

中筋遺跡は、仙台平野南部の山元町中筋にあり、平野西側を南北方向に延びる丘陵の東側に立地する。周辺には丘陵に接して島状に丘陵が分布している。現在、本遺跡の周辺は平坦な地形が広がっているが、かつては調査区の南西側の傍まで丘陵が伸びていたことがわかっている。中筋遺跡では縄文晩期の遺物包含層と弥生時代中期中葉の水田跡、古墳時代前期の土坑などが検出されている。ここでは、弥生時代中期の水田跡の検討、および縄文時代晩期と弥生時代の周辺の植生や生業を明らかにすることを目的に花粉化石と大型植物化石を調査した。

２．試料と分析方法

弥生時代中期中葉の水田跡は、弥①地点の北側などで畦畔遺構が確認されている。水田耕作土とされる６B 層は、オリーブ灰色細粒砂質シルトないしシルト質細粒砂からなる。縄文晩期の堆積層は、砂礫層と黒褐色有機質シルト質砂ないし有機質砂質シルトからなる。なお、当初、大型植物化石分析４試料の予定であったが、試料採取時の打ち合わせにより大型植物化石分析２試料、花粉分析７試料に変更した。

1)　花粉分析

花粉分析試料は、弥①～弥⑤地点の水田耕作土（6B 層）と弥⑤地点の 6B 層の下位の 6D 層、縄文晩期層の３層準である（図 1）。花粉化石の抽出は、試料約 1～2g を秤量し体積を測定後に 10%KOH（湯煎約 15 分）、傾斜法により砂を取り除き、48%HF（約 15 分）、重液分離（比重 2.15 の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸 1: 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5 分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量 0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により 750℃で３時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトの ImageJ で 75μm² より大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

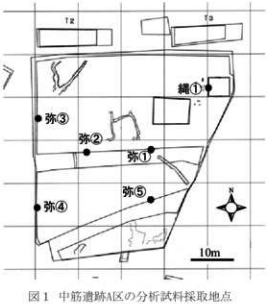


図１　中筋遺跡A区の分析試料採取地点

2)　大型植物化石分析

分析は弥①地点の弥生時代中期の 6B 層（s1）と、縄①地点の縄文時代晩期の 8B 層（s2）で行った。各試料から約 1000cc を 0.25mm 目の篩で水洗し、実体顕微鏡で同定可能な植物遺体を選び出し同定・計数した。

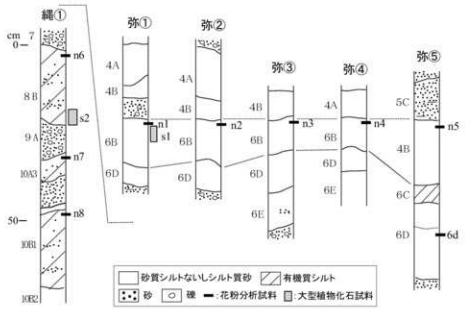


図２　地質柱状図と分析試料採取層準

３．結　果

1)　花粉分析結果

花粉分析試料の堆積物の特性を表１に示す。水田耕作土とされる６B 層の堆積物は、細粒砂やシルトを主体とし有機物は少ない。縄文晩期層もシルト質細粒砂ないし細粒砂シルトを主とするが、有機物を11～19%と比較的多く含む。

出現した分類群のリストとその個数を表２に、主要花粉分布図を図３に示す。出現率は、樹木花粉は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科、マメ科は樹木と草本の区別が出来ない分類群は草本花粉としてまとめた。

水田耕作土とされる６B 層の樹木花粉組成は、弥①地点（n1）、弥②～④地点（n2～n4）、弥⑤地点（n5）の３つのタイプに区分される。弥①地点（n1）は高率を占める分類群はなく、保存が悪いためクリ属型とした花粉を含めたクリの頻度が 28%を占め、ケヤキ属型やコナラ亜属、モミ属、トチノキなどが比較的多い。モミ属は弥①地点で頻度が最も高いが、ほとんどが壊れた花粉からなる。弥②～弥④地点（n2～n4）は、クリとクリ属型が 56～85%と極めて高率で出現する。他にコナラ亜属や、ケヤキ属型、トチノキなどからなる。弥⑤地点（n5）では、クリとトチノキが比較的多く占め、ケヤキ属型やコナラ亜属、

表1　分析試料の堆積物の特性(重量%)

No.	地点	層	堆積物の特徴	砂	シルト粘土	強熱減量(有機物量)
n1	弥①	6B	オリーブ灰色細粒砂質シルト, 極細粒砂混入	36.4	55.3	8.3
n2	弥②	6B	オリーブ灰色シルト質細粒砂, 極細粒砂混入	48.4	45.1	6.5
n3	弥③	6B	オリーブ灰色シルト質中～細粒砂ないし砂質シル	46.4	45.9	7.7
n4	弥④	6B	オリーブ灰色シルト質細粒～中粒砂	50.7	42.7	6.6
n5	弥⑤	6B	オリーブ黒色有機質極細粒砂質シルト	35.3	52.9	11.8
6d	弥⑤	6D	暗オリーブ灰色シルト質細粒砂	56.4	35.0	8.6
n6	縄①	8B	黒褐色有機質シルト質極細粒砂	52.7	28.0	19.3
n7	縄①	10A3	黒褐色有機質シルト質中粒砂	61.8	27.1	11.1
n8	縄①	10B1	黒褐色有機質極細粒砂質シルト	30.4	52.3	17.3

表2　中筋遺跡A区より出現した花粉化石の一覧表

和　名	学　名	弥① 6B層 n1	弥② 6B層 n2	弥③ 6B層 n3	弥④ 6B層 n4	弥⑤ 6B層 n5	弥⑤ 6D層 6d	縄① 8B層 n6	縄① 10A3層 n7	縄① 10B1層 n8
樹　木										
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	16	1	2	2	2	-	-	-	1
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	1	-	-	-	2	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	1	1	4	-	6	-	-	-	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	3	1	2	1	1	-	-	-	2
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	3	-	1	1	11	2	-	4	3
イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科（うち カヤ型）	Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxace (*Torreya* type)	5 *2*	1 *1*	1 *1*	4 *1*	20 *15*	- -	- -	6 *6*	4 *3*
ヤナギ属	*Salix*	-	1	1	-	1	-	-	-	1
サワグルミ属	*Pterocarya*	2	-	-	-	3	-	-	1	-
クルミ属	*Juglans*	3	2	1	1	1	4	2	7	4
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya* - *Juglans*	-	-	-	1	2	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	1	-	-	-	1	-	-	-	1
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	*Betula*	1	1	1	-	-	-	-	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	2	2	2	2	1	-	-	-	1
ブナ	*Fagus crenata* Blume	2	1	-	1	-	-	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	23	17	11	13	24	5	2	10	11
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	25	43	243	85	45	167	8	83	87
クリ属近似種	cf. *Castanea*	18	15	6	33	-	18	-	-	-
ケヤキ属型	*Zelkova* type	29	7	8	15	28	1	4	7	3
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis* - *Apananthe*	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コクサギ属	*Orixa*	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ウルシ	*Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F.A	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヤマウルシ類	*Toxicodendron trichocarpum* type	-	-	-	-	1	-	1	1	1
モチノキ属	*Ilex*	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	*Acer*	3	2	2	2	8	1	-	5	2
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	9	6	5	5	41	13	6	32	35
シナノキ属	*Tilia*	-	1	-	-	-	-	1	-	-
ツバキ属	*Camellia*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	-	-	-	-	1	-	-	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	1	1	1	-	-
ニワトコ属	*Sambucus*	1	-	-	-	-	1	-	-	1
草　本										
ガマ属	*Typha*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
イネ科（イネ型）	Gramineae (*Oryza* type)	7	5	2	2	2	-	-	-	-
イネ科（野生型）	Gramineae (Wild type)	11	9	4	10	8	-	-	2	5
カヤツリグサ科	Cyperaceae	9	11	3	8	4	2	1	2	2
ツユクサ属	*Commelina*	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アヤメ科	Iridaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アサ	*Cannabis sativa* Linn.	-	-	-	-	-	-	-	1	1
カナムグラ属	*Humulus*	-	-	-	1	11	-	-	1	-
アサ－カナムグラ属	*Cannabis sativa* - *Humulus*	2	2	-	1	-	-	1	1	-
クワ科－イラクサ科	Moraceae - Urticaceae	-	3	-	-	-	-	-	-	-
イヌタデ属	*Persicaria*	-	1	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科	Chenopodiaceae	-	-	-	-	2	-	-	1	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	2	-	-	1	1	-	1
コウホネ属	*Nuphar*	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	1	1	1	1	-	1	-	-	1
マメ科	Leguminosae	1	-	-	-	1	-	-	-	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	1	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	-	-	1	-	2	2
ヨモギ属	*Artemisia*	28	45	17	44	22	2	-	12	5
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	3	-	7	1	1	1	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	3	1	2	3	4	1	-	-
シダ植物										
ゼンマイ属	*Osmunda*	2	4	1	4	2	-	1	1	1
サンショウモ	*Salvinia natans* (L.)All.	-	2	1	-	-	-	-	-	-
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	17	15	7	13	16	-	2	20	10
他のパリノモルフ										
寄生虫卵										
鞭虫	*Trichuris*	-	-	-	-	-	-	5	4	1
毛細線虫属	*Capillaria*	1	1	-	-	-	-	1	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	152	104	292	166	201	215	25	159	159
草本花粉	Nonarboreal pollen	64	89	30	77	54	12	6	23	17
シダ植物胞子	Fern spores	19	21	9	17	18	0	3	21	11
花粉・胞子数	Pollen and Spores	235	214	331	260	273	227	34	203	187
不明花粉	Unknown pollen	30	8	16	8	39	4	1	27	7
樹木花粉量（粒/cm^3）		1890	890	7360	1250	3570	4550	2010	3220	5450
微粒炭量（mm^2/cm^3）		581	461	794	372	2774	1123	1493	1350	5941

カヤ型などからなる。

草本花粉組成は各地点でおおむね同様で、ヨモギ属が比較的多く占め、イネ科やカヤツリグサ科などからなる。弥⑤地点ではつる植物のカラハナソウ属がいく分多い。イネ型花粉は弥①地点と弥②地点では 2～3%を占めるが、他の地点では 0.6～0.8%と低率である。また、抽水植物のコウホネ属やガマ属が僅かに出現している。細粒微粒炭量は、弥⑤地点で 2774 mm^2/cm^3 と多量に含まれるが、弥生①～④地点では 372～794 mm^2/cm^3 と目立って多くない。

水田耕作土層の下位の 6D 層（6d）では、クリが 86%と極めて高率で出現してトチノキが 6%占める。他の分類群は低率であるが、コナラ亜属やウルシなどが出現している。草本は稀で、微粒炭量は 1123 mm^2/cm^3 と比較的多い。

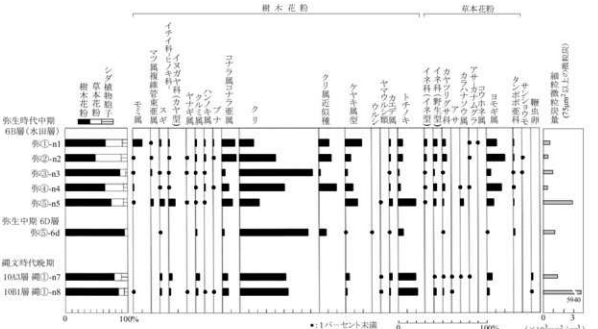


図 3 中筋遺跡の主要花粉分布図
（出現率は樹木は樹木花粉数、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した）

縄文晩期層は 8B 層では花粉は少ないが 10A3 と 10B1 層からは普通に産出した。10 層ではクリが 52～55%と高率で出現し、トチノキが 20～22%と比較的多く占める。他にコナラ亜属やケヤキ型、カエデ属、ハンノキ属などが出現している。草本花粉は低率であるが、アサ花粉と鞭虫卵が 2 試料から検出される。また、n8 には細粒微粒炭が 5940 mm^2/cm^3 と夥しい量の炭が含まれる。

2)　大型植物化石分析結果

縄文時代の 10B 層からは、栽培植物のアサを出土し、割られたり剥かれたりした利用痕跡のあるカヤ、オニグルミ、クリ、ナラガシワ、トチノキ、ヒシ属が確認された。人為による利用痕跡が明瞭には認められないが、出土部位自体が利用可能な植物はサンショウ、カラスザンショウ、キハダ、ヤマブドウ、サルナシ、マタタビ、ミズキ、ニワトコ属を出土した（表 3）。可食部分以外にカヤは葉、トチノキは果皮と未熟果、未熟種子を出土している。これら以外の木本は針葉樹のモミ属、広葉樹のフジ属、ケヤキ、イタヤカエデ、コシアブラを出土し、草本はカヤツリグサ属、イヌタデ属と水湿地に生育するミゾソバを出土した。

表3　中筋遺跡A区の縄文晩期と弥生時代から出土した大型植物化石のリストと個数

分類群	出土部位	利用部位	縄① 8B層	弥① 6B層
木　本				
モミ属 *Abies*	葉片	N	2	-
	基部種鱗	N	1	-
カヤ *Torreya nucifera* (Linn.)Sieb. et Zucc.	種皮破片	U	1	-
	葉片	N	1	-
オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮半分割痕	U	2	-
	内果皮破片	U	7	-
	内果皮炭化破片	U	4	5
クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	果皮剥き痕完形	U	2	-
	果皮剥き痕半分	U	2	-
	果皮20mm以上破片	U	14	-
	果皮20mm以下破片	U	49	-
	果皮炭化微少破片	U	-	2
ナラガシワ *Quercus aliena* Blume	果皮半分	U	1	-
コナラ属 *Quercus*	果皮破片	U	4	-
ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.)Makino	果実破片	N	1	-
フジ属 *Wisteria*	芽	N	1	-
サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (Linn.)DC.	内果皮完形	A	1	-
	内果皮半分・破片	A	4	-
カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.	内果皮半分	A	1	-
キハダ *Phellodendron amurense* Rupr.	種子完形	A	1	-
	種子破片	A	1	-
イタヤカエデ *Acer mono* var. *marmoratum* (Nichols)Hara	果実半分	N	1	-
	種子完形・半分	N	3	-
カエデ属 *Acer*	葉基部片	N	1	-
トチノキ *Aesculus turbinata* Blume	種皮20mm以上破片	U	11	-
	種皮20mm以下破片	U	36	-
	種皮炭化微少破片	U	-	1
	果皮破片	N	1	-
	未熟果	N	3	-
	未熟種子	N	1	-
ヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat	種子	A	1	-
サルナシ *Actinidia arguta* (Sieb. et Zucc.)Planch.	種子完形	A	3	-
	種子半分	A	1	-
マタタビ *Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.)Maxim.	種子完形	A	2	-
	種子破片	A	3	-
ミズキ *Cornus controversa* Hemsley	内果皮完形	A	3	-
	内果皮半分・破片	A	3	-
コシアブラ *Aralia sciadophylloides* Franch.	果実	N	1	-
ニワトコ属 *Sambucus*	内果皮完形	A	3	-
木本	芽	N	3	-
草　本				
カヤツリグサ属 *Cyperus*	果実	N	1	-
アサ *Cannabis sativa* Linn.	果実半分	C	1	-
ミゾソバ *Persicaria thunbergii* (Sieb et Zucc.)H.Gross	果実	N	1	-
イヌタデ属 *Persicarya*	果実	N	1	-
ハコベ属 *Stellaria*	風化種子	N	-	1
ヒシ属 *Trapa*	果皮破片	U	8	-

C:栽培植物, U:利用根のある部位, A:利用可能部位, N:利用しない部位

弥生時代の水田耕作土の6B 層からは、オニグルミ、クリ、トチノキの炭化微小片とハコベ属の風化種子を1個出土したのみであった。

大型植物遺体の形態記載

栽培植物

アサ：果実は球形からやや縦に長い球形で表面は平滑で光沢があり褐色で血脈状の模様が確認できる場合が多い。基部は円形盤状の薄褐色のへそがあり、縦方向に縫合線があって2分する。内部の子葉は脂肪分を多く含み食用とする。

利用痕のある部位

カヤ：葉は線形扁平で薄く平滑、先端は鋭く尖り裏面に2本の幅がやや広い気孔条がある。種子は完形であれば紡錘形で先端が尖り基部はやや円く突出し、種皮は固くやや薄く明褐色で縦方向に畝条の筋が密布する。子葉は脂肪を多く含み食用とされる。

オニグルミ：内果皮は完形では球形で先端と基部がやや尖り、表面には不規則なおうとつと細い線状の溝がまばらに存在する。内果皮壁は緻密で固く壁にはところどころに空隙がある。内果皮は発芽の際に縦方向に2分する縫合線があり、上下から圧力を加えることによりこの縫合線沿いに割ることができる。子葉は脂肪分に富み食用とする。

クリ：果実は丸みを帯びた三角形で下半分の基部は褐色の細かいおうとつが密布してざらつき、上半分は赤褐色で平滑でやや薄く縦方向に細かい筋があり、上端は尖り柱頭は毛状突起が数本つく。子葉はデンプンが多く甘みがあり食用とする。本遺跡で出土した果皮の1個は、1側がついたまま剥かれており、高さ28.4mm幅29.5mmであり、1個の果皮は真半分に剥かれていて高さ30.5mm幅25.7mmと計測することができた。

ナラガシワ：果実は完形であれば円筒形で基部は平坦で円盤型で褐色のざらつくへそがあり、上端は尖る。果皮は黄褐色で縦方向に細かい筋がありやや薄くやや柔らかい。本遺跡で出土した遺体は果実の下半分の破片であったが、他のコナラ亜属と異なり基部のへそが平坦であることから区別ができる。子葉はデンプンを多く含み食用とする。果皮の破片は種の特徴が認められないことからコナラ属と同定した。

トチノキ：果皮は厚く大きな柵状組織からなりスポンジ状で表面は弱い光沢があり3片で球形の果実を構成する形になっている。種子は完形であれば楕円球形で下半部の大きなへそは平滑褐色で光沢が無く、上半部は黒色で強い光沢があり大変微細な指紋状や流理状模様がある。子葉はデンプンを多く含むがサポニンなども多く含むためあく抜きをしたのち食用とする。

ヒシ属：果実は菱形状に大きな突起が突出し、刺状突起は2つあるいは4つである。本遺跡で出土した部位はかなり太い刺状突起と細めの刺状突起、本体の一部と思われる。ヒシ属は水域に生育し地域や水域により形態の変異が著しいことから種の特定は困難である。子葉はデンプンを多く含み食用とする。

利用可能部位

サンショウ：内果皮は球形で黒色、壁はやや厚く固く表面には大きさが揃った網目が全面にあり、一端に内果皮長の3分の1位の長さの溝状のへそがある。現在は香辛料として利用するが、縄文時代には割れた状態で出土する場合が多く利用の可能性がある。

カラスザンショウ：内果皮は球形で黒色、壁は厚く固く表面には縁が不規則に突出したサンショウの2倍程度の大きさの網目が全面にある。へそはサンショウより縁が突出して穴が大きい。現在は利用されていないがサンショウとともに割れて出土することが多く利用されていた可能性が高い。

キハダ：種子は半円形で扁平で黒色、壁は薄く固く網目を密布する。果実は甘く食用とする。

ヤマブドウ：種子は円い三角形で先端が尖り腹面には中央の稜を挟んで両側に水滴形の穴があり、背面には匙状の溝がある。他のブドウ属と比較してゆがんだ形が多く匙の中央がかなりはっきりと縁取るようにくぼんでいる。果実は甘く食用とする。

サルナシ：種子は楕円形で扁平、暗褐色でやや薄く固く全面には中央がへこんだ網目が密布する。マ

タタビと比較するとへそは種子基部真下に突出するようにつくことが多く、表面は筋状の稜を持つ網目内に穴がへこんで見える。果実は甘くそのまま食用とする。

マタタビ：種子は楕円形で扁平、暗赤褐色でやや薄く固く全面には中央がへこんだ網目が密布する。サルナシと比較するとへそは種子基部より斜め上につき、表面は平面に穴がへこんで見える。現在は漬け物や薬用として利用する。

ミズキ：内果皮は球形で壁はやや柔らかく厚く、表面には縦斜め方向にやや深い筋状の溝が 10 本以上あり、基部には裂けた穴状のへそがある。積極的な利用事例はないが完熟果は甘みがあり、縄文時代の利用植物集積にはほとんど伴っている例が多い。

ニワトコ属：内果皮は楕円形で扁平で黄褐色で壁はやや固く薄く、全体に波状のしわを密布する。基部はやや細く先端腹面側に小孔状のへそがある。縄文時代には集積や編み物内部に堆積している例があり、飲料や薬用としての利用が示唆されている。

4．考　察

1）弥生時代の水田について

弥生時代中期の畦畔遺構が確認されている地点に近い弥①地点と弥②地点では、イネ型花粉が他の弥③～⑤地点より幾分多く検出された。畦畔のそばでイネ型花粉が検出されたことから、弥①地点の周辺で水田稲作を行っていた可能性はあるものの、イネ型花粉の頻度は2～3%と低い。仙台平野北部にある沓形遺跡の弥生時代水田跡から検出されたイネ属型花粉の頻度は、現代の水田に比べて低いがそれでも22～29%と比較的多い（吉川, 2010）。水田跡の周辺においてイネ型花粉の頻度が低くなる可能性は、イネの開花期に分析地点が水田の風上側に位置していた場合や、稲作の継続期間が短い場合などが考えられる。大型植物化石でイネの部位が検出されていない状況を考慮すると、稲作の継続期間が短かった可能性が高い。一方、大型植物遺体をほとんど出土せず、炭化材と炭化種実もごく微小で僅かに出土し、ハコベ属は風化が激しいことから、6B 層はしばしば乾陸化し分解が進みやすい環境にあったと考えられる。

2）縄文時代晩期から弥生時代の周辺植生と生業

縄文晩期層や弥生時代中期の弥②～④地点の 6B 層、弥⑤地点の 6D 層ではクリ花粉が 50%以上を占め、特に弥③地点と弥④地点、弥⑤地点 6D 層では 70%を超える。また、縄文晩期や 6D 層ではトチノキ花粉も比較的多い。クリ花粉の散布範囲は狭く、クリ林の周囲に落葉広葉樹林が広がっている地点においては、樹木花粉比率はクリ純林内で 30%以上，林内に約 25m 以上入った中央部で約 60%以上を占め，クリ林から離れると急減し，風下側の樹冠縁から約 20mで 5%以下，約 200mでは 1%以下である（吉川, 2011）。さらに、クリ林からの距離とクリ花粉量の関係からも飛散距離が短いことが実証されている（未公表）。また、トチノキ花粉の飛散範囲も樹冠から約 10m 以内と狭い（未公表）。分析試料は砂を多く含むことから流水によって搬入された花粉が含まれていることが考えられる。そのような堆積状況でクリやトチノキの虫媒種花粉が大半を占め風媒種花粉が少ないことは、上流域や周辺にクリやトチノキが主に分布し、コナラ亜属やケヤキ、ハンノキ属などの風媒種の樹木が稀であったことを示す。つまり、縄文晩期には低地の縁や河川傍にはトチノキやオニグルミが生え、その背後の微高地にクリ林が広がっていたと考えられ、コナラ亜属やケヤキなどの風媒受粉樹木は主に丘陵に分布していたと推測される。

弥生時代中期でもクリが優勢な林が広がっていたと考えられるが、風媒種の頻度が高くなっていることから、水田稲作の開始により開けた空間が広がったため丘陵からの飛来花粉の頻度が相対的に高く表現されていると推測される。また、弥①～⑤地点のクリの頻度からは、弥生時代中期には弥②～④地点の傍の微高地にクリ林が形成されていた可能性は高い。おそらく中筋遺跡では縄文晩期から弥生時代中期までクリ林が継続して維持管理され、さらに水田稲作を始めた後も周辺にクリ林が維持されていたと考えられる。越後平野北部の沖積低地に立地する野地遺跡（吉川, 2009）や青田遺跡（吉川, 2004）では縄文時代後・晩期に自然堤防の微高地にクリ林が形成されていたことが明らかになっており、仙台平野でも沖積平野でクリ林が形成されていたことは注目される。

縄文時代の 8B 層は砂礫を含むため水流により短時間に堆積したと考えられるが、植物遺体の保存は比較的良好であった。出土した大型植物化石の種類の半数以上は利用痕跡がある部位ないし利用可能部位である。利用痕跡のある部位が産出したクリ、トチノキ、オニグルミ、ナラガシワ、針葉樹のカヤ、草本のヒシ属は利用後に廃棄されたと考えられる。また、サンショウ、カラスザンショウ、キハダ、ヤマブドウ、サルナシ、マタタビ、ミズキ、ニワトコ属は利用可能部位であり、利用痕跡のある部位と伴に産出していることから、これら植物の部位も利用と関係する可能性が高い。また、縄文晩期にはアサ花粉と種子、弥生中期の 6D 層からはウルシ花粉が僅かに検出されているため、少し離れた所ではアサやウルシの栽培も行われていたようである。一方、通常利用しない部位が産出したモミ属やケヤキ、イタヤカエデ、コシアブラなどは流域ないし丘陵に分布していたと考えられる。

引用文献

吉川昌伸．2004．青田遺跡における縄文時代晩期以降の花粉化石群．日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ 青田遺跡（関連諸科学・写真図版編）（新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団編）：35-42.

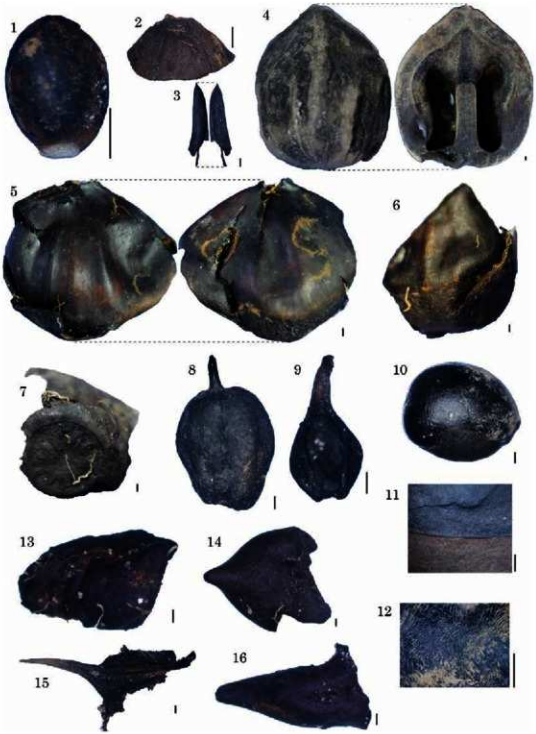
吉川昌伸．2009．植生史と生業及び堆積環境．日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅡ 野地遺跡（新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団編）：153-163.

吉川昌伸．2010．沓形遺跡周辺の弥生時代以降の植生史（平成 19 年度調査）．沓形遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ－（仙台市教育委員会編）：187-193.

吉川昌伸．2011．クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況。植生史研究, 18：65-76.

図版１　中筋遺跡から産出した花粉化石の顕微鏡写真

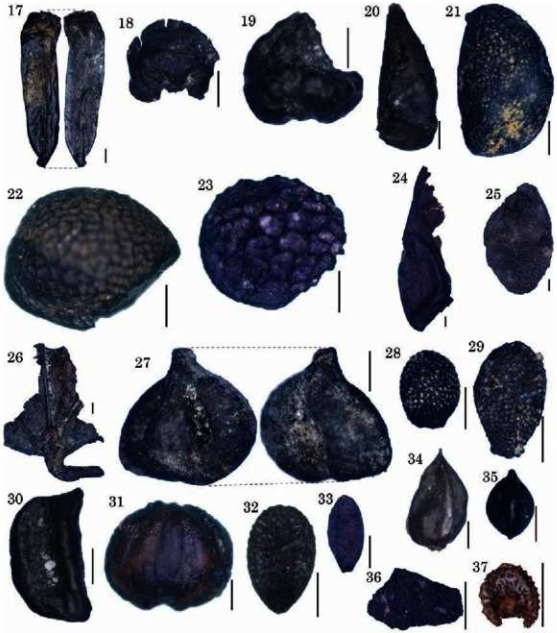
1：コナラ亜属，弥③(n3)，PAL.MY 2190．2：クルミ属，縄①(n7)，PAL.MY 2187．3：クリ，弥③(n3)，PAL.MY 2189．4-6：トチノキ属，縄①(n7)，PAL.MY 2188．7-8：ウルシ，弥⑤(6d)，PAL.MY 2185．9：イネ科（イネ型），弥③(n3)，PAL.MY 2191．10：アサ，縄①(n7)，PAL.MY 2195．11：アサ，縄文①(n8)，PAL.MY 2184．12：鞭虫卵，縄文①(n7)，PAL.MY 2186．　スケール＝10μm



図版２　中筋遺跡から出土した大型植物化石(1)

1.アサ、果実半分 2.カヤ、種皮破片 3.カヤ、葉片 4.オニグルミ、内果皮半分割痕 5,6.クリ剥かれた果皮 7.ナラガシワ、果実破片 8,9.トチノキ、未熟果実 10.トチノキ、未熟種子 11.トチノキ、種皮拡大 12.トチノキ、種皮拡大 13.ヒシ属、果実破片 14･16.ヒシ属、刺状突起

1･16 縄文１地点 8B 層出土、スケールは 1mm



図版3　中筋遺跡から出土した大型植物化石(2)

17.モミ属、葉片 18.モミ属、種鱗 19.ケヤキ、果実破片 20.フジ属、芽 21.キハダ、種子 22.サンショウ、内果皮 23.カラスザンショウ、内果皮 24.イタヤカエデ、果実 25.イタヤカエデ、種子 26.カエデ属、葉片 27.ヤマブドウ、種子 28.マタタビ、種子 29.サルナシ、種子 30.コシアブラ、果実 31.ミズキ、内果皮 32.ニワトコ属、内果皮 33.カヤツリグサ属、果実 34.ミゾソバ、果実 35.イヌタデ属、果実 36.クリ、炭化果皮破片 37.ハコベ属、風化種子

17-35 縄文時代1地点8B層出土、36,37 弥生時代1地点6B層出土、スケールは1mm

第６節　　中筋遺跡から出土した加工材の樹種同定と放射性炭素年代測定

古代の森研究舎

１．はじめに

中筋遺跡は、仙台平野南部の山元町中筋にあり、平野西側を南北方向に延びる丘陵の東側に立地する。周辺には丘陵に接して島状に丘陵が分布している。中筋遺跡では縄文晩期の遺物包含層と弥生時代中期中葉の水田跡、古墳時代前期の土坑などが検出されている。ここでは、弥生時代と考えられる杭２試料と古墳時代の木棺の底板と上板？と考えられる木材の樹種同定、および各試料の放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

1) 樹種同定

試料は、A 区杭１と杭２、B 区木棺の上板?G と底板 h との４点である。加工材からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を切り取り、ガムクロラールで封入してプレパラートを作成し、生物顕微鏡で観察・同定した。

2) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、樹種同定と同試料の A 区杭１(NKS-A1)と杭２(NKS-A2)、B 区木棺の上板?G (NKS-BG)と底板 h (NKS-Bh)との４点である。杭１と杭２は最外年輪、木棺 G と h は試料の最も外側の年輪を用いた。前処理は酸－アルカリ－酸洗浄し、加速器質量分析計（AMS）を用いて測定した。なお測定は Beta Analytic Inc.の協力を得た。

３．結　果

1) 樹種同定

樹種同定の結果、A 区杭１はカヤ、杭２はイヌガヤ、B 区木棺底板 h はモミ属、上板 G はスギであった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を示す。

表1 中筋遺跡出土加工材の樹種

試料	種類	樹種
杭1	丸木杭	カヤ
杭2	丸木杭	イヌガヤ
板材h	棺底板	モミ属
板材G	棺上板?　（半炭化）	スギ

カヤ(*Torreya nucifera* (L.)Sieb. et Zucc.)：晩材部は薄く年輪界がやや不明瞭で軸方向柔細胞を欠く。仮導管にはらせん肥厚があり、2 本のらせんが対になっていることが多い。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はヒノキ型で４個ある。

イヌガヤ(*Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch var. *harringtonia*)：晩材部は薄く均質な材で、樹脂細胞が多く年輪全体に平均的に分布している。仮導管にはらせん肥厚があり放射組織はすべて柔細胞からなり、分野壁孔はトウヒ型で２個くらいある。接線断面でも樹脂細胞が多く出現している。

モミ属(*Abies*)：晩材部は明瞭だがやや幅が狭い。放射組織は放射柔細胞のみからなるが、上下縁辺部に不規則に盛り上がった柔細胞が見られる。放射柔細胞は厚壁でじゅず状末端壁があり、分野壁孔はスギ型で3,4 個ある。

スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don)：炭化材のため樹脂細胞ははっきりわからないが、年輪界は明

瞭で晩材部は幅が厚い。放射組織はすべて放射柔細胞からなり分野壁孔はスギ型で2,3個存在する。

2）放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を表2に、炭素年代から暦年への較正図を図1に示す。A区杭1のカヤ材で2230±30 y BP（2σ：390-200 cal BC）、A区杭2のイヌガヤ材で2180±30 y BP（2σ：360-270 cal BC, 260-170 cal BC））、B区木棺底板hのモミ属材で1740±30 y BP（2σ：240-390 cal AD）、B区木棺上板Gのスギ炭化材で1930±30 y BP（2σ：20-130 cal AD）の年代値であった。

表2　AMS法による放射性炭素年代測定結果

No.	試料	未補正^{14}C年代 *1 (y BP)	δ^{13}C *2 (permil)	^{14}C年代 *3 (y BP)	暦年代 *4 （）内の%は確率	測定番号
NKS-A1	A区 杭1 カヤ材 （最外年輪）	2220 ± 30	-24.1	2230 ± 30	cal BC 360 (cal BP 2310) and cal BC 280 (cal BP 2230) and cal BC 260 (cal BP 2210) and cal BC 240 (cal BP 2190) and cal BC 240 (cal BP 2180) 2σ (95%) : cal BC 390 to 200 (cal BP 2340 to 2150) 1σ (68%) : cal BC 380 to 350 (cal BP 2330 to 2300) and cal BC 300 to 220 (cal BP 2250 to 2180) and cal BC 220 to 210 (cal BP 2170 to 2160)	Beta-341545
NKS-A2	A区 杭2 イヌガヤ材 （最外年輪）	2160 ± 30	-23.7	2180 ± 30	cal BC 340 (cal BP 2290) and cal BC 320 (cal BP 2270) and cal BC 200 (cal BP 2150) 2σ (95%) : cal BC 360 to 270 (cal BP 2310 to 2220) and cal BC 260 to 170 (cal BP 2210 to 2120) 1σ (68%) : cal BC 350 to 290 (cal BP 2300 to 2240) and cal BC 250 to 220 (cal BP 2180 to 2170) and cal BC 210 to 200 (cal BP 2160 to 2140)	Beta-341546
NKS-BG	B区 木棺材G 上板？(半炭化) スギ材	1930 ± 30	-25.1	1930 ± 30	cal AD 70 (cal BP 1880) 2σ (95%) : cal AD 10 to 10 (cal BP 1940 to 1940) and cal AD 20 to 130 (cal BP 1930 to 1820) 1σ (68%) : cal AD 30 to 40 (cal BP 1920 to 1920) and cal AD 50 to 80 (cal BP 1900 to 1860) and	Beta-341547
NKS-Bh	B区 木棺材h 底板 モミ属材	1760 ± 30	-26.1	1740 ± 30	cal AD 260 (cal BP 1690) and cal AD 300 (cal BP 1660) and cal AD 320 (cal BP 1630) 2σ (95%) : cal AD 240 to 390 (cal BP 1720 to 1560) 1σ (68%) : cal AD 250 to 340 (cal BP 1700 to 1610) and	Beta-341548

＊1　未補正 ^{14}C 年代（y BP），（同位体分別未補正）：試料の ^{14}C／^{12}C 比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前（BP）かを計算した年代。半減期としては Libby の 5568 年を用いた。

＊2　δ^{13}C（permil）：試料の測定 ^{14}C／^{12}C 比を補正するための ^{13}C／^{12}C 比。この安定同位体比は、下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta^{13}C\ (‰) = \frac{(^{13}C/^{12}C)\ [試料] - (^{13}C/^{12}C)\ [標準]}{(^{13}C/^{12}C)\ [標準]} \times 1000$$

（ここで ^{13}C／^{12}C［標準］＝0.0112372）

＊3　^{14}C 年代（y BP），（同位体分別補正）：試料の炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）を測定して、試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}C の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の ^{13}C 値を-25（‰）に基準化することによって得られる年代値で、暦年代を得る際にはこの年代をもちいる。

＊4　暦年代：過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。
使用したデータセット：Intcal09

4．考　察

A区から出土した杭1はカヤ材、杭2はイヌガヤ材であった。炭素年代では杭1が杭2より約50年古い年代が得られているが、暦年代は較正曲線が水平になるため年代の幅が広くはっきりしない。暦年

代では杭１と杭２は弥生時代前期頃である。B 区の木棺については、炭素年代では上板 G の方が底

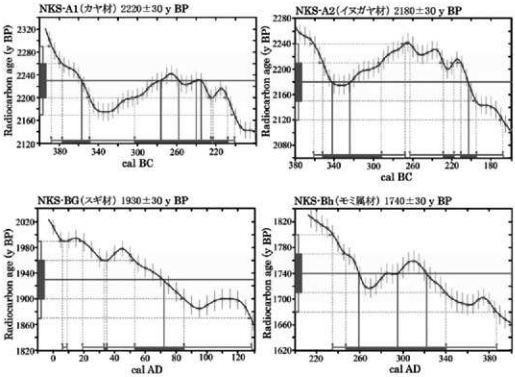


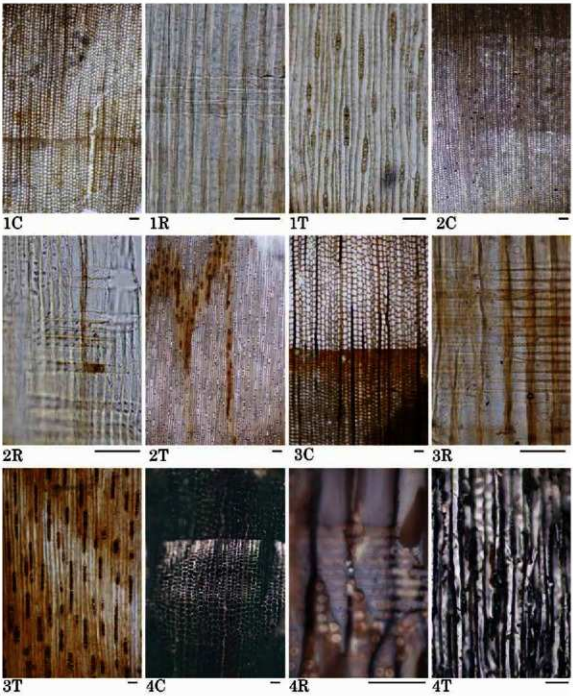
図1　放射性炭素年代から暦年代への較正

板 h より約 200 年古い年代であり、底板 h の暦年代が 240-390 cal AD の古墳時代前期頃、上板 G が 20-130 cal AD の弥生時代中期頃である。この場合、上板 G に利用された木材が樹齢 200 年を超えるような大木のスギの中心部分であれば矛盾しない。いづれにしても最外年輪で測定されている杭と異なり、棺材については最外年輪でないため伐採された年代よりは古い年代である。

カヤとイヌガヤは東北の太平洋沿岸部に普通に生育し、宮城県南部では山林内で多く分布し入手しやすい材であったと考えられる。棺材とみられるモミ属とスギは年輪が平行に近く、大径木を板材として利用したと考えられる。東北における古代の棺材分析例はないが、近世ではスギや複維管束亜属など針葉樹を用いた例が多い（伊東ほか, 2012）。

引用文献

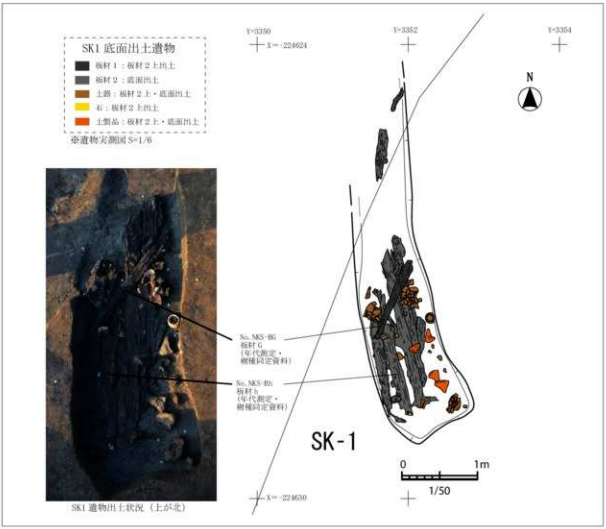
伊東隆夫・山田昌久．2012．木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社．449p.



図版１　中筋遺跡から出土した加工材の顕微鏡写真

１カヤ（杭１）．２イヌガヤ（杭２）．３モミ属（底板h）．４スギ（上板G）．

（C：横断面, R：放射断面, T：接線断面）　スケール=0.1mm



参考：樹種同定・放射性炭素年代測定分析試料

第７節　中筋遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）および炭素・窒素安定同位体分析

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

宮城県山元町に所在する中筋遺跡の測定対象試料は、弥生時代中期に位置づけられる土器に付着する炭化物４点である（表 1）。試料 No.１～３は鉢形土器の体部上位内面、No.４は蓋形土器の口縁部内面より採取した。いずれの炭化物も 1mm 程度の厚さがあり、器面にしっかりと付着する状態であった。

2　年代測定試料の化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。AAA 処理された試料を２つに分け、一方を年代測定用、他方を安定同位体等分析用の試料とする。
（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。
（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3　年代測定試料の測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　炭素・窒素安定同位体比及び含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

（１）試料を EA（元素分析装置）で燃焼し、N_2 と CO_2 を分離・定量する（表 3）。
（２）分離した N_2 と CO_2 は、インターフェースを通して質量分析計に導入し、炭素の安定同位体比（$\delta^{13}C$）と窒素の安定同位体比（$\delta^{15}N$）を測定する。

これらの処理、測定には、元素分析計-安定同位体比質量分析計システム（EA-IRMS：Thermo Fisher Scientific 社製 Flash EA1112- DELTA V　ADVANTAGE ConFlo Ⅳ System）を使用する。$\delta^{13}C$ の測定では IAEA の C6 を、$\delta^{15}N$ の測定では N1 を標準試料とする。

5　算出方法

（１）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料（PDB）からのずれを示した値であ

る。$\delta^{15}N$ は、試料窒素の ^{15}N 濃度（$^{15}N/^{14}N$）を測定し、基準試料（大気中の窒素ガス）からのずれを示した値である。いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。$\delta^{13}C$ は AMS 装置と質量分析計で測定され、AMS 装置による値は表中に（AMS）と注記し（表 1）、質量分析計による値は表中に（MASS）と注記する（表 3）。$\delta^{15}N$ は質量分析計による値で、表中に（MASS）と注記する（表 3）。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（$\pm 1\sigma$）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（$1\sigma = 68.2\%$）あるいは 2 標準偏差（$2\sigma = 95.4\%$）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

試料の測定結果を表 1～3 に示す。

試料 4 点の ^{14}C 年代は、2340±20yrBP（No.3）から 2180±20yrBP（No.2）の間にあり、かなり狭い範囲に収まるが、差も若干認められる。暦年較正年代（1σ）は、最も古い No.3 が 407～391cal BC の範囲、最も新しい No.2 が 352～193cal BC の間に 2 つの範囲で示され、全体として縄文時代晩期末葉ないし弥生時代前期への移行期頃から弥生時代中期頃に相当する（小林 2009）。土器の特徴から推定される時期に対して、おおむね一致するか、若干古い年代値となっている。

これらの土器付着炭化物はいずれも土器の内面に付着し、調理に伴って残存した食物に由来する可能性が高い。食物はその種類によって含まれる炭素の由来が異なり、それが年代値に影響する場合があるため、次に試料となった炭化物の特徴を炭素と窒素の安定同位体比、含有量に基づいて検討する。

今回測定された試料の炭素・窒素安定同位体比を日本列島の食料資源に関するデータと比較したグラフをYoneda et al. 2004に基づいて作成し、図版2に示した。炭素安定同位体比 $\delta^{13}C$ は、-26.6‰(No.1)から-25.2‰(No.3)で、C3植物やそれを食べる草食動物の範囲に含まれる。窒素安定同位体比 $\delta^{15}N$ は、2.81‰(No.2)から6.83‰(No.4)で、C3植物等の範囲に重なりながら、より高い範囲に広がっている。

土器付着炭化物の由来は単一とは限らず、複数の種類の食物等の残滓が含まれる可能性がある。このため、グラフ上に1点として示される各試料の内容も、複数の食物の混合物である可能性を考慮して検討する必要がある。$\delta^{13}C$ がC3植物やそれを食べる草食動物の範囲に含まれるのに対し、$\delta^{15}N$ がそれらよりも高い範囲に広がることについては、$\delta^{15}N$ が食物連鎖の上位に向かって濃縮されることを踏まえ、陸生の雑食もしくは肉食動物由来の窒素が試料に含まれると見なすことで、ある程度説明が可能である（赤澤ほか1993、吉田2006）。海産物の利用については、$\delta^{13}C$ がそれらの範囲から離れていることから、積極的には認められない。ただし、4点の中で $\delta^{13}C$ が最も高いNo.3や、$\delta^{15}N$ が最も高いNo.4の年代値が相対的に古く、$\delta^{15}N$ が最も低いNo.2が新しい年代値を示していることに注目すれば、No.3、4等に海産物由来の炭素が含まれ、海洋リザーバー効果によって年代値が実際より若干古く見積もられている可能性を考慮するべきとも考えられる。この点については、土器の型式学的特徴と合わせて検討を深める必要がある。

炭素・窒素含有量に基づいてC/N比を算出すると、モル比で12.5（No.2）から20.7（No.4）の範囲である。C/Nモル比については、ドングリ等デンプンを主成分とするものを除くC3植物は7～20、草食動物もこの範囲に含まれ、海生生物はこれらと一部重なりながら若干低い値となることが報告されており（吉田2006）、今回の試料4点はおおむねC3植物や草食動物の範囲に含まれることになる。安定同位体比に基づく検討結果に矛盾しない結果と言える。

試料の炭素含有率はすべて60%を超え、炭化物として適正な値である。今回の分析において、化学処理、測定上の問題は特に認められなかった。

文献

赤澤威，米田穣，吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析，中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11　―明科町内―　北村遺跡　本文編（(財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14），長野県教育委員会，（財）長野県埋蔵文化財センター，445-468

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林謙一 2009　近畿地方以東の地域への拡散，西本豊宏編，新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Yoneda, M. et al. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan, *Journal of Archaeological Science*, 31, 97-107

吉田邦夫　2006　煮炊きして出来た炭化物の同位体分析，新潟県立歴史博物館研究紀要，7，51-58

表１　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-133577	No.1	弥生土器 B-202	土器付着炭化物	AAA	**-23.65 ± 0.38**	**2,220 ± 20**	**75.85 ± 0.23**
IAAA-133578	No.2	弥生土器 B-201	土器付着炭化物	AaA	**-25.48 ± 0.23**	**2,180 ± 20**	**76.27 ± 0.22**
IAAA-133579	No.3	弥生土器 B-203	土器付着炭化物	AaA	**-23.24 ± 0.17**	**2,340 ± 20**	**74.73 ± 0.23**
IAAA-133580	No.4	弥生土器 B-204	土器付着炭化物	AaA	**-25.50 ± 0.27**	**2,270 ± 20**	**75.36 ± 0.22**

［#6421］

表２　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

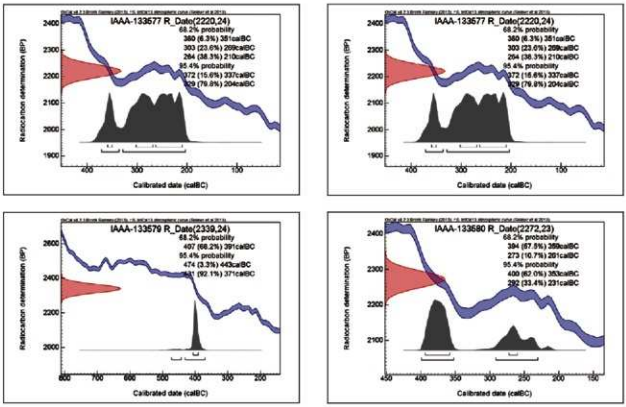
測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-133577	2,200 ± 20	76.06 ± 0.22	2,220 ± 24	360calBC - 351calBC (6.3%) 303calBC - 269calBC (23.6%) 264calBC - 210calBC (38.3%)	372calBC - 337calBC (15.6%) 329calBC - 204calBC (79.8%)
IAAA-133578	2,180 ± 20	76.19 ± 0.21	2,176 ± 22	352calBC - 297calBC (49.1%) 228calBC - 221calBC (4.3%) 211calBC - 193calBC (14.8%)	358calBC - 280calBC (57.1%) 259calBC - 243calBC (2.8%) 236calBC - 170calBC (35.5%)
IAAA-133579	2,310 ± 20	75.00 ± 0.23	2,339 ± 24	407calBC - 391calBC (68.2%)	474calBC - 443calBC (3.3%) 431calBC - 371calBC (92.1%)
IAAA-133580	2,280 ± 20	75.28 ± 0.22	2,272 ± 23	394calBC - 359calBC (57.5%) 273calBC - 261calBC (10.7%)	400calBC - 353calBC (62.0%) 292calBC - 231calBC (33.4%)

［参考値］

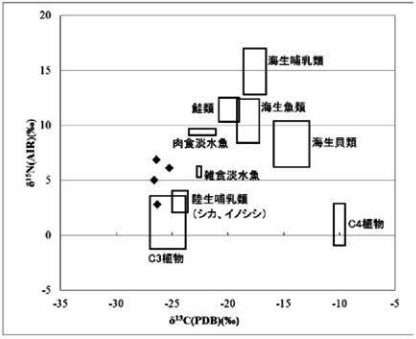
表３　炭素・窒素安定同位体比及び含有量

試料名	δ ^{13}C (‰)（MASS）	δ ^{15}N (‰)（MASS）	C 含有量（%）	N 含有量（%）	C/N 重量比	C/N モル比
No.1	-26.6	5.02	65.6	5.71	11.5	13.4
No.2	-26.3	2.81	61.0	5.69	10.7	12.5
No.3	-25.2	6.12	62.1	5.33	11.6	13.6
No.4	-26.4	6.83	62.6	3.52	17.8	20.7

注）表３に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は、SI サイエンス株式会社の協力を得て行った。

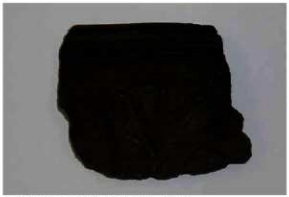


[図版 1]暦年較正年代グラフ（参考）



[図版 2]炭素・窒素安定同位体比グラフ（参考）

◆は測定試料。散布図上に表示した枠は、食料資源の同位体比の分布範囲を示す。Yoneda et al. 2004 に基づき作成した。



試料名 No. 1　測定番号：IAAA-133577
弥生土器・鉢（B-202・表面）第 133 図 10

試料名 No. 1　測定番号：IAAA-133577
弥生土器・鉢（B-202・裏面）

試料名 No. 2　測定番号：IAAA-133578
弥生土器・鉢（B-201・表面）第●図●

試料名 No. 2　測定番号：IAAA-133578
弥生土器・鉢（B-201・裏面）

試料名 No. 3　測定番号：IAAA-133579
弥生土器・鉢（B-203・表面）第 100 図 19

試料名 No. 3　測定番号：IAAA-133579
弥生土器・鉢（B-203・裏面）

試料名 No. 4　測定番号：IAAA-133579
弥生土器・蓋（B-204・表面）第 75 図 1

試料名 No. 4　測定番号：IAAA-133579
弥生土器・蓋（B-204・表面）

参考：放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体分析試料

第８節　中筋遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

宮城県山元町に所在する中筋遺跡の測定対象試料は、弥生土器に付着した炭化物７点と、泥炭層から採取した植物遺存体３点である（表１）。土器付着炭化物はすべて土器の外面より採取した。炭化物は厚く、しっかりと付着する状態のものが多かったが、一部付着の薄い物も見られた。土器の時期は弥生時代中期前半頃とされる。植物遺存体は、No.12 が葉と見られる植物片、No,13 が直径 3mm の球形の種実、No.14 がクルミ核と見られる種実である。

2　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC

が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは 2 標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

5　測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

（1）土器付着炭化物の年代

試料の ^{14}C 年代は、2610±30yrBP（No.10）から 2260±30yrBP（No.6）の間にある。暦年較正年代（1σ）は、最も古い No.10 が 806～791cal BC の範囲、最も新しい No.6 が 386～235cal BC の間に 2 つの範囲で示され、7 点全体で縄文時代晩期中葉から弥生時代中期頃に相当する（小林 2009）。炭化物の付着した土器が弥生時代中期前半頃とされるのに対し、No.5、6、8、11 はおおよそ整合する結果と見られるが、No.7、9、10 は古い年代を示した。

今回測定した土器付着炭化物は土器の外面から採取されており、土器を火にかけた際の燃料の煤に由来する可能性が高い。この場合、燃料が古い木であれば、古木効果で年代値が古くなる可能性がある。一方、煮炊きの吹きこぼれによって食物に由来する炭化物が土器の外面に残る可能性もある。そこで、土器付着炭化物の δ^{13}C を確認すると、-27.78±0.48‰（No.8）から-23.08±0.29‰（No.5）で、C3 植物やそれを食べる草食動物等の範囲に収まっている（赤澤ほか 1993）。この数値は、食物に由来する炭素の海洋リザーバー効果によって年代値が実際より古く見積もられた可能性を積極的に支持しないものである。ただし、土器付着物はさまざまな物質を含む可能性があり、分析結果はその平均値であることから、海洋リザーバー効果についても完全に否定されるものではない。

また、炭化物には土器に厚く付着していたものと、薄かったものが見られた。試料の炭素含有率を見ると、No.10 以外の 6 点はいずれも 50%を超える適正な値であるが、No.10 は 19%という炭化物としては低い値になっている。No.10 について特に炭化物以外の物質の混入は観察されていないが、土器の胎土など炭化物以外のものが含まれる可能性があり、炭素の由来に注意を要する。

上述のような諸々の注意点と、土器の型式学的特徴とを合わせて、検討を深める必要がある。

（2）植物遺存体の年代

試料の ^{14}C 年代は、No.12 が 2050±20yrBP、No.13 が 2150±30yrBP、No.14 が 2130±30yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、No.12 が 102～2cal BC の間に 3 つの範囲、No.13 が 349～124cal BC の間に 3 つの範囲、No.14 が 199～112cal BC の範囲で示され、いずれも弥生時代中期頃に相当する。

試料の炭素含有率はすべて約 50%ないしそれを超える値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

赤澤威，米田穣，吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析，中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 ―明科町内― 北村遺跡 本文編（(財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 14），長野県教育委員会，（財）長野県埋蔵文化財センター，445-468

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり 第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，55-82

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表 1　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

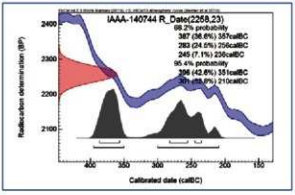
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり Libby Age（yrBP）	δ ^{13}C 補正あり pMC (%)
IAAA-140744	No.5	弥生土器 B-213	土器付着炭化物	AaA	**-23.08 ± 0.29**	**2,260 ± 20**	**75.49 ± 0.22**
IAAA-140745	No.6	弥生土器 B-221	土器付着炭化物	AaA	**-24.74 ± 0.55**	**2,260 ± 30**	**75.51 ± 0.25**
IAAA-140746	No.7	弥生土器 B-222	土器付着炭化物	AaA	**-25.83 ± 0.47**	**2,460 ± 30**	**73.60 ± 0.24**
IAAA-140747	No.8	弥生土器 B-224	土器付着炭化物	AaA	**-27.78 ± 0.48**	**2,280 ± 30**	**75.25 ± 0.25**
IAAA-140748	No.9	弥生土器 B-223	土器付着炭化物	AaA	**-25.56 ± 0.56**	**2,410 ± 30**	**74.13 ± 0.23**
IAAA-140749	No.10	弥生土器 B-206	土器付着炭化物	AaA	**-26.41 ± 0.51**	**2,610 ± 30**	**72.28 ± 0.24**
IAAA-140750	No.11	弥生土器 B-225	土器付着炭化物	AaA	**-25.22 ± 0.53**	**2,280 ± 30**	**75.26 ± 0.26**
IAAA-140751	No.12	T-30 B20 層	植物片（葉）	AaA	**-22.19 ± 0.39**	**2,050 ± 20**	**77.47 ± 0.24**
IAAA-140752	No.13	T-30 B18 層	種実	AaA	**-28.08 ± 0.49**	**2,150 ± 30**	**76.49 ± 0.25**
IAAA-140753	No.14	T-30 B29 層	種実（クルミ）	AAA	**-21.91 ± 0.33**	**2,130 ± 30**	**76.73 ± 0.24**

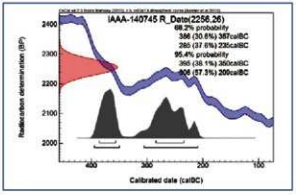
［#6722］

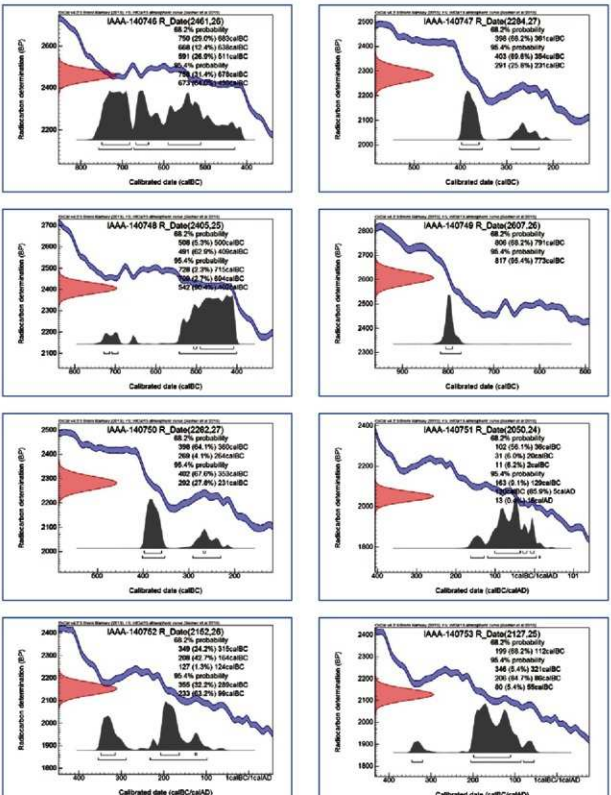
表 2　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-140744	2,230 ± 20	75.79 ± 0.22	2,258 ± 23	387calBC - 357calBC (36.6%) 283calBC - 256calBC (24.5%) 245calBC - 236calBC (7.1%)	396calBC - 351calBC (42.6%) 301calBC - 210calBC (52.8%)
IAAA-140745	2,250 ± 20	75.55 ± 0.23	2,256 ± 26	386calBC - 357calBC (30.6%) 285calBC - 235calBC (37.6%)	395calBC - 350calBC (38.1%) 306calBC - 209calBC (57.3%)
IAAA-140746	2,480 ± 30	73.48 ± 0.23	2,461 ± 26	750calBC - 683calBC (29.0%) 668calBC - 638calBC (12.4%) 591calBC - 511calBC (26.9%)	758calBC - 678calBC (31.4%) 673calBC - 430calBC (64.0%)
IAAA-140747	2,330 ± 30	74.82 ± 0.24	2,284 ± 27	398calBC - 361calBC (68.2%)	403calBC - 354calBC (69.6%) 291calBC - 231calBC (25.8%)
IAAA-140748	2,410 ± 20	74.04 ± 0.22	2,405 ± 25	508calBC - 500calBC (5.3%) 491calBC - 409calBC (62.9%)	728calBC - 715calBC (2.3%) 709calBC - 694calBC (2.7%) 542calBC - 402calBC (90.4%)
IAAA-140749	2,630 ± 20	72.07 ± 0.22	2,607 ± 26	806calBC - 791calBC (68.2%)	817calBC - 773calBC (95.4%)
IAAA-140750	2,290 ± 30	75.23 ± 0.24	2,282 ± 27	398calBC - 360calBC (64.1%) 269calBC - 264calBC (4.1%)	402calBC - 353calBC (67.6%) 292calBC - 231calBC (27.8%)
IAAA-140751	2,000 ± 20	77.92 ± 0.23	2,050 ± 24	102calBC - 36calBC (56.1%) 31calBC - 20calBC (6.0%) 11calBC - 2calBC (6.2%)	163calBC - 129calBC (9.1%) 120calBC - 5calAD (85.9%) 13calAD - 16calAD (0.4%)
IAAA-140752	2,200 ± 20	76.01 ± 0.24	2,152 ± 26	349calBC - 315calBC (24.2%) 208calBC - 164calBC (42.7%) 127calBC - 124calBC (1.3%)	355calBC - 289calBC (32.2%) 233calBC - 99calBC (63.2%)
IAAA-140753	2,080 ± 20	77.22 ± 0.24	2,127 ± 25	199calBC - 112calBC (68.2%)	346calBC - 321calBC (5.4%) 206calBC - 86calBC (84.7%) 80calBC - 55calBC (5.4%)

［参考値］







[図版] 暦年較正年代グラフ（参考）

試料名 No. 5　測定番号：IAAA-140744
弥生土器・甕（B-213・表面）第 77 図 1

試料名 No. 5　測定番号：IAAA-140745
弥生土器・甕（B-221・表面）第 79 図 1

試料名 No. 7
測定番号：IAAA-140746
弥生土器・鉢（B-222・表面）
第 74 図 2

試料名 No. 8
測定番号：IAAA-140747
弥生土器・高坏（B-224・表面）
第 69 図 1

試料名 No. 9
測定番号：IAAA-140748
弥生土器・深鉢（B-223・表面）
第 69 図 8

試料名 No. 10
測定番号：IAAA-140749
弥生土器・鉢（B-206・表面）
第 74 図 1

試料名 No. 11
測定番号：IAAA-140750
弥生土器・深鉢（B-225・表面）
第 134 図 1

参考：放射性炭素年代測定分析（土器類）試料

第９節　　宮城県山元町中筋遺跡出土土器の圧痕分析

高瀬克範（北海道大学大学院文学研究科）

１．分析の目的

土器の胎土にのこる植物種子や昆虫の圧痕は，土器製作時の資源利用のほか，土器製作の季節や周囲の環境推定にも有効な情報を提供する。本稿では，宮城県南部における弥生文化期の穀物利用に関する情報収集をおもな目的として，土器にのこる圧痕を検討する。

２．分析の対象

分析対象としたのは，弥生文化期以前の文化層となる中筋遺跡Ａ区６層以下から出土した土器のうち，接合復元されている全個体とすべての底部破片（3 箱，グリッドは多様），および J-5・6 グリッド（1 箱），H-4 グリッド（1 箱），I- 3・4 グリッド（1 箱），H-5・6 グリッド（1 箱），H-3 グリッド（1 箱），F-3 グリッド（2 箱），F-4 グリッド（2 箱）出土の土器片である。復元個体は総数で数個体にとどまり，コンテナ数は合計で 12 箱である。破片数は計数していないが，　コンテナ 1 箱の平均破片数はおおよそ 200～400 個程度と推定される。したがって，観察した破片数は概算で 2400～4800 個程度と推計される。出土土器の全量にはおよばないが，本遺跡出土土器の植物種子圧痕の傾向を一定程度とらえることができるサンプル数と考えられる。

土器表面の保存状態は必ずしも良好ではない。埋没環境の影響により，表面が比較的強度に摩耗している個体が多い。また，最終的に埋没する以前に，長期間にわたって地表面に露出したり，自然の営力で地表面を移動したりしていた個体も数多く含まれていると推定される。

３．分析の方法

分析方法は，丑野・田川（1991）が開発したレプリカ法を用いた。圧痕の内部に土砂が残っている場合には筆などで取り除くか，水を用いて再洗浄した。離型材には水を用い，パラロイド等は使用していない。レプリカ作成には歯科用付加重合型シリコン（トクヤマデンタル社トクヤマフィットテスター）を用いたが，深さのある 1 点（NKS-006-01）の圧痕に関してはブルーミックスソフトを用いた。作成した圧痕のレプリカは，走査型電子顕微鏡（KEYENCE VE-8800）により写真撮影をおこなった[1]。電子顕微鏡写真およびレプリカ実物の実体顕微鏡観察によって，圧痕の形成原因となった物質の同定を行った。

４．分析結果

分析結果を第 1 表にしめした。写真 1～30 には圧痕が観察された土器の写真（左）と圧痕レプリカの電子顕微鏡写真（右）を掲載している。土器の写真は，型式学的な特徴を判断しやすい外面の写真を優先して掲載した。写真に圧痕が写っている場合にはその位置を矢印でしめしたが，圧痕が断面や内面側にあるため写真に写っていない場合には矢印を付していない。

種子の形状，顆粒状突起，紡錘状の筋からみてイネの籾と同定されるのは，NKS-008（写真 21，22），NKS-010（写真 25，26）である。また，NKS-007-02（写真 19，20）は種子の一部しか残存していない

が，表面の保存状態が良好で顆粒状突起が認められる。護穎・内穎（長田 2002）の境界も明瞭に観察され，籾が一部で剥がれおち玄米が露出している箇所があることが確認できる。また，NKS-009（写真 23，24）は，やはり顆粒状突起から護穎・内穎の破片と同定される。

NKS-001（写真 1，2），NKS-004–01（写真 7，8），NKS-007-1（写真 17，18）の表面の保存状態はそれほどよくないが，一部に確実な顆粒状組織が残存しておりやはりイネと同定される。護穎・内穎が剥がれて部分的に玄米が露出している可能性も考えられるが，籾の境界が明確には認められるわけではない。したがって顆粒状突起が一部にしか認められない原因が，圧痕表面の保存状態に悪さにあるのか，実際に護穎・内穎の一部が剥がれ落ちていたためであるのかについては確定できない。

NKS-004-02（写真 9，10）もサイズや紡錘形の隆起からみてイネの種子と同定されるが，表面には顆粒状突起は全くみられない。胚乳の可能性と，たんに籾の表面組織が観察しにくい状態になっている可能性の双方が考えられるが，イネ種子に由来することは確実である。

NKS-002（写真 3，4），NKS-003（写真 5，6），NKS-005（写真 11，12），NKS-011（写真 27，28），NKS-012（写真 29，30）には，圧痕の由来物質を特定できるような形態的特徴はなく同定結果は不明である。NKS-006-01（写真 13，14）は U 字状を呈し断面が丸いが，口・脚・触角などはないため昆虫ではない。表面には低い突起が認められ，全体の形状からみてもアオイ科などの植物種子の可能性が考えられるが，明確な同定の根拠を見いだすことができないため同定結果は不明である。NKS-006-02（写真 15，16）は肉眼で圧痕を発見した際にはマメ科の可能性が想定されたが，レプリカの電子顕微鏡観察では臍は確認されず不明と同定された。

5．まとめ

中筋遺跡出土土器の圧痕をレプリカ法によって分析したところ，15 個の圧痕のうち 8 個がイネに由来することが明らかとなった。そのほかの 7 個については圧痕の由来物質が不明であるため，栽培植物としてはイネのみが検出されたことになる。

イネの圧痕をともなう土器片のうち 1 点（NKS-001）は古墳文化前期に属し，1 点（NKS-009）は縄文晩期～弥生文化期の所産である。それ以外の 6 個はすべて弥生文化期に属するものであることを考えると，縄文晩期に遡る可能性がある網目状の燃糸文をもつ粗製土器片（NKS-009）もまた，弥生文化期に属する可能性が高い。したがって，今回の分析においてはイネが縄文晩期にさかのぼる確実な証拠はえられていない。

弥生文化期の本州島東北部においては，土器にのこる種子圧痕のなかではイネが圧倒的多数を占める点がひろく共通することがわかってきている（高瀬 2010a，2010b，2011，Takase2011）。レプリカ法で縄文晩期以前のイネがみつかった例はなく，弥生文化期の雑穀類もまだ検出されていない。本遺跡での分析結果も，穀物の種類やイネの出現時期をふくめて従来の分析結果ときわめて整合的である。

当時の稲作は，大規模な平野以外にはあまり広がっていない可能性が指摘されるようになってきているが（高瀬 2011 など），本遺跡の調査成果により宮城県域南部の沿岸部では，弥生文化期中期前～中葉に稲作が行われていることが複数の資料から裏付けられた。水田跡，石器の組成と使用痕，微化石にくわえて，本稿で検討した種子の圧痕もそうした理解をささえる証拠になりえる。今後は，さらにミクロ

な生業の地域差を把握するために，おなじ山元町内であってもより標高の高い丘陵上の遺跡などにおける様相についても，同じ手法を用いて解明していく必要がある。

本稿の作成にあたり，山田隆博氏をはじめ山元町教育委員会の方々に多大なご協力をいただいた。また，日下和寿（白石市教育委員会），大坂拓氏（宮城県教育委員会）にもお世話になった。同定にあたっては，椿坂恭代氏にご教示を賜った。お世話になった方々に記して感謝申し上げる。本報告は科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号：25244036，研究代表者：設楽博己）による研究成果の一部である。

註

（1）電子顕微鏡による写真撮影は遠藤英子氏による。

引用文献

丑野　毅・田川裕美 1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24, pp.13-35。

長田武正 2002『増補日本イネ科植物図譜』平凡社。

高瀬克範 2010a「レプリカ・セム法による先史時代の植物利用に関する基礎的研究－青森県域出土土器を対象として－」『明治大学日本古代学研究所紀要』13, pp.3-22。

高瀬克範 2010b「レプリカ・セム法による先史時代の植物利用に関する基礎的研究－秋田県域出土土器を対象として－」『貝塚』66, pp.1-18。

Takase, K. 2011 "Plant Seeds Recovered from Potsherds of the Final Jomon and Yayoi Periods: A Case Study in Iwate and Yamagata Prefectures, Northeastern Japan", Meiji University Ancient Studies of Japan, 3, pp.41-63.

高瀬克範 2011「レプリカ法による縄文晩期から弥生・続縄文期の土器圧痕の検討―北海道・宮城県域における事例研究―」『北海道考古学』47, pp.33-50。

第1表　分析結果一覧

圧痕No.	出土位置	層位	圧痕をともなう土器の器形	圧痕の位置	時期	圧痕の由来物質	写真	備考
NKS-001	B区　SK11	底面	壺	口縁部　外面	古墳前期（塩竈式）	イネ	1, 2	C-92
NKS-002	A区　F-2	6D層	甕?	底部　内面	縄文晩期～弥生中期	不明	3, 4	B-197
NKS-003	A区　F-3	6D層	甕?	底部　外面	縄文晩期～弥生中期	不明	5, 6	B-196
NKS-004-01	A区　H-3	6D層	甕	底部　外面	弥生	イネ	7, 8	B-188, 布目
NKS-004-02	A区　H-3	6D層	甕	底部　外面	弥生	イネ	9, 10	B-188
NKS-005	A区　H-3	6D層	甕?	底部　外面	縄文晩期～弥生中期	不明	11, 12	B-187
NKS-006-01	A区　F-3	7層	鉢	底部　断面	縄文晩期後葉	不明	13, 14	A-144
NKS-006-02	A区　F-3	7層	鉢	底部　断面	縄文晩期後葉	不明	15, 16	A-144
NKS-007-01	A区　J-4	6D層	甕	胴部　外面	弥生中期中葉（桝形式）	イネ	17, 18	B-189
NKS-007-02	A区　J-4	6D層	甕	胴部　内面	弥生中期中葉（桝形式）	イネ	19, 20	B-189
NKS-008	A区　J-5	6D層	壺	頸部　外面	弥生中期中葉（桝形式）	イネ	21, 22	B-190
NKS-009	A区　J-5	6D層	甕	胴部　断面	縄文晩期～弥生中期	イネ	23, 24	B-303
NKS-010	A区　H-4	6E層	甕	胴部　内面	弥生中期中葉（桝形式）	イネ	25, 26	B-72
NKS-011	A区　F-3	6E層	壺	頸部　断面	縄文晩期～弥生中期	不明	27, 28	B-191
NKS-012	A区　F-3	7層	甕	胴部　外面	縄文晩期～弥生中期	不明	29, 30	A-111

写真１　NKS-001（C-92）

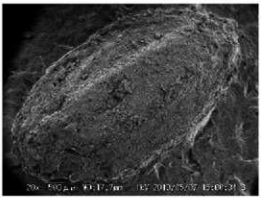


写真２　NKS-001

写真３　NKS-002（B-197）

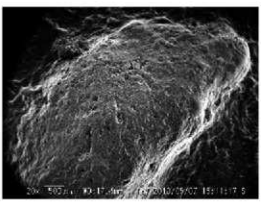


写真４　NKS-002

写真５　NKS-003（B-196）

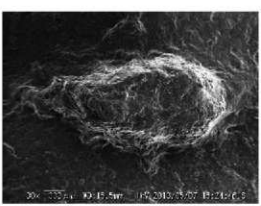


写真６　NKS-003

写真７　NKS-004-01（B-188）

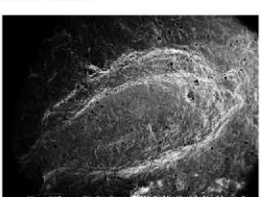


写真８　NKS-004-01

写真図版１　圧痕が認められた土器（左）と圧痕レプリカの電子顕微鏡写真（右）(1)

写真９　NKS-004-02（B-188）

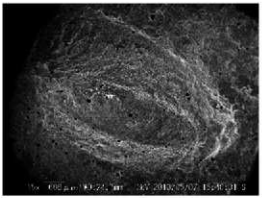


写真１０　NKS-004-02

写真１１　NKS-005（B-187）

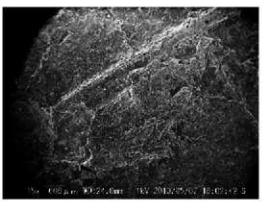


写真１２　NKS-005

写真１３　NKS-006-01（A-144）

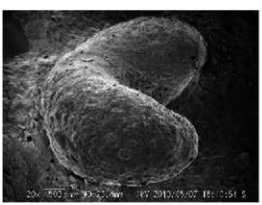


写真１４　NKS-006-01

写真１５　NKS-006-02（A-144）

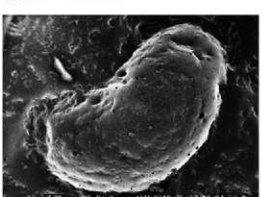


写真１６　NKS-006-02

写真図版２　圧痕が認められた土器（左）と圧痕レプリカの電子顕微鏡写真（右）(2)

写真１７　NKS-007-01（B-189）

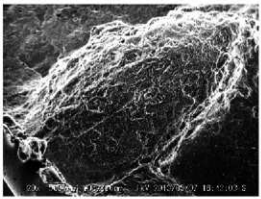


写真１８　NKS-007-01

写真１９　NKS-007-02（B-189）

写真２０　NKS-007-02

写真２１　NKS-008（B-190）

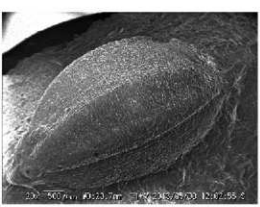


写真２２　NKS-008

写真２３　NKS-009（B-188）

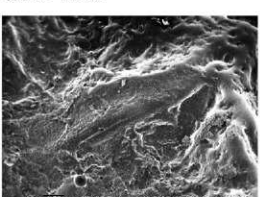


写真２４　NKS-009

写真図版３　圧痕が認められた土器（左）と圧痕レプリカの電子顕微鏡写真（右）(3)

写真２５　NKS-010 (B-72)

写真２６　NKS-010

写真２７　NKS-011 (B-191)

写真２８　NKS-011

写真２９　NKS-012 (A-111)

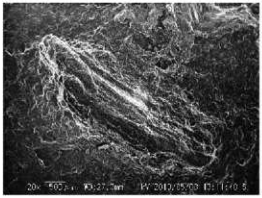


写真３０　NKS-012

写真図版４　圧痕が認められた土器（左）と圧痕レプリカの電子顕微鏡写真（右）(4)

第 10 節　　宮城県山元町中筋遺跡出土石器の使用痕分析

高瀬克範（北海道大学大学院文学研究科）

1．分析の目的

本稿では，中筋遺跡における弥生文化期の生産活動を明らかにすることを目的として，石器の機能・用途の推定をおこなう。

2．分析の対象と方法

分析対象は，中筋遺跡から出土したすべての石包丁，板状石器，石斧（破片をふくむ）である。内訳は，石包丁 4 点，石包丁の未製品 2 点，板状石器 13 点，石斧 1 点の計 20 点で，形態，製作技術，岩石，出土層位，出土位置および伴出した土器を総合的に判断して，すべて弥生文化中期前葉～中葉の所産と考えられる。石器の詳細については，事実記載や属性表を参照されたい。

分析方法は，Keeley（1977，1980）による高倍率法を用いた。使用痕光沢面（use-wear polish）の分類は，自らの使用実験をふまえたうえで，梶原・阿子島（1981），阿子島（1989）にしたがった。石器表面の観察には落射証明付き金属顕微鏡（オリンパス BX-FM）を用い，必要に応じて顕微鏡に接続したデジタルカメラ（オリンパス DP-21）で顕微鏡写真を撮影した。観察にさきだって，エタノールを含ませた脱脂綿で資料表面の油脂分を除去している。

石器表面における使用痕光沢面の分布範囲とその発達程度を検討することができるようにするために，顕微鏡観察時に使用痕光沢面のパッチの最大長をマイクロメーターで計測した。その大きさは以下の 6 段階に分類し，発達程度と分布を図面上に記録した。

なし：使用痕光沢面が認められない。

微弱：30 ミクロン未満の使用痕光沢面が分布する。

弱：30 ミクロン以上，100 ミクロン未満の使用痕光沢面が分布する。

中：100 ミクロン以上の使用痕光沢面が分布する。

やや強：100 ミクロン以上の使用痕光沢面が連接して分布する。

強：200 倍での観察時に視野全体に使用痕光沢面が面的に分布する。

3．分析結果

20 点中 9 点の資料に使用痕光沢面が認められた。使用痕光沢面の発達程度や分布，写真撮影位置を第 1・2 図にしめした。写真図版の写真番号は，第 1・2 図中の番号と対応する。以下，記述の便宜のため実測図左側の面を左面，右側の面を右面とよぶ。

(1)石包丁

第 1 図 1 の右面・左面には，最高で「やや強」段階まで発達した B タイプの使用痕光沢面が分布して

いる（写真1・2）。相対的にもっとも発達した使用痕光沢面が分布するのは，左面では紐孔の直下および左側の主面，右面では刃部中央から右側の主面および左側の主面である。線状痕は使用痕光沢面上に確認され，刃部に対して直交・斜行方向がある。ただし，紐孔左側の主面上では左上–右下（写真1），紐孔右側の主面では右上–左下の方向が支配的である（写真2）。

第1図2の左面および右面には，最大で「やや強」段階まで発達したBタイプの使用痕光沢面が分布している（写真3）。紐孔右側の主面上にも比較的発達した使用痕光沢面が認められるが（写真4），相対的にもっとも発達しているのは右面・左面ともに紐孔左側の主面上である（写真3）。使用痕光沢面上に確認される線状痕は，刃部に対して直交・斜行方向である。紐孔の左側では直交方向，右側では右上–左下に斜行する方向が支配的である。

第1図3の左面には，使用痕光沢面は全く認められなかった（写真5）。だが，右面には刃面にのみ最高で「中」段階まで発達したBタイプの使用痕光沢面が確認された（写真6）。線状痕の方向は，刃部縁辺を下にしたとき左上–右下が優勢である。

第1図4は左面の主面，および紐孔間と刃面の一部に「中」段階以下のBタイプの使用痕光沢面が分布している。右面ではより広い範囲に，発達程度も相対的に高いBタイプの使用痕光沢面が分布している。とくに発達した使用痕光沢面（最高で「やや強」段階）が分布するのは，紐孔の直下と主面左側である。線状痕は直交方向もしくは左上–右下に斜行する方向が優勢である。

このほかにも石包丁の未製品2点の全面検鏡をおこなったが，使用痕は全く確認されなかった。

(2)板状石器

第1図5は板状石器の刃部の破片で，左面には肉眼でも観察できる光沢が残っている。その部分には，顕微鏡観察によって使用痕光沢面が分布していることが確認できる。原面の凹凸のうち凹部にまでふかく入り込んでいるため部分的には丸みがあるが，分布域がきわめてひろく巨視的にはかなり平坦な外観を呈するよく光を反射する使用痕光沢面である（写真9）。Aタイプに近いが，線状痕や微小なピット，凹凸が目立ち，典型的なAタイプにくらべてややなめらかさを欠く。左面の使用痕光沢面は，割れ面によって切られている。さまざまな方向の線状痕がみられるが，支配的なのは縁辺に対して平行方向である。右面にも同様の使用痕光沢面がみとめられるが，凹凸がはげしい自然面であるため発達の程度は左面よりも格段に低い。面的な分布箇所はなく，最高でも「中」段階程度まで発達したパッチで，しかも線状痕・ピットが目立ち表面がやや荒れている（写真10）。右面の使用痕光沢面は刃部縁辺でもっとも発達し，内部にいくにしたがって発達程度は低くなる。縁辺にある多くの微小剥離痕の内部にも，Bタイプ光沢のパッチが分布している。

第1図6は，3つの破片が割れたのち接合した板状石器である。接合はしていないが，左面の右側はさらに石器が続いているので，本来はさらに長い石器であったと考えられる。刃部とは反対側に自然面が残存しており，その付近には右面にも左面にも一部に硬い接触物と擦れたと推定される箇所がある。顕微鏡観察では，この部分に使用痕光沢面はみとめられなかった。刃部にはA・Bタイプ光沢が分布し，とくに左面で発達程度が高い（写真11～13）。いずれの面でも刃部縁辺で相対的に発達した使用痕光沢面が分布

し，内部にいくにしたがって発達程度は低くなる。使用痕光沢面上には明瞭な線状痕が認められ，使用痕光沢面そのものもやや荒れた外観を呈する。線状痕は，縁辺に対して平行・斜行・直交方向がみとめられるが，平行方向が圧倒的に優勢である。縁辺に分布する多くの微小剥離痕の内部にまで使用痕光沢面が進入している。使用痕光沢面の分布には，割れたふたつの破片それぞれにピークがあることから，大きく2つに割れたあとにそれぞれの破片が別個の道具として利用された可能性が高い。

第2図1にも縁辺部にA・Bタイプ光沢が分布している（写真15）。発達の程度は左面のほうが高い。使用痕光沢面の分布範囲は，肉眼で観察される光沢面の範囲よりもやや狭い。使用痕光沢面上に分布する線状痕は，縁辺に対して平行方向が圧倒的に優勢である。右・左両面には一部に硬い物質と接触したような擦れ面が認められるが，顕微鏡観察では使用痕光沢面などは観察されなかった（写真14）。縁辺に分布する多くの微小剥離痕の内部にまで使用痕光沢面が進入している。

第2図2は刃部をふくめて大きく割れている板状石器であるが，のこった刃部縁辺に使用痕光沢面が認められる。使用痕光沢面の発達程度は両面でそれほど高くはなく「微弱」～「弱」の発達段階にとどまるが（写真17・18），右面の一部に斑晶上にやや発達したパッチがある（写真16）。線状痕は縁辺に対して平行方向が圧倒的に優勢である。

第2図3は，幅28cm以上と本稿の分析対象のなかではもっとも大きい板状石器である。刃部縁辺には，肉眼でも明確に確認できる光沢が広範囲にみとめられる。左面のほうが相対的に使用痕光沢面の発達程度が高く，左面の縁辺近くではAタイプが分布し，内部にいくにしたがって発達程度が低くなる。使用痕光沢面の表面は線状痕や大小のピットが多く分布し，典型的なA・Bタイプよりは荒れた外観を呈する（写真19～23）。縁辺にある微小剥離痕の稜線上や内部にも，Bタイプ光沢が分布している。線状痕は縁辺に対して平行・斜行・直交方向があるが，明らかに平行方向が支配的である。右面の右側，自然面が残存する部分に一部擦れ面があるが，顕微鏡観察では使用痕光沢面はみとめられなかった（写真24）。

このほかの8点の板状石器には使用痕光沢面は認められなかった。これらには刃部として使用できる縁辺ものこっているが肉眼で観察できる光沢はみとめられず，使用されていなかった可能性が高いと考えられる。

(3)石斧

磨製石斧1点の刃部破片を観察したが，使用痕光沢面・線状痕は観察されず，顕著な荒れやラウンディングも認められなかった。

4．機能・用途と生産活動の推定

4点の石包丁にみとめられた使用痕光沢面は，Bタイプのなかでもとくにコーングロスパッチとよばれるなめらかな表面をもち，断面形はドーム状に丸みをおびているものである。イネ科植物と接触した痕跡と推定される。このほか，1）相対的に発達した使用痕光沢面が主面上，とくに紐孔の左右に分布する，2）刃面にも使用痕光沢面が分布することはあるものの，研ぎ直しの影響によって主面よりは発達していない場合が多い，3）線状痕が一般に不明瞭であるが，確認できる場合は縁辺に対して斜行・直交方向のもの

が多い，4）紐孔付近では使用痕光沢面は分布しないか，あっても発達程度が低いものしかない，といった特徴が指摘できる。

こうした点は，これまでに明らかになっている穀物の穂摘具として石包丁の使用方法（須藤・阿子島 1984，1985，阿子島・須藤 1984，阿子島 1989），すなわち紐孔に紐を通して片手で握持し，親指で穂首を主面上に押さえつけた状態で手首を上に返して穂を切断する動作で用いられたことを示している。刃面に使用痕光沢面がない，あるいは発達が弱い点は砥石による研ぎ直しの影響で説明が可能である。本遺跡から出土した石包丁はすべて，穀物の穂摘具として利用されたと推定される。

大型直縁刃石器（斎野 1992，1993）の一種である板状石器には，13 点中 5 点に使用痕光沢面が認められた。使用痕光沢面の種類は，表面がやや荒れてはいるものの B タイプやそれが発達した A タイプの範疇でとらえられるため，石包丁と同様に接触物質はイネ科植物であると推定される。しかしながら，使用痕光沢面の分布パターンは石包丁とは明確にことなっており，縁辺でもっとも発達した使用痕光沢面が分布する。線状痕は明確に認められ，縁辺に対して平行方向にはしるものが支配的である。石包丁では最高でも「やや強」段階にまでしか発達しない使用痕光沢面も，板状石器では「強」段階まで発達するケースがある。縁辺部から数 cm 以上内部に使用痕光沢面が分布することから，ある程度厚みのある状態のイネ科植物の切断動作がもっとも想定しやすい。なおかつ，線状痕が発達するような砂粒とも頻繁に接触するような用途が考えられる。山田（1987），御堂島（1989），斎野（1996）らが推定するように，収穫・除草時の根刈りにもちいられたものと推定される。

本遺跡では大型直縁刃石器のうち茎をもつものはみられず，福島県域とはややことなる様相がみられる。もっとも共通性が高いのは仙台平野で，収穫・除草にかかわる石器の種類，岩石や製作技術のみならず，用途のうえでも仙台平野ときわめて類似していることが明らかとなった。中筋遺跡で検出された水田はおそらく 1 %以上の勾配をもつやや傾斜がきつい地形面に造営されたもので，必ずしも広大な拡がりをもつものではない。だが，農耕に関わる石器の道具立て・使用法は，相対的に大規模な水稲耕作を行っている仙台平野ときわめて共通性が高いことが今回の分析で確認された。

最後に，本稿の執筆にあたって大変お世話になった山田隆博氏をはじめとする山元町教育委員会の方々，仙台市教育委員会の斎野裕彦氏，白石市教育委員会の日下和寿氏，宮城県教育委員会の大坂拓氏に深く御礼申し上げる。

引用文献

阿子島香・須藤　隆 1984「富沢水田遺跡泉崎前地区出土石庖丁の使用痕」『富沢水田遺跡』，pp.213-216，仙台市教育委員会。

阿子島香 1989『石器の使用痕』ニューサイエンス社。

斎野裕彦 1992「大型板状安山岩製石器について」『大平臺史窓』11，pp.39-68。

斎野裕彦 1993「弥生時代の大型直縁刃石器（上）」『弥生文化博物館研究紀要』2，pp.85-109。

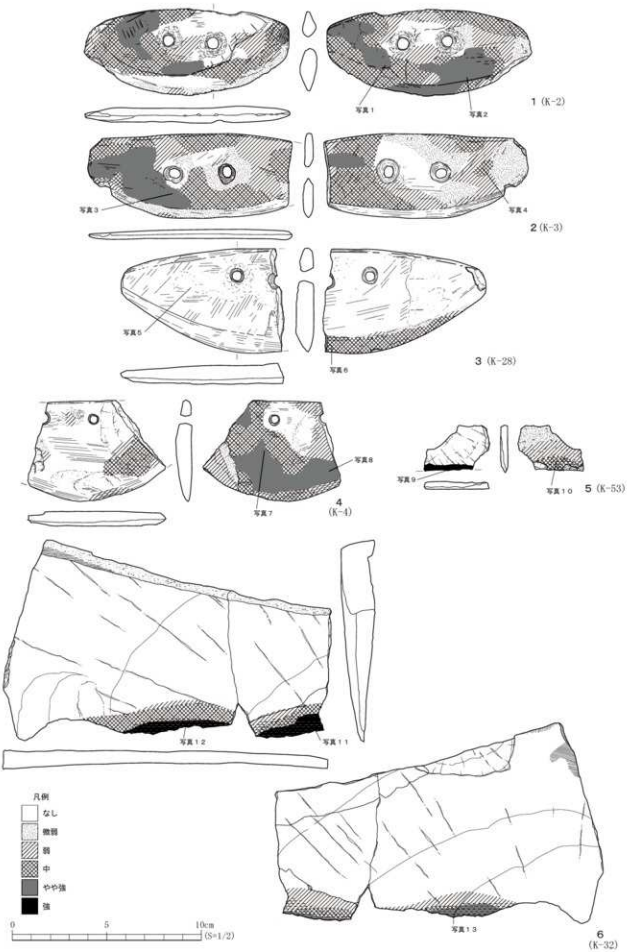
斎野裕彦 1996「板状石器の形態と使用痕」『中在家南遺跡他　第 2 分冊分析・考察編』，pp.181-200，仙台市教育委員会。

須藤　隆・阿子島香 1984「下ノ内浦遺跡 SK2 土壙出土の石庖丁」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報□』，pp.59-66，仙台市教育委員会。

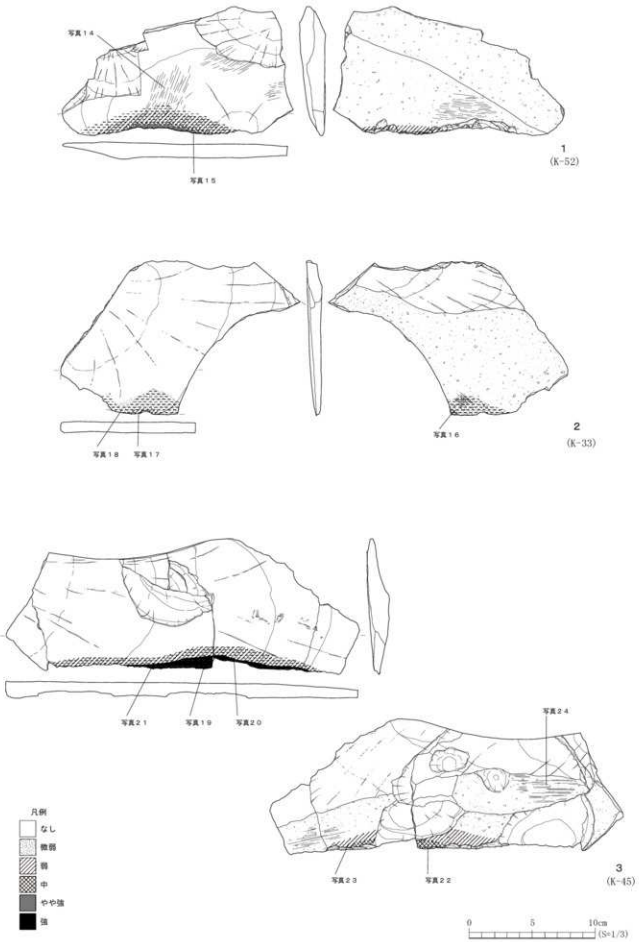
須藤　隆・阿子島香 1985「東北地方の石庖丁」『日本考古学協会第 51 回総会研究発表要旨』，p.19。

御堂島正 1989「有肩扇状石器の使用痕分析—南信州弥生時代における打製石器の機能—」『古代文化』41-3，pp.30-43。

山田しょう 1987「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢』，pp.461-468。



第１図　使用痕分析結果 (1)



第２図　使用痕分析結果（2）

写真１

写真２

写真３

写真４

写真５

写真６

写真７

写真８

0　200μ

写真図版１　顕微鏡写真（1）

写真９

写真１０

写真１１

写真１２

写真１３

写真１４

写真１５

写真１６

0　200μ

写真図版２　顕微鏡写真（2）

写真１７

写真１８

写真１９

写真２０

写真２１

写真２２

写真２３

写真２４

0　200μ

写真図版３　顕微鏡写真（3）

第Ⅴ章　総　括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

1. 出土遺物の特徴と時期

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器である。出土した土器類の総数は18,325点（約259,190g）、土製品類の総数は139点（約8,780g）、石器類の総数は449点（約12,813g）である。これらの出土遺物のうち、本報告では、土器類567点、土製品類5点、石器類は51点について図示した。以下、それぞれについて検討を行う。

（1）縄文土器（第141～143図）

A区基本層6～10層を中心に出土した。特に基本層6・7層からの出土が多い。そのほとんどが破片資料で、図示できたものは152点である。器形を復元できたものは少ない。これらの縄文土器は、器形・文様の特徴から、大きく縄文時代後期と縄文時代晩期のものに分けられる。出土した土器の多くは晩期後葉～末のもので、この他、縄文時代中期末頃の遺物（第95図9）もわずかに出土している。これらの遺物は基本層各層で混在しており、層位的な出土はしていない。そこで、今回は土器の特徴をもとに、後期と晩期の遺物に分けて、その年代について検討することとする。

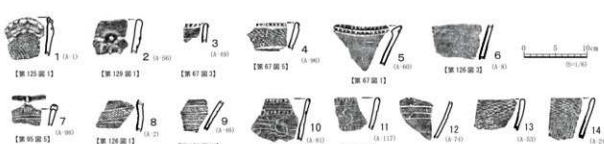
1）縄文時代後期の土器（第141図）

すべて破片資料で少量出土した。図示できたものは、A区基本層6・7・9層から出土した深鉢の口縁部破片・胴部破片であり、全体の器形・文様は不明である。ここでは文様の特徴をもとに年代について検討する。

口縁部に刺突文入りのC字状の隆帯を張り付けたもの（第141図1）やボタン状の貼付＋盲孔と沈線を垂下させたものは（第141図2）、蔵王町西浦B遺跡（鈴木2011）・二屋敷遺跡（加藤ほか1984）・鍛冶沢遺跡（千葉ほか2010）などに類例があり、その特徴から縄文時代後期前葉頃に位置づけられる。

口唇部に刻目・沈線文を施すもの（第141図3～5）は、蔵王町鍛冶沢遺跡（千葉ほか2010）・王ノ壇遺跡（小川ほか2000）・気仙沼市田柄貝塚（手塚ほか1986）などに類例があり、その特徴から縄文時代後期中葉頃に位置付けられる。

刻目＋平行沈線文を施すもの（第141図7～9）、刻目＋平行沈線文・入組文を施すもの（第141図10・11）は、亘理町畑中貝塚（藤沼ほか1986）・蔵王町鍛冶沢遺跡（千葉ほか2010）・気仙沼市田柄貝塚（手塚ほか1986）などに類例があり、その特徴から縄文時代後期後葉～末頃に位置付けられる。



※A区基本層6層出土：3～5・7、A区基本層7層出土：1・6・8～11、A区基本層9層出土：2・12～14

第141図　中筋遺跡　縄文時代後期の土器

2）縄文時代晩期の土器（第 142・143 図）

ほとんどが破片資料で出土したため、器形や全体の文様を判別できるものは少ない。図示できたものは、A 区基本層 6～10 層から出土した深鉢、浅鉢、壺、注口土器で、出土層位でみると 7 層から出土したものが多く、器面が磨滅しているものが多い。ここでは、土器の器面に施されている文様を分類し、そのおおよその年代について検討することとする。

①土器の分類

土器外面の器面の文様から以下の A～F 類に分類される。出土数でみると、A・B 類は少量で、C～F 類が多数を占める。なお、口縁部形態については平坦、小波状、波状があり、底部はすべて平底である。

A 類：羊歯状文が施されるもの（第 142 図 1～4）

B 類：雲形文が施されるもの（第 142 図 5～7）

C 類：工字文が施されるもの（第 143 図 1）

D 類：匹字文が施されるもの（第 143 図 2～14）

E 類：変形工字文（註 1）が施されるもの（第 143 図 15～27）

F 類：平行沈線文・沈線文が施されるもの（第 143 図 28～35）

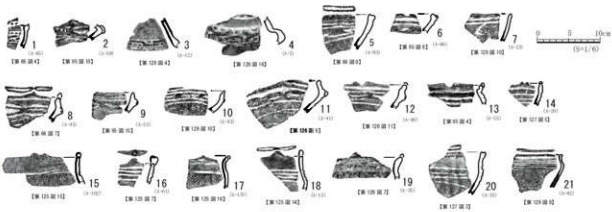
③土器の年代的位置づけ

A 類の羊歯状文が施されるものには、浅鉢・注口土器がある（第 142 図 1～4）。このような特徴をもつ土器は、亀理町畑中貝塚第 1 層出土土器（藤沼ほか 1986）、蔵王町鍛冶沢遺跡（千葉ほか 2010）、大和町摺萩遺跡（柳沢ほか 1990）などに類例があり、縄文晩期前葉の大洞 BC 式段階のものと考えられる。

B 類の雲形文が施されるものには、浅鉢・鉢がある（第 142 図 5～7）。雲形文は、晩期中葉の大洞 C1 式・C2 式に特徴的にみられる文様で、このような特徴をもつ土器は、亀理町畑中貝塚第 2・3 層出土土器（藤沼ほか 1986）、蔵王町鍛冶沢遺跡第ⅩⅣ類土器（千葉ほか 2010）、大和町摺萩遺跡（柳沢ほか 1990）、大崎市北小松遺跡（生田 2010・2011、小野 2014）などに類例があり、比較的簡素な曲線による雲形文の特徴から、晩期中葉の大洞 C2 式段階のものと考えられる。この他、第 142 図 8～21 についても、その特徴や類例などから晩期中葉のものとみられる。

C～E 類の工字文・匹字文・変形工字文を施す土器には、鉢・浅鉢・台付鉢・深鉢・壺があり、匹字文を施すもの（第 143 図 2～14）・変形工字文を施すもの（第 143 図 15～27）が多く、工字文を施すもの（第 143 図 1）は少量である。C～E 類の土器は、蔵王町鍛冶沢遺跡（千葉ほか 2010）、白石市和尚堂遺跡（日下 2009）、角田市梁瀬浦遺跡（角田市教育委員会 1976）・鱸沼遺跡（志間 1971）、大和町摺萩遺跡（柳沢ほか 1990）、大崎市北小松遺跡（生田 2010・2011、小野 2014）などに類例があり、縄文晩期後葉～末の大洞 A～A´式段階のものと考えられる。中筋遺跡から出土した縄文晩期後葉の土器は、層位的な出土はしていないものの、D・E 類の占める割合が高いことから、晩期後葉の中でも、大洞 A 式新段階～A´式期を主体とする時期のものとみられる。

F 類の平行沈線文・沈線文を施すもの（第 143 図 28～35）については、ほとんどが破片資料のため全体の文様が不明のものが多い。文様の配置などから、F 類としたものの中には C～E 類が含まれている可能性がある。また、調整技法や胎土は C～E 類に類似しているものが多い。このことから、F 類については、C～E 類と同様の年代幅におさまる可能性が高いと考えられる。



1・2・5・6・8・9・13: 基本層 6 層、3・10 ～ 12・14 ～ 18・20: 基本層 7 層、4・19: 基本層 8 層、7・21: 基本層 9 層

第 142 図　中筋遺跡　縄文時代晩期前葉～中葉の土器

2 ～ 6・15 ～ 17・20 ～ 23・28: 基本層 6 層、7 ～ 11・18・19・24・25・29 ～ 32: 基本層 7 層
1・12・14・26: 基本層 8 層、13・33 ～ 35: 基本層 9 層、27: 基本層 10 層

第 143 図　中筋遺跡　縄文時代晩期後葉～末の土器

(2) 弥生土器（第 144～153 図）

A 区基本層 6 層を中心に多く出土した。そのほとんどが破片資料で、図示できたものは 321 点である。器形を復元できたものはわずかである。器種は高坏・鉢・蓋・壺・甕・深鉢がある。以下、その特徴等について示し、編年的位置づけについて検討する。

1）弥生土器の地文・調整技法・文様の特徴

【地文・底部の痕跡】

地文の特徴：図化できた資料の地文には、縄文・植物茎回転文・櫛歯状文などが認められた（第 144 図）。縄文には単節 LR・RL、無節 R・L、附加条（LR＋R）、網目状撚糸文などがある。弥生土器全体の傾向として、単節 LR が多く、次いで附加条（LR＋R）が一定量認められ、その他については少量認められた程度である。また、植物茎回転文については少量、櫛歯状文が施文されたものはわずかに確認された。

底部の痕跡：今回の調査で出土した弥生土器の底部資料はすべて平底である。底部では、網代痕・織布痕・木葉痕が認められた。

【調整技法】

外面はナデ・ヨコナデ・ミガキ・ケズリ・ハケメ、内面はナデ・ミガキなどがあるが、全体ではミガキによる調整が多い（第 144 図）。

【文様】

沈線文によって施文されるものがほとんどで、その他、列点文等の刺突や壺肩部に隆帯を付すものなどがある。

破片資料のため、全体の文様を把握できるものが少ないが、文様には変形工字文、山形文・連弧文、方形・長方形の区画文、三角形の区画文、方形・三角形以外の区画による幾何学文、波状文、渦文、沈線文・平行沈線文などが施文される（第 144・145 図）。この他、地文のみのものや、ミガキ調整で無文のものもある。文様の沈線には、上幅が 3mm 前後の太い沈線で、深く肉彫り状に施文するもの（第 145 図 1）、上幅が幅 2mm 前後の中太の沈線で、断面形が U 字状で比較的浅いもの（第 145 図 2）、上幅が幅 1mm 前後の細い沈線で、断面形が V 字状または U 字状で比較的浅いものがある（第 144 図 6・第 145 図 3～6）。

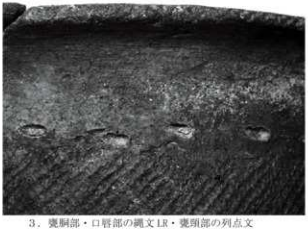
これらの文様の施文方法には、無文部分に沈線によって施文するものと磨消縄文を用いて文様帯内に地文を施文するものが認められ、磨消縄文のものが多く確認された。

【その他の特徴】

その他の特徴として、壺（第 149 図 16、第 150 図 48・56・60）や鉢（第 147 図 13・30・34・56・73・75）外面の一部に赤彩が残るものが認められた。また、土器の使用時に付着したと考えられる煤が付着しているものも多く確認された。煤の付着が多く確認された器種は甕・深鉢・鉢・蓋類で、壺類は煤の付着しているものが少ない。甕は内面・外面、鉢は外面、蓋は内面の口縁部周辺で特に煤が付着していた。なお、煤が付着した土器の一部については、放射性炭素年代測定を実施した（第Ⅳ章第 7・8 節を参照）。

1．縄文附加条（LR＋R）・甕口縁部～頸部のヨコナデ（B-88）

2．甕頸部の綾絡文・口縁部～頸部ミガキ調整（B-235）



3．甕胴部・口唇部の縄文LR・甕頸部の列点文
口縁部～頸部ヨコナデ（B-214）

4．甕内面のミガキ調整（B-214）

5．植物茎回転文（B-159）

6．植物茎回転文・満文（B-218b）

第144図　中筋遺跡出土弥生土器の地文・調整技法・文様（1）

1．太い沈線による幾何学文（B-202）

2．中太の沈線による幾何学文（B-210）

3．細い沈線による幾何学文（B-209）

4．細い沈線による方形・長方形の区画文（B-240）

5．細い沈線による変形工字文（B-313）

6．無文上施文の変形工字文（B-124）

第145図　中筋遺跡出土弥生土器の地文・調整技法・文様（２）

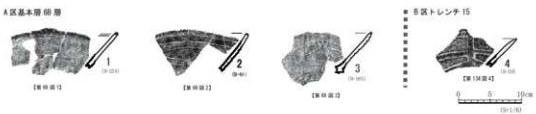
2）弥生土器の特徴と分類

今回の調査で出土した弥生土器のうち、器形・文様等がある程度特徴的なものを対象にし、以下のとおり分類を行った。

【高坏】（第146図）

高坏で出土したのは坏部の口縁部資料のみで、全体の器形は不明である。鉢の可能性もあるが、鉢と比較して胴部から口縁部の立ち上がりが浅いものを高坏として分類した。図示できたものは4点で、いずれも破片資料のため、ここではそれぞれの特徴について示す。

1は、波状口縁で口唇部の突起部分に刻目、外面に変形工字文、内面口縁部に沈線を施す。2は、平縁で口唇部に刻目、外面に変形工字文を施す。3は波状口縁で口唇部突起部分に刻目、外面に三角形と長方形の区画文、内面口縁部に沈線を施す。4は外面に長方形の区画文を施す。



第146図　中筋遺跡　弥生土器・高坏　集成図

【鉢】（第147図）

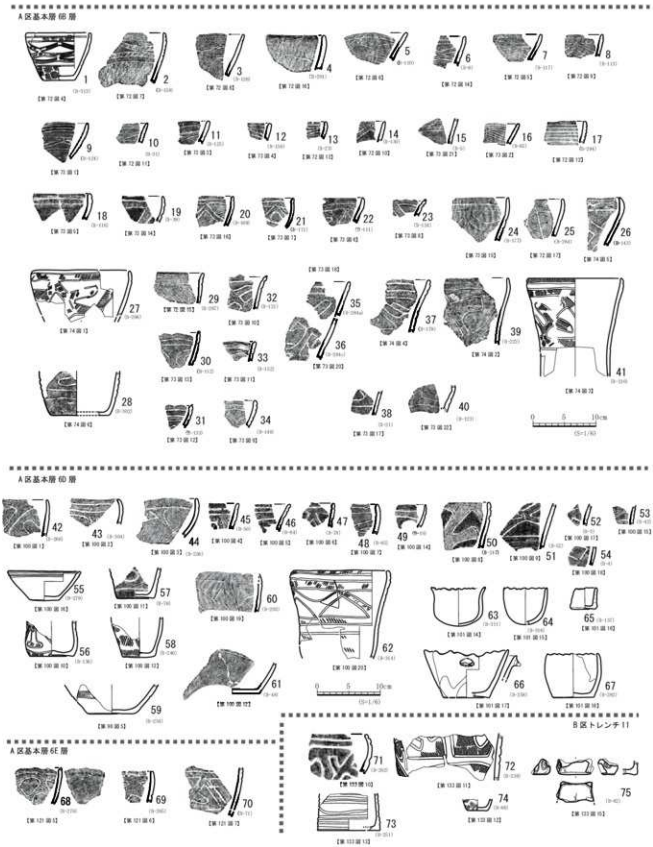
ほとんどが破片資料のため、全体の器形を復元できるものはわずかであるが、口縁部～胴部の形状から器形が逆台形状になるもの（Ⅰ類）・筒形状になるもの（Ⅱ類）・その他の器形（Ⅲ類）に分類した。

Ⅰ類（逆台形状）は、口縁部が内湾し立ち上がるもの（Ⅰa 類）、直線的または外反して立ち上がるもの（Ⅰb 類）に分けられる。口径10cm 前後のものと口径15cm 前後のものに分けられる可能性がある。口縁部は平縁が主体で、波状口縁のもの（23・30～32・34・68）が少量認められた。

Ⅱ類（筒形状）については、復元できる資料がないため、全体の器形は不明であるが、鉢の破片としては明らかに深身になると判断された資料をⅡ類とした。白石市和尚堂遺跡（日下 2009）や角田市鱸沼遺跡（志間 1971）、いわき市龍門寺遺跡（猪狩 1985）などに類例がある。口縁部～胴部資料については、胴部下半でやや一度膨らみ、そこからやや外反しながら直線的に口縁部付近に立ち上がり、口縁部が内湾する器形である（39・41・62・72）。底部資料には底部付近が膨らむもの（56）、台形状の器形になるもの（73）などがある。

Ⅲ類（その他の器形）には、方形を呈する鉢（75）や小型の鉢（65・74）、把手の付く鉢（66）、丸底で波状口縁の鉢（63・64）、平底で波状口縁の鉢（67）などがある。

地文には縄文・植物茎回転文があり、単節縄文 LR の割合が高い。外面の文様には、変形工字文（1・2・6・7・9～13・15・16・48）、山形文（5・12）、連弧文（3・4・8・14）、平行沈線文（7・18・55・59）、三角形区画文（19～21・23～24・26・47・51・62）、平行沈線＋波状文（73）・幾何学文（22・25・27～43・56・57・60・68～72 など）がある。



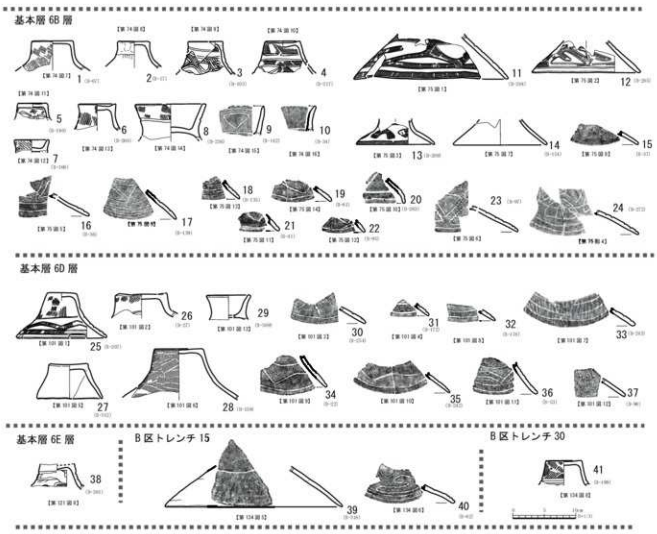
第147図　中筋遺跡　弥生土器・鉢類　集成図

【蓋】（第 148 図）

天井部の形態により、つまみ部があるもの（Ⅰ類）とつまみ部がないもの（Ⅱ類）に分けられる。ほとんどが破片資料のため、全体の器形を復元できるものはわずかであるが、口径が異なる 11 と 13 が存在することから、大型品と小型品に分けられると考えられる。また、口縁部資料の形態から、蓋の器形には、胴部から口縁部にかけて直線的もしくはやや外反して開くものや、胴部から大きく外反して開き口縁部に至るものなどがあると想定される。

地文には縄文・植物茎回転文があり、単節縄文 LR の割合が高い。また 10 のように単節縄文 LR・RL の 2 種類の原体を施文しているものも認められた。

外面の文様は、無文のもの（2・14・15・27・29・30・39）、地文のみのもの（1・6・28）、三角形区画文（4・9・16～18・20・23・33）、山形文（19～21・22・25）・沈線文（8・26・31・32・41）・幾何学区画文（3・5・11・12・13・24・30・38・40）などがある。



第148図　中筋遺跡　弥生土器・蓋　集成図

【壺】（第 149・150 図）

壺の器形については、すべて破片資料のため復元できるものはない。そこで、比較的形態の特徴を把握しやすい口縁部～頸部の形態に着目し分類すると、頸部が比較的長いもの（Ⅰ類）、頸部が短いもの（Ⅱ類）、頸部が短く口径が胴部径とほぼ同じで広口となるもの（Ⅲ類）に分けられる。

Ⅰ類（長頸）は、口径 10cm 前後のものが主体で、口縁部に地文を施すものが多く、無文のもの（8・9）、長方形の区画文を施すもの（21）も少量ある。口縁部はほとんどが平縁であるが、波状口縁のものもわずかにみられる（45）。この他、口径が 5cm 前後の細頸となるものや（6～9）、肩部が撫肩となるもの（B2・6・7）もある。

Ⅱ類（短頸）には 4 があり、無文で頸部に平行沈線文を施す。

Ⅲ類（短頸・広口）は、小型の壺（41）で、頸部に平行沈線文・胴部に変形工字文を施すものである。42・43・62 についてもⅢ類の可能性がある。

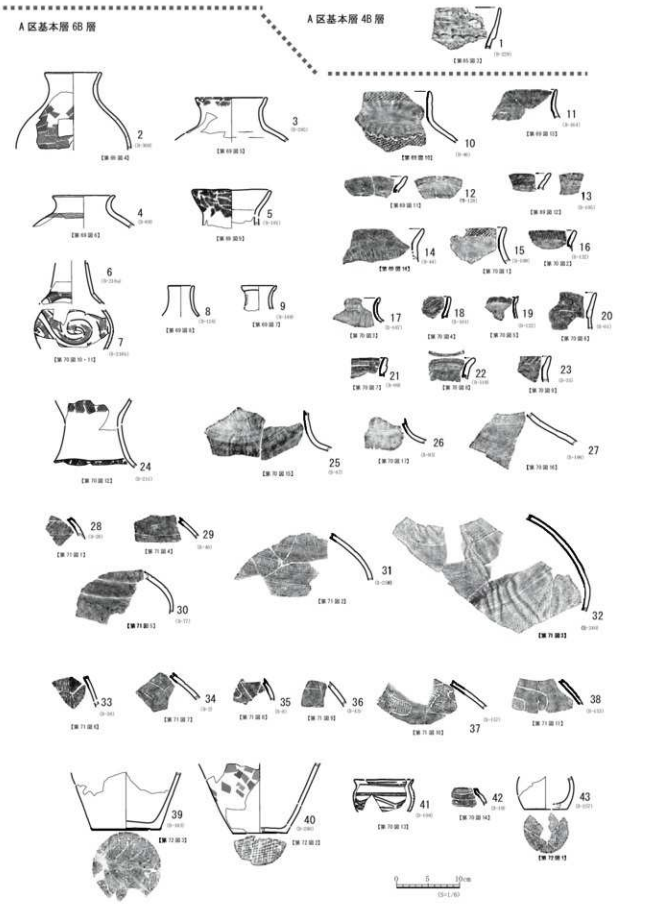
壺の文様・地文については、口縁部～頸部にミガキ調整・無文または口縁部付近地文、肩～胴部中位に沈線文による文様・胴部下半に地文が施文されるものが多く、その他に胴部が地文のみのもの（2）や頸部に隆帯を付すもの（54・55）などがある。地文には縄文・植物茎回転文があり、単節縄文 LR の割合が高い。肩～胴部中位に施文される文様には、変形工字文（41）、渦文（6・7）、方形・長方形区画文（32）、平行沈線による区画文（24・25・27～30・31・54）、幾何学文（33～38・53・55～61）などがあり、特に変形工字文・渦文・平行沈線のよる区画文の文様は比較的細い沈線によって施文されるものが多い。

【甕】（第 151・152 図）

甕は、口縁部・頸部の形状から、頸部付近でくびれ、口縁部が外反して立ち上がるもの（Ⅰ類）と頸部付近でくびれ、口縁部が内湾するもの（Ⅱ類）に分けられる。全体の出土数でみると、Ⅰ類が大半を占め、Ⅱ類はわずかである。

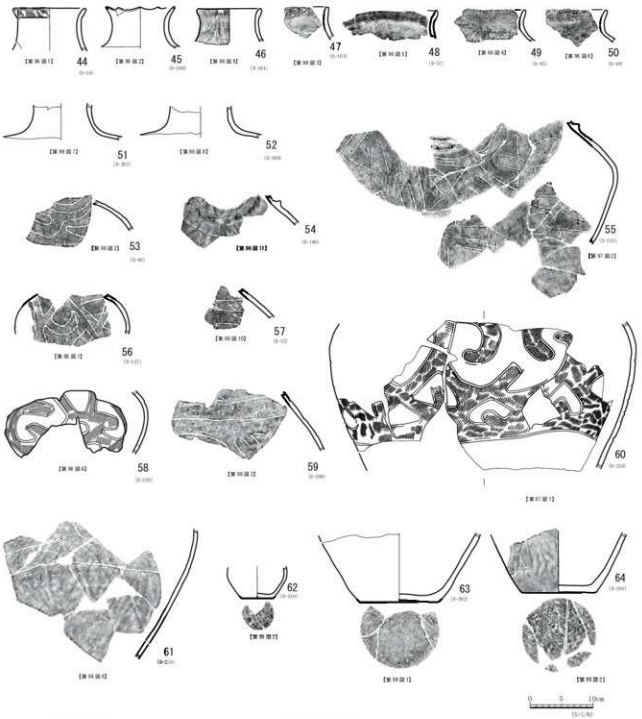
Ⅰ類の甕には、口縁部の外反度が強いものや弱いものがある。口縁部は平縁で、底部は平底である。頸部の文様としては、列点文を施すもの（1～15・45～60・86・88・89）、綾絡文を施すもの（16～17・61）、無文のもの（20～38・62～79・87・90・91）があり、図示できた資料については、列点文・無文のものがほぼ同様の割合で認められた。地文は、甕の口唇部や頸部～胴部にかけて施文される。縄文が大半を占め、植物茎回転文、櫛歯状文も少量認められた。縄文は単節縄文 LR・附加条（LR＋R）が多く、単節縄文 RL、無節縄文 L・R、網目状撚糸文なども少量ある。外面の調整は頸部にヨコナデを施すものが多く、ミガキを施すものも一定量認められた。内面の調整はミガキが大半を占める。

Ⅱ類の甕には、大型のもの（a 類）と小型のもの（b 類）がある。大型のもの（Ⅱa 類）は、口唇部及び胴部に縄文 LR を施文し、外面の口縁部～頸部・内面はミガキ調整である（44）。小型のもの（Ⅱb 類）は頸部に細い沈線による平行沈線文（40・42・43）・長方形の区画文（41）を施す。Ⅱb 類については、口縁部資料のため全体の器形は不明であるが、同様の器形が仙台市高田 B 遺跡・中在家南遺跡などで確認されており、それらと同様の器形であると考えられる。

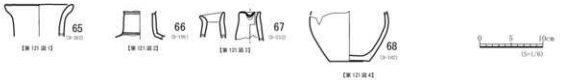


第149図　弥生土器・壺　集成図（1）―A区基本層4B層・6B層―

A区基本層6D層

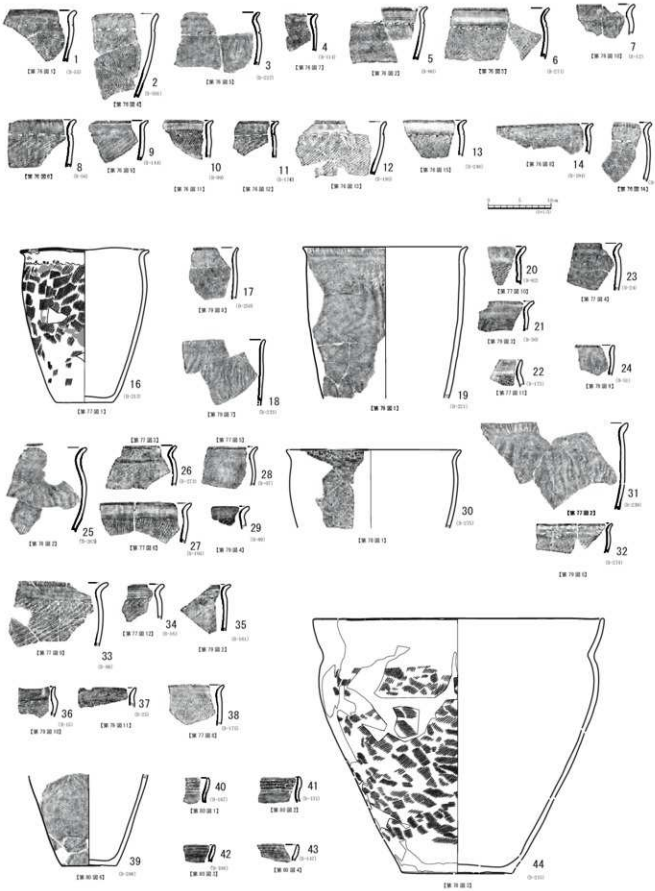


A区基本層6E層

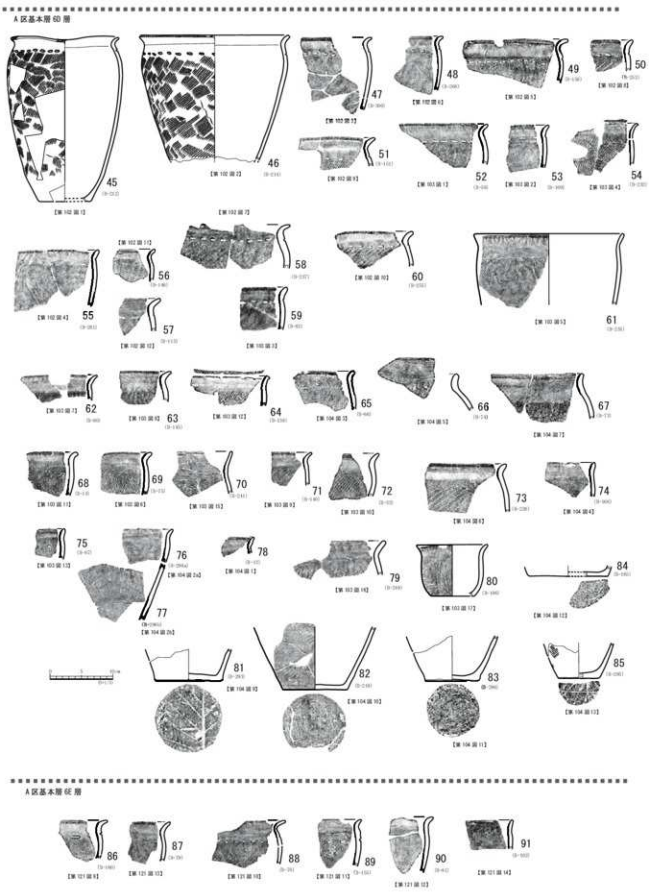


第150図　弥生土器・壺　集成図（２）―A区基本層6D・6E層―

A区基本層6B層



第151図　中筋遺跡弥生土器・甕　集成図（1）-A区基本層6B層-

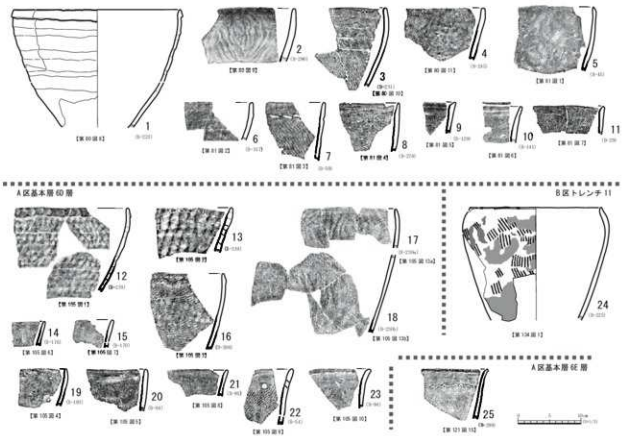


第152図　中筋遺跡弥生土器・甕　集成図（２）-A区基本層6D・E層-

【深鉢】（第 153 図）

甕と比較して、頸部付近に屈曲を持たない器形のものを深鉢として分類した。口縁部の形状からⅠ類：内湾して立ち上がるものとⅡ類：外傾して直線的に立ち上がるものに分けられる。地文には、縄文・植物茎回転文・網目状撚糸文・櫛歯状文などがあり、単節縄文 LR の割合が高い。器面調整は、外面がナデ、内面がミガキ・ナデである。すべて破片資料のため全体の器形は不明であるが、今回の調査で出土した底部資料はすべて平底であることから、平底の深鉢である可能性が高い。

Ⅰ類の深鉢では口縁部付近まで地文が施文されるものが多く、Ⅱ類では口縁部付近にナデ調整を施すものがほとんどである。また、Ⅱ類の中には胴部上半に列点文(59)や綾絡文（25）を施文するものもある。この他、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残されているもの（1・12・13）がある。このような特徴を有する土器は、仙台市沼向遺跡（斎野 2010）などで出土しており、製塩土器の可能性がある。



第153図　中筋遺跡　弥生土器・深鉢　集成図

3）弥生土器の編年的位置づけ

中筋遺跡が所在する東北地方南部の仙台平野周辺の弥生土器の編年は、伊東信雄の研究により始まり（伊東 1957）、その後、須藤隆による詳細な編年が構築され（須藤 1998・1999）、近年では、石川日出志（石川 2005）・斎野裕彦（2008・2011）・大坂拓（大坂 2012）らにより周辺地域との並行関係を含めた研究が進められている。これらの先行研究を参考にしながら、中筋遺跡出土土器の編年的位置づけについて検討することとする（註2）。なお、中筋遺跡の調査で出土した弥生土器の大半は、A 区基本層 6B・D・E 層から出土したものであることから、ここでは、これらの土器群を中心に検討を進める。

【A 区基本層 6E 層出土土器】

出土した器種には、鉢Ⅰa 類、蓋、壺Ⅰ類、甕Ⅰ類、深鉢Ⅱ類がある。高坏の存在は不明であるが、鉢または蓋と認定したものの中に高坏が存在する可能性がある。A 区基本層 6B・6D 層と比較すると弥生土器の出土数は少ない。文様は磨消縄文による幾何学文で、中太の沈線で施文される。甕は頸部に列点文を施すものと施さないものがある。地文には単節縄文 LR、単節縄文 RL、無節縄文 R、植物茎回転文などがあり、単節縄文 LR が多い。

【A 区基本層 6D 層出土土器】

出土した器種には、鉢Ⅰa・Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ類、蓋Ⅰ・Ⅱ類、壺Ⅰ類、甕Ⅰ類、深鉢Ⅰ・Ⅱ類がある。高坏の存在は不明であるが、鉢または蓋と認定したものの中に高坏が存在する可能性がある。壺・鉢・蓋の文様には磨消縄文による変形工字文、三角形の区画文、幾何学文、山形文などがあり、中太の沈線で施文される。文様の主体は三角形区画文・幾何学文である。地文は、単節縄文 LR・附加条（LR＋R）が多く、単節縄文 RL、無節縄文 L・R、網目状撚糸文、植物茎回転文、櫛歯状文なども少量ある。壺には、肩部付近に隆帯が巡るものが一部認められる。甕は、頸部に列点文または綾絡文を施すもの、頸部が無文のものがあり、列点文・無文のものがほぼ同様の割合で認められ、綾絡文を施すものは少ない。深鉢には、粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る製塩土器と考えられるものも含まれる。

【A 区基本層 6B 層出土土器】

出土した器種には、高坏、鉢Ⅰa・Ⅰb・Ⅱ類、蓋Ⅰ・Ⅱ類、壺Ⅰ～Ⅲ類、甕Ⅰ・Ⅱ類、深鉢Ⅰ・Ⅱ類がある。高坏の占める割合は極めて少ない。高坏・壺・鉢・蓋の文様には磨消縄文による変形工字文、方形・三角形の区画文、幾何学文、山形文・連弧文、渦文、無文上施文の変形工字文などがある。文様は中太または細い沈線で施文されるが、変形工字文・連弧文・山形文・渦文は細い沈線で施文されるものが大半を占める。文様の主体は変形工字文・三角形区画文である。地文は、6D 層出土土器と同様の傾向を示す。壺では、壺Ⅰ類の中に細頸のものや撫肩の器形のものが認められ、短頸・広口の小型壺である壺Ⅲ類も少量確認される。これらの文様は細い沈線により施文される。この他、短頸で頸部付近に 2 条の沈線文を施す壺Ⅱ類も 1 点のみ認められる。甕は、甕Ⅰ・Ⅱ類について 6D 層出土土器とほぼ同様の傾向を示すが、甕Ⅲ類が 6B 層のみに認められる。深鉢には、6D 層と同様、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る製塩土器と考えられるものも含まれる。

【A 区基本層 6 層出土土器の編年的位置づけ】

中筋遺跡 A 区基本層 6B・D・E 層から出土した弥生土器の大半は、その形態や文様の特徴から弥生時代中期前葉～中期中葉頃に位置付けられる。周辺地域における当該時期の弥生土器は、白石市和尚堂遺跡（日下 2009）、蔵王町鍋冶沢遺跡（千葉 2010）、角田市鱸沼遺跡（志間 1971）、名取市原遺跡（大友 1997・1999・2000・2002）、仙台市高田 B 遺跡（髙橋 1994、赤澤 2000）・中在家南遺跡（赤澤 1996）・沼向遺跡（斎野 2010）・いわき市龍門寺遺跡（猪狩 1985）などで出土している。

弥生土器が一定量出土した基本層 6 層の遺物出土状況をみると、最上層にあたる 6B 層には上記各時期の遺物だけでなく、縄文中期～晩期の遺物も含まれており、実際の堆積時期より古い土器が混入していることが確認されている。この状況は 6D・E 層も同様である。したがって、6B・D・E 層各層から出土した器種・

文様が、そのまま各時期の土器組成を示すものではないと判断され、各層位ごとの詳細な土器組成・文様構成・編年的位置づけ等を行うことは難しい。そこで、基本層6層出土弥生土器の全体的な特徴からその傾向を示し、中筋遺跡出土土器の特徴を考えてみたい。

まず、文様の面では、下層（6E・D層）は、磨消縄文による中太の沈線で描かれた三角形区画文・幾何学文が主体で、その意匠は鰻沼遺跡・龍門寺遺跡出土土器と類似しているものが多く認められる。また、下層には磨消縄文による比較的細い沈線による変形工字文もわずかに含まれる。これに対し、上層（6B）では磨消縄文による細い沈線で描かれた変形工字文・方形区画文・沈線文等が主体となり、構図を描く沈線同士が離れ、施文が粗くなったと判断されるもの（石川 2005）や、無文上施文の変形工字文も一部あり、高田B遺跡・中在家南遺跡出土土器の特徴と類似したものが確認されるようになる。甕頸部の施文については、頸部列点文・頸部無文主体、頸部綾絡文少量という傾向が各層で共通する（註3）。地文の面では、単節縄文LR・附加条（LR＋R）主体、植物茎回転文・単節縄文RL・無節縄文L・R・網目状撚糸文・櫛歯状文少量の傾向が各層で共通する。出土器種の面では、鉢・蓋・壺・甕主体、深鉢少量、高坏稀という傾向は各層でほぼ共通するが、個別器種でみると、壺においては6B・D層に口縁部が受口状になるものがあり、6B層で壺Ⅰ類に撫肩のもの・細い長頸のもの、小型の広口短頸の壺Ⅲ類が含まれるようになり、甕においては6B層で甕Ⅱ類がみられるようになる（註4）。

このように、基本層6層内においては、下層（6D・E層）から上層（6B）にかけて徐々に新しい要素が認められるようになり、特に6B層出土土器には枡形式・中在家南式に類似するものが多く認められる。これらの傾向と出土土器の特徴を踏まえ、基本層6B層出土土器は弥生時代中期中葉の枡形式～中在家南式並行期、基本層6D・E層出土土器は原式新段階～枡形式並行期の幅におさまる土器群として捉えておきたい。

【その他の出土土器】

この他、A区基本層4B層では、頸部付近に連続押圧が施された壺（第149図1）が出土しており、弥生時代後期のものと考えられる。また、B区T-11基本層では、太い沈線による磨消縄文の幾何学文が施された鉢（第147図71・72）が出土しており、これらは弥生時代中期前葉でも古い段階のものと考えられる。

【まとめ】

今回の中筋遺跡の調査では、弥生時代中期前葉～中期中葉を中心とする土器群がまとまって出土した。これまで、阿武隈川下流域の県南地域において、当該時期のまとまった資料は、角田市鰻沼遺跡、白石市和尚堂遺跡出土土器などに限られており、その様相は不明な点が多い状況にある。中筋遺跡出土土器は、阿武隈川下流域の中期前半に位置付けられる鰻沼遺跡出土土器とその様相が類似し、かつそれ以降の様相の土器も含まれることから、当該地域の中期前葉～中葉の土器編年を検討する上で基礎資料としてなりうる土器群として評価される。併せて、福島県浜通り地方に接する仙台平野最南端の亘理地域で、弥生土器がまとまって出土した例はこれまでなく、仙台平野と浜通り地方の間の空白地帯を埋める資料として、中筋遺跡出土土器の果たす役割は大きいといえる。今回は周辺地域との比較検討を行うことができなかったが、その地域性把握・土器編年の検討を進める必要があり、今後の課題としたい。

(3) 土師器（第154～161図）

B区SK1～14土坑及びB区基本層5a・b層を中心に1,805点出土した。出土した土師器は、非ロクロ成形のもの(1,804点)とロクロ成形のもの(1点)に分けられる。このうち図示できたものは94点で、すべて非ロクロ成形のものである。

以下、非ロクロ成形の土師器について、その特徴等をもとに、編年的位置づけについて検討する。

1）土師器の特徴

非ロクロ成形の土師器の器種は、鉢、器台、高坏、壺、甕、ミニチュア土器である。以下、器種ごとに形態・調整技法等の特徴について示す。

【鉢】（第154図）

図示できたものは18点で、全体の器形が分かるものは5点(12～14・17・18)である。

口縁部の形態などから、以下の5つに分けることができる。

a. 口縁部が直線的ないし内湾気味に開き、半球形に近い胴部をもつもの(1～6)

内外面ともにヘラミガキを主体とし、一部外面胴部下半にヘラ削りを施すものが認められ、内面はナデやヘラナデ、ヘラ削りを施すものがある。

b. aを大型化したものと思われるもの(11)

外面はヘラミガキを主体とし、一部ハケメが残る。内面は口縁部にヘラミガキ、胴部にヘラ削り後ヘラナデを施す。

c. 口縁部が外傾し、浅い胴部をもつもの(13・14)

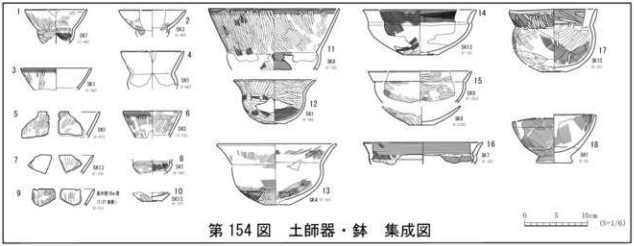
外面はヘラミガキを主体としたものと、ハケメを主体としたものとに分かれ、一部ヘラ削りを施すものも認められる。内面はヘラミガキを主体とし、ヘラ削りやヘラナデを施すものもある。

d. 口縁部が外反ないし直立気味に外傾し、半球形状の胴部をもつもの(12・17)

内外面ともにヘラミガキを主体とし、外面に一部ハケメが残り、ヘラ削りを施す。内面には他にヘラナデが施される。

e. 埦形で底部に台がつくもの(18)

外面にナデを施し、内面はハケメ後にナデを施す。



第154図　土師器・鉢　集成図

【器台】（第 155 図）

図示できたものは 7 点で、このうち全体の器形が分かるものは 2 点（1・2）である。

1・2 ともに受け部が内湾するもので、脚部は「ハ」の字に開き、脚部に円窓（3 孔）、受け部と脚部の間に貫通孔を有する。

器面調整については、1 が外面口縁部にヨコナデ・ヘラミガキを施し、受け部～脚部にハケメ後ヘラミガキを施す。内面は受け部にヘラミガキ、脚部にヘラ削り後ハケメを施す。2 は、外面口縁部ヨコナデ、受け部にハケメ後ナデ、ヘラミガキを施し、脚部はヘラ削り後ヘラミガキ、脚裾部にヨコナデを施す。内面は口縁部ヨコナデ、受け部にナデ後ヘラミガキ、脚部ヘラナデ後ハケメを施す。

全体の器形が不明な 3・4・5・7 についても、1・2 と共通する特徴を有することからこれらと類似する器形であると考えられるが、一部受け部口縁端部がつまみ上げられる小皿状のもの（6）も認められる。

第 155 図　土師器・器台　集成図

【高坏】（第 156 図）

図示できたものは 7 点である。このうち 6 点が脚部のみの資料、1 点が坏部のみの資料で、全体の器形は不明である。

脚部資料については、その形態的特徴から以下の 4 つに分けることができる。

◆形態的特徴（脚部）

a.「ハ」の字に開き、円窓（3 孔）を有するもの（2）

b. 脚部柱状部が中空棒状のもの（3・4）

c. 脚部柱状部が中実棒状のもの（5・6）

d. 脚部柱状部が中膨らみ中空のもの（7）

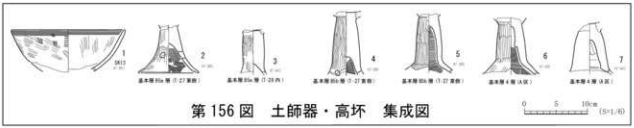
◆器面調整

a. 脚部（2～6）

外面はいずれもヘラミガキを主体とし、内面はナデやヘラナデを施すもの、一部ハケメを施すものがある。

b. 坏部（1）

外面はヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ、内面はヨコナデ・ヘラミガキを施す。



第 156 図　土師器・高坏　集成図

【壺】(第 157 図)

図示できたものは 7 点で、全体の器形が分かるものは 1 点(1)のみである。底部に輪台充填技法が確認できたものは 2 点である。口縁部については、その形態的特徴から以下の 2 つに分けることができる。

◆形態的特徴(口縁部)

a. 単純口縁のもの

・外反しながら外上方に開くもの (1)

・長く直線的に外傾するもの (4)

b. 複合口縁のもの (5)

◆器面調整

[外面]

・ハケメ後ナデ、ヘラ削りを施す(1)

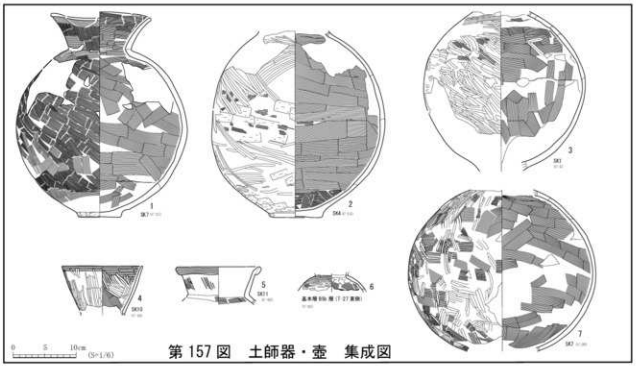
・ヘラ削り後ハケメ・ヘラミガキを施すもの(2)

・ハケメ後ヘラミガキを施すもの(3)

・ハケメ後ナデ、ヘラミガキを施すもの(4)

[内面]

・ヘラナデを主体とし、一部ハケメやヘラナデ、ヘラミガキを施すものがある。



第 157 図　土師器・壺　集成図

【甕】（第 158 図）

図示できたものは 38 点で、このうち全体の器形が分かるものは 11 点(1～7・9～13)である。底部に輪台充填技法ないしその痕跡が確認できたものは 5 点である。

以下、全体の器形が分かるものを中心に、その特徴について示す。

◆形態的特徴(口縁部)

a. S 字状のもの(1)

b. 外反するもの(2～7・9～13)

口唇端部はいずれも丸くおさめている。

◆器面調整

a. 口縁部がS字状のもの

外面が口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り後ナデ、内面は口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデを施す。外面底部中央に凹みがある。

b. 口縁部が外反するもの

［口縁部～頸部］

内外面ともにハケメ後ヨコナデを施すものが多いが、外面には一部ヘラミガキを施すものが認められる。

・ヨコナデを外面口縁部中位まで施すもの(3・5・6・8・9・13)

・ヨコナデが外面頸部まで及ぶもの(2・4・7・10・12)

［胴部］

・外面全体にハケメが残るもの(2・3・5・10・11・12・13)

・外面胴部中位までヘラ削りを施すもの(6)

・外面ハケメ後ヘラ削り、ヘラミガキを施すもの(7)

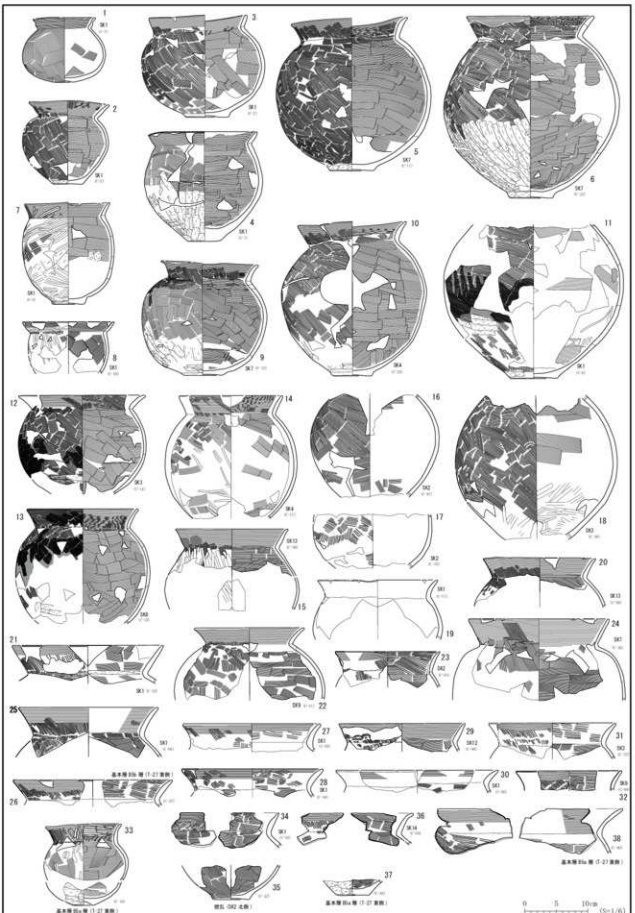
・外面ハケメ後ナデ、ヘラ削りを施すもの(4・9)

・内面はヘラナデを主体とし、一部指オサエを施すものもある。

【ミニチュア土器】（第 159 図）

図示したものは 1 点である。鉢形を呈し、器面調整は外面にハケメを施す。

第 159 図　土師器・ミニチュア土器



第 158 図　土師器・甕　集成図

2) 土師器の編年的位置

今回の調査で出土した非ロクロ成形の土師器は、器台や輪台充填技法で製作された壺や甕などの器種が存在することから古墳時代前期の特徴を有しており、東北地方南部における土師器編年に当てはめると塩釜式期に位置づけられる(氏家 1957)。塩釜式土器の編年については、丹羽茂によって細分された後、次山淳、辻秀人、青山博樹により編年されている。

第 8 表に示したように、各氏の編年を参考にしながら、当該時期の土師器が多く出土した SK1 土坑及び SK7 土坑、SK13 土坑出土土器を中心に、本遺跡出土土師器の編年的位置付けについて検討する。

丹羽編年(1985)	Ⅰ段階	ⅡA 段階			ⅡB 段階	Ⅲ段階
次山編年(1992)	1 段階	2 段階		3 段階	4 段階	5･6 段階
辻編年(1994･1995)	Ⅱ-1 期	Ⅱ-2 期	Ⅲ-1 期	Ⅲ-2 期	Ⅲ-3 期	Ⅲ-4 期
青山編年(2010･2011)	塩釜 1 式(古相)	塩釜 1 式(新相)	塩釜 2 式(古相)	塩釜 2 式(新相)	塩釜 3 式(古相)	塩釜 3 式(新相)

第 8 表　塩釜式土器　　編年対照表(田嶋 2012)

①SK1 土坑出土土器（第 160 図）

SK1 では、器台・鉢・壺・甕が 653 点出土し、このうち 25 点図示した。

器台は、いずれも内湾する受け部を呈する。器面調整は内外面ともにヘラミガキを施す。脚部が残存する資料は、受け部と脚部の間の貫通孔、円窓を有し、脚部外面にヘラミガキ、内面にハケメ・ヘラ削りを施す。器台の貫通孔と脚部の円窓の省略は青山編年塩釜 2 式新相(辻編年Ⅲ-2 期・次山編年 3 段階)から始まるとされる。

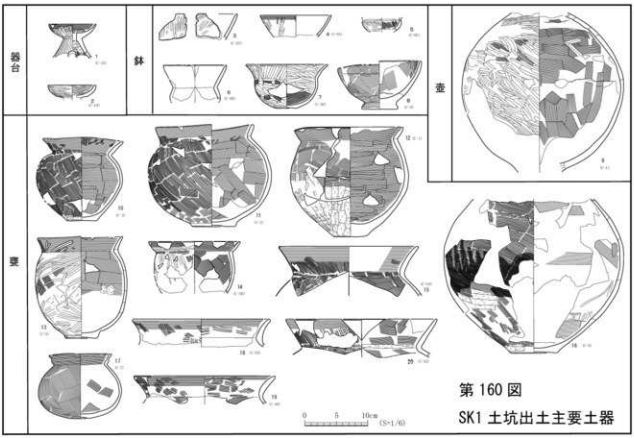
鉢は、全体の器形が分かるものは少ないが、残存する部位の形態や調整技法からいわゆる「小型丸底鉢」とよばれる器形のものが認められる。器面調整は内外面にヘラミガキを施すものと内面にナデを施すものが認められる。小型丸底鉢は、辻編年Ⅲ-1 期(次山編年 2 段階・青山編年塩釜 2 式古相段階)から出現するとされている。

甕は、口縁部の形態から外反するものとＳ字状のものの 2 つに分けられる。外反する口縁部をもつものは、いずれも口唇端部を丸くおさめ、胴部中位に最大径をもつ。器面調整は、外面口縁部から頸部については、ヨコナデを施す範囲が口縁部中位までのものと頸部まで及ぶものがある。胴部は、全体的にハケメを残すものが主体であるが、胴部中位までヘラ削りを施すものやヘラミガキを施すものも認められる。

Ｓ字状の口縁部を呈する甕は、器面調整が内外面口縁部ヨコナデ・外面頸部から底部ヘラ削り後ナデ、内面胴部にヘラナデを施す。外面底部中央には凹みが認められる。

口唇端部を丸くおさめるものは、次山編年 2 段階(辻編年Ⅱ-2 期・青山編年塩釜 1 式新相)以降に位置づけられている。また、口縁部中位までヨコナデを施すものは次山編年 1～2 段階(辻編年Ⅱ-1～Ⅲ-1 期・青山編年塩釜 1 式古相～塩釜 2 式古相)、頸部までヨコナデが及ぶものは次山編年 3 段階(辻編年Ⅲ-2 期・青山編年塩釜 2 式新相)以降に位置づけられている。胴部の器面調整においては、ハケメを胴部上半にのみ施すものが青山編年塩釜 3 式古相(辻編年Ⅲ－3 期・次山編年 5・6 段階)に増すとされている。器種のセット関係という点では、小型器台と小型丸底鉢のセット関係が辻編年Ⅲ-1～2 期(次山編年 2～3 段階・青山編年塩釜 2 式古相～2 式新相)に成立し、Ⅲ-3～4 期にそれが崩れるとされている(注5)。

これら諸点の特徴から、SK1 土坑出土土器は、辻編年のⅢ-1～3 期(次山編年 2～3 段階・青山編年塩釜 2 式古相～2 式新相)の幅におさまるものと考えられる。



第 160 図
SK1 土坑出土主要土器

②SK7 土坑出土土器（第 161 図）

SK7 では、鉢・壺・甕が 213 点出土し、このうち 10 点図示した。

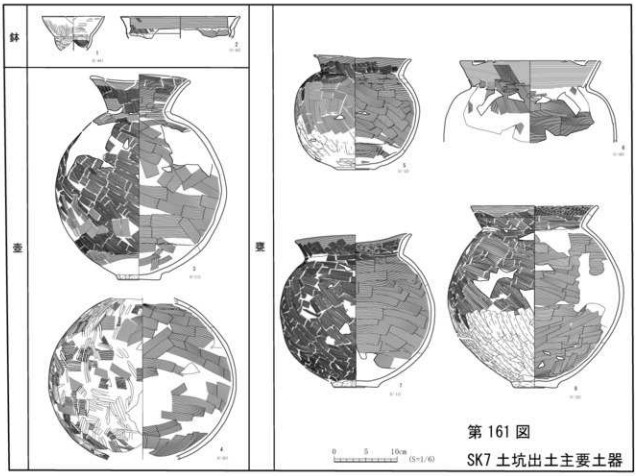
鉢は、SK1 土坑出土土器と同様に小型丸底鉢とよばれるものが認められる。器面調整はヘラミガキを主体とし、外面胴部下半にヘラ削りを施す。胴部下半にヘラ削りを施すという特徴は、青山編年塩釜 3 式古相段階(辻編年Ⅲ-3 期・次山編年 4 段階)以降にみられるとされている。

甕については、口縁部の形態や外面の器面調整などの面で SK1 土坑出土土器と共通した特徴を有しており、これに近い時期のものであると考えられる。

これら諸点の特徴から、SK7 土坑出土土器は、辻編年Ⅲ-1～Ⅲ-3 期(次山編年 2～4 段階・青山編年塩釜 2 式古相～3 式古相)の幅におさまるものと考えられる。

③その他土坑出土土器

SK1・7 と比較すると、出土した土師器の点数は少ない。器種は高坏・器台・鉢・壺・甕・ミニチュア土器である。出土数が少なく欠落している器種がある可能性や全体の器形が分かるものが少量であることから、詳細な編年的位置づけは難しい。そこで、最も出土点数の多かった SK1 土坑出土土器と個別に比較してみると、SK2・3・8・13 は全体的に共通した特徴を有することから同様の年代幅におさまるものと考えられる。SK4 については、甕の特徴などから辻編年のⅢ-2～3 期(青山編年 2 式新相～3 式古相・次山編年 2～3 段階)の幅におさまるものと考えられる。また、図示できた資料が少量だった SK9～12・14 についても、器面調整などの点で類似する特徴を有することから、同様の枠内で捉えることができると考えられる。



第 161 図
SK7 土坑出土主要土器

④遺構外出土土器

A 区基本層から高坏、B 区基本層から器台・鉢・高坏・壺・甕、撹乱から甕が出土した。ここでは、比較的分類が可能である高坏をもとに、その編年的位置づけを検討することとする。

すべて脚部のみの資料で、「ハ」の字に開き、円窓を有するものと脚柱状部が中空棒状のものと中実棒状のもの、中膨らみ中空のものの 4 つに分けられる。辻編年における高坏の変遷(辻 1995)を参考にすると、脚上半部が中実、下半部が外反しながら開く裾部のものは福島県域・宮城県域のⅢ期に広く認められるとし、脚上部が柱状中空で、脚下部が屈曲して内湾しながら外方にのびる裾部のものはⅢ－3 期、中実棒状で脚下部が「ハ」字状に開くものはⅢ－4 期に位置づけられている。

中膨らみ中空のものについては、製作時にできる粘土紐の積み上げ痕が認められないことから、製作手法の面で塩釜式期の範疇におさまるものと考えられる(註 5)。

全体的な器形が不明であることを踏まえ、辻編年のⅢ-1～4 期(次山編年 2～6 段階・青山編年塩釜 2 式古相～塩釜 3 式新相)の枠内で捉えたい。

⑤まとめ

以上のことから、今回の調査で出土した非ロクロ成形の土師器は、古墳時代前期の塩釜式期の範疇におさまるものである。土坑群から出土した土師器全体としては、辻編年Ⅲ-1～Ⅲ-3 期(青山編年塩釜 2 式古相～3 式古相・次山編年 2～4 段階)の枠内で捉えることができると考えられ、塩釜式の中でもおおよそ中頃から後半段階にかけてのものと推定される。

(4) 石器

石器は、A 区 435 点、B 区 14 点、合計 449 点出土した。以下、全点を対象に、各器種の特徴とその出土状況について整理し、その特徴をまとめる。

1) 器種の分類と特徴

【石鏃】

扁平で鋭利な尖端部が作り出された小形の石器である。有茎石鏃が 1 点出土した（第 88 図 1）。

【石錐】

棒状の尖頭部をもち、その断面形が三角形もしくは菱形状となるものであり、4 点出土した（第 88 図 2～5）。

【石箆】

一端に長軸と直行する刃部を作り出したものであり、3 点が出土した（第 88 図 6、第 137 図 1）。

【不定形石器】

二次加工の施された石器で、石器の形状に一定の傾向が認められないものを一括した（第 93 図 1～4、第 117 図 1～3、第 124 図 2～4、第 137 図 2）。47 点出土した。

【剥片】

剥片、チップ、砕片を含めすべて剥片とした。347 点出土した。

【石核】

剥片を剥離する目的で整形された礫、もしくは剥片である。17 点が出土した（第 117 図 4・5、第 118 図 1・2、第 123 図 1、第 136 図 1）。

【石包丁】（第 162 図）

平面形が楕円形、または杏仁形をした扁平な石器である。出土した 6 点のうち、製品 4 点（第 162 図 1～4）と未成品 2 点（第 162 図 5、6）が確認されており、製品はいずれも 2 個の紐孔をもつ磨製石包丁である。未成品は、器体の両面に調整が加えられている。

【板状石器】（第 163 図）

扁平、不整形であり、安山岩を素材とした石器である（第 163 図 1～13）。13 点出土した。第 163 図 1～3、8、10 のように一部に自然面が残存しているものもあるが、器体表面のほとんどが節理面で割れた面で構成されている。第 163 図 1～3、8、13 の刃縁部両面には、肉眼でも観察が可能な光沢が認められる。

【磨製石斧】

長軸と直交する縁辺に刃部が作出された石器であり、器体や刃部の成形に研磨を用いるものである。磨製石斧 2 点（第 116 図 1・2）が出土した。

【扁平片刃石斧】

扁平で片刃の磨製石斧である。1 点（第 116 図 3）が出土した。

【敲石】

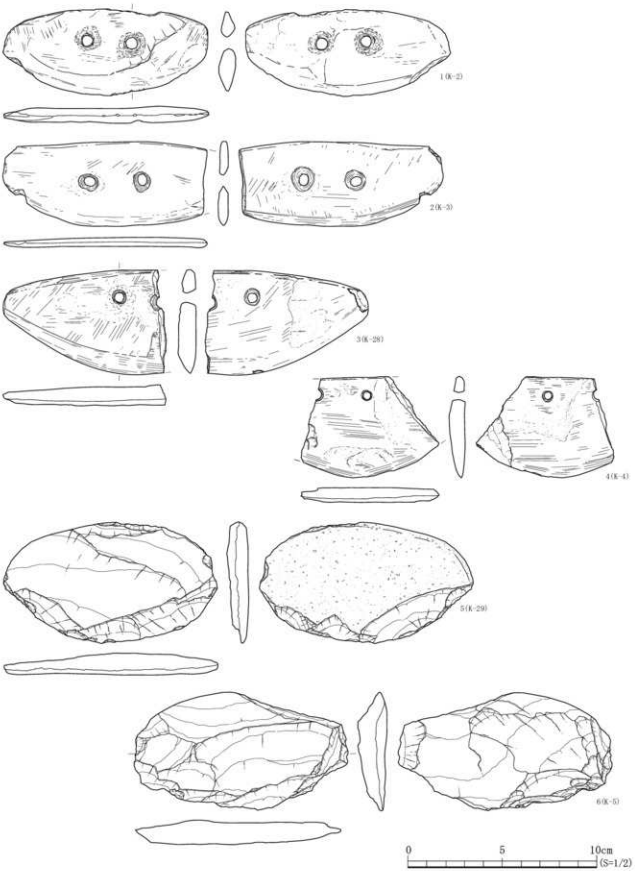
平面形が棒状（第 94 図 1）や円盤状（第 94 図 2）の礫に敲打痕が認められるものである。4 点出土した。

【石錘】

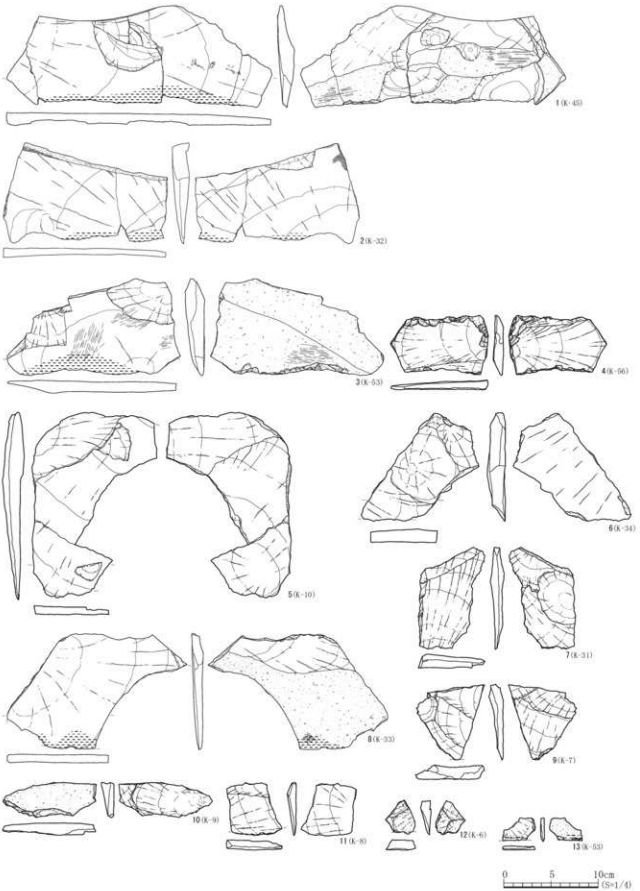
扁平な円・楕円礫の 1 ヶ所もしくは対となる 2 ヶ所を打ち欠いたものである。2 点出土した（第 94 図 3）。

【凹石】

敲打による凹部が認められるものである。2 点出土した（第 94 図 4、第 124 図 1）。



第162図　A区基本層6B・6D層出土遺物　石包丁



第163図　A区基本層6B・6D層出土遺物　板状石器

2）出土状況

今回の調査で出土した石器の出土状況を第9表に示した。出土状況の特徴としては、大部分がA区基本層6層、特に6B・6D層からの出土が多い点が指摘できる。6層の上層である3層、5A層からは、出土遺物が少ない。また7層以下は、下層になるにつれ出土量が減る傾向にある。A区基本層6B、6D層からは、石包丁、板状石器など大陸系磨製石器が確認されており、弥生時代中期に属する土器が数多く出土している。このことから、同一層から出土した石器についても同様の時期を想定したい。

第９表　石器の出土状況

出土・層位＼器種		石鏃	石錐	石篦	不定形石器	剥片	石核	石包丁	板状石器	磨製石斧	扁平片刃石斧	敲石	凹石	石錘	計
A	3					2									2
	5A					3	1								4
	6B	1	4	2	22	161	3	4	8		2	1	1		209
	6C					1									1
	6D				14	96	8	2	3	2	1	3		1	130
	6E				1	32	1						1		35
	7				7	21	1					1			30
	8A					3	1								4
	8B					2									2
	9A				1	5									6
	10A					1									1
	表土				1	6	1								8
	廃土				1	2									3
B	1 / 1					1									1
	13 / 1					1									1
	T-11					5	1								6
	T-15				1	3									4
	表採					2									2
	計	1	4	3	47	347	17	6	13	2	1	4	2	2	449

3）石器・石材組成

石器・石材表を第10表に示した。トゥール類では大型板状石器が最も多く出土し、石包丁、石錐、石篦が続く。礫石器は敲石が最も多く、石錘、凹石が続く。石材には、珪質頁岩、頁岩、砂岩、珪質凝灰岩、凝灰岩、玉髄、碧玉、結晶片岩、粘板岩、斑れい岩、安山岩、花崗岩、軽石がある。石器・石材関係では、大型板状石器に安山岩が利用される。石包丁は、珪質凝灰岩、結晶片岩、粘板岩とさまざまな石材が選択される特徴が指摘できる。

第10表　石器・石材組成

器種／石材	珪質頁岩	頁岩	砂岩	珪質凝灰岩	凝灰岩	玉髄	碧玉	結晶片岩	粘板岩	斑れい岩	安山岩	花崗岩	軽石	計
石鏃		1 (1.3)												1 (1.3)
石錐	1 (6.7)	2 (6.9)										1 (13.7)		4 (27.3)
石篦		2 (118.8)		1 (41.9)										3 (160.8)
不定形石器		21 (312.9)	20 (1235.4)	2 (17.6)		1 (10.2)			2 (14.1)		1 (178.0)			47 (1768.2)
剥片	12 (175.8)	158 (853.2)	93 (1566.7)	16 (81.0)	1 (86.2)	59 (670.7)	5 (46.8)				1 (45.6)	2 (140.7)		347 (366.7)
石核		2 (32.6)	6 (793.0)	4 (239.8)		2 (227.8)	1 (117.4)				1 (360.0)			17 (1770.7)
石包丁				1 (58.1)				3 (161.0)	2 (168.6)					6 (387.7)
板状石器											13 (1793.5)			13 (1793.5)
磨製石斧										2 (333.8)				2 (333.8)
扁平片刃石斧					1 (38.0)									1 (38.0)
敲石			1 (142.8)								3 (1230.0)			4 (1372.8)
石錘											1 (108.1)	1 (134.3)		2 (242.4)
凹石											1 (885.0)		1 (365.0)	2 (1250.0)
計	13 (182.5)	186 (1326.0)	120 (3727.9)	24 (438.4)	2 (124.2)	63 (908.6)	6 (164.2)	3 (161.0)	4 (182.7)	2 (333.8)	21 (4600.2)	4 (288.7)	1 (365.0)	449 (12813.2)

(5) 土製品

土製品には、A 区基本層 7 層から出土した耳飾り、B 区 SK1・2・7・10・13・14 土坑から出土した土製支脚がある。

1）耳飾り

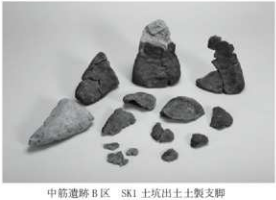
耳飾りは 1 点出土のみである（第 128 図 6）。表面部直径 3.6×4.0㎝・くびれ部直径 1.8×2.2㎝・厚さ 4.3㎝のもので、中実の鼓状の形状である。外面の調整技法等は磨滅のため不明である。縄文時代後期～晩期の遺物を含む基本層から出土していることから、それ以前のものとみられる。

2）土製支脚

土製支脚は 138 点（約 8,730g）出土した。支脚は非常に脆く、そのほとんどが細片で出土した。このうち、SK1 土坑出土の 2 点（第 30 図 26・27）と SK8 土坑出土の 1 点（第 52 図 10）、SK13 土坑出土の 1 点（第 61 図 11）の 1 点について図示した。これらは残存高 8～15㎝ほどの中実の台形状の形状を呈し、指オサエ・ナデ痕跡が認められ、片面が被熱を受け赤化している。塩釜式期の土師器とともに出土しており、古墳時代前期のものとみられる。

このような特徴をもつ古墳時代前期の土製支脚は、亘理町宮前遺跡第 49 号住居跡（丹羽 1983）、名取市野田山遺跡第 19 号住居跡（小井川ほか 1992）などで出土している。このうち、野田山遺跡第 19 号住居跡出土の土製支脚は、住居跡の炉からほぼ原位置で 4 個一組の状態で出土しており、これらは、炉での煮炊きをする際に、土器の下に据えた器具として使用されたと考えられている。中筋遺跡で出土した土製支脚は住居跡から出土したものではないが、支脚自体の依存状態や形状の面で野田山遺跡の事例と酷似している（第 164 図）。このことから、中筋遺跡出土の土製支脚については、野田山遺跡のものと同様に日常生活で煮炊きに使用された支脚であると想定され、使用後に土器と共に土坑へ埋め戻されたと考えられる。

中筋遺跡 B 区　SK13 土坑出土土製支脚



中筋遺跡 B 区　SK1 土坑出土土製支脚

1：中筋遺跡 SK1 出土　2：中筋遺跡 SK13 出土
3・4：野田山遺跡第 19 号住居跡出土

第164図　中筋遺跡出土 土製支脚とその類例

2. 検出した遺構の時期と特徴

今回の中筋遺跡の調査では、A 区で水田跡 3 区画、溝跡 2 条、ピット 1 基・木杭跡 2 箇所、性格不明遺構 1 基、遺物包含層、B 区で土坑 14 基、旧河道跡を検出し、この他、自然災害痕跡も確認された。ここでは、これらの遺構等について、出土遺物・遺構の重複関係等から、その時期・性格について検討する。

（1）検出遺構の所属時期

A 区・B 区において確認した遺構等の所属時期については、基本層序の確認・出土遺物の特徴・自然科学分析の結果等の検討から、以下のとおりとした。なお、それぞれの所属時期は第 11 表にまとめた。

【A 区検出遺構】

遺物包含層は、出土遺物の特徴から、基本層 6B 層が弥生時代中期中葉、基本層 6D 層が弥生時代中期前葉～中葉、7 層～10 層が縄文時代晩期後葉～末の包含層と考えられる。基本層 6B 層上面で確認した SN1～3 水田区画、SD1 溝跡、P1～3 ピット・杭跡は弥生時代中期中葉頃、基本層 6D 層上面で確認した SD2 溝跡は弥生時代中期前葉～中葉頃のものと思われる。

【B 区検出遺構】

SK1～14 土坑は、B 区基本層 B5a・b 層上面で確認し、出土した遺物の特徴から古墳時代前期のものと考えられる。旧河道跡は基本層 B5a 層以下で確認されたことから、古墳時代前期以前のものとみられる。

第 11 表　中筋遺跡検出遺構の所属時期

<table>
<tr><th rowspan="2">時代</th><th colspan="2">A 区</th><th colspan="2">B 区</th></tr>
<tr><th>基本層序</th><th>遺構等</th><th>基本層序</th><th>遺構等</th></tr>
<tr><td>縄文時代晩期後葉～末</td><td>基本層 7～10 層</td><td>遺物包含層</td><td></td><td rowspan="6">旧河道跡</td></tr>
<tr><td>縄文時代晩期末
～弥生時代中期前葉</td><td rowspan="2">基本層 6E 層
基本層 6D 層</td><td>遺物包含層</td><td></td></tr>
<tr><td>弥生時代中期前葉～中葉</td><td>遺物包含層
溝跡（SD2）</td><td rowspan="3">基本層 B29 層
～
基本層 B5a 層</td></tr>
<tr><td>弥生時代中期中葉</td><td>基本層 6B 層</td><td>遺物包含層
水田跡（SN1～3）
溝跡（SD1）
ピット・杭跡（P1～3）</td></tr>
<tr><td>弥生時代中期中葉直後</td><td>基本層 5B 層</td><td></td></tr>
<tr><td>弥生時代後期</td><td rowspan="3">基本層 4b 層
基本層 4a 層</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">土坑（SK1～14）</td></tr>
<tr><td>古墳時代前期</td></tr>
<tr><td>古墳時代中期～後期</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>古代～</td><td>基本層 3 層</td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

（2）中筋遺跡で確認された自然災害痕跡

今回の中筋遺跡の調査では、自然災害痕跡として、洪水・津波の痕跡と考えられる痕跡が確認された。

①洪水痕跡

今回の中筋遺跡の調査では、礫・砂を主体とする砂礫層が相当数確認され（A区の基本層2層・5A層・7層・9層、B区のB9層・B10層・B16層・24層・30層）、これらの砂礫層には、遺跡西側に位置する亘理丘陵上に分布している花崗岩類を起源とする岩片が多く含まれる。これらは、大雨洪水の発生に伴い、遺跡南部を南北に流れる鷲足沢川の氾濫によってもたらされたものとみられる。

これらの砂層のうち、A区基本層7層・9層については、松本秀明氏による分析の結果、土石流堆積物と判断され、2600～2500年前のものと推定されている（第Ⅳ章第2節）。また、A区基本層5A層は、弥生時代中期中葉の基本層6B層の上層、弥生時代後期～古墳時代前期の堆積層である基本層4層直下に位置することから、弥生時代中期～後期の間に発生した洪水砂層であると考えられる。

B区で確認した砂礫層は、古墳時代前期の土坑群の確認面（B5a・b層）の下層に位置する。B9・10・16・24層の下層に位置するB29層は、植物遺存体の年代測定の結果から、弥生時代中期以降の堆積層と想定されている。このことから、B9・10・16・24層は、弥生時代中期～古墳時代前期以前の洪水砂層であると推定される。

②津波痕跡

今回の調査で確認された津波痕跡の可能性がある堆積物は、A区において確認した中粒の砂で構成される「砂層」で、A区の基本層5B層にあたる。この砂層はA区東半においてのみ検出され、弥生時代中期中葉の堆積層（6層）と古墳時代前期の堆積層（4層）の間に薄く堆積した状態で確認された。

山元町教育委員会では、この砂層が仙台市沓形遺跡及びその周辺で確認されている弥生時代の津波堆積物と同様の性格を持つ堆積物である可能性が想定されたことから、沓形遺跡の調査を担当した仙台市教育委員会の斎野裕彦氏の助言を受け、東北学院大学 松本秀明氏に砂層の詳細な分析を依頼した。その結果、中筋遺跡で確認された砂層（5B層）は、粒度組成が海浜堆積物の特徴に類似することから津波堆積物の可能性が高いとの分析結果を得ることができた。

ここでは、中筋遺跡で確認された津波痕跡について若干の検討を行う。

【砂層（5B層）の特徴と分析結果】

○分布範囲：A区東半にのみに分布（第165図）。分布域の標高は海抜6.5～7.3mで、調査区内においては、A区中央付近（標高7.3付近）が分布限界である。

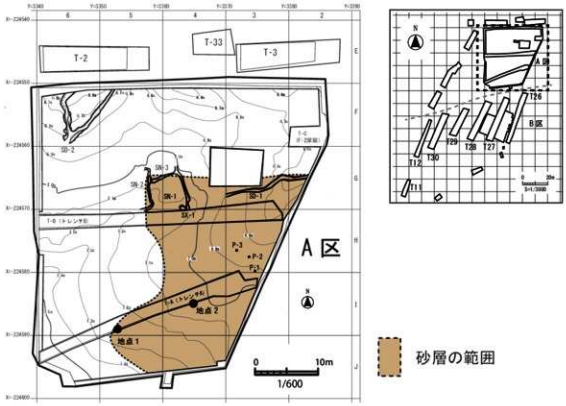
○確認層位：弥生時代中期中葉の堆積層（6B層）の直上及び古墳時代前期の堆積層（4B層）の直下で確認（第6・166・167図）。

○層　　厚：1～8cm。

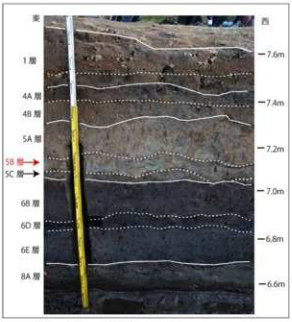
○堆積状況：薄く面的に堆積しており、調査区南西の標高が高い地点ほどさらに薄くなり、標高7.3mのA区中央付近で砂層は途切れる（第6・167図）。

○砂層の粒度分析・年代測定結果（松本秀明氏・第Ⅳ章第2節参照）

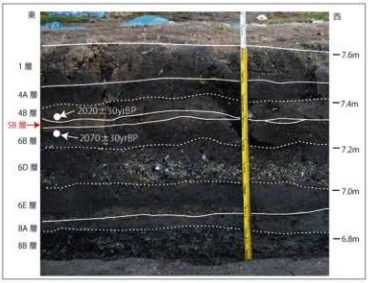
・粒度組成は平均粒径2.62φ、淘汰度0.60の値を示す。比較的淘汰良好な砂層で、粒径から海浜の



第165図　中筋遺跡 A区 砂層（基本層5B・C層）確認範囲

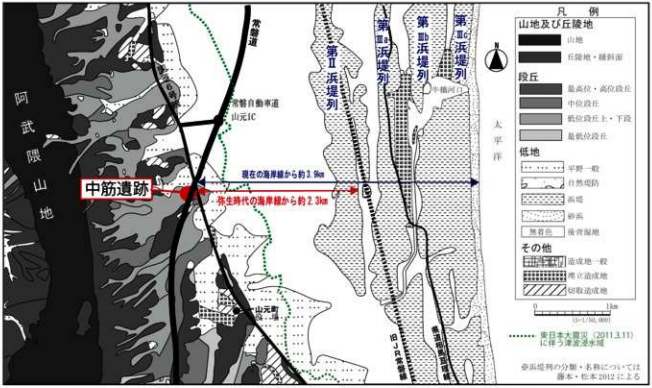


第 166 図　中筋遺跡 A 区
地点２の砂層（5B 層）断面
（北から撮影）

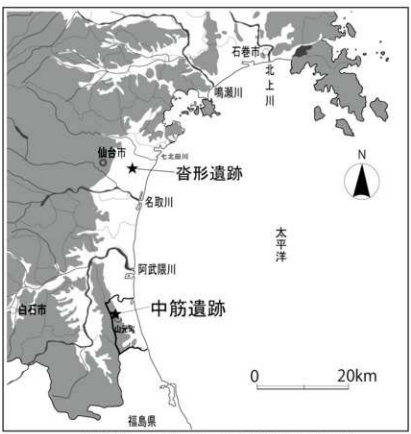


第 167 図　中筋遺跡 A 区　地点１の砂層（5B 層）断面
※砂層が途切れる地点（北から撮影）

※○：年代測定結果（松本秀明氏による）



第168図　中筋遺跡周辺の地形分類図と海岸線の位置



第169図　中筋遺跡・沓形遺跡の位置関係

砂丘堆積物の特徴に類似。津波堆積物の可能性が高い。

・砂層の年代：砂層直上及び直下に堆積した腐植物の放射性炭素年代測定を実施。その結果、砂質堆積物直上層（4B 層）の年代が 2020±30yrBP、砂質堆積物直下層（6B 層）の年代が 2070±30yrBP の値を示す。この結果から、砂層は約 2,000 年前の弥生時代に堆積した砂層と判断される。

○砂層の珪藻分析結果（㈱古環境研究所・第Ⅳ章第 3 節参照）

・砂層（5B 層）は珪藻密度が極めて低く、珪藻がほとんど検出されない。

【中筋遺跡における砂層（5B 層）の位置付け】

砂層（5B 層）の粒度分析の結果やその堆積状況の確認等から、この「砂」は津波によりもたらされた「津波堆積物」である可能性が高いと判断された。砂層の年代は、放射性炭素年代測定の結果から約 2,000 年前のものと推定され、仙台平野中部に位置する沓形遺跡・荒井南遺跡・荒井広瀬遺跡で確認されている弥生時代の津波堆積物（斎野 2010・2013、庄司 2012、主濱 2014）に対比される。

中筋遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵裾部の標高 7～10m の低地に立地し、現在の海岸線からは、直線距離で約 3.9km、弥生時代の海岸線（第Ⅱ浜堤列海側）からは約 2.3km に位置する（第 168 図）。中筋遺跡で確認された津波堆積物である砂層（5B 層）は、調査区中央付近で途切れることから、この付近が当時の津波により運ばれた「砂」の到達地点であったと考えられ、その遡上距離は約 2.3km 前後であったと推定される。

中筋遺跡から直線距離で約 30km 北に位置する仙台平野中部の沓形・荒井南遺跡では、弥生時代の津波により運ばれた砂質堆積物の分布が当時の海岸線から約 2.5km 付近であったと推定されており、中筋遺跡の砂質堆積物の遡上距離と近い値を示している。このことを踏まえると、約 2,000 年前の弥生時代に発生した津波は、中筋遺跡周辺においても沓形・荒井南遺跡周辺と同等規模の浸水域であった可能性が考えられる（第 169 図）（註 6）。

今回の中筋遺跡の調査で、阿武隈川以南の仙台平野南部でも約 2,000 年前（弥生時代）の津波痕跡の可能性の高い砂質堆積物が確認されたことにより、当時の津波被害が広域に及んでいた可能性を想定できるようになった。しかしながら、仙台市と山元町の間に位置する名取市・岩沼市・亘理町周辺地域では、現在のところ、発掘調査による弥生時代の津波痕跡の事例は報告されていない。今後、周辺地域での弥生時代の津波堆積物の事例が増加することにより、当時の津波浸水範囲等をより詳細に把握することが可能になる。今後、仙台平野沿岸地域において、当時の海岸線から 2km 前後の範囲における発掘調査を行う場合は、弥生時代の砂質堆積物等の存在を視野に入れて調査を行う必要がある。

（3）縄文時代の遺構

今回の調査範囲では、縄文時代の遺構は検出されなかったが、A 区基本層 7 層以下で縄文時代晩期以前の遺物包含層が確認された。A 区基本層 7 層以下で出土した縄文土器の年代は、縄文時代後期～晩期と幅があるが、晩期後葉～末の土器類が主体である。これらの出土した土器は、器面が磨滅しているものが多く、そのほとんどは B 区の旧河道から運ばれたものとみられる。晩期後葉～末の土器類が一定量出土していることから、これらの土器を使用した集団の集落が中筋遺跡周辺に存在する可能性が想定される。

（4）弥生時代の遺構

今回の調査で確認された弥生時代の遺構には、水田跡 3 区画（SN1～3）、溝跡 2 条（SD1・2）、ピット 1 基・杭跡 2 箇所（P1～3）、性格不明遺構 1 基（SX1）、遺物包含層がある。これらはいずれも A 区に位置する。

①水田跡

A 区中央やや北側（G-4・5）付近で検出した。水田跡は、標高 7m の勾配 2%前後の緩傾斜地に立地する。畦畔は 5 条確認し、水田区画は 3 区画認められ、基本層 6B 層を耕作土としている。このうち、最も残りのよい SN1 水田区画についてみると、区画は方形を基調とし、田面の標高差は 12cm で、面積は 26.5 ㎡前後である。水田区画内からの出土遺物は数点のみで、水田区画以外の地点の遺物出土量と比較すると非常に少ない傾向にある。今回確認した水田跡は、水田耕作土である基本層 6B 層の畦畔検出地点とその周辺のプラント・オパール分析及び花粉分析の結果（第Ⅳ章第 3・5 節）から、限られた範囲に分布し、耕作期間は短期間であったと推定される（註 7）。

水田の所属時期については、水田区画内での遺物出土数がきわめて少なく、かつ時期を推定できる遺物が出土していないため、詳細な時期決定は難しい。そこで、水田周辺の基本層 6B 層出土遺物をみると、基本層 6B 層では、弥生時代中期前半～中葉の土器が一定量出土しており、その中で最も新しいものは弥生時代中期中葉の中在家南式期の土器である。また、基本層 6B 層下層にあたる基本層 6D 層の上面からは枡形式を中心とする遺物が一定量出土している。このことから、基本層 6B 層は枡形式期～中在家南式期に形成された堆積層と推定され、6B 層での水田の開始時期もこれに近い時期であると考えられる。

水田の廃絶時期については、水田跡が約 2,000 年前の津波堆積物と推定される砂層（5B 層）により覆われており、かつその後復旧した痕跡は認められないことから、その廃絶時期は砂層（5B 層）に覆われた津波襲来直後の中在家南式期であると考えられる。

今回の調査では、基本層 6B 層以外で水田区画を確認することができなかったが、その下層にあたる基本層 6D 層からも一定量の枡形式期の弥生土器、石包丁・板状石器等が出土している。その中で枡形囲式期と考えらえる土器には籾痕が確認されており、水田区画 SN1～3 より古い時期に周辺に水田が存在した可能性が考えられる。

②溝跡、木杭跡・ピット

A 区において確認された溝跡（SD1・2）、木杭跡・ピット（P1～3）のうち、SD2 は基本層 6D 層上面で確認されたことから、水田跡よりも古い時期の遺構であると考えられる。

SD1・P1～3 については、基本層 6B 層上面で確認されたことから、水田跡と近い時期に機能した可能性のある遺構であると考えられる。SD1 は堆積土が基本層 5A・B 層のみで構成されており、津波堆積物（砂）及び河川からの土石流性堆積物（砂礫）によって埋没したと推定され、機能時は開口していたと考えられる。P1～3 木杭跡・ピットは、その位置関係から杭列になる可能性がある（註 8）。SD1・P1～3 の性格については不明であるが、同時期の水田との位置関係から、これと関連する性格を有していた可能性が考えられる。

③性格不明遺構

SX1 性格不明遺構は、SN1 水田区画内の畦畔南東隅で確認した。径 1m 前後・深さ 10cm の不整形を呈し、底面は凹凸が多い。SX1 の堆積土は津波堆積物と考えられる砂層（基本層 5B 層）を主体とし、畦畔下端を

若干抉る形で確認され、底面標高は水田面より低い。SX1 が水田に伴う遺構であるか、人為的に掘り込まれた遺構かは不明であるが、堆積土の状況から、少なくとも水田が砂層（基本層 5B 層）に覆われた段階に同時に埋没している。このような津波堆積物を堆積土とし、不整形で底面に凹凸がある遺構については、仙台市舎形遺跡 2・3 次調査（庄司ほか 2012）でも確認されており、これらと同様の性格である可能性が考えられる（註 9）。

（5）古墳時代の遺構

今回の調査で確認された古墳時代の遺構には、SK1～14 土坑がある。これらは、いずれも B 区に位置し、出土遺物から古墳時代前期のものと考えられる。

ここでは、SK1～14 土坑の特徴・出土遺物等から、その性格について検討する。

【SK1～14 土坑の特徴と性格】

①土坑の特徴

SK1～14 土坑は、B 区中央付近にある程度まとまり、ある一定の間隔で分布している。土坑の堆積土はいずれも黒褐色・暗褐色シルトを基調とする人為堆積土で、土師器・土製支脚がまとまって出土した。土坑の断面形は方形・逆台形・皿状を呈し、底面はほぼ平坦で、平面形が隅丸長方形と呈するものと楕円形を呈するものに分けられる。**平面形が隅丸長方形を呈するもの**は 12 基（SK1～4・6～10・12～14）あり、その規模は、長軸 1.2～5.5m・短軸 0.8～1.5m・深さ 5～30cm で、長軸 4m 前後・短軸 1m 前後のものが多い。その方向は、長軸が南北方向のもの（SK1～3・6・10・12～14）と東西方向のもの（SK4・7～9）に大きく分けられる。**平面形が楕円形を呈するもの**は 2 基（SK5・11）あり、その規模は長軸 0.6m 前後のものと 1.0m 前後のもので、深さは 10cm 程度である。これらの土坑のうち、重複しているものは、「SK3（隅丸長方形・長軸南北）→SK-5（楕円形）」、「SK4（隅丸長方形・長軸東西）→SK-9（隅丸長方形・長軸東西）」、「SK14（隅丸長方形・長軸南北）→SK13（隅丸長方形・長軸南北）→SK-6（隅丸長方形・長軸南北）」の関係にあり、平面形・長軸方向による新旧関係は明確ではない（第 170 図）。

②遺物出土状況

SK1～14 土坑からは、土坑に伴うと考えられる遺物としては土師器・土製支脚などが出土している。土坑の堆積土はいずれも人為堆積で、遺物が土坑内に一括で埋められた状態で出土している。土坑の残存状況がよく、出土遺物の多い SK1・7 土坑でみると、SK1 では底面：板材・遺物・土製支脚→中層：埋め戻し土→上層：遺物・埋め戻し土、SK7 では底面：遺物→中層：埋め戻し土→上層：遺物・埋め戻し土の順に埋め戻しており、上層の遺物は細片のものが多い。

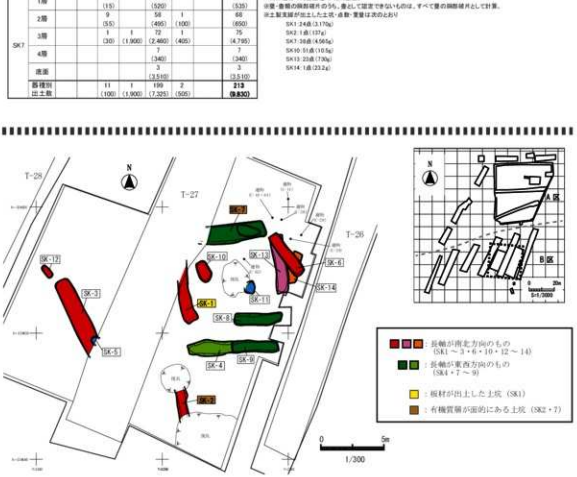
各土坑からの土師器の出土器種は第 12 表のとおりで、出土器種には器台・鉢・高坏・壺・甕・ミニチュア土器があり、そのほとんどが甕類で、精製器種はわずかである。また、出土した遺物のうち、甕類には内外面に煤が多く付着しているものが多数あり、日常的に使用していた土器が土坑内に廃棄されたと考えられる。この他、SK7 出土の土師器鉢（第 47 図 2）と SK13 出土の土師器鉢（第 60 図 3）は接合関係にあり、同時期に埋められた遺物であると判断される。土製支脚は SK1・2・7・10・13・14 から出土した。支脚は非常に脆く、そのほとんどが細片で出土した。依存状態のよいものは、片面のみが被熱を受け赤化しており、実際に日常で煮炊きに使用されたものが土坑に埋められたとみられる。

第12表　中筋遺跡B区　土坑出土　土師器一覧

遺構	出土層位	出土土師器 器種の点数・重量							層位別出土数
		器台	高坏	鉢	壺	甕	甕or壺	ミニチュア土器	
SK1	1層			65 (665)		523 (4,680)	2 (255)		590 (5,600)
	2層	1 (10)				9 (35)			10 (45)
	3層	2 (80)			2 (2,105)	44 (725)			48 (2,910)
	底面					5 (2,590)			5 (2,590)
	器種別出土数	3 (90)		65 (665)	2 (2,105)	581 (8,030)	2 (255)		**653 (11,145)**
SK2	1・2層					1 (35)			1 (35)
	底面					100 (1,375)			100 (1,375)
	器種別出土数					101 (1,410)			**101 (1,410)**
SK3	1層			1 (10)		14 (680)			15 (690)
	2層	1 (10)		2 (30)		30 (390)	1 (25)		34 (455)
	底面					1 (470)			1 (470)
	器種別出土数	1 (10)		3 (40)		45 (1,540)	1 (25)		**50 (1,615)**
SK4	1層			1 (5)		9 (70)			10 (75)
	底面	1 (170)		1 (330)	1 (2,000)	39 (1,845)			42 (4,345)
	器種別出土数	1 (170)		2 (335)	1 (2,000)	48 (1,915)			**52 (4,420)**
SK5	1層					31 (145)			31 (145)
	器種別出土数					31 (145)			**31 (145)**
SK6	1層					2 (5)			2 (5)
	2層					5 (25)			5 (25)
	3層					5 (20)			5 (20)
	器種別出土数					12 (50)			**12 (50)**
SK7	1層			1 (15)		59 (520)			60 (535)
	2層			9 (55)		58 (495)	1 (100)		68 (650)
	3層			1 (30)	1 (1,900)	72 (2,460)	1 (405)		75 (4,795)
	4層					7 (340)			7 (340)
	底面					3 (3,510)			3 (3,510)
	器種別出土数			11 (100)	1 (1,900)	199 (7,325)	2 (505)		**213 (9,830)**

遺構	出土層位	出土土師器 器種の点数・重量							層位別出土数
		器台	高坏	鉢	壺	甕	甕or壺	ミニチュア土器	
SK8	1層					40 (295)			40 (295)
	2層					7 (55)			7 (55)
	3層					40 (1,060)	1 (100)	1 (85)	42 (1,245)
	底面			2 (300)		6 (15)	2 (1,915)		8 (2,230)
	器種別出土数			3 (300)		88 (1,425)	3 (2,015)	1 (85)	**95 (3,825)**
SK9	1層					18 (105)			18 (105)
	底面					1 (120)			1 (120)
	器種別出土数					19 (225)			**19 (225)**
SK10	1層				1 (150)				1 (150)
	器種別出土数				1 (150)				**1 (150)**
SK11	1層					10 (10)	2 (285)		12 (295)
	底面				1 (225)				1 (225)
	器種別出土数				1 (225)	10 (10)	2 (285)		**13 (520)**
SK12	1層					17 (170)	1 (125)		18 (295)
	底面						1 (170)		1 (170)
	器種別出土数					17 (170)	2 (295)		**19 (465)**
SK13	1層	1 (130)	1 (200)	8 (370)		103 (1,480)	1 (20)		114 (2,400)
	器種別出土数	1 (130)	1 (200)	8 (370)		103 (1,480)	1 (20)		**114 (2,400)**
SK14	1層					8 (50)			8 (50)
	器種別出土数					8 (50)			**8 (50)**

※出土点数は、上段の数字が「出土点数」、下段（）内の数字が「出土遺物の総重量(g)」を示す。
出土遺物の総重量(g)は乾燥重量。
※第・番号の無数値外のうち、書ぶ して認定できないものは、すべて量の細部値片として計量。
出土製土師器が出土した土坑・点数・重量は次のとおり
SK1:2点(3.170g)
SK2:1点(37g)
SK7:3点(4.565g)
SK10:1点(10.5g)
SK13:2点(73g)
SK14:1点(23.2g)



第170図　中筋遺跡　B区　SK1～14土坑の分布と方向

③土坑出土の板材について

SK1 土坑では、土坑底面に板材（材質：モミ属）が数枚並べられた状態で出土した。この底板の上には遺物を挟んで別の材質の板材（材質：スギ）が 1 枚出土している。底面に並べられた板材は、土坑内での位置・出土状況から木棺の可能性がある。

この他、SK2 底面、SK7 堆積土 3 層上面では、厚さ 1～2cm 程度の黒色の有機質層が面的に確認されており、SK1 と同様な板材が存在し、土壌化した可能性がある。

④土坑の性格

今回確認された土坑群は南北・東西の一定方向に揃い、古墳時代前期の遺物が比較的多く出土することから、発掘調査時、古墳時代前期にみられる「方形周溝墓」・「方形周溝状遺構」・「周溝をもつ建物跡」等の可能性を視野に入れて精査を行った。しかし、遺構が溝状に続かないこと、遺構の位置関係から方形の区画とならないこと、周辺に建物跡等の柱穴が確認されないこと、遺構が重複しそれぞれが別遺構と認定できたことから、これらの遺構は、それぞれ単独の古墳時代前期の「土坑」であると結論に至った。

これらの土坑の性格については、遺物の出土状況は、土坑の堆積土が人為堆積で、遺物が一定量出土していることから、SK1～14 土坑は「土器廃棄遺構」や「土坑墓」の性格を有する可能性が想定される。遺構の構造・配置でみると、平面形は整った隅丸長方形を呈するものが多く、その長軸が南北ないし東西方向に揃い、ある一定の間隔で分布している。また、土坑すべてではないが、木棺の可能性のある板材が伴うもの（SK1）や板材が存在した可能性のあるもの（SK2・7）が確認された。その一方で、SK1～14 土坑では、玉類や石製品・鉄製品などの副葬品が 1 点も出土しておらず、遺物は日常的に使用されたとみられる土師器と土製支脚のみで構成される。

そこで、周辺地域での調査事例をみると、古墳時代前期の土坑は、山元町的場遺跡 SK11・12・15・53（山田ほか 2014）、亘理町宮前遺跡 第 4 号土坑（丹羽 1983）・舘南囲遺跡 第 1 土坑（古川ほか 1991）・堀の内遺跡 SK40・45・47（亘理町教育委員会 1997）などで確認され、他地域でも多数確認されている。このように、古墳時代前期の土坑は多数確認されているが、その性格は不明なものが多く、また、その立地についても、集落の内外から確認されており、土坑単体で確認される例も少なくない。これらの事例と中筋遺跡の土坑群を比較した場合、その形状や配置、板材の出土など、周辺地域でこのような土坑の類例はほぼ皆無といってよい（註 10）。

以上のとおり、今回の調査で確認した SK1～14 土坑の性格については、「土器廃棄遺構」や「土坑墓」の可能性が想定された。出土遺物の内容からみれば、人骨や副葬品等が出土していないため、その性格を「土坑墓」と断定するには、判断材料が不足していると思われるが、①木棺の可能性のある板材が出土していること、②平面形は整った隅丸長方形を呈し、③土坑同士の方向が揃い、ある一定の間隔で分布している点から、現段階では、単に遺物を廃棄した「土器廃棄遺構」というよりは、「土坑墓」としてみたほうが解釈しやすいと考える（註 11）。しかしながら、周辺地域での類例がないことから、今回は、これらの土坑群の性格については「土坑墓」の可能性を提示するにとどめておきたい。今後、類例の増加を待って再度検討したい。

3. まとめ

中筋遺跡は、宮城県南東部の阿武隈山地から東に延びる丘陵裾部の標高7～10mの低地に立地する。遺跡の時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代にわたる。今回の調査では、A区で水田跡3区画、溝跡2条、ピット1基・木杭跡2箇所、性格不明遺構1基、遺物包含層、B区で土坑14基、旧河道跡を検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。この他、自然災害痕跡を確認した。

以下、各時代の遺構について要点をまとめる。

① A区において、縄文時代晩期後葉～末の遺物包含層が確認され、縄文土器・石器・土製品が出土した。今回の調査区内では、同時期の遺構が確認されなかったことから、周辺に同時期の集落が存在する可能性が考えられる。

② 弥生時代の遺構には、水田跡3区画（SN1～3）、溝跡2条（SD1・2）、ピット1基・木杭跡2箇所（P1～3）、性格不明遺構1基（SX1）がある。これらは出土遺物から弥生時代中期中葉頃のものとみられる。県南地域で、当該時期の水田跡が発見されたのは初めてであり、調査の結果、この水田は約2,000年前に発生した津波により廃絶したことが明らかとなった。この他、A区において、弥生時代中期前葉～中葉の遺物包含層が確認され、多くの弥生土器や石器が出土し、当該時期の土器編年を考える上で貴重な資料を得ることができた。今回の調査区内では、同時期の住居等は確認されなかったことから、周辺地域に水田経営を行った集落が存在する可能性が考えられる。

③ 古墳時代の遺構には、土坑14基（SK1～14）がある。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも古墳時代前期のものと考えられる。遺物の出土状況や遺構の特徴から、これらの土坑は「土坑墓」の可能性が想定された。

④ 自然災害痕跡として、洪水・津波の痕跡と考えられる痕跡を確認した。洪水痕跡は、A区及びB区において確認し、縄文時代晩期、弥生時代中期～後期の間に発生したとみられる洪水砂層を検出した。
津波痕跡は、A区において確認し、調査の結果、その年代は約2,000年前（弥生時代）のものと推定され、仙台平野中部に位置する沓形遺跡・荒井南遺跡で確認されている弥生時代の津波堆積物に対比される。中筋遺跡で確認された津波堆積物（砂層）は、調査区中央付近で途切れることから、この付近が当時の津波により遡ばれた「砂」の到達地点であったと考えられ、その遡上距離は当時の海岸線から約2.3km前後であったと推定される。

⑤ この他、B区において、弥生時代中期～古墳時代前期以前の旧河道跡を確認した。

（註）

註１　本報告の中で、「変形工字文」としたものの中には、いわゆる「変形四字文」（鈴木 1987）と呼ばれているものも含めた。

註２　仙台平野周辺の弥生土器編年の各時期の型式名については、研究者により若干の違いがみられる。今回は、斎野裕彦氏（2011）・大坂拓氏（2012）の編年案を参考にし、型式名を用いることとした。

註３　弥生時代中期中葉の甕頸部の施文について、白石川以南地域では綾絡文が主体・列点稀という傾向が認められる（日下 2009）に対し、中筋遺跡の甕は、綾絡文少量、頸部列点文・頸部無文主体であることから、阿武隈川下流域の中でも地域により、甕頸部の施文方法は異なる可能性がある。

註４　中在家南式の特徴として、壺においては、受口状口縁の増加、長頸化した器形・撫肩の器形など後続型式へ受け継がれる要素がみられる点、磨消縄文の施文においては、沈線を挟んで地文部と無文部がと隣り合わないことが多くなり、その退化が進み構図の交点を描く沈線同士が離れる傾向、口縁部が内湾する鉢の減少などが指摘されている（石川 2005、斎野 2011、大坂 2012）。

註５　塩釜式期の土師器の製作技法等については、辻秀人氏からご教示をいただいた。

註６　東日本大震災に伴う津波によって運ばれた津波堆積物は、分布調査の結果、「砂質堆積物」と「泥質堆積物」で構成され、泥質堆積物が砂質堆積物よりもさらに陸側まで及んでいたことが確認されている（松本 2013）。中筋遺跡で確認された津波堆積物は「砂質堆積物」のみで、津波由来と特定できる泥質堆積物は確認（認識）できなかった。本来存在したはずの泥質堆積物については、その後の堆積層とともに土壌化したため認定できなかったと推定される。また、「砂質堆積物」の分布範囲から、当時の津波はさらに西側の内陸部へ侵入していたと想定され、今回の調査区全面が当時の津波による浸水を受けていた可能性が考えられる。

註７　プラント・オパール分析の結果では、A 区範囲内の基本層 6B 層に含まれるプラント・オパールは 600～1,800 個/g で、畦畔が確認された範囲が 1,800 個/g で最も高い値を示し、それ以外は低い値であった。このことから、基本層 6B 層での水田分布域は限られた範囲であった可能性が指摘されている。また、畦畔確認地点でのプラント・オパール密度が低い点から、耕作期間（年数）は短期間であったと推定されている。花粉分析の結果では、イネ型花粉が畦畔確認地点において他所より比較的多く検出されたが、イネ型花粉の頻度が 2～3%で低い値であることから、稲作の継続期間が短かった可能性が指摘されている。

註８　P1・3 木杭跡の木杭については、樹種同定・放射性炭素年代測定を行っており、P1 の木杭は樹種：カヤ・年代：2230±30yrBP（390-200calBC）、P3 の木杭は樹種：イヌガヤ、年代：2180±30yrBP（360-270calBC）という分析結果が得られている（第Ⅳ章 6 節参照）。

註９　沓形遺跡で確認された SX1～5 性格不明遺構は、津波堆積物（砂層）を堆積土とし、水田畦畔の下端に沿うように検出されており、その形状は溝状・土坑状を呈し、底面には凹凸が認められている。SX1～5 の性格については不明としているものの、津波に関わる痕跡の可能性も想定している。

註 10　宮城県内の木棺墓については、現在のところ古墳時代後期の大野田古墳群 9A 区の SK446 木棺墓（結城 2011）などがあるが、古墳時代前期までさかのぼる事例は確認されていない。土器廃棄遺構については、古墳時代中期のものが多賀城市山王遺跡（高倉 1981）、村田町新巻崎遺跡（須田ほか 1991）などで確認されており、多量の土器類のほか石製模造品などが出土している。前者は土壙墓、後者は祭祀関連遺構と推定されている。これらの事例は、古墳時代中期のものであり、出土遺物や遺構の平面形、所属時期などの面で中筋遺跡の土坑群とは異なる点が多い。

註 11　今回中筋遺跡で確認された SK1～14 土坑を「土坑墓」として考えた場合、出土遺物の面から、玉類など副葬品がなく、日常的に使用された土器類・支脚のみが出土していることから、古墳時代の一般的な階級の墓であった可能性も考えられる。

引用・参考文献

青山博樹ほか 2000「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』2
青山博樹 2010「古墳時代前期の土器編年-仙台平野とその周辺-」『北杜一迁秀人先生還暦記念論集-』
青山博樹 2011「土師器の編年 ⑦東北」『古墳時代の考古学 I 古墳時代史の枠組み』同成社
赤澤清章ほか 1996『中在家南遺跡地』仙台市文化財調査報告書第213集
赤澤清章ほか 2000『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書242集
猪狩忠雄ほか 1985『龍門寺遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊
生田和宏 2010『北小松遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書223集
生田和宏 2011『北小松遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書226集
伊藤協文 2006「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57 1-8
伊東信雄 1957「第2章 弥生式文化時代」『宮城県史1 古代史・中世史』宮城県史刊行会
石川日出志 2005「仙台平野における弥生中期土器編年の再検討」『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』
岩見和泰・佐藤憲幸 1991「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第140集
氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
大坂拓 2009「大洞A式土器の再検討」『考古学集刊』第5号
大坂拓 2012「本州島東北部における初期弥生土器の成立過程-大洞A´式土器の再検討と特殊工字文土器群の提唱-」『江豚沢 I』
大坂拓 2012「仙台平野の弥生土器」『平成24年度特別企画展 発掘富沢-30年のあゆみ-』仙台市教育委員会
大友透・福山宗志 1997『原遺跡』名取市文化財調査報告書38集
大友透 1999『原遺跡』名取市文化財調査報告書41集
大友透・鴨崎哲也 2000『原遺跡』名取市文化財調査報告書43集
大友透・鴨崎哲也 2000『原遺跡』名取市文化財調査報告書44集
大友透 2002『原遺跡発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書第49集
太田昭夫 1987「宮城県における弥生式土器編年研究の現状と課題」『第2回縄文文化検討会シンポジウム 東北地方の弥生式土器の編年について』
小野章太郎 2014『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書234集
小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土色帖』2010年版
小川淳一ほか 2000『王ノ墓遺跡』仙台市文化財調査報告書第249集
主流光朗ほか 2014『荒井南遺跡第1次調査』仙台市文化財調査報告書第425集
鈴治一郎 1971「二 合戦原古窯址群」『山元町誌』
角田市教育委員会 1976『梁瀬浦遺跡』角田市文化財調査報告書第1集
加藤道男ほか 1984「三屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IX』宮城県文化財調査報告書第99集
加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』
日下和寿 2009『和尚堂遺跡ほか発掘調査報告書』白石市文化財調査報告書37集
笹田正 1995『弧塚遺跡』山元町文化財調査報告書
小井川和夫ほか 1992『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書第145集
小林行雄 1941「土製支脚」『考古学雑誌』31-5
国立歴史民俗博物館 1996『農耕開始期の石器組成 1 近畿（大阪・兵庫）・中国・四国』国立歴史民俗博物館資料調査報告書7
斎野裕彦 1992「宮城県」『弥生時代の石器-始まりと終わり- 第1部第3分冊 北陸、信越、関東、東北編』
斎野裕彦 2004「東北地方における土師器の開始とその展開」『さきがけ』第21号
斎野裕彦 2005「水田跡の調査方法及び構造の復解について」『シンポジウム山形県の水田遺構-資料集』
斎野裕彦 2008「仙台平野」『弥生時代の考古学8-集落から読む弥生社会-』同成社
斎野裕彦ほか 2010『沿向遺跡第4～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集
斎野裕彦ほか 2010『沓形遺跡』仙台市文化財調査報告書第363集
斎野裕彦 2011「東北地域」『講座日本の考古学 第5巻 弥生時代(上)』青木書店
斎野裕彦 2012「仙台平野中北部における弥生時代・平安時代の津波痕跡と集落動態」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態総合研究』東北芸術工科大学 科研報告
斎野裕彦 2012「仙台平野の農耕災害痕跡 弥生から近世へ」『講座 東北の歴史 第4巻 交流と環境』清文堂
斎野裕彦 2013「仙台平野の弥生時代・平安時代の津波痕跡」『宮城考古学』第15号
佐藤祐輔 2008「東北地方南部における砂沢式並行期の土器について」『弥生時代における砂沢式土器の諸問題』
佐々久・志間泰治・氏家和典 1971「一 井戸沢横穴古墳群発掘調査報告」『山元町誌』
澤井祐紀ほか 2007「ハンディジオスライサーを用いた宮城県仙台平野（仙台市・名取市・岩沼市・亘理町・山元町）における古津波痕跡調査」『活断層・古地震研究報告』第7号
澤井祐紀ほか 2008「ハンドコアラーを用いた宮城県仙台平野（仙台市・名取市・岩沼市・亘理町・山元町）における古津波痕跡調査」『活断層・古地震研究報告』第8号
庄司裕美ほか 2012『沓形遺跡第2・3次調査』仙台市文化財調査報告書397集
須藤隆 1997「岩手県花巻町 中神遺跡の調査」
須藤隆 1998「東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究」募集堂
須藤隆 1999「第三章 弥生時代」『仙台市史』通史編1・原始
須藤隆 2007「東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性」
須田良平ほか 1991「新峰崎遺跡」村田町文化財調査報告書第9集
笹鉄止陸 1974「史料 仙台領内古墳・館」第四巻
志間泰治 1956「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
志間泰治 1971「鵜沼遺跡」
志間泰治 1975「亘理の古墳」
志間泰治 2007「龍報1 歴史を掘り起こす」
鈴木雅 2011「西浦B遺跡」蒜王町文化財調査報告書第10集
鈴木正博 1987「続大洞A式考」『古代』84
鈴木朋子 2002「場の内遺跡」亘理町文化財調査報告書第8集
関俊司 2004「北逢塚遺跡」山元町文化財調査報告書第3集
仙台市教育委員会 2014 「事例報告1 仙台市荒井広瀬遺跡」『東日本大震災と考古学』平成26年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
高倉敏明ほか 1981「山王・高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書第2集
高瀬克範 2000「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集
高橋栄一 1994「高田B遺跡」宮城県文化財調査報告書164集
田嶋明人 2012「古墳雛立期の広域編年－東日本域を対象とした検討（その5）－」『東生』第1号
千葉直樹・小野章太郎 2010「鎧沢沢遺跡」宮城県文化財調査報告書222集
千葉正雄 1993「弧塚遺跡」『弧塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第157集
次山 淳 1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班－環境文化研究会15周年記念論文集－』
辻秀人 1994「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版社

辻秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年　―その2―」『東北学院大学論集―歴史学・地理学―』第 27 号
辻秀人 2001「東北の弥生土器と土師器」『アジア文化史研究』第 1 号
辻秀人 2008「大塚森古墳の研究」『歴史と文化』第 43 号　東北学院大学論集
手塚均ほか 1986『田柄貝塚』宮城県文化財調査報告書第 111 集
長島雄一ほか 1990「福島県における弥生時代土器編年研究の現状と課題」『第 2 回縄文文化検討会シンポジウム　東北地方の弥生式土器の編年について』
中村五郎 1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
丹羽　茂 1983「宮前遺跡」『杉木橋横穴古墳群・宮前遺跡』　宮城県文化財調査報告書第 96 集
丹羽　茂 1985「今熊野遺跡Ⅰ―古代編―」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越右塚』　宮城県文化財調査報告書 104 集
初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大友拓 2012『西右山原遺跡ほか-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ-』宮城県文化財調査報告書第 230 集
初鹿野博之 2013a「浦沢遺跡」『発掘された日本列島 2013 新発見考古学速報』文化庁
初鹿野博之 2013b「宮城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡」『第 39 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2014「宮城県山元町熊の作遺跡」『第 40 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2015「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
引地弘行 2002「館の内遺跡」『名生館遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 188 集
平塚泰人 2001「仙台平野における小型丸底鉢について」『仙台市富沢遺跡保存館研究報告』4
平井勝 1983『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64, ニューサイエンス社
藤田至則・加納博・瀬沢文教・八島隆一 1988『角田地域の地質』地域地質研究報告　地質研究
藤沼邦彦ほか 1986『亘理町畑中貝塚』宮城県文化財調査報告書第 115 集
藤沼邦彦 2008「工字文雑考」『芹沢長介先生追悼　考古・民族・歴史学論叢』
藤沼邦彦・関根達人 2008「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」『縄覧　縄文土器』
藤岡紘敏・田中敏 2003『竹島コレクション考古図録第 4 集　福島県相双地域の弥生時代遺跡』福島県立博物館学術調査報告書第 39 集
古川一明・鈴木真一郎・大和亲生 1991「館洞囲遺跡」『館洞囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 144 集
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-整理・報告書編-』
藤本展子・松本秀明　2012「阿武隈川付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第 17 巻
松本秀明 1977「仙台付近の海岸平野における微地形分類と地形発達―粒度分析法を用いて―」『東北地理』29
松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57
松本秀明・熊谷真樹・吉田真幸 2013「仙台平野中部に見られる弥生時代の津波堆積物」『人間情報学研究』18
松本秀明 2013「仙台平野中部で見いだされた弥生時代の津波堆積物」『宮城考古学』第 15 号
宮城県考古学会編 2010『平成 22 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2011『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2012『平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2013『平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2014『平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県企画部土地対策課編 1988『土地分類基本調査　角田』
村越潔 1983『亀ヶ岡式土器』考古学ライブラリー18, ニューサイエンス社
柳沢和明ほか 1990『摺沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第 132 集
山田隆博 2008　『企画展図録　亘理郡の古墳時代』山元町歴史民俗資料館
山田隆博・村上裕次・山口淳 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2013『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 5 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2014『的場遺跡-常磐-』山元町文化財調査報告書第 6 集
山田隆博・藤田祐 2014『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第 7 集
山田隆博・丹野修太 2014『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第 8 集
山内清男編 1964『日本原始美術Ⅰ』
山元町史編纂委員会編 1971『山元町誌』
山元町史編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
結城慎一ほか 2010「下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか」仙台市文化財調査報告書第 390 集
吉野武 2015「熊の作遺跡出土の木簡と墨書土器」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
亘理町教育委員会 1997『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第 7 集

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかすじいせき
書 名	中筋遺跡
副 書 名	常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書Ⅴ
巻 次	
シ リ ー ズ 名	山元町文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第10集
編 著 者 名	山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓
編 集 機 関	山元町教育委員会
所 在 地	〒989-2203 宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1 電話0223-37-5116
発 行 年 月 日	平成27（2015）年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	位置 北緯	位置 東経	調査期間	調査面積	調査原因
中筋遺跡 （なかすじ）	宮城県 （みやぎけん） 亘理郡 （わたりぐん） 山元町 （やまもとちょう） 鷲足字 （わしたじ） 中筋 （なかすじ）	043621	14080	37度 58分 47秒	140度 52分 4秒	2012.08.23 ～2012.12.19	4,140㎡	常磐自動車道（県境～山元間）建設工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中筋遺跡	散布地	縄文時代	—	縄文土器	縄文時代晩期後葉～末の遺物包含層、洪水痕跡
	生産遺跡	弥生時代	水田・溝跡・ピット 木杭跡・性格不明遺構	弥生土器・ 石包丁・板状石器	弥生中期前葉～中葉の遺物包含層 津波痕跡
	—	古墳時代	土坑	土師器・土製支脚	土坑14基

要約

中筋遺跡は、宮城県南東部の阿武隈山地から東に延びる丘陵裾部の標高7～10mの低地に立地する。遺跡の時期は、縄文時代、弥生時代、古墳時代にわたる。今回の調査では、A区で水田跡3区画、溝跡2条、ピット1基・木杭跡2箇所、性格不明遺構1基、遺物包含層、B区で土坑14基、旧河道跡を検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。この他、自然災害痕跡を確認した。

① A区において、縄文時代晩期後葉～末の遺物包含層が確認され、縄文土器・石器・土製品が出土した。今回の調査区内では、同時期の遺構が確認されなかったことから、周辺に同時期の集落が存在する可能性が考えられる。

② 弥生時代の遺構には、水田跡3区画（SN1～3）、溝跡2条（SD1・2）、ピット1基・木杭跡2箇所（P1～3）、性格不明遺構1基（SX1）がある。これらは出土遺物から弥生時代中期中葉頃のものとみられる。県南地域で、当該時期の水田跡が発見されたのは初めてであり、調査の結果、この水田は約2,000年前に発生した津波により廃絶したことが明らかとなった。この他、A区において、弥生時代中期前葉～中葉の遺物包含層が確認され、多くの弥生土器や石器が出土し、当該時期の土器編年を考える上で貴重な資料を得ることができた。今回の調査区内では、同時期の住居等は確認されなかったことから、周辺地域に水田経営を行った集落が存在する可能性が考えられる。

③ 古墳時代の遺構には、土坑14基（SK1～14）がある。これらは、遺構の重複関係や出土遺物から、いずれも古墳時代前期のものと考えられる。遺物の出土状況や遺構の特徴から、これらの土坑は「土坑墓」の可能性が想定された。

④ 自然災害痕跡として、洪水・津波の痕跡と考えられる痕跡を確認した。洪水痕跡は、A区及びB区において確認し、縄文時代晩期、弥生時代中期～後期の間に発生したとみられる洪水砂層を検出した。津波痕跡は、A区において確認し、調査の結果、その年代は約2,000年前（弥生時代）のものと推定され、仙台平野中部に位置する各形遺跡・荒井南遺跡で確認されている弥生時代の津波堆積物に対比される。中筋遺跡で確認された津波堆積物（砂層）は、調査区中央付近で途切れることから、この付近が当時の津波により運ばれた「砂」の到達地点であったと考えられ、その遡上距離は当時の海岸線から約2.3km前後であったと推定される。

⑤ この他、B区において、弥生時代中期～古墳時代前期以前の旧河道跡を確認した。

山元町文化財調査報告書第10集

中筋遺跡

―常磐自動車道（亘理～山元間）建設工事に係る発掘調査報告書Ⅴ―

平成27年3月27日発行

発行　山元町教育委員会
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1
TEL0223-37-5116／FAX0223-37-0119

印刷　株式会社 東北プリント
宮城県仙台市青葉区立町24-24